

沼津市文化財調査報告書 第113集

中原遺跡発掘調査報告書

第2分冊

4区の調査・7区の調査・自然科学分析

2016

沼津市教育委員会

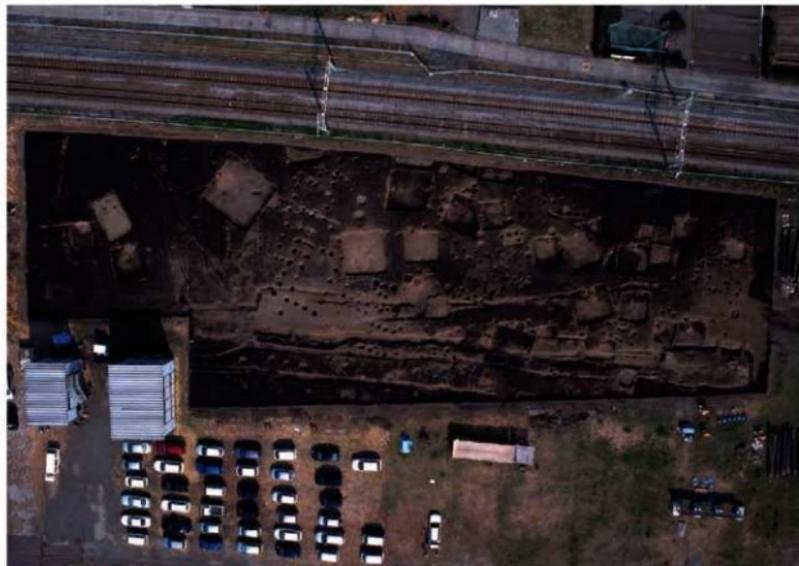


4区西側完掘状況



4区東側完掘状況

巻頭カラー図版 2



7区完掘状況



銅製鉸具と刺金

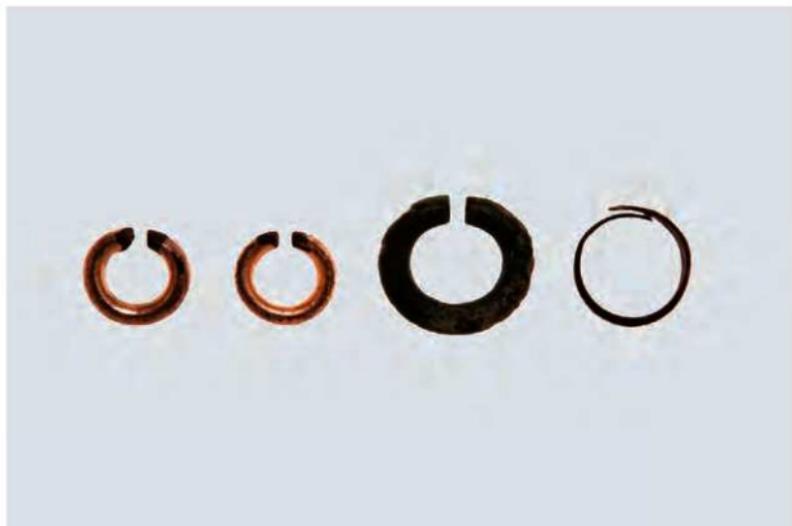


4区第21号住居址出土 鉄鉗



4区第21号住居址出土 銅製分銅

巻頭カラー図版 4



銅製耳環と銅環



4区出土 ガラス小玉鑄型穿孔部拡大

例言

1. 本書は静岡県沼津市原字一本松他に所在する中原遺跡の発掘調査報告書（第2分冊）である。第2分冊は中原遺跡4区・7区の調査成果と自然科学分析について記載している。その他、調査に関する例言は、第1分冊を参照していただきたい。

凡例

1. 方位は国家座標の真北方位で、座標値は世界測地系に準拠している。標高は海拔高を表す。
2. 遺構名の記載は例のとおりに統一した。なお、各区の報告において、8区・5区を除いては、調査区名は省略した。例) 3区第1号竪穴住居址：3-SB1

3. 遺構の略号は、次のとおりである。遺構実測図の縮尺は基本的には以下に示すもので統一をしたが、一部の遺構についてはその限りでない。そのため、各図にスケールを表示した。

SB：竪穴住居址：S=1/80 SH：掘立柱建物址：S=1/80

SD：溝状遺構：分布図 S=1/250、1/300、平面図 S=1/80、1/150、断面図 S=1/80

SK：土坑：S=1/80 PT：ピット：分布図 S=1/250、1/300 P：柱穴：各遺構図による。

SX：不明遺構：S=1/80

4. 遺構実測図中のスクリーントーンの指示は以下のとおりである。



カマド



粘土範囲



焼土・炭化物

5. 遺物実測図の縮尺については以下のとおりである。

土器：S=1/4 石製品：S=1/2、S=1/4 土製品・銅製品・鉄製品・玉製品：S=1/2 古銭 S=1/1

6. 本書で使用した土器類の断面表現は以下のとおりである。

土師器断面（白抜き） 須恵器断面（黒塗り）

7. 遺物出土状況図は出土位置の座標を記録した遺物のみ記載している。なお、遺物のシンボルについては各図に凡例を表示した。

8. 遺物出土状況図で示した挿図番号と出土遺物実測図に示した番号は同一である。また遺構出土状況図には、遺構断面図に出土した座標を投影したドット図を併せて掲載した。

9. 土層・土器胎土の色調・記号は、新版標準土色帖に基づいて記載し、計測は土色計（SCR-1 第一合成株式会社製）を用いた。

10. 本遺跡で用いる時期区分は鈴木敏則氏の遠江須恵器編年（鈴木敏則 2001・2004）を用い、本文では遠江と略す。おおその時期の対応は第1分冊の凡例を参照。

目次

巻頭カラー図版

例言

凡例

第2分冊 調査区位置図 1

第VI章 4区の調査

第1節 4区の調査経過 4

第2節 4区の遺構と遺物 4

第VII章 7区の調査

第1節 7区の調査経過 76

第2節 7区の遺構と遺物 76

第VIII章 自然科学分析

1. 中原遺跡出土の炭化物の種類と年代（パリオ・サーヴェイ株式会社） 182

2. 中原遺跡出土の炭化材の年代と樹種（パリオ・サーヴェイ株式会社） 196

3. 中原遺跡出土ガラス小玉鋳型の自然科学分析（パリオ・サーヴェイ株式会社） 204

4. 中原遺跡出土金属遺物の成分分析（パリオ・サーヴェイ株式会社） 234

5. 沼津市中原遺跡出土古代土師器の胎土分析（パリオ・サーヴェイ株式会社） 239

6. 中原遺跡出土水平口縁甕の蛍光X線分析による製作地の推定（池谷 信之） 247

報告書抄録

奥付

巻頭カラー図版目次

図版 1	4区西側完掘状況 4区東側完掘状況
図版 2	7区完掘状況 銅製鉸貝と刺金
図版 3	4区第 21 号住居址出土 鉄鉋 4区第 21 号住居址出土 銅製分銅
図版 4	銅製耳環と銅環 4区出土 ガラス小玉鋳型穿孔部拡大

挿図目次

第 1 図	調査区位置図	1
第 2 図	4区主軸方位	4
第 3 図	4区遺構配置図	5
第 4 図	4区調査区割付図	5
第 5 図	4区第 1 号住居址実測図	7
第 6 図	4区第 1 号住居址出土遺物実測図	8
第 7 図	4区第 2・3 号住居址実測図 (1)	9
第 8 図	4区第 2・3 号住居址実測図 (2)	10
第 9 図	4区第 2 号住居址遺物出土状況図	11
第 10 図	4区第 2 号住居址出土遺物実測図	11
第 11 図	4区第 4 号住居址実測図	13
第 12 図	4区第 4 号住居址出土遺物実測図	14
第 13 図	4区第 5 号住居址実測図	14
第 14 図	4区第 5 号住居址出土遺物実測図	14
第 15 図	4区第 6 号住居址実測図	15
第 16 図	4区第 6 号住居址出土遺物実測図	15
第 17 図	4区第 7 号住居址実測図 (1)	16
第 18 図	4区第 7 号住居址実測図 (2)	17
第 19 図	4区第 7 号住居址遺物出土状況図	18
第 20 図	4区第 7 号住居址出土遺物実測図	19
第 21 図	4区第 8 号住居址実測図	20
第 22 図	4区第 9 号住居址実測図	21
第 23 図	4区第 9 号住居址出土遺物実測図	21
第 24 図	4区第 10 号住居址実測図 (1)	22
第 25 図	4区第 10 号住居址実測図 (2)	23
第 26 図	4区第 10 号住居址遺物出土状況図	24
第 27 図	4区第 10 号住居址出土遺物実測図	25
第 28 図	4区第 11 号住居址実測図	26

第29图	4区第11号住居址遺物出土状況図	27
第30图	4区第11号住居址出土遺物実測図	28
第31图	4区第12号住居址実測図(1)	29
第32图	4区第12号住居址実測図(2)	30
第33图	4区第12号住居址出土遺物実測図	30
第34图	4区第14・22号住居址実測図	31
第35图	4区第14・22号住居址遺物出土状況図	32
第36图	4区第14号住居址出土遺物実測図(1)	33
第37图	4区第14号住居址出土遺物実測図(2)	34
第38图	4区第22号住居址出土遺物実測図	34
第39图	4区第15・16・21号住居址実測図(1)	36
第40图	4区第15・16・21号住居址実測図(2)	37
第41图	4区第15号住居址出土遺物実測図	39
第42图	4区第16号住居址出土遺物実測図	39
第43图	4区第15・16号住居址遺物出土状況図	40
第44图	4区第21号住居址遺物出土状況図	41
第45图	4区第21号住居址出土遺物実測図(1)	42
第46图	4区第21号住居址出土遺物実測図(2)	43
第47图	4区第17・18号住居址実測図(1)	44
第48图	4区第17・18号住居址実測図(2)	45
第49图	4区第17号住居址遺物出土状況図	46
第50图	4区第17号住居址出土遺物実測図	47
第51图	4区第18号住居址出土遺物実測図	48
第52图	4区第20号住居址実測図	50
第53图	4区第20号住居址出土遺物実測図	50
第54图	4区第1号掘立柱建物址実測図	51
第55图	4区第2号掘立柱建物址実測図	52
第56图	4区第3号掘立柱建物址実測図	54
第57图	4区第3号掘立柱建物址出土遺物実測図	54
第58图	4区第4号掘立柱建物址実測図	55
第59图	4区溝状遺構分布図	57
第60图	4区溝状遺構断面図(1)	58
第61图	4区溝状遺構断面図(2)	59
第62图	4区溝状遺構出土遺物実測図	63
第63图	4区ピット分布図	64
第64图	4区ピット出土遺物実測図	65
第65图	4区第1号不明遺構実測図	65
第66图	4区遺構外出土遺物実測図	66
第67图	4区出土土器拓本	68
第68图	7区遺構配置図	77
第69图	7区主軸方位	77

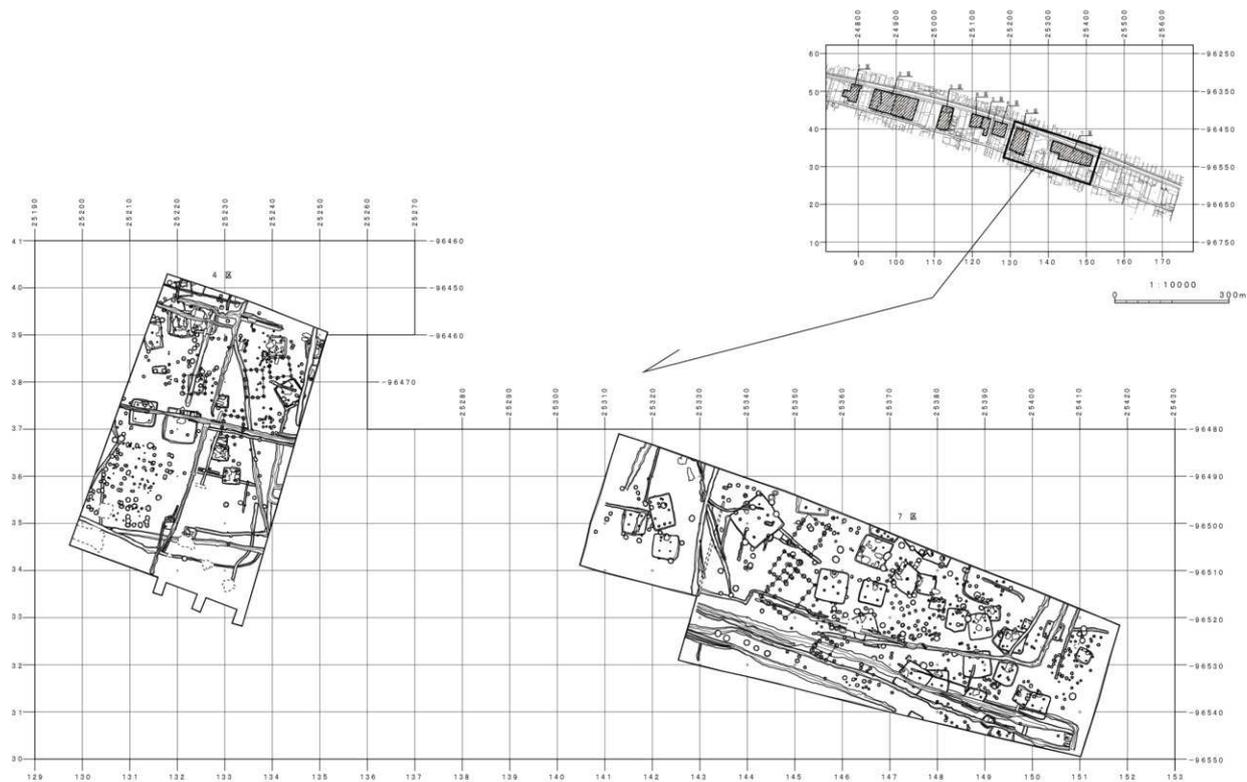
第 70 图	7 区第 1 号住居址实测图 (1)	79
第 71 图	7 区第 1 号住居址实测图 (2)	80
第 72 图	7 区第 1 号住居址出土遗物实测图	81
第 73 图	7 区第 2 号住居址实测图 (1)	82
第 74 图	7 区第 2 号住居址实测图 (2)	83
第 75 图	7 区第 2 号住居址出土遗物实测图 (1)	84
第 76 图	7 区第 2 号住居址出土遗物实测图 (2)	85
第 77 图	7 区第 3 号住居址实测图	86
第 78 图	7 区第 3 号住居址出土遗物实测图	86
第 79 图	7 区第 4 号住居址实测图 (1)	87
第 80 图	7 区第 4 号住居址实测图 (2)	88
第 81 图	7 区第 4 号住居址出土遗物实测图	89
第 82 图	7 区第 5 号住居址实测图 (1)	90
第 83 图	7 区第 5 号住居址实测图 (2)	91
第 84 图	7 区第 5 号住居址出土遗物实测图	91
第 85 图	7 区第 6 号住居址实测图 (1)	92
第 86 图	7 区第 6 号住居址实测图 (2)	93
第 87 图	7 区第 6 号住居址遗物出土状况图	94
第 88 图	7 区第 6 号住居址出土遗物实测图	95
第 89 图	7 区第 7 号住居址实测图	96
第 90 图	7 区第 7 号住居址出土遗物实测图	97
第 91 图	7 区第 8 · 35 · 36 号住居址实测图	99
第 92 图	7 区第 8 号住居址遗物出土状况图	101
第 93 图	7 区第 8 号住居址出土遗物实测图	103
第 94 图	7 区第 36 号住居址出土遗物实测图	103
第 95 图	7 区第 9 号住居址实测图	104
第 96 图	7 区第 10 号住居址实测图 (1)	105
第 97 图	7 区第 10 号住居址实测图 (2)	106
第 98 图	7 区第 10 号住居址出土遗物实测图	106
第 99 图	7 区第 11 号住居址实测图 (1)	107
第 100 图	7 区第 11 号住居址实测图 (2)	108
第 101 图	7 区第 11 号住居址遗物出土状况图	109
第 102 图	7 区第 11 号住居址出土遗物实测图	110
第 103 图	7 区第 12 号住居址实测图	111
第 104 图	7 区第 12 号住居址出土遗物实测图	112
第 105 图	7 区第 14 号住居址实测图 (1)	112
第 106 图	7 区第 14 号住居址实测图 (2)	113
第 107 图	7 区第 15 号住居址实测图 (1)	114
第 108 图	7 区第 15 号住居址实测图 (2)	115
第 109 图	7 区第 15 号住居址出土遗物实测图 (1)	115
第 110 图	7 区第 15 号住居址遗物出土状况图	116

第 111 图	7 区第 15 号住居址出土遗物实测图 (2)	117
第 112 图	7 区第 16 号住居址实测图 (1)	117
第 113 图	7 区第 16 号住居址实测图 (2)	118
第 114 图	7 区第 16 号住居址遗物出土状况图	119
第 115 图	7 区第 16 号住居址出土遗物实测图 (1)	120
第 116 图	7 区第 16 号住居址出土遗物实测图 (2)	121
第 117 图	7 区第 17 号住居址实测图 (1)	121
第 118 图	7 区第 17 号住居址实测图 (2)	122
第 119 图	7 区第 17 号住居址出土遗物实测图	122
第 120 图	7 区第 18 号住居址出土遗物实测图	123
第 121 图	7 区第 18 号住居址出土遗物实测图	125
第 122 图	7 区第 19 号住居址实测图	125
第 123 图	7 区第 20·21 号住居址实测图 (1)	126
第 124 图	7 区第 20·21 号住居址实测图 (2)	127
第 125 图	7 区第 20 号住居址出土遗物实测图	128
第 126 图	7 区第 21 号住居址出土遗物实测图	128
第 127 图	7 区第 22 号住居址实测图 (1)	129
第 128 图	7 区第 22 号住居址实测图 (2)	130
第 129 图	7 区第 22 号住居址出土遗物实测图	131
第 130 图	7 区第 23 号住居址实测图 (1)	132
第 131 图	7 区第 23 号住居址实测图 (2)	133
第 132 图	7 区第 23 号住居址出土遗物实测图	133
第 133 图	7 区第 24 号住居址实测图	134
第 134 图	7 区第 24 号住居址出土遗物实测图	135
第 135 图	7 区第 25 号住居址实测图	136
第 136 图	7 区第 25 号住居址出土遗物实测图	137
第 137 图	7 区第 26 号住居址实测图	137
第 138 图	7 区第 27·39 号住居址实测图	138
第 139 图	7 区第 27 号住居址出土遗物实测图	139
第 140 图	7 区第 28 号住居址实测图	140
第 141 图	7 区第 28 号住居址出土遗物实测图	141
第 142 图	7 区第 29 号住居址实测图 (1)	141
第 143 图	7 区第 29 号住居址实测图 (2)	142
第 144 图	7 区第 29 号住居址遗物出土状况图	143
第 145 图	7 区第 29 号住居址出土遗物实测图	144
第 146 图	7 区第 30 号住居址实测图 (1)	145
第 147 图	7 区第 30 号住居址实测图 (2)	146
第 148 图	7 区第 30 号住居址出土遗物实测图	147
第 149 图	7 区第 31 号住居址实测图	148
第 150 图	7 区第 31 号住居址遗物出土状况图	149
第 151 图	7 区第 31 号住居址出土遗物实测图 (1)	150

第 152 図	7 区第 31 号住居址出土遺物実測図 (2)	151
第 153 図	7 区第 32 号住居址実測図	152
第 154 図	7 区第 33・34 号住居址実測図	153
第 155 図	7 区第 33 号住居址出土遺物実測図	154
第 156 図	7 区第 34 号住居址出土遺物実測図	154
第 157 図	7 区第 1 号掘立柱建物址実測図	155
第 158 図	7 区第 2 号掘立柱建物址実測図 (1)	156
第 159 図	7 区第 2 号掘立柱建物址実測図 (2)	157
第 160 図	7 区第 3 号掘立柱建物址実測図	159
第 161 図	7 区第 4 号掘立柱建物址実測図	160
第 162 図	7 区溝状遺構分布図	161
第 163 図	7 区溝状遺構土層断面図	162
第 164 図	7 区溝状遺構出土遺物実測図	169
第 165 図	7 区ビット分布図	171
第 166 図	7 区ビット出土遺物実測図	172
第 167 図	7 区第 1 号不明遺構実測図	172
第 168 図	7 区第 1 号不明遺構出土遺物実測図	172
第 169 図	7 区遺構外出土遺物実測図	173
第 170 図	7 区出土土器拓本 (1)	174
第 171 図	7 区出土土器拓本 (2)	175

挿表目次

第 1 表	4 区溝状遺構計測表 (1)	58
第 2 表	4 区溝状遺構計測表 (2)	59
第 3 表	4 区ビット計測表 (1)	69
第 4 表	4 区ビット計測表 (2)	70
第 5 表	4 区ビット計測表 (3)	71
第 6 表	4 区ビット計測表 (4)	72
第 7 表	4 区ビット計測表 (5)	73
第 8 表	4 区ビット計測表 (6)	74
第 9 表	7 区溝状遺構計測表 (1)	162
第 10 表	7 区溝状遺構計測表 (2)	163
第 11 表	7 区ビット計測表 (1)	175
第 12 表	7 区ビット計測表 (2)	176
第 13 表	7 区ビット計測表 (3)	177
第 14 表	7 区ビット計測表 (4)	178
第 15 表	7 区ビット計測表 (5)	179
第 16 表	7 区ビット計測表 (6)	180



左列・下列に示した2～3桁数字はグリッドを示し、上列・右列に示した5桁数字は国土座標値を示す。

第1図 調査区位置図（第2分冊報告分）

0 1:800 20m

第Ⅵ章 4区の調査

第VI章 4区の調査

第1節 4区の調査経過

中原遺跡4区は、全体調査区の中では中央東寄りに位置する2,332㎡の調査区である。当初、南北に長軸を持つ長方形の調査区①を設定し、③を排土置き場として調査を進めた（第4図）。また①の調査中には新たにトレンチを3か所（②）を設定し、南端部における遺構の広がりを確認した。そして①・②の調査終了後は①の西側に隣接する③の調査を行った。

4区の調査は、平成20年7月30日より重機による表土掘削を開始した。8月11日から遺物包含層の上面を精査した後、遺物包含層の掘り下げに着手し、9月4日から遺物包含層の掘り下げが完了した地点から順次、遺構検出面の精査と遺構掘削を行った。また9月22日からは前述したように調査区南側の確認のため、トレンチを3か所設定し掘り下げたが、トレンチでは遺構が確認されなかった。そのため、9月25日に②での掘削作業を終了した。

10月2日より③の範囲も含めて遺構掘削を進め、4区の大部分の調査を平成21年2月18日までに完了させた。2月24日には空中写真撮影を実施し、撮影後は引き続き柱穴の掘り下げなど、残った遺構の掘削および実測作業を3月15日まで行い、3月16日には2回目の空中写真撮影を実施した。空中写真撮影終了後は埋め戻し作業を行い、3月19日に埋め戻し作業を完了させ、その後現場資材等を撤去し、4区の調査を全て完了させた。

第2節 4区の遺構と遺物

4区は南から北へ向かってやや傾斜となっている調査区である。遺構は調査区全域で検出されたが、特に北半に集中する。遺構は古墳時代後期～奈良平安時代にかけての竪穴住居址20軒、これらと同年代と思われる掘立柱建物4棟、中世以降と推測される溝状遺構31条、組み合わせの判明しないピット313基が検出された。

なお、4区では調査段階においてSB13・SB19・SD9・SD10・SD16の名称が与えられている遺構が存在した。これらは整理作業における検討の結果、遺構ではないと判断されたが、調査と並行して遺物への注記作業がかなりの数で進行していたため、混乱を防ぐためにもこれらを欠番とし、その他の遺構に対しても新しく遺構名称を振り直すことはせず、調査時に付けられた番号をそのまま用いて報告した。

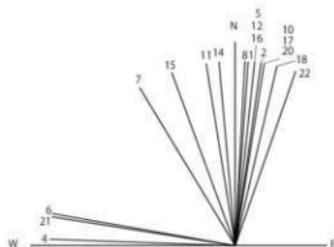
出土遺物は、遺構から出土したものを中心に掲載した。出土遺物は古墳時代後期～奈良平安時代に帰属するものが大半を占めるが、中世以降の遺物も少量であるが認められた。

(1) 竪穴住居址 4-SB

調査区中央付近から北側にかけて18軒が集中し、2軒のみ南側での検出である。主軸方位は3つのグループに分かれる（第2図）。すなわち、北東-南西軸を持つグループ（SB1・SB2・SB5・SB8・SB10・SB12・SB16・SB17・SB18・SB20・SB22）、ややばらつきがあるものの北西-南東軸を持つグループ（SB7・SB11・SB14・SB15）、西北西-東南東軸を持つグループ（SB4・SB6・SB21）の3グループである。なおSB3・SB9の軸方位は不明である。

4区第1号住居址（4SB1 第5図・第6図）

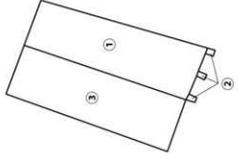
132-35Gr・132-36Gr・133-35Gr・133-36Gr で 検



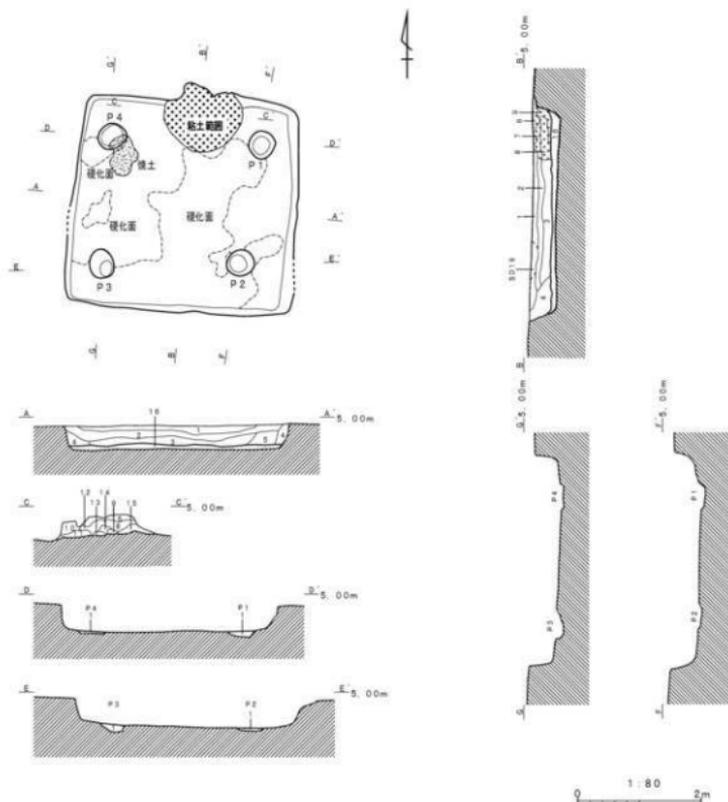
第2図 4区主軸方位



第3図 4区遺構配置図

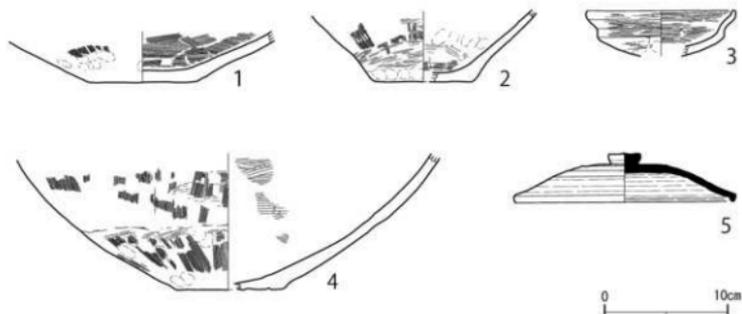


第4図 4区調査区劃付図



A・B・C	1 10YR2/1	黒	やや締まりが強い褐色土で5mm以下の繊維40%、5mm以下のスコリア10%を含む
	2 10YR2/1	黒	締まりが強い褐色砂礫土で5mm以下の繊維50%、5mm以下のスコリア7%を含む
	3 10YR1/7/1	黒	締まりが強い褐色砂礫土で1~2mmの繊維50%、5mm以下のスコリア7%を含む
	4 10YR1/7/1	黒	締まりが強い褐色土で5mm以下の繊維15%、5mm以下のスコリア5%を含む
	5 10YR1/7/1	黒	やや締まりが強い褐色土で5mm以下の繊維15%、10mm以下のスコリア5%を含む
	6 5Y2/2	赤褐色	やや締まりが強い2~7mmの繊維15%、2mm程度のスコリア1%以下を含む
	7 10YR2/3	暗褐	粘性が強い5mm以下の繊維3%、2~5mmのスコリア2%を含む
	8 2.5Y2/1	黒	2~8mmの繊維20%、5mm以下のスコリア3%を含む
	9 10YR2/2	黒	締まりが強い5mm以下の繊維10%、2~5mmのスコリア5%、粘土、土器片を含む
	10 10YR4/2	灰黄褐	やや締まりが強い2~7mmの繊維30%、5mmのスコリア3%を含む
	11 10YR2/2	黒	締まりが強い3~8mmの繊維15%、2mmのスコリア1%を含む
	12 10YR2/3	暗褐	締まりが強い2~7mmの繊維7%、5mm以下のスコリア2%を含む
	13 2.5Y3/1	黒	やや締まりが強い2~7mmの繊維10%、1mmのスコリア1%を含む
	14 7.5YR3/2	黒	締まりが強い3~10mmの繊維5%、1mmのスコリア1%を含む
	15 2.5Y3/2	黒	やや締まりが強い2~7mmの繊維7%、1mmのスコリア1%を含む
	16 10YR2/1	黒	砂質土壌
	P1 5YR2/1	黒	黄色く練れやすい繊維が多量で8~12mmの繊維10%、1~2mmのスコリア10%を含む
	P2 5YR2/1	黒	黄色く練れやすい繊維が多量で5~15mmの繊維7%、1~3mmのスコリア10%を含む
	P3 2.5Y2/1	赤	黄色く練れやすい15mmの繊維7%、1~2mmのスコリア7%を含む
	P4 7.5YR2/1	赤	黄色く練れやすい繊維が多量で5~15mmの繊維7%、1~3mmのスコリア10%を含む

第5図 4区第1号住居址実測図



第6図 4区第1号住居址出土遺物実測図

出された。平面形は方形を呈し、立ち上がりは深さ0.32mが残存していた。SD19がSB1を切っているが、SD19の掘り込みは0.02～0.14mと非常に浅く、写真で確認する限りSB1にはほとんど影響を与えていない。

規模 東西3.66m×南北3.41m

重複関係 (古)SB1→SD19(新)

主軸方位 N-4°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4は径0.39～0.45m・深さ0.04～0.10mを測る。

貼床 黒色の砂質土を使って床面とし、SB中央から南側にかけて硬化面が広がっていた。またP4付近の床面直上で焼土が認められた。

カマド 北辺の中央に位置する。崩壊していたため形状は確認できなかったが、カマドの構築土とみられる粘土の広がり認められた。芯材等は確認されなかった。

遺物 土器を5点図示した。1～4は土師器、5は須恵器である。

1・2は甕の底部で木葉痕を有する。1は2に比べ、底部から胴部への開きが大きく、また器壁も厚い。1はハケメ調整、2はハケメとミガキ調整が施される。3は須恵器模倣坏である。口縁部と体部の境の稜は強く、口唇部が内傾する。内外面とも黒色処理が施される。4は土師器の埴の底部で、外面にミガキ調整による光沢がごくわずかに観察できる。

5は須恵器の摘み蓋で、天井部には回転ヘラケズリが施される。やや平頂化しており、遠江V期前半頃に位置づけられる。1と5はカマドから出土した。

時期 出土遺物から(7世紀後半～)8世紀前半頃に位置づけられる。

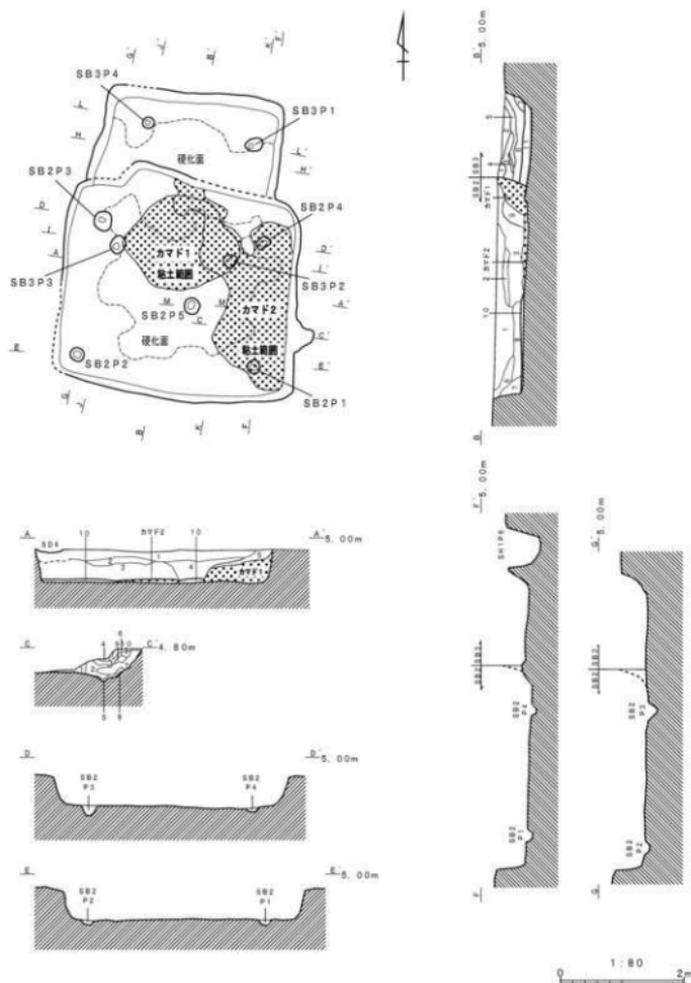
4区第2・3号住居址(4-SB2・4-SB3 第7図～第10図)

SB2は132-36Gr・133-36Grで検出された。SD4に上端の一部が切られる。平面形は東西辺がやや長い方形を呈し、立ち上がりは深さ0.39mが残存していた。カマド周辺の立ち上がりが明瞭ではなかったため、B断面図には粘土の広がりからSB2とSB3の境を想定線を用いて表現した。また、両遺構の層位の差を認識できなかったため、SB2とSB3では同一番号を振っているが、本来は異なるSB遺構の覆土である。SB3は132-36Gr・133-36Grで検出された。南半をSB2に切られているため、全容は明らかではないが、残存部から平面形は方形と推定される。立ち上がりは深さ0.30mが残存していた。

規模 SB2 東西3.82m×南北3.34m SB3 東西2.92m×南北1.61m(残存部)

重複関係 (古)SB3→SB2→SD4(新)

主軸方位 SB2 N-8°-E(カマド1段階) SB3 不明(カマド未検出 SB2と同一軸か)



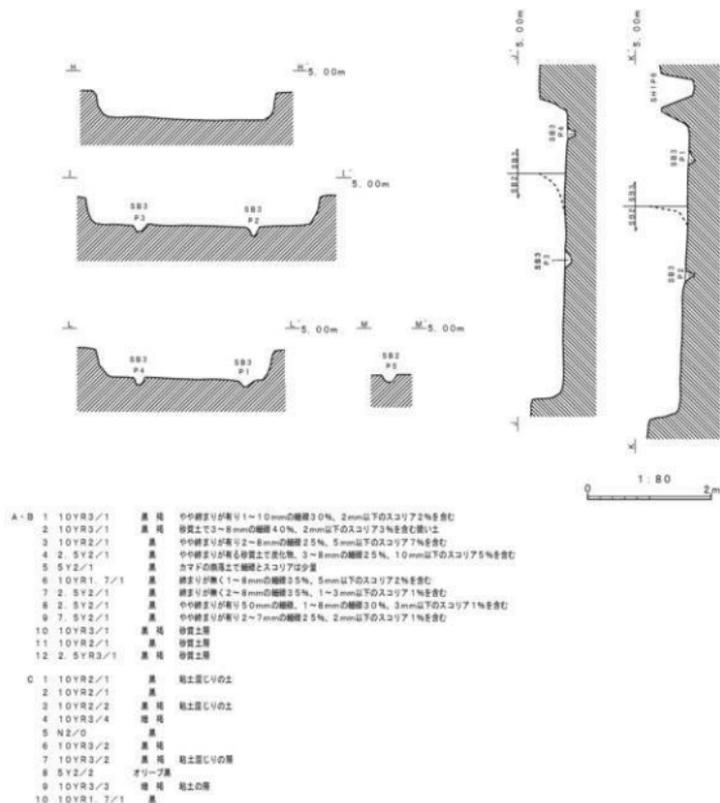
第7図 4区第2・3号住居実測図(1)

壁 溝 いずれも検出されない。

柱 穴 SB2 5基検出。主柱穴と考えられるP1～P4は径0.20～0.27m・深さ0.07～0.16mを測る。P5は中央やや南寄りに位置し、径0.25m・深さ0.12mである。

SB3 4基検出。P1～P4は径0.18～0.29m・深さ0.10～0.15mを測る。

貼 床 いずれも黒褐色の砂質土を使って床面としている。SB2の中央とSB3の北端部を除く全域に硬化面が認められた。



第8図 4区第2・3号住居址実測図(2)

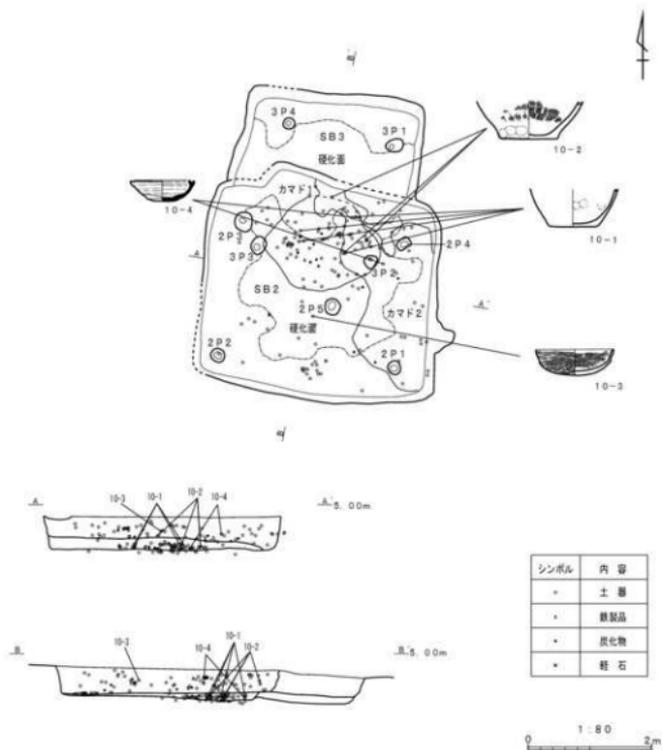
カマド SB2 北辺中央と東辺でカマドの構築土と考えられる粘土の広がり認められた。遺構内で2か所の粘土の広がりが検出されたことから、カマドの造り替えがあったものと想定される。北辺のものをカマド1、東辺のものをカマド2とした。位置や遺物の出土状況からカマド2が先に作られたものと考えられる。いずれも芯材等は確認されなかった。

SB3 検出されない。

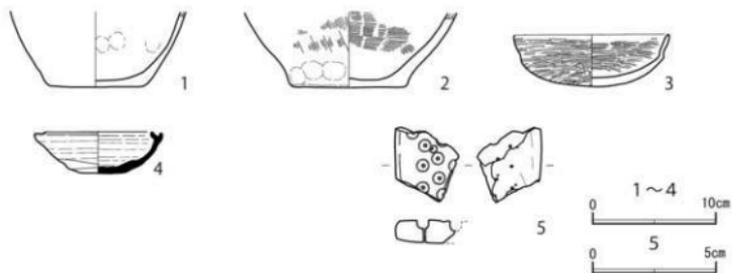
遺物 SB2は土師器3点、須恵器1点、土製品1点の計5点を図示した。

1・2は甕である。1・2は胴部下半から底部のみであるが、1は底部のナデが弱く、また2と比べ器壁が薄い。いずれも木葉痕を有する。3は土師器の丸底坏で、口縁部と体部の境に稜を持つ。内外面ともに黒色処理が施される。4は須恵器の坏身で、法量から遠江IV期(後葉)頃に位置づけられる。1・2・4はカマドの掘方から出土した。

5はガラス小玉の鋳型である。胎土は精製緻密で、最大長3.03cm、最大幅2.56cm、厚さ0.99cm、表面にはほぼ完形の貫通孔が5か所認められる一方、裏面はそれに加えて、表面まで貫通しない盲孔が3か



第9図 4区第2号住居址遺物出土状況図



第10図 4区第2号住居址出土遺物実測図

所認められる。盲孔は、いずれも貫通孔の近くに並ぶように認められる。

SB3は破片資料が数点出土しているが、図示できる遺物はなかった。

時期 出土遺物からSB2は7世紀後半に位置づけられる。SB3はSB2に切られているが、小片遺物において7世紀を遡る遺物が出土していないことから、SB3も7世紀の範囲内に位置づけられる。

4区第4号住居址(4SB4 第11図・第12図)

133-38Gr・134-38Grで検出された。南辺の上端の一部がSH3P12および攪乱により切られている。平面形は南北方向に長軸を持つ長方形である。立ち上がりは深さ0.54mが残存していた。

規模 東西3.60m×南北4.36m 重複関係:(古)SB4→SH3(新)

主軸方位 N-88°-W 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。検出面からP1・P3・P4は径0.22～0.27m・深さ0.04～0.05m、P2は径0.46m・深さ0.08mを測る。

貼床 黒色の砂質土を使って床面とし、硬化面がまばらに認められた。

カマド 西辺の中央に位置する。崩壊していたが、カマドの構築土とみられる粘土の広がりや掘方を検出した。また多数の土器破片が出土しているが、これを除き芯材等は確認されていない。

遺物 土器を6点を図化した。1～3は土師器、4～6は須恵器である。

1は小型甕でやや肩が張る。SB2から出土した小片と接合した。2は同じく小型甕であるが、1と比べて肩部の張りが弱い。3は外面に密なミガキ調整が施される。

4～6は須恵器の無台碗である。4は底部から口縁部に向けて大きく外反し、内面にはロクロ目を強く残す。遠江V期～VI期前半頃に位置づけられる。5・6は内面に火樺状の黒斑が認められる。特に6は火樺が明瞭である。また6の胎土は白色で、焼成は悪く、かつ軟質で、またロクロ目を強く残すなど遠江の須恵器とは異なる特徴を持つことから、別の地域からの搬入と考えられる。

1・4・6はカマドから出土し、5は床面直上から出土した。

時期 須恵器から8世紀後半(～9世紀初頭)頃に位置づけられる。

4区第5号住居址(4SB5 第13図・第14図)

132-37Gr・133-38Grで検出された。上端をSD21やピット、攪乱により切られているが、平面形は方形と考えられる。立ち上がりは深さ0.35mが残存していた。

規模 東西2.56m×南北2.61m 重複関係(古)SB5→SD21(新)

主軸方位 N-6°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 検出されない。

貼床 黒色の砂質土層を使って床面とし、ほぼ全面に硬化面が認められた。

カマド 北辺の中央に位置する。検出段階でカマド構築土を確認したことから、本来の高さよりも大きく削平を受けている。カマドの芯材等は確認されなかった。

遺物 駿東型球胴甕を1点図化した。肩部はやや張り、口縁部がやや肥厚する。頸部に横位ヘラミガキ調整が認められる。カマドから出土した。

時期 横位ヘラミガキ調整を施す球胴甕から7世紀後半～8世紀前半に位置づけられる。

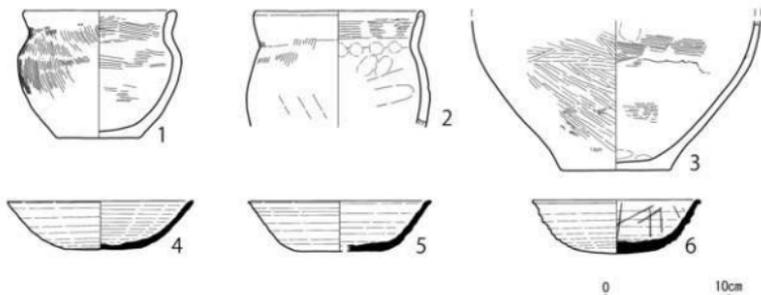
4区第6号住居址(4SB6 第15図・第16図)

132-34Grで検出された。北東角をSD7、南辺の上端をSD8に切られる。検出された平面形は不整な方形を呈し、立ち上がりは深さ0.45mが残存していた。

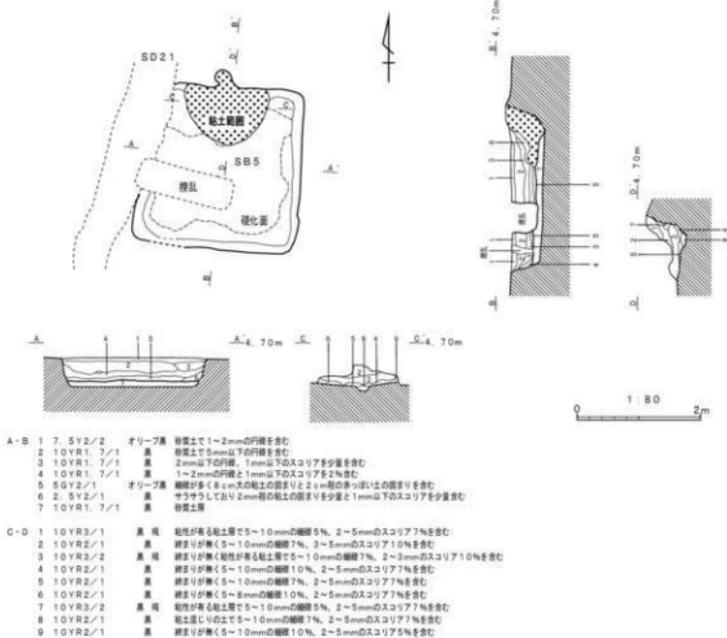
規模 東西2.53m×南北2.70m 重複関係(古)SB6→SD7・SD8(新)

主軸方位 N-80°-W 壁溝 検出されない。

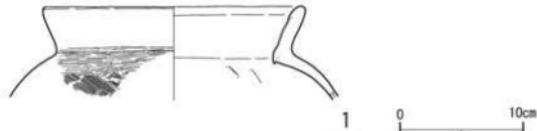
柱穴 検出されない。 **貼床** 確認できなかった。



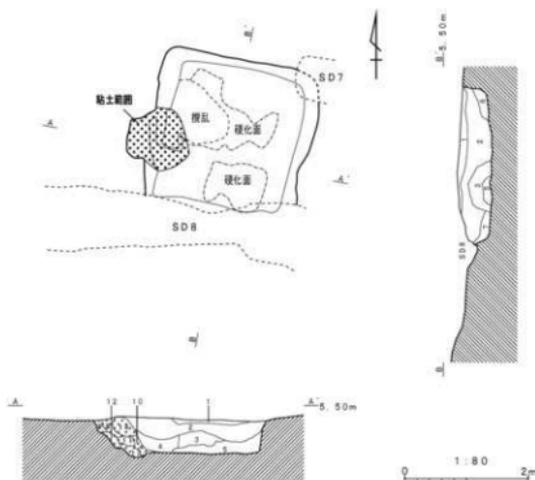
第12図 4区第4号住居址出土遺物実測図



第13図 4区第5号住居址実測図

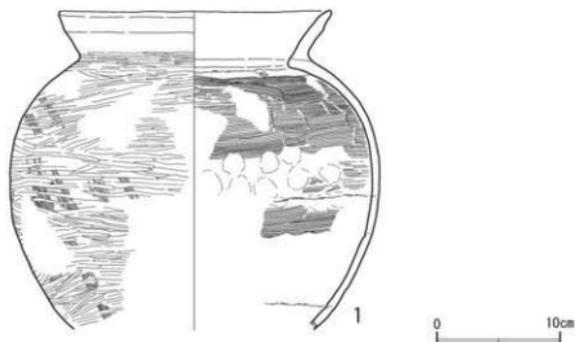


第14図 4区第5号住居址出土遺物実測図

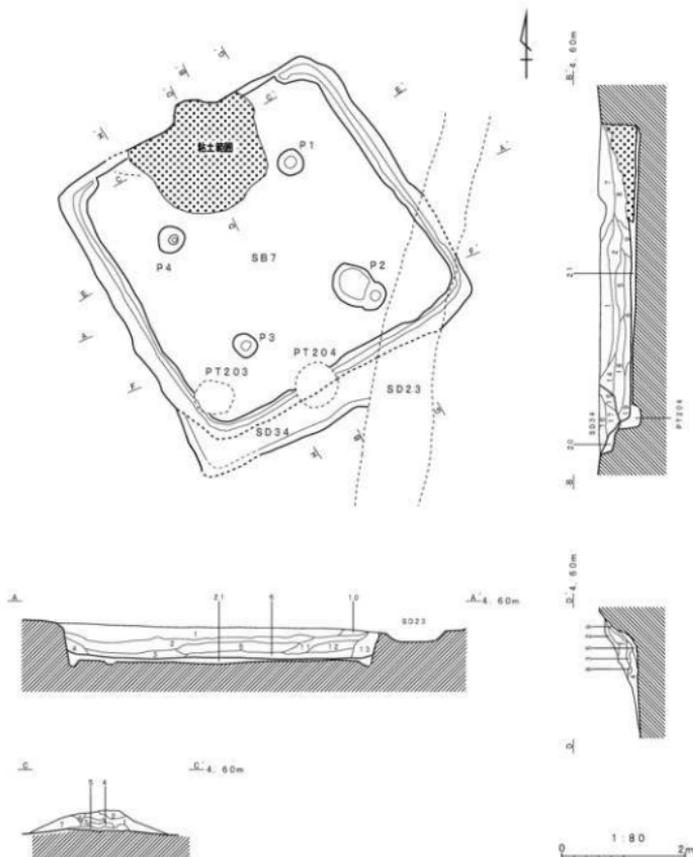


- | | | | |
|-------|-----------|--------|--|
| A・B 1 | 10YR1 7/1 | 黒 | 終まりが無く2~1.5mmの繊維が主体で2.0mmの繊維、2mm以下のスコリアを含む |
| 2 | 10YR1 7/1 | 黒 | 終まりが無く1.0~1.5mmの繊維1.5%、2~5mmのスコリア10%を含む |
| 3 | 10YR1 7/1 | 黒 | 終まりが無く5~1.0mmの繊維10%、5mm以下のスコリア7%を含む |
| 4 | 10YR1 7/1 | 黒 | 終まりが無く1.0~1.5mmの繊維10%、2~8mmのスコリア10%を含む |
| 5 | 10YR1 7/1 | 黒 | 終まりが無く5~1.0mmの繊維10%、3~5mmのスコリア7%を含む |
| 6 | 10YR1 7/1 | 黒 | やや終まりがあり5~1.0mmの繊維10%、5mm以下のスコリア10%を含む |
| 7 | 10YR1 7/1 | 黒 | 2.5mmの繊維が10%、5mm以下のスコリア7%を含む |
| 8 | 5YR2/2 | 黒褐色 | やや終まりがある砂質土で1.0mm以下の繊維を3%、5mm以下の繊維30%、粘土ブロック30%を含む |
| 9 | 10YR1 7/1 | 黒 | やや終まりがあり1.0mm以上の繊維1%、5mm以下のスコリア30%を含む |
| 10 | 10YR3/3 | 緑褐色 | カマド跡上でやや粘性があり5mm以下の繊維3%、5mm以下のスコリア3%を含む |
| 11 | 5YR2/1 | 黒 | 終まりが無く砂質土で5mm以下の繊維が主体でカマド粘土を若干含む |
| 12 | 5YR2/1 | 黒 | 終まりが無く砂質土で1~2mmの繊維が主体でカマド粘土を若干含む |
| 13 | 10YR2/1 | 黒 | 終まりが無く砂質土で5mm以下の繊維が主体で層に比べ褐色土ブロック30%を含む |
| 14 | 10YR4/3 | にじみ黄褐色 | カマド跡上でやや粘性があり5mm以下の繊維3%、5mm以下のスコリア3%を含む |

第15図 4区第6号住居址実測図



第16図 4区第6号住居址出土遺物実測図



第17図 4区第7号住居址実測図(1)

カマド 西辺のやや南寄りに位置する。崩壊していたため形状はほぼ確認できなかったが、カマドの構築土とみられる粘土の広がりや掘方が認められた。土器破片が少量出土しているが、芯材等は確認されなかった。

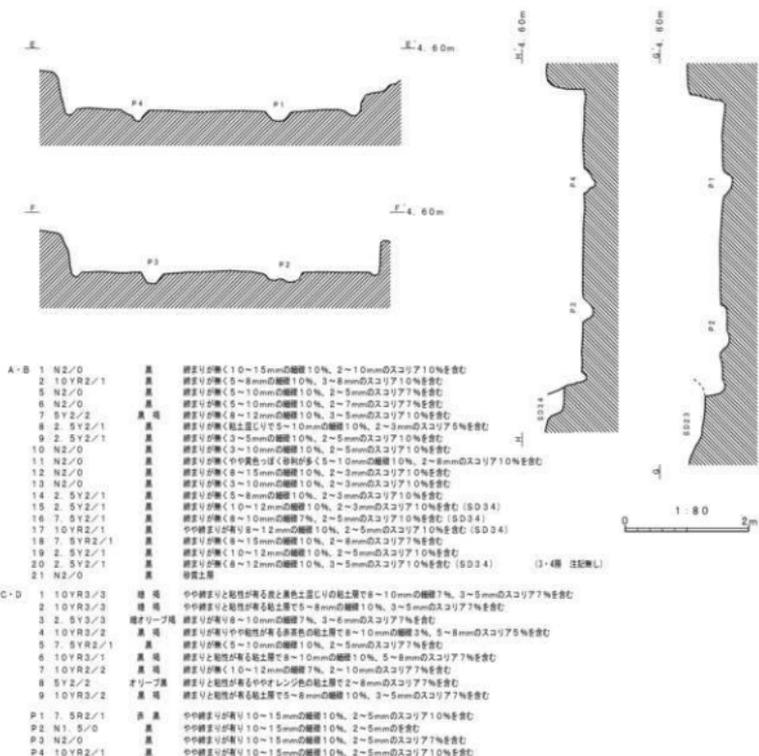
遺物 床面直上出土の敷東型球胸葬を1点図示した。横位のヘラミガキ調整が外面全面に施されている。

時期 横位ヘラミガキ調整を施す球胸葬から7世紀後半～8世紀前半に位置づけられる。

4区第7号住居址(4-SB7 第17図～第20図)

134-37Gr・134-38Grで検出された。検出時にはSD34を認識しておらず、両遺構を同一の住居址として掘り進めたが、SB7に壁溝が確認されたことから掘削途中からSD34とSB7を別遺構として扱った。

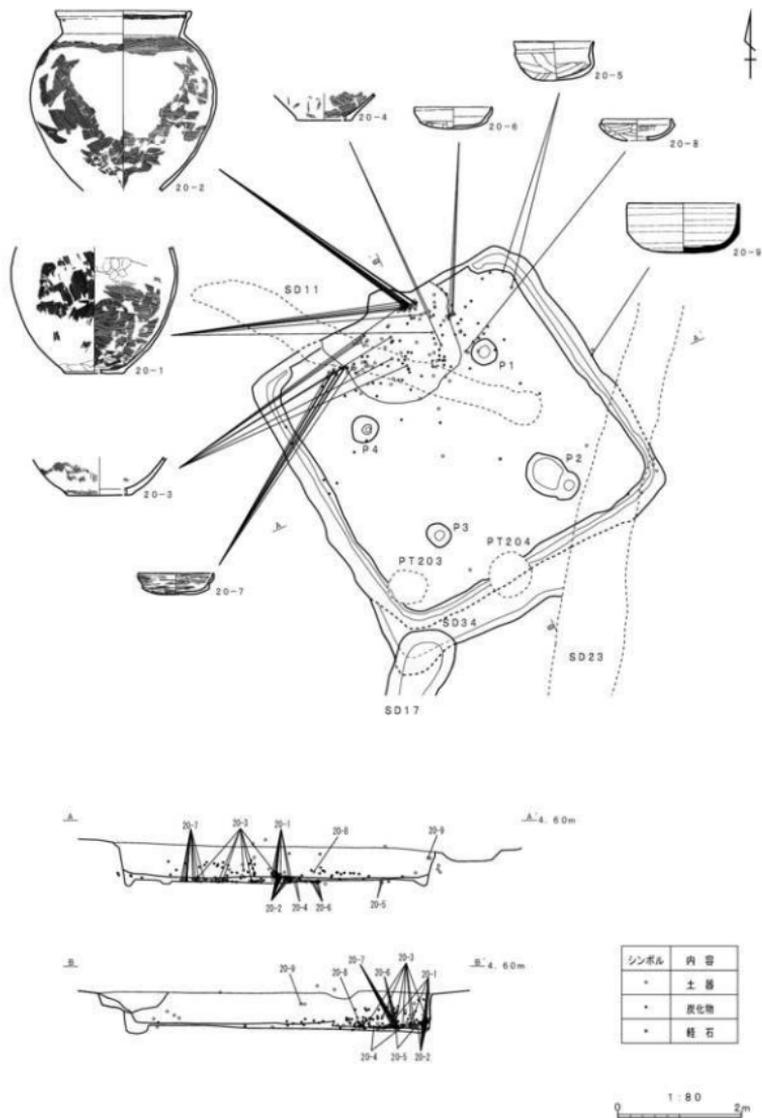
SB7はSD23に上端を切られるが、溝状遺構の深度が浅かったため、SB7の全容はほぼ捉えることができた。平面形は方形を呈し、立ち上がりは深さ0.48mが残存していた。



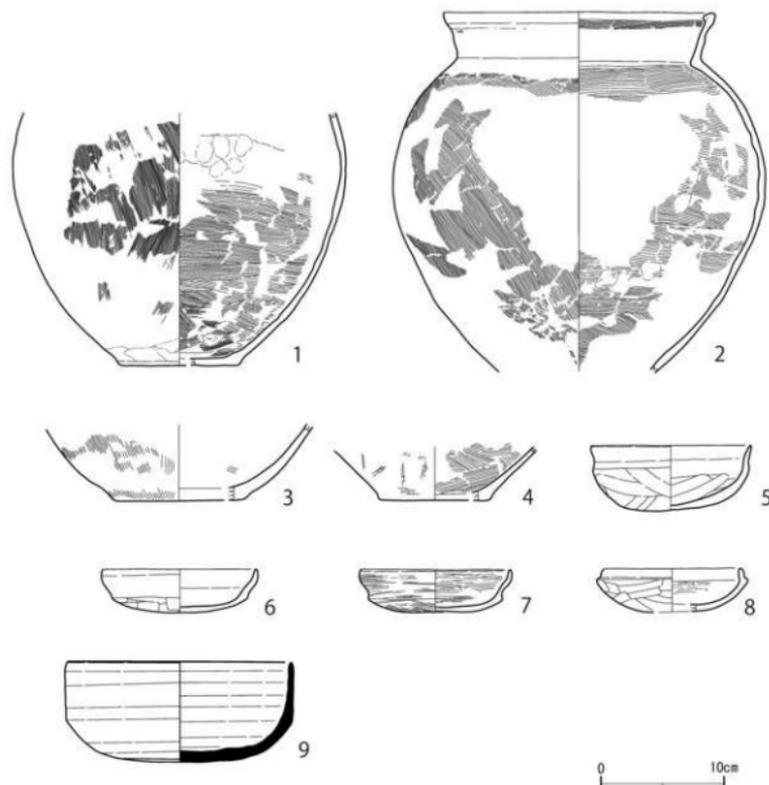
第18図 4区第7号住居址実測図(2)

なおSD34は、調査所見にしたがって溝状遺構としたが、SB7に先行するSB遺構の可能性もある。
 規模 東西4.93m×南北4.88m 重複関係 (古)SD34→SB7→SD11・SD17・SD23(新)
 主軸方位 N-31°-W
 壁 溝 北辺を除く3辺で検出された。幅0.20～0.44m、深さ0.08～0.18mを測る(残存部)。
 柱 穴 4基検出。P1・P3・P4は径0.37～0.46m・深さ0.15～0.18m、P2は径0.64m・深さ0.14mを測る。いずれも主柱穴と考えられる。
 貼 床 黒色の砂質土を使って床面としている。
 カマド 北辺の中央に位置する。崩壊しているが、カマドの構築土とみられる粘土が認められ、多数の土器破片、炭化物が出土した。芯材等は確認されなかった。
 遺 物 土器を9点図化した。1～8は土師器、9のみ須恵器である。

1～4は駿東型球胴甕で、内外面ともハケメ調整が施されるのみで、ミガキ調整は認められない。5～8は土師器の坏である。5は粗製胎土で、丸底の底部から内湾して立ち上がり、口唇部が短く反する。胎土には黒色粒がまばらに含まれ、底部には木葉痕が認められる。6はナデ調整であるが、7・8



第19図 4区第7号住居址遺物出土状況図



第20図 4区第7号住居址出土遺物実測図

はともにミガキ調整で、7は内外面ともに黒色処理を施す。9は須恵器の大形無台碗である。平底を呈し、体部は稜からまっすぐに立ち上がる。胎土は白色で、やや軟質であり、遺構覆土の中でも上層からの出土である。1・2・3・4・6・7はカマド周辺から出土した。

時期 須恵器の年代は明らかではないが、ミガキ調整を伴わない球胴甕や須恵器模倣坏から7世紀に位置づけられる。

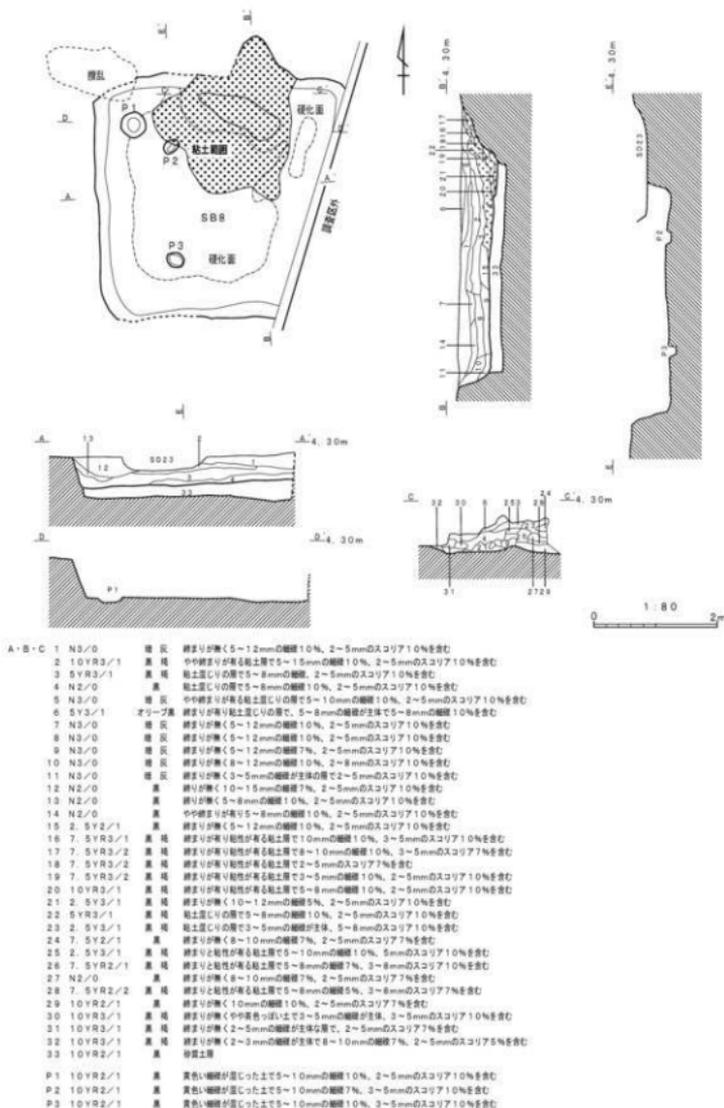
4区第8号住居址(4SB8 第21図)

134-38Gr・135-38Grで検出された。東側は調査区外に広がる。SD23に北辺と南辺の上端の一部を切られるが、深度は浅くSB8の下部が残存していたため、平面形は方形と捉えることができた。立ち上がりは最大で深さ0.50mが残存していた。

規模 東西3.41m×南北3.88m 重複関係 (古)SB8→SD23(新)

主軸方位 N-3°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 3基を検出したが、3基ともに遺構の西側に寄る。P1は径0.40m・深さ0.80m、P2・P3は径0.21～0.25m・深さ0.08～0.21mを測る。主柱穴はP2・P3であろう。



第21図 4区第8号住居地実測図

- 貼床** 黒色の砂質土を使って床面とし、SB中央から西側にかけて硬化面が認められた。
- カマド** 北辺の中央に位置する。崩壊していたが、カマドの構築土とみられる粘土と掘方を確認した。芯材等は検出されていない。
- 遺物** 図示できるものはなかったが、横位ヘラミガキ調整を施す裏の胴部片が出土している。
- 時期** 出土遺物から7世紀後半～8世紀前半頃と考えられる。

4区第9号住居址(4SB9 第22図・第23図)

134-38Grで検出された。東半は調査区外へ広がるため全容は明らかではない。SD23が西辺と北辺の上端を、PT150が南辺の一部を切っている。平面形は残存部分から方形と推定され、立ち上がりは深さ0.54mが残存していた。

規模 東西1.70m×南北2.76m **重複関係** (古)SB9→SD23(新)

主軸方位 不明(カマド未検出) **壁溝** 検出されない。

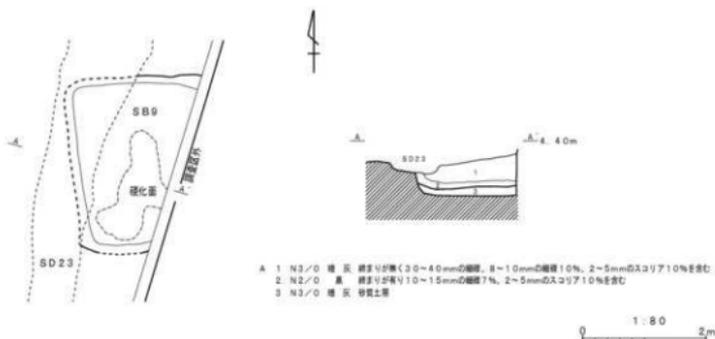
柱穴 検出されない。

貼床 暗灰色の砂質土層を使って床面としている。硬化面が中央から南西側に認められる。

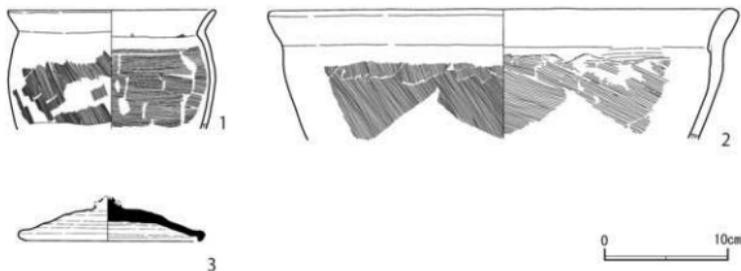
カマド 検出されない。

遺物 土器を3点図化した。1・2は土師器、3は須恵器である。

1は小型甕である。口縁部から胴部上半が残存する。内外面ともにハケメによる調整である。2は埴



第22図 4区第9号住居址実測図



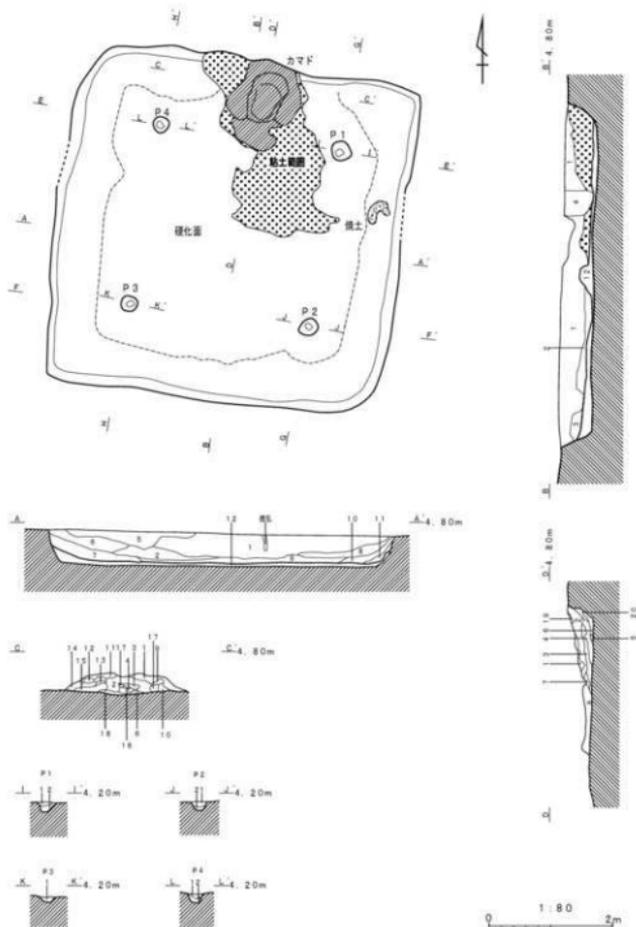
第23図 4区第9号住居址出土遺物実測図

である。胴部はやや内湾した後、底部に向かって直線的に延びる。内外面ともにハケメ調整のみである。3は須恵器の摘み蓋で、返り天井部には回転ヘラケズリが施され、頂部は失われているものの宝珠状のツマミの痕跡が認められる。やや平頂化していることから、遠江V期に位置づけられる。

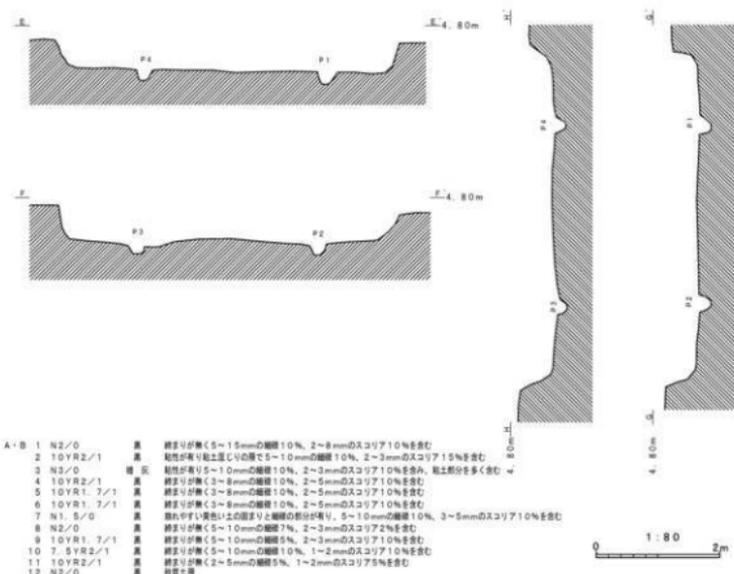
時期 出土遺物から8世紀前半頃の遺構と考えられるが、出土遺物が少なく詳細は不明である。

4区第10号住居址 (4-SB10 第24図～第27図)

131-37Grで検出された。SD12により一部上端が切られるが、全容はほぼ捉えることができた。平面形は方形を呈し、立ち上がりは深さ0.36mが残存していた。



第24図 4区第10号住居址実測図(1)



A・B	1	N2/0	黒	跡まりが無く5～15mmの繊維10%、2～8mmのスコリア10%を含む
	2	10YR2/1	黒	粘性が有り粘土質にしての層で5～10mmの繊維10%、2～3mmのスコリア15%を含む
	3	N3/0	黒	粘性が有り5～10mmの繊維10%、2～3mmのスコリア10%を含む、粘土成分が多く含む
	4	10YR2/1	黒	跡まりが無く3～8mmの繊維10%、2～5mmのスコリア10%を含む
	5	10YR1, 7/1	黒	跡まりが無く3～8mmの繊維10%、2～5mmのスコリア10%を含む
	6	10YR1, 7/1	黒	跡まりが無く3～8mmの繊維10%、2～5mmのスコリア10%を含む
	7	N1, 5/0	黒	跡れやすい黄色い土に跡まりと繊維の成分が有り、5～10mmの繊維10%、3～5mmのスコリア10%を含む
	8	N2/0	黒	跡まりが無く5～10mmの繊維7%、2～3mmのスコリア2%を含む
	9	10YR1, 7/1	黒	跡まりが無く5～10mmの繊維6%、3～5mmのスコリア10%を含む
	10	7.5YR2/1	黒	跡まりが無く5～10mmの繊維10%、1～2mmのスコリア10%を含む
	11	10YR2/1	黒	跡まりが無く2～5mmの繊維5%、1～2mmのスコリア5%を含む
	12	N2/0	黒	砂質土層

C・D	1	5Y2/2	オリーブ黒	跡まりと粘性が有り黒色土に粘土が混ざっている
	2	10YR3/2	黒	跡まりと粘性が有り黒土層で物細かな層が混ざりに含まれる
	3	10YR2/1	黒	跡まりと粘性が有り黒色土に粘土が混ざっている
	4	7.5YR3/2	黒	跡まりと粘性が有り黒土層が混ざっている
	5	10YR1, 7/1	黒	やや跡まりと粘性が有り繊維に粘土が混ざっている
	6	10YR3/2	黒	跡まりが有り土層の間に混ざりおらず5層の様な繊維層ではない
	7	5Y2/1	黒	やや跡まりと粘性が有り黒色土
	8	2.5Y2/1	黒	跡まりが有りやや粘性が有る黒色土に粘土ブロックが混じる
	9	10YR3/2	黒	跡まりが有り2層と類似している
	10	10YR3/2	黒	跡まりが有りやや粘性が有る、少量より多量にして跡まっている
	11	5Y2/1	黒	跡まりと粘性が有り黒色土に粘土が混ざっている
	12	2.5Y3/2	黒	跡まりと粘性が有る黒土ブロックの混れ込み
	13	5Y2/2	オリーブ黒	やや跡まりと粘性が有り黒色土に粘土が混ざっている
	14	5Y2/2	オリーブ黒	やや跡まりと粘性が有り、1層と1層に類似している
	15	10YR3/2	黒	跡まりが有りやや粘性が有る黒土層が混ざっている
	16	10YR3/3	黒	やや跡まりと粘性が有る黒土が跡まっている層
	17	6N6	砂質ブロック	
	18	2.5Y3/1	黒	やや跡まりが有り粘性が有る黒土層でサラサラした粘土
	19	5Y2/2	オリーブ黒	跡まりが有り1層に似て、粘性が有り黒色土に粘土が混ざっている
	20	10YR3/2	黒	跡まりと粘性が有り多量に混じり粘土層

P1	1	7.5YR5/1	黒	砂質混じりの黒色土
	2	2.5Y2/1	黒	黄色い土質の砂質土
P2	1	10YR3/2	黒	粘土の混れ込みの層
	2	N1/0	黒	砂質土に粘土が混じる
P3	1	2.5Y3/2	黒	砂質層に粘土の黒色土も混ざるのみ
P4	1	10YR2/1	黒	中程度に粘土が混じる
	2	2.5Y2/1	黒	中程度に粘土が混じる

第25図 4区第10号住居址実測図(2)

規模 東西5.84m×南北5.52m 重複関係 (古)SB10→SD12(新)

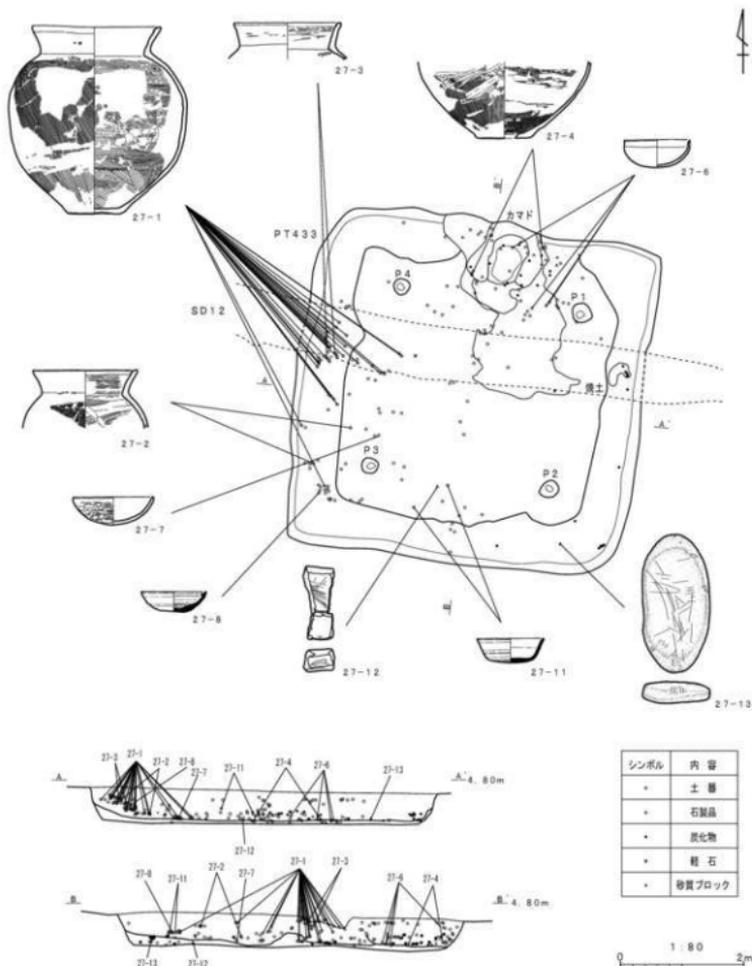
主軸方位 N-9°-E 壁 溝 検出されない。

柱 穴 4基検出。いずれも主柱穴と考えられ、P1・P2・P4は径0.26～0.33m・深さ0.14～0.16m、

P3は径0.26m・深さ0.08mを測る。

貼 床 黒色の砂質土を使って床面としている。ほぼ全面に硬化面が広がり、SB10東側の床面直上から焼土と炭化材が検出されている。

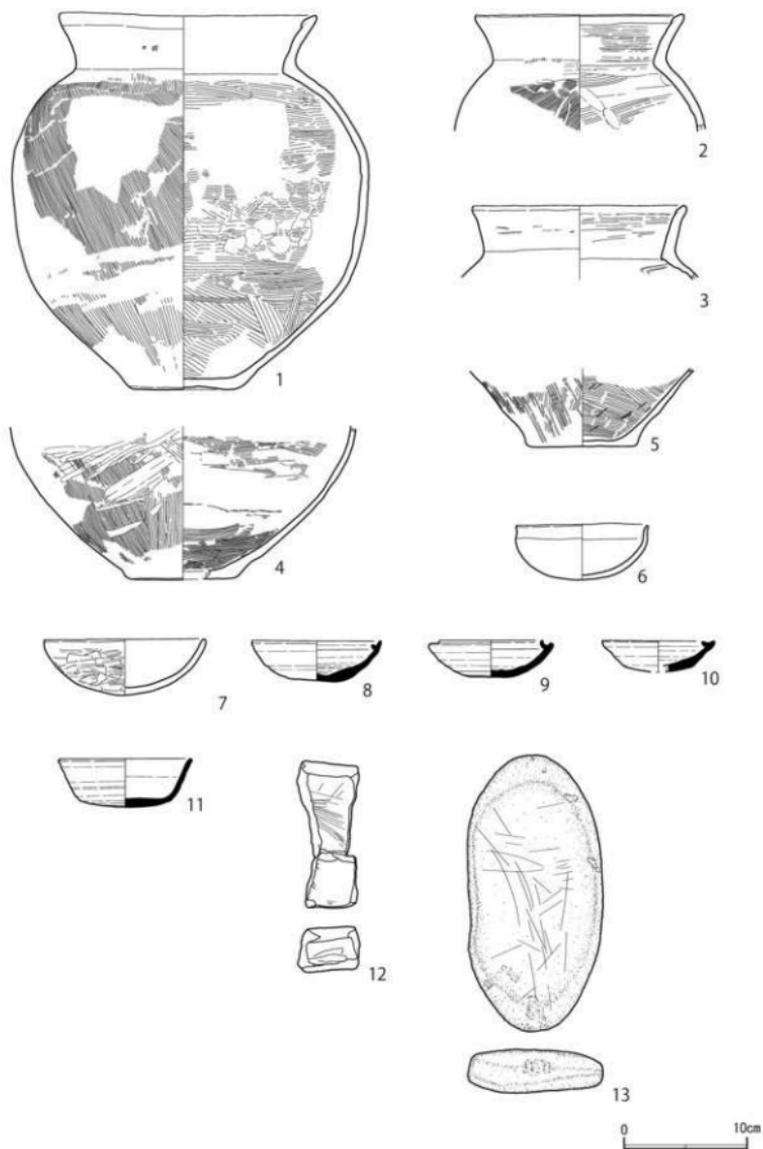
カマド 北辺の中央に位置する。崩壊していたが、カマドの構築土とみられる粘土の広がりとかマドの袖部と思われる盛り上がり部を検出した。ここでは、砂質ブロックが出土しており、これを芯材として利用していた可能性がある。ここでは粘土の広がり、袖部の盛り上がり、カマド掘方の範囲をそれぞれ図化した。



第26図 4区第10号住居址遺物出土状況図

遺物 土器11点、石製品2点、計13点を図示した。土器は1～7が土師器、8～11が須恵器である。

1～5は鞍車型球胴甕で、いずれも内外面ともハケメによる調整である。1～3の口縁端部は内側に肥厚する。4の胴部はハケメ調整の後に、胴部と底部の接合部に対して丁寧なナデ調整がなされており、ミガキのような光沢が認められる。5はやや直線的に立ち上がる。内面には工具の当たり痕が、細かなキズが付いている。6・7は土師器の丸底坏である。6は粗製で、胎土に黒色粒をまばらに含む。7は口縁部と体部の境がはっきりせず、緩やかに立ち上がる。外面はケズリ調整の後にミガキ調整が施される。



第27図 4区第10号住居址出土遺物実測図

内面には光沢は認められず、ナデ調整と考えられる。4・6はカマドから出土した。

8～11は坏身である。8は口縁部が受部からわずかに突出する。底部に回転ヘラ切り痕が認められる。8・9・10は遠江IV期後葉～末葉に位置づけられる。11はやや丸底気味を呈した無台坏身で、遠江IV期末葉～V期初頭に位置づけられる。その他に図化できなかったが、須恵器横瓶の体部片が出土している。

12・13は砂岩製の砥石である。12は長さ11.91cm、幅4.88cm、厚さ3.53cm、重さ208.42gを測る。使用面は表裏の2面である。13は長さ22.54cm、幅10.74cm、厚さ3.41cm、1141.91gを測る。使用面は表裏面、左側面の3面に認められる。

時期 出土遺物から7世紀後半～8世紀初頭頃に位置づけられる。

4区第11号住居址 (4SB11 第28図～第30図)

131-38Gr・131-39Grで検出された。北西部が調査区外に広がるが、平面形は南北に長軸を持つ長方形と推定される。立ち上がりは深さ0.18mが残存していた。

規模 東西3.60m×南北5.76m(残存部) 重複関係 なし

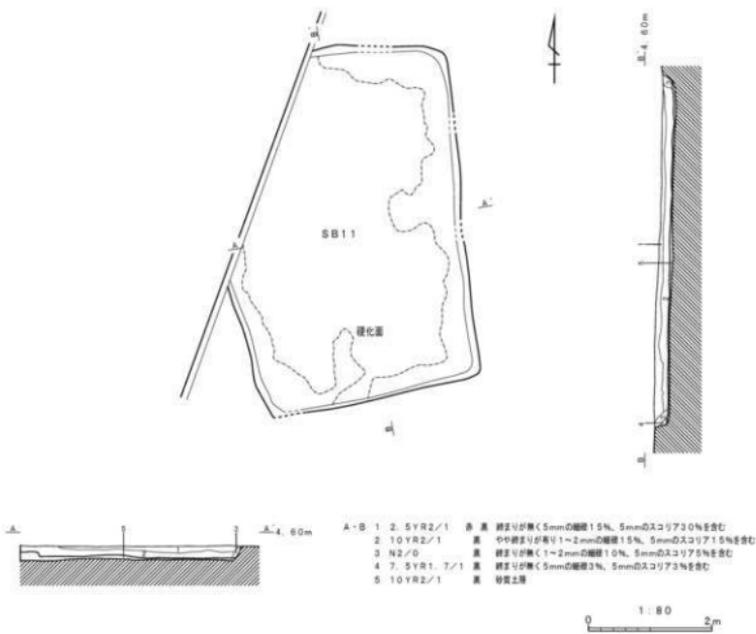
主軸方位 N-9°-W(カマド未検出のため推定) 壁溝 検出されない。

柱穴 検出されない。

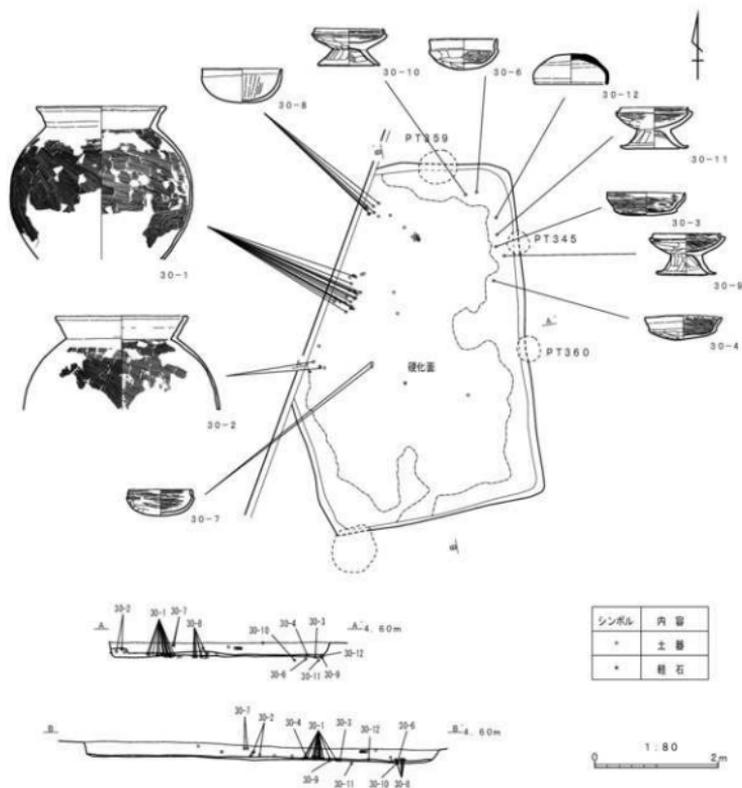
貼床 黒色の砂質土を使って床面とし、ほぼ全面に硬化面が認められる。

カマド 検出されない。

遺物 土器12点を図示した。1～11は土師器である。1・2は球胴甕で、内外面にハケメによる



第28図 4区第11号住居址実測図



第29図 4区第11号住居址遺物出土状況図

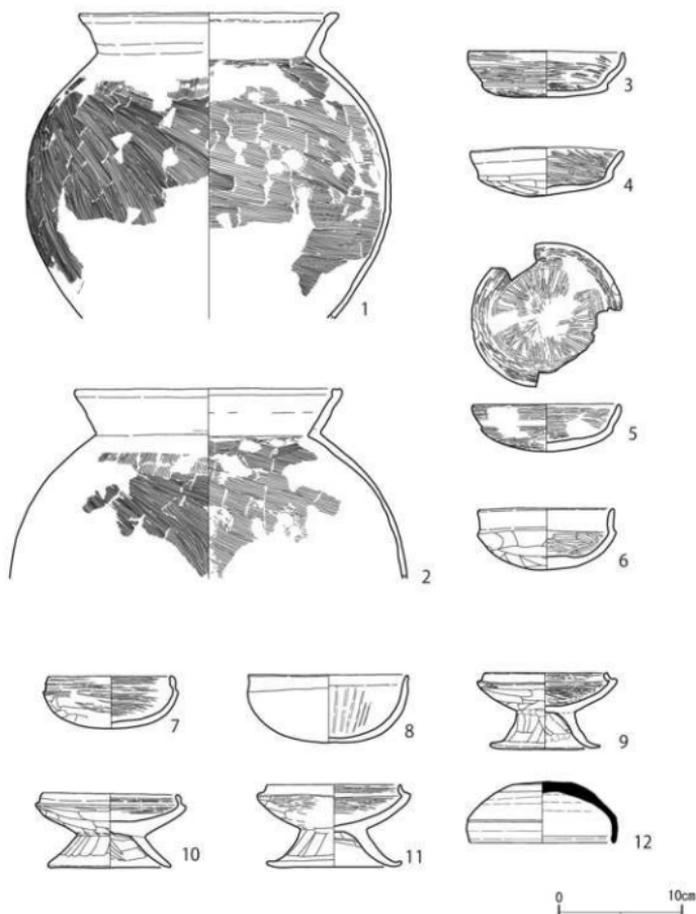
る調整がなされる。口縁端部が内面に肥厚する。3～7は環である。3・5は口縁端部がやや内湾し、4は外に向かって開く。3は黒色処理が施される。5は甲斐型環のように内面見込み部に細かな放射状のタテミガキ調整がなされるが、器形は須恵器模倣の丸底である。6は須恵器模倣の形態であるが、外面にはミガキ調整は施されない。7は口縁部が短く、やや内湾するとともに、内外面ともに黒色処理が施される。8は粗製の埴である。体部が半円球で、口縁部がわずかに屈曲する。胎土に黒色粒を含む。9～11は低脚の高環である。7世紀代に特徴的にみられる器形で、坏部は外面がケズリ調整、内面は丁寧なミガキ調整である。「ハ」の字状に開く短脚の脚部はケズリ調整による。11の脚部端部はやや反る。12は須恵器の坏蓋である。遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉頃に位置づけられる。

1・2・3・4・6・8・9・10・11・12は床面直上もしくは掘方面からの出土で、良好な一括資料である。

時期 出土遺物から（6世紀末～）7世紀前半に位置づけられる。

4区第12号住居址（4-SB12 第31図～第33図）

132-37Gr・132-38Grで検出された。SD28に一部上端が切られるが、全容はほぼ捉えることができた。



第30図 4区第11号住居址出土遺物実測図

残存部分から平面形は方形である。立ち上がりは深さ0.61mが残存していた。

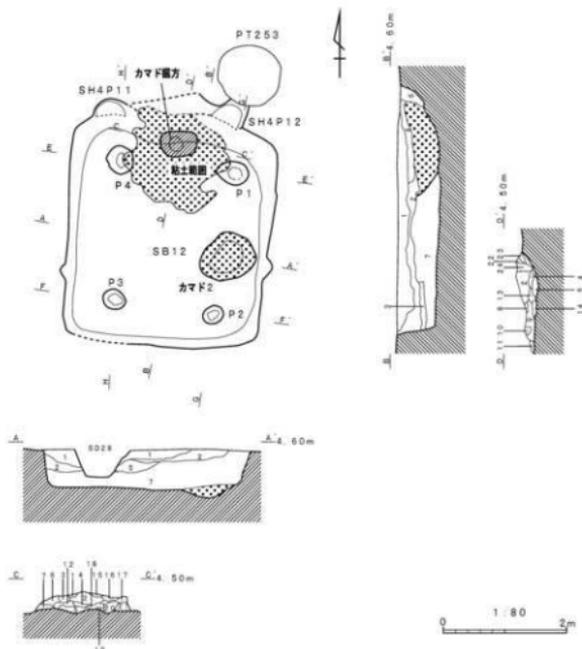
規模 東西3.31m×南北3.52m 重複関係 (古)SH4→SB12→SD28(新)

主軸方位 N-6°-E(残存部) 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4の径は0.33～0.52m・深さ0.13～0.20mを測る。

貼床 確認できなかった。

カマド 北辺中央付近と東辺で、カマドの構築土とみられる粘土の広がり認められた。同一遺構内で2基検出されたことから、カマドの造り替えがあったものと想定される。北辺のものをカマド1、



第31図 4区第12号住居址実測図(1)

東辺のものをカマド2とした。残存状況や出土位置からカマド2が先に作られたものと考えられるが、いずれも芯材は確認されず粘土のみの構築である。北辺ではカマド周辺で土器が数点出土している。ここではカマドの掘り込みと粘土の広がりの範囲を図化した。カマド2では掘方のみしか検出ができなかったため、上部構造は不明であり、炉跡の可能性もある。

遺物 駿東型球胴甕を1点図化した。胴部下半が残存する。外面に縦位のミガキ調整、内面はハケメ調整が認められる。カマド1から出土した。

時期 出土遺物から7世紀後半～8世紀前半に位置づけられる。

4区第14・22号住居址(4SB14・4SB22 第34図～第38図)

131-39Gr・131-40Gr・132-39Gr・132-40Grで検出された。SB14はSD25・SD26に部分的に上端が切られるが、全容はほぼ捉えることができた。平面形は方形で、立ち上がりは深さ0.54mが残存していた。

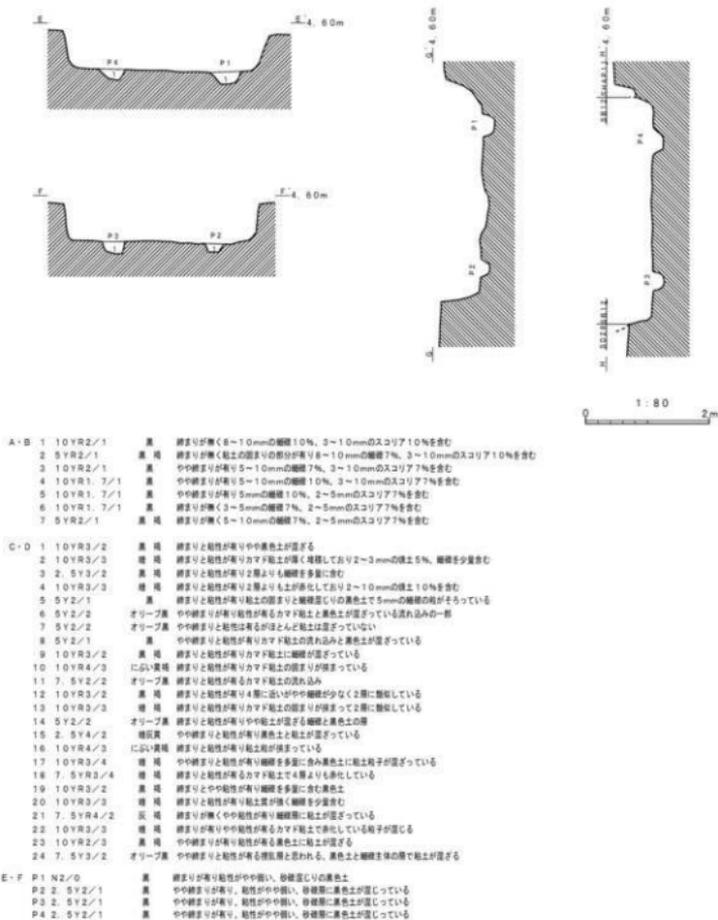
SB22は北半が調査区外に広がるとともに、西側をSB14に切られ、SD25に南東角の上端が切られる。このため全容は明らかではないが、西辺に粘土の広がりが確認されたため、平面形は東西に軸を持つ方形と推定される。立ち上がりは深さ0.63mが残存していた。

規模 SB14 東西3.25m×南北3.23m SB22 東西3.60m×南北2.20m(調査区内)

重複関係 (古) SB22→SB14→SD26→SD25(新)

主軸方位 SB14 N-5°-W SB22 N-51°-E(残存部から推定)

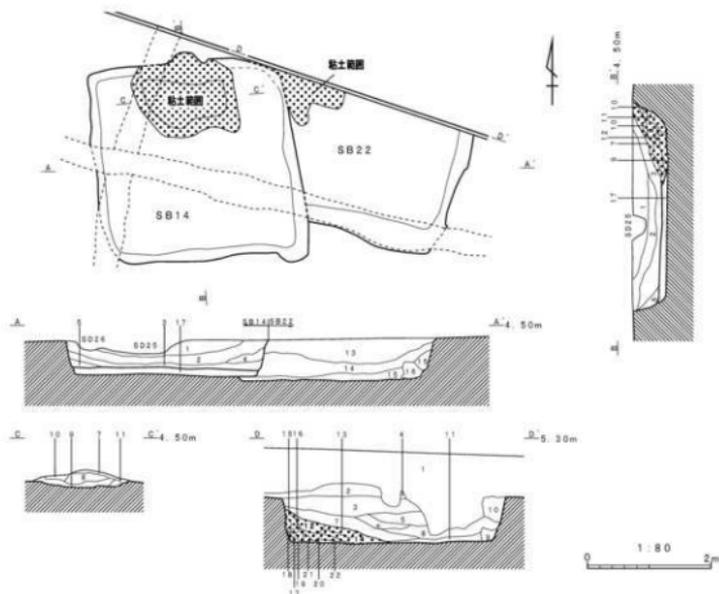
壁溝 いずれも検出されない。 **柱穴** いずれも検出されない。



第32図 4区第12号住居址実測図(2)

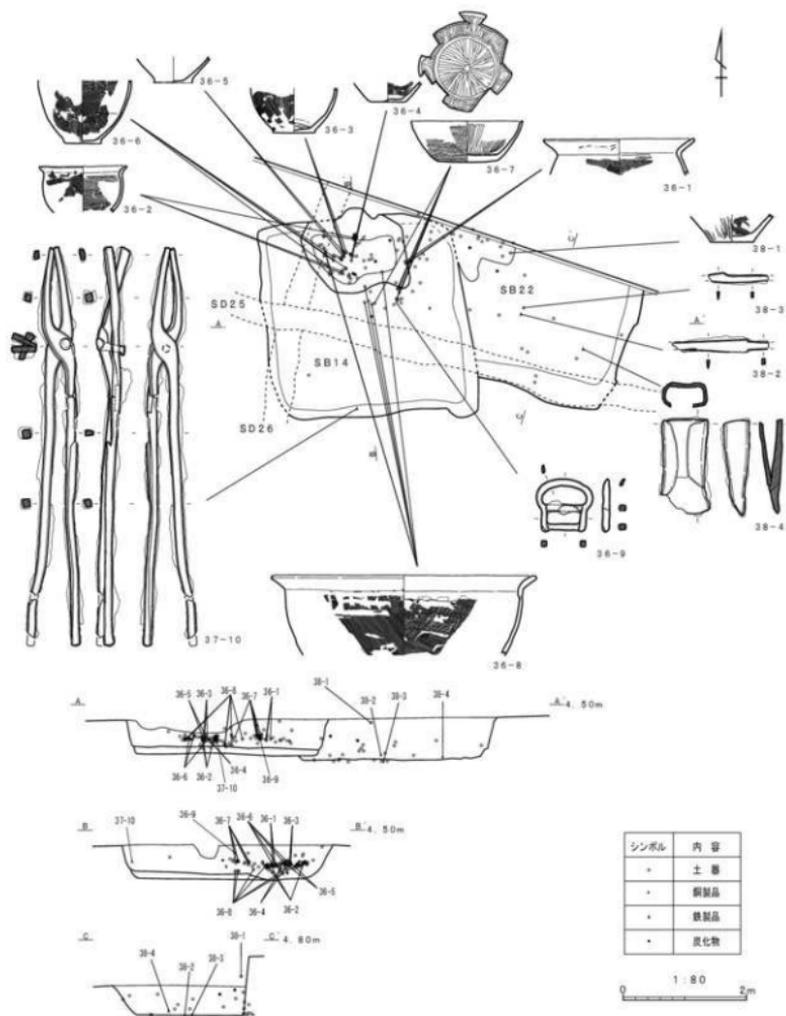


第33図 4区第12号住居址出土遺物実測図

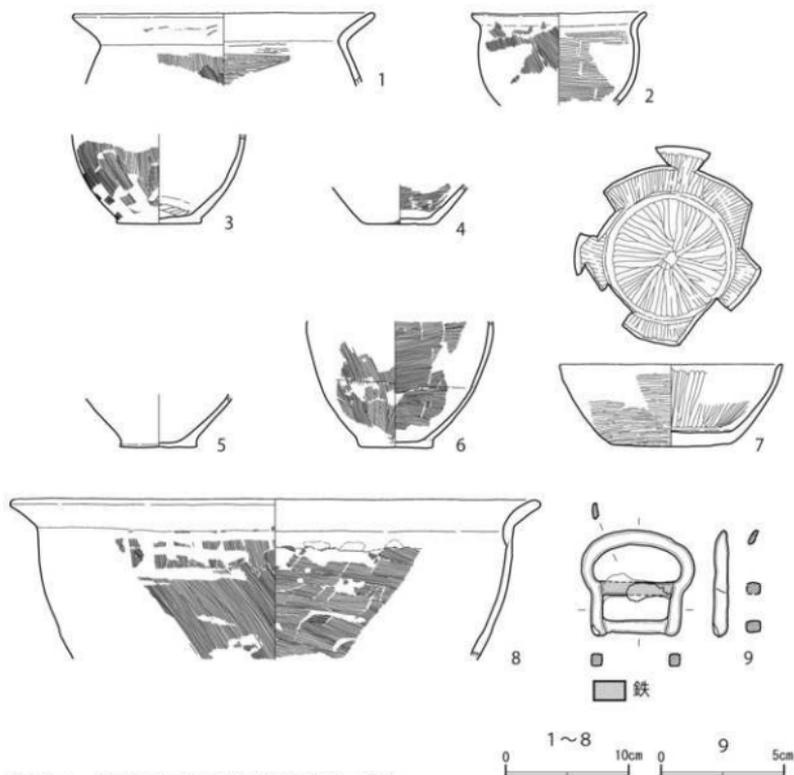


A・B・C	1	N2/0	黒	砂質土で2~5mmの繊維3%, 3mmのスコリア3%を含む
	2	10YR2/1	黒	砂質土で2~5mmの繊維7%, 2~3mmのスコリア5%を含む
	3	5Y2/1	黒	砂質土で2~5mmの繊維5%, 2~3mmのスコリア5%を含む
	4	10YR2/1	黒	砂質土で2~5mmの繊維7%, 1~2mmのスコリア3%を含む
	5	5Y2/1	黒	砂質土で2~3mmの繊維7%, 2~3mmのスコリア7%を含む
	6	5YR2/1	黒	砂質土で2~5mmの繊維3%, 3mmのスコリア1%を含む
	7	10YR2/2	黒	やや粘性がある粘質土で10mm以下の繊維10%, 5mm以下のスコリア3%を含む
	8	10YR3/2	黒	やや粘性がある粘質土で5mm以下の繊維1%, 10mm以下の繊維3%, 5mm以下のスコリア3%を含む
	9	10YR3/2	黒	粘土質砂質土で10mm以下の炭化植物1%, 1~2mmの繊維30%, 5mm以下のスコリア1%を含む
	10	5YR3/1	黒	やや粘性がある粘質土で5mm以下の繊維5%, 5mm以下のスコリア1%を含む
	11	5Y2/2	赤リ〜黒	砂質土で1~2mmの繊維30%, 5mm以下のスコリア1%を含む
	12	5YR3/3	暗	粘質土で1~2mmの繊維1%, 1~2mmのスコリア1%を含む
	13	5YR2/1	赤	練まりが細かい砂質土で10mm以下の繊維40%, 10mm以下のスコリア10%を含む
	14	5YR2/1	赤	下部にやや練まりがある砂質土で10mm以下の繊維40%, 5mm以下のスコリア10%を含む
	15	7Y2/1	黒	やや練まりがある粘質土で10mm以下の繊維をやや含み, 5mm以下の繊維40%, 5mm以下のスコリア3%, 若干の炭化植物混入
	16	5YR2/1	赤	黒色土で地山残存
	17	5YR2/1	黒	砂質土層
D	1	5P2/1	灰	黄土
	2	10YR2/1	黒	遺物を含む
	3	5YR2/1	赤	練まりが細く10mm以下の繊維30%, 10mm以下のスコリア10%を含む
	4	5YR2/1	赤	遺物を含む
	5	5YR2/1	黒	練まりが細く5mm以下の繊維30%, 5mm以下のスコリア5%を含む
	6	7YR2/1	黒	練まりが細く5mm以下の繊維20%, 10mm以下のスコリア5%を含む
	7	5R3/1	暗赤灰	やや練まりがあり10mm以下の繊維30%, 10mm以下のスコリア5%を含む
	8	10YR2/1	黒	練まりが細く1~2mmの繊維40%, 5mm以下のスコリア3%を含む
	9	5YR2/1	黒	練土層
	10	5YR2/1	黒	練まりが細く10mm以下の繊維30%, 10mm以下のスコリア10%を含む
	11	5YR2/1	黒	やや練まりがあり5mm以下の繊維20%, 5mm以下のスコリア5%を含む
	12	10YR2/2	黒	練まりが有り10mm以下の繊維5%, 5mm以下のスコリア2%を含む30mm次の砂質ブロック混入
	13	10YR3/2	黒	練まりが有り5mm以下の繊維5%, 5mm以下のスコリア3%を含む
	14	7YR3/2	黒	粘性があり5mm以下の繊維7%, 5mm以下のスコリア5%を含む
	15	5YR3/1	黒	やや粘性があり5mm以下の繊維30%, 5mm以下のスコリア1%を含む
16	10YR3/3	暗	練土で粘性がある粘質土で5mm以下の繊維1%, 5mm以下のスコリア3%, 重層を含む	
17	5YR2/2	黒	やや粘性があり戻りて5mm以下の繊維1%, 5mm以下のスコリア1%, 重層を含む	
18	5YR3/2	暗	練土で粘性があり重層を含む粘質土で5mm以下の繊維1%, 5mm以下のスコリア3%を含む	
19	5YR3/3	暗	やや粘性があり1~2mmの繊維3%, 5mm以下のスコリア2%を含む	
20	10YR4/2	暗赤	練土で粘性があり重層を含む粘質土で5mm以下の繊維1%, 5mm以下のスコリア3%を含む	
21	10YR3/2	黒	やや粘性があり1~2mmの繊維5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	
22	7YR3/2	黒	やや粘性があり1~2mmの繊維10%, 1~2mmのスコリア3%を含む	

第34図 4区第14・22号住居址実測図



第35図 4区第14・22号住居址遺物出土状況図



第36図 4区第14号住居址出土遺物実測図(1)

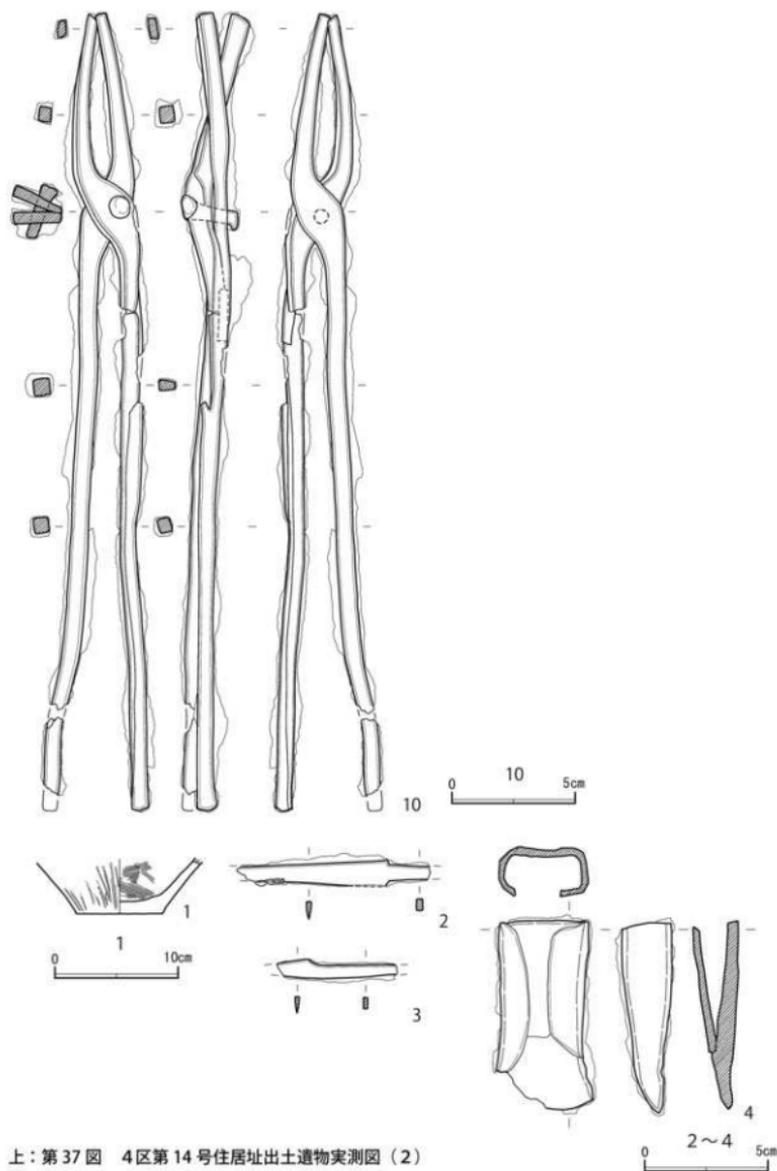
貼床 SB14 黒褐色の砂質土層を使って床面としている。硬化面は認められない。

SB22 掘方を床面としている。硬化面は認められない。

カマド SB14 崩壊をしていたが、北辺の中央で構築土と考えられる粘土の広がりが見られた。芯材等は確認されなかった。

SB22 西辺においてカマド構築土と考えられる粘土の広がりが見られることから、カマドは西辺に位置すると考えられる。粘土の広がりには調査区外へ続く。

遺物 SB14は土器8点、銅製品1点、鉄製品1点の計10点を図化した。土器はいずれも土師器である。1～6は裏で5を除き、ハケメ調整である。1は口縁部片で、胎土から長胴甕と考えられる。2は肩部が張らない小型甕である。3～6は底部片であるが、同じく小型甕であろう。5は内外面ともにナデ調整のみである。6は歪みが激しい。長胴を呈する。底部径から小型甕と考えられるが、胎土は1と共通する。7は甲斐型環である。内面見込み部に放射状の暗文、外面体部に横位のミガキ調整、底部はケズリ調整の後にミガキ調整が認められる。口径18.0cm、底径9.5cmを測る大型の環で、甲斐地域編年V期頃に該当する。8は口縁部が肥大化していない端である。1～6・8はカマド周辺から出土した。



上：第37図 4区第14号住居址出土遺物実測図（2）

下：第38図 4区第22号住居址出土遺物実測図

9は銅製の鉋具である。縦4.4cm、横4.6cm、重量は20.06gを測る。銅製であるが、一部が鉄によって補修がなされている。

10は鉄釘である。ゆがみが激しく、また柄が一部欠損するが、復元長は32.7cmを測る。組み合わせ箇所となる釘の周りのみ、薄く作られている。

SB22は土器1点、鉄製品3点の計4点を図化した。

1は駿東型球胴甕の底部で、縦位のミガキ調整が施される。2・3は刀子である。2は刃部の先端部と茎部の先端部が欠損する。両角間で茎部先端に向けてやや先細っている。3は刃部側が撫間、棟側が角間（もしくは撫間）である。刃部が茎部と比べて短い。4は床面直上から出土した無肩の袋状鉄斧で、先端の一部が欠損する。袋部は完全に閉じきっておらず、断面形は図上の左側面がやや開きぎみで、背面中央部がややへこんでいるが、右側面の造りから本来は隅丸長方形を呈していたと考えられる。無肩であるが、袋部と刃部の間で段を持ち、厚みが増すことから、刃部と袋部が別造りの可能性がある。

時期 SB14は出土遺物から8世紀後半～9世紀前半頃と考えられる。SB22は判断できる遺物に乏しいが、ミガキ調整を施す球胴甕片から7世紀後半～8世紀前半頃であろう。

4区第15・16・21号住居址(4SB15・4SB16・4SB21 第39図～第46図)

131-38Gr・131-39Gr・132-38Gr・132-39Grで検出された。SB15は南側をSB16に、西辺の一部をSD27に、北辺をSD26に切られるが、残存部分から平面形は方形と推定される。立ち上がりは深さ0.38mが残存していた。

SB16は東辺をSB21に、北西部をSD27に切られる。平面形は南壁がやや突出する方で、立ち上がりは深さ0.59mが残存していた。

3つのSBで最も新しいSB21はSD26～SD28に上端の一部を切られている。平面形は方形で、立ち上がりは深さ0.71mが残存していた。

規模 SB15 東西3.95m×南北3.07m(残存部) SB16 東西5.48m×南北5.41m(残存部)
SB21 東西5.44m×南北5.75m

重複関係 (古)SB15→SB16→SB21(新)

主軸方位 SB15 N-20°-W SB16 N-6°-E SB21 N-81°-W

柱穴 SB15 2基検出。P1・P2は径0.46m・深さ0.18mを測る。

SB16 4基検出。P1～P4の径は0.28～0.42m・深さ0.19～0.25mを測る。

SB21 4基検出。P1～P4は径0.25～0.29m・深さ0.05～0.10mを測る。

貼床 SB15・SB16 黒色の砂質土層を使って床面としている。SB15には硬化面は検出されなかったが、SB16では南西側に硬化面が認められた。

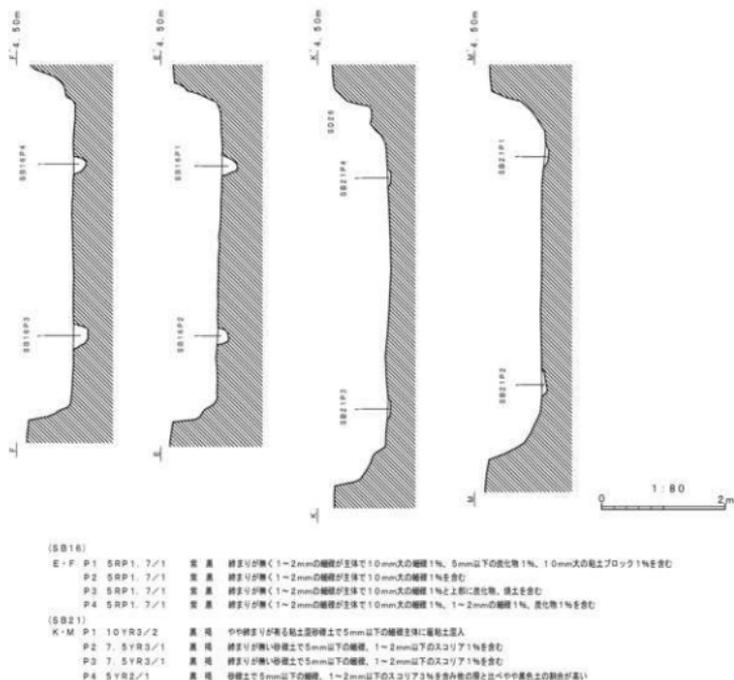
SB21 黒色の砂質土を使って床面とし、硬化面はまばらに検出された。

カマド SB15 北辺のほぼ中央でカマドの構築土とみられる粘土と掘方が認められた。芯材と思われる礫と砂質ブロックが検出され、土器が多数出土している。

SB16 北辺でカマドの構築土と思われる粘土が認められたが、SD27に切られるため残存状況は良好ではない。芯材等は確認されなかったが、北辺のやや東寄りに掘方を確認した。また粘土の分布範囲とは、やや異なるSB遺構西側において焼土の広がりが出検された。

SB21 西辺でカマドの構築土とみられる粘土の広がりが認められたが、SB16と同様SD27に切られるため残存状況は良好ではない。芯材等は確認されず粘土のみの構築であると思われるが、カマド内で伏せられた状態の甕が出土しているためこれを芯材として利用していた可能性がある。

遺物 SB15は土器12点を図化した。1～5は土師器である。1～3は甕で、1・2は口縁部が「く」の字状に屈曲し、球胴で胴部上位に最大径がある。駿東型球胴甕の粗形とされる器形である。3は小型



第39図 4区第15・16・21号住居址実測図(1)

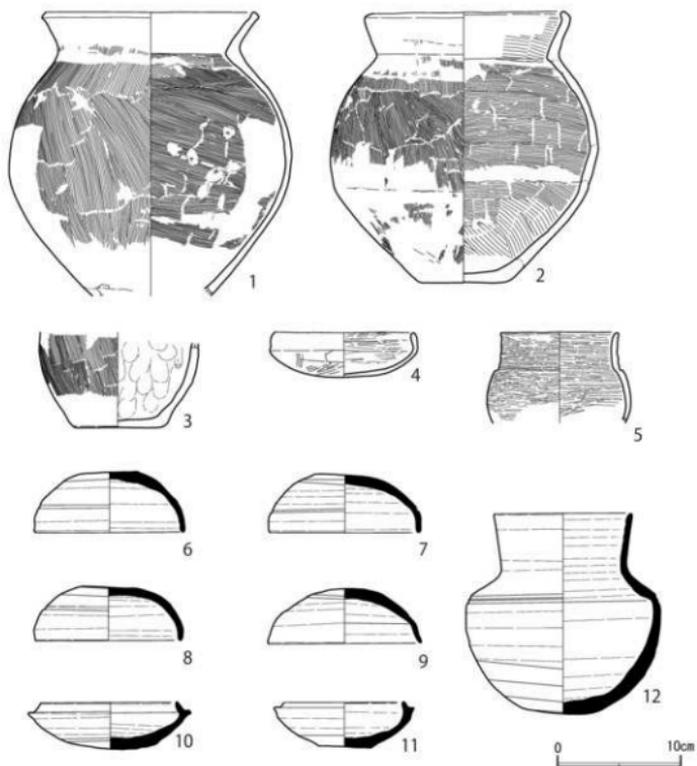
甕で底部から胴部下半までが残存する。内面には指頭圧痕が強く残り、器面はあまり平滑ではない。4は口縁部が短くやや内湾する須恵器模倣坏である。5は小型壺で、金属器を模倣するかのように内外面に、丁寧かつ非常に密なミガキ調整が施される。胴部は、やや球胴で、明瞭な稜を持ち、口縁部は直立する。

6~12は須恵器で、6~9は坏蓋である。6~8は口縁部と体部の境に沈線が施される。9は口縁部と体部の境に稜を持ち、口縁部に向けてやや開く。10・11は須恵器坏身で、口縁部が受部からわずかに突出する。6~10は遠江Ⅲ期後葉~末葉頃、11はⅣ期に位置づけられる。12は須恵器の短頸壺で、肩部に自然軸が認められる。覆土上層出土の11を除き、いずれの須恵器もほぼ完形品であり、カマドの西側にて出土した。

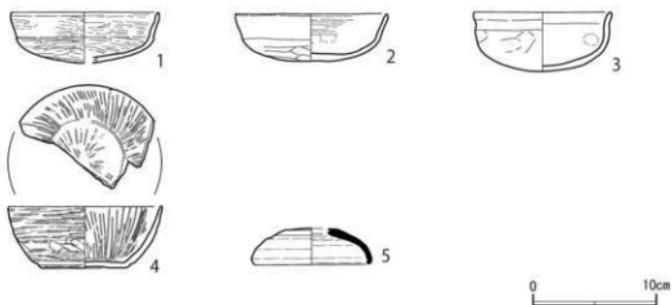
SB16は土器5点を図示した。1~4は土師器、5のみが須恵器である。

1・2は丸底坏である。1は須恵器模倣坏で、内面に黒色処理が施される。2は稜が緩やかで、ミガキ調整は認められない。3は粗製胎土の坏である。胎土に黒色粒をまばらに含み、底部には木葉痕が残る。4は甲斐型坏で、口径12.4cm、底径7.0cmと大型であり、甲斐地域福年Ⅴ~Ⅵ期頃に位置づけられる。

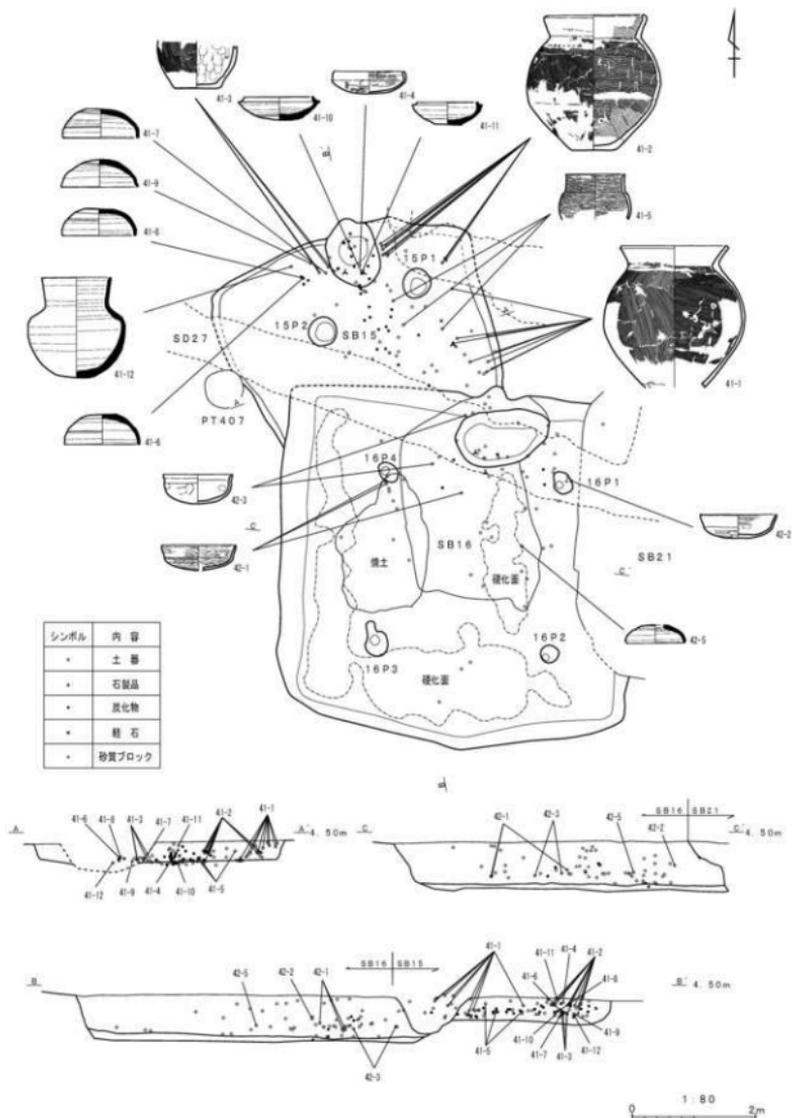
5は須恵器坏蓋である。天井部に回転ヘラケズリが施される。遠江Ⅳ期後葉頃に位置づけられる。土師器類もおおよそこの年代に該当するものと考えられるが、4の甲斐型坏のみ年代が異なる。8世紀後半に位置づけられる4は、本来SB16と切り合うSB21に伴う遺物であった可能性もあるが、遺物の注



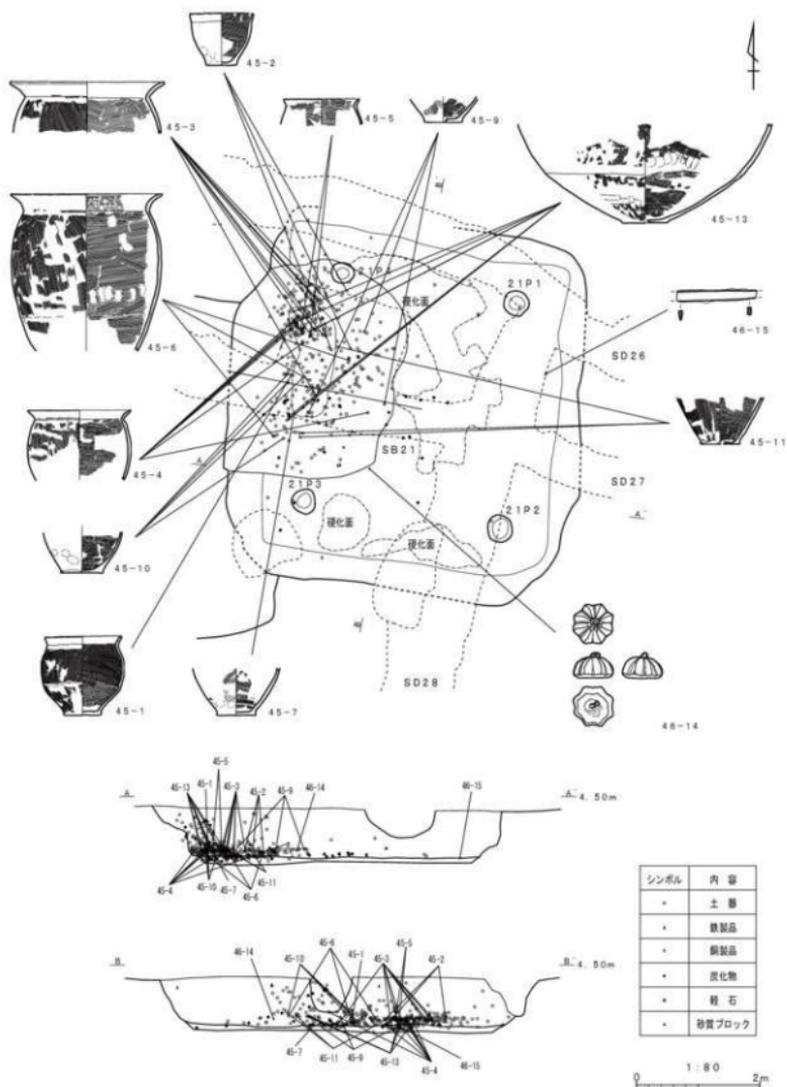
第41図 4区第15号住居址出土遺物実測図



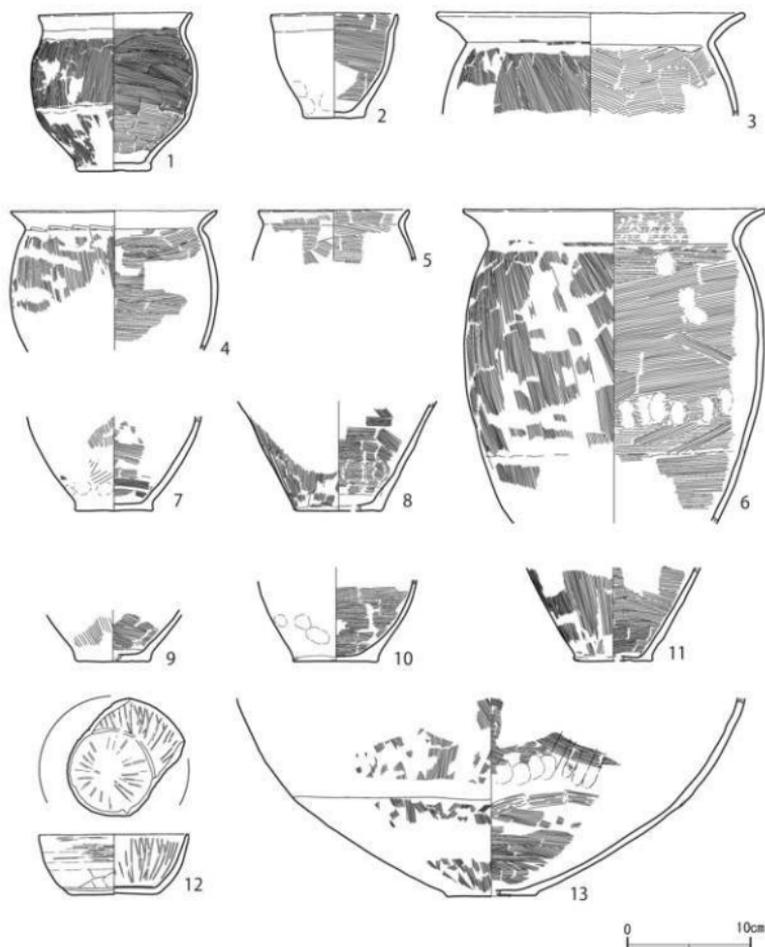
第42図 4区第16号住居址出土遺物実測図



第43図 4区第15・16号住居址遺物出土状況図



第44図 4区第21号住居址遺物出土状況図



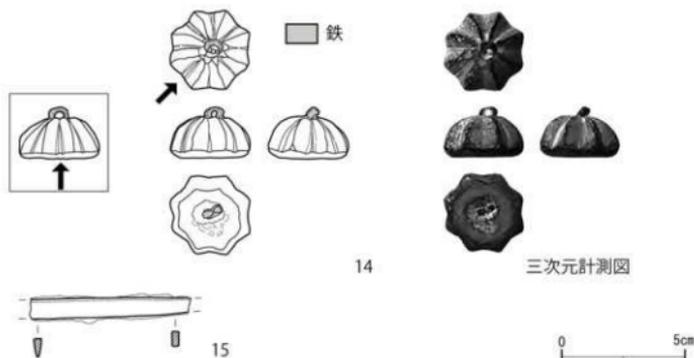
第45図 4区第21号住居址出土遺物実測図(1)

記にしたがってSB16に掲載した。

いずれの遺物もカマドや床面からの出土ではなく、覆土の中層以上からの出土である。

SB21は土師器13点と銅製品1点、鉄製品1点、計15点を図化した。図化した遺物の大部分がカマドからの出土である。

1～11は狭もしくは小型甕である。1の内面は胴部と底部の接合箇所を境にハケメ調整の単位が異なる。2は肩部が張らず、口縁部がやや外に向けて開く鉢のような器形をしている。3・4・6は口縁部が「く」の字状に屈曲し、肩部が張らない長胴甕である。5は口縁部の屈曲が弱く、肩部が張らない



第46図 4区第21号住居址出土遺物実測図(2)

小型甕で、頸部にも横位ハケメ調整が認められる。7～11は胴部～底部が残存する。いずれも(小型を含む)長胴甕である。12は甲斐型環で、口径12.0cm、底径7.2cmを測る大型で、甲斐地域編年V～VI期に位置づけられる。底部には回転系切り痕ののち、「×」の線刻が見られる。13は塙である。ミガキ調整は認められない。

14は銅製の分銅で、8単位からなる連弁状の稜線を持ち、頭部に小さな円鈕を付ける。本来、縦位の連弁は二重の沈線によって表現されていたものと考えられるが、一部(図における矢印側)を除き、二重沈線は明確でない。また本体部は銅製であるが、鈕のみ鉄製である。鈕は底面部で折り返して固定されている。底面は丁寧なケズリ調整が施され、平滑化されている。縦3.2cm、横3.2cm、厚さ2.0cm、重量は71.11gを測る。

15は刀子や鋸、棒状鉄製品などが想定されるが、ここでは不明鉄製品とした。残存部の両先端で、断面形が異なっている。

時期 出土遺物からSB15は、6世紀末～7世紀前半に位置づけられる。SB16は出土遺物の中でも時期差が認められるが、7世紀後半～末期に位置づけられるものが本遺構に伴うものであろう。SB21は長胴甕や甲斐型環の年代を考慮し、8世紀後半～9世紀前半頃に位置づけられる。

4区第17・18号住居址(4SB17・4SB18 第47図～第51図)

SB17は131-36Gr・131-37Gr・132-36Gr・132-37Grで検出された。4区内での最大のSB遺構である。北東部がSB18に、東辺・西辺の上端の一部がSD12に切られている。平面形は方形で、立ち上がりは深さ0.51mが残存していた。

SB18は132-37Grで検出された。こちらは4区内での最小のSB遺構である。上端の一部がSD12により切られるが平面形は方形を呈し、立ち上がりは深さ0.27mが残存していた。

規模 SB17 東西6.95m×南北6.94m SB18 東西2.25m×南北2.08m

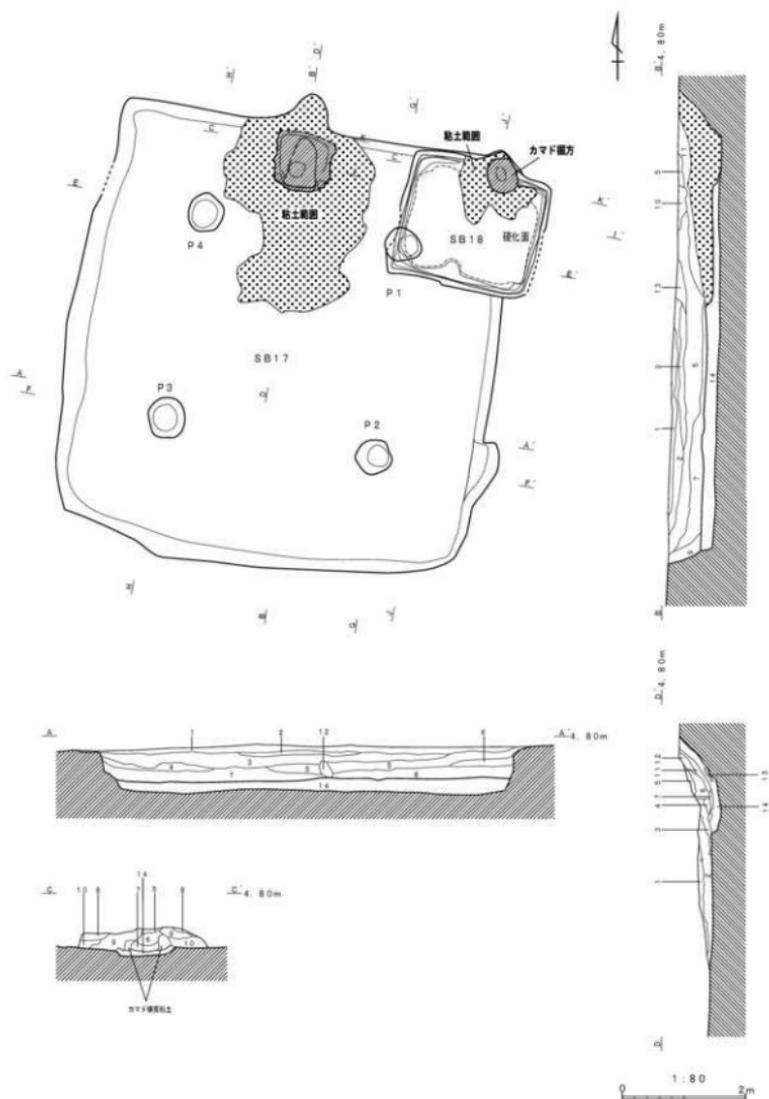
重複関係 (古) SB17→SB18→SD12(新)

主軸方位 SB17 N-9°-E SB18 N-13°-E

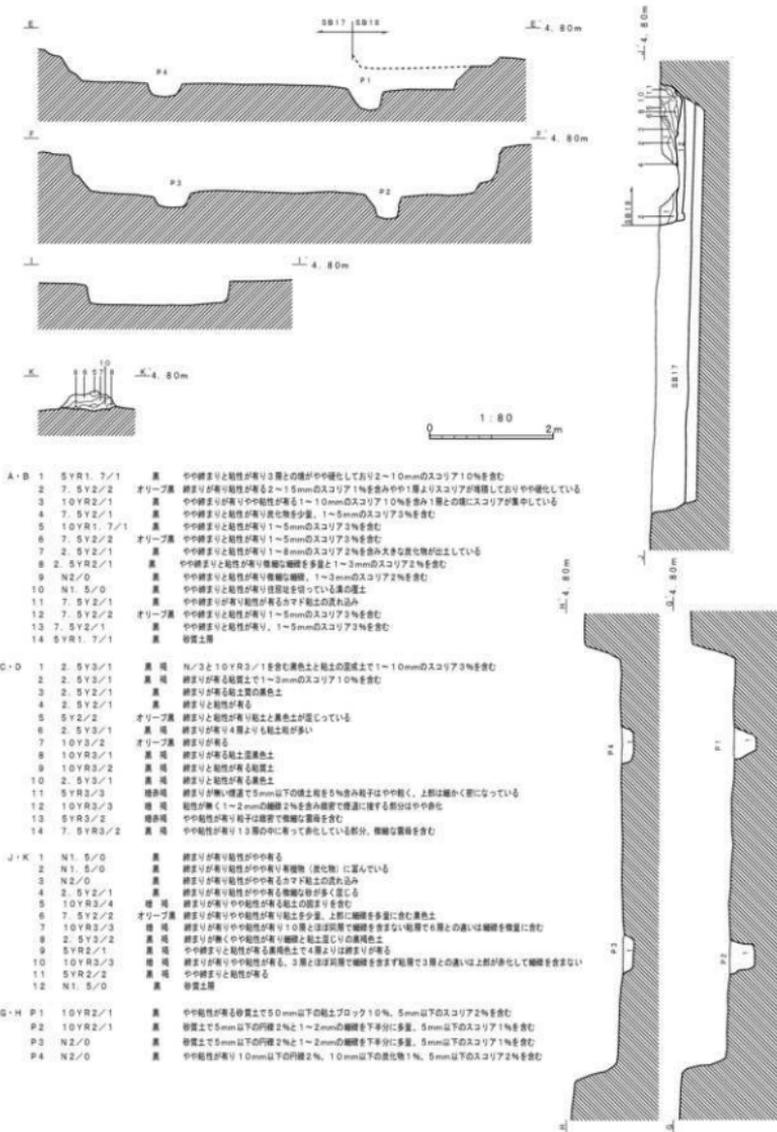
壁溝 SB17 検出されない。

SB18 カマド部分を除く壁際で検出された。幅0.50～0.90m・深さ0.40～0.60mを測る。

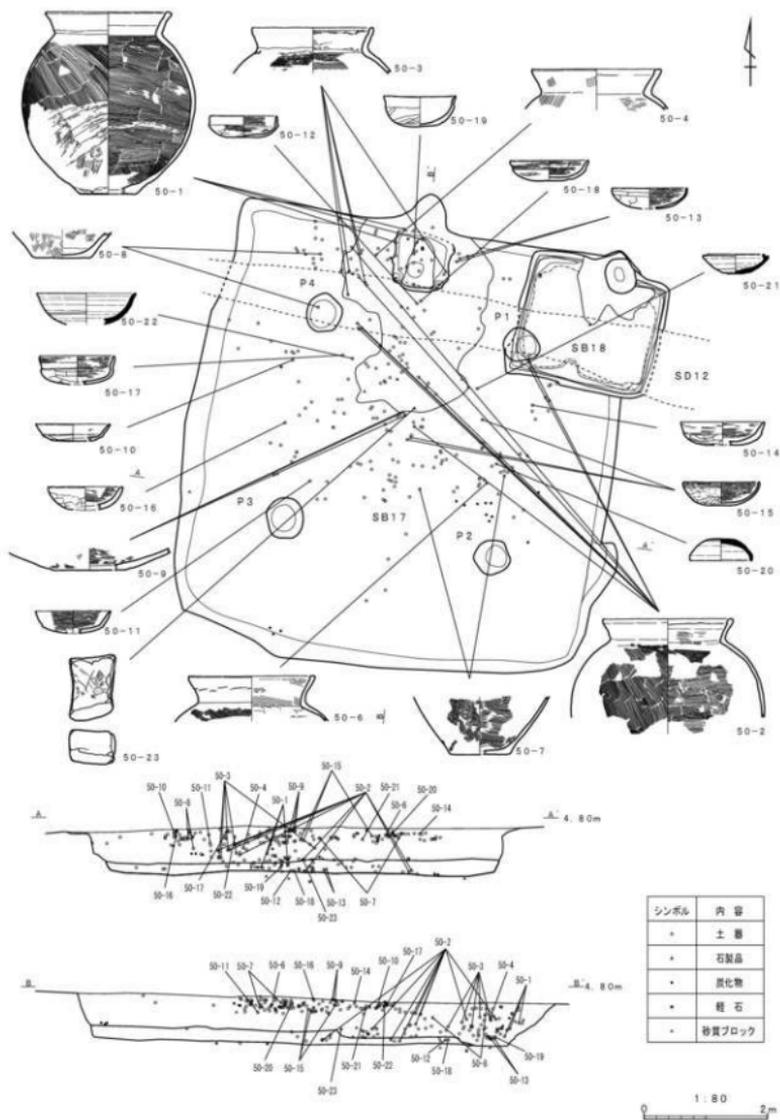
柱穴 SB17 4基検出。P1・P2は径0.56m・深さ0.36～0.41m、P3・P4は径0.63～0.66m・深さ0.17～0.19mを測る。いずれも主柱穴であろう。



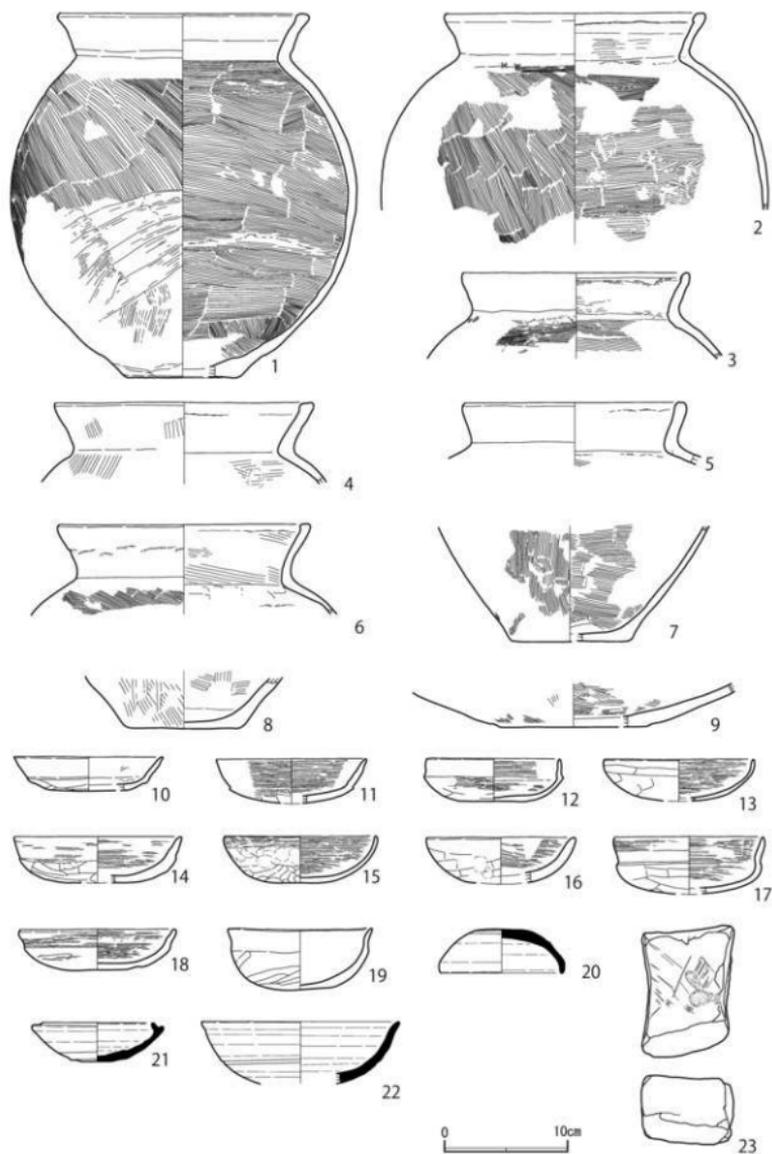
第47図 4区第17・18号住居址実測図(1)



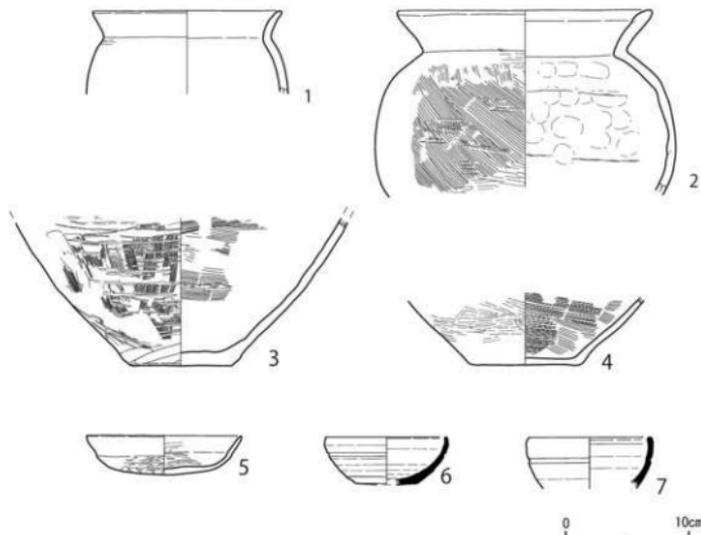
第48図 4区第17・18号住居址実測図(2)



第49図 4区第17号住居址遺物出土状況図



第50図 4区第17号住居址出土遺物実測図



第51図 4区第18号住居址出土遺物実測図

SB18 検出されない。

貼床 いずれも黒色の砂質土を使って床面としている。SB17には硬化面は認められなかったが、SB18の床面は、ほぼ全面が硬化していた。

カマド SB17 北辺中央に位置する。両袖部、燃焼部が比較的良好に残存している。燃焼部では支脚が認められ、袖の芯材も確認された。

SB18 北辺のほぼ中央に位置する。崩壊していたため形状は確認できず、カマドの構築土とみられる粘土の広がり方が認められた。土器が数点出土し、芯材の一部と考えられる砂質ブロックなどが検出されている。

遺物 SB17は土器22点、石製品1点の計23点を図化した。土器は1～19が土師器、20～22が須恵器である。

1～9は鞍東型球胴甕である。1は胴部下半にハケではなくヘラと想定される工具によって調整がなされている。2は口縁部～胴部上半が残存し、球胴を呈する。3～6は口縁部～頸部片、7～9は底部片である。9は壺の可能性もある。いずれの個体にもミガキ調整は認められない。10～18は坏で、口縁部の形態に差はあるものの、いずれも体部ヘラケズリの後、ミガキ調整を施す。15は内外面ともに黒色処理を、11～14は内面のみ黒色処理が施される。16は他の個体と比べ器壁が厚く、黒色処理も施されていない。17・18は薄手だが、16と同じく黒色処理は施されていない。19は粗製の甕で、胎土に黒色粒を含み、底部には木葉痕が残る。体部は半円球で、口縁部がわずかに外反する。

20は坏蓋で、天井部に線刻が認められる。21は坏身で、口縁部が受部からわずかに突出している。20・21は遠江Ⅳ期に位置づけられる。22は無台碗で口唇部がやや外反する。22は遠江Ⅴ期に位置づけられる。SB18から出土した小片と接合した。

23は砂岩製の砥石である。長さ10.16cm、幅7.29cm、厚さ53.3cm、重さ552.76gを測る。使用面は表裏・

両側面の4面に認められる。

SB18は土器7点を図化した。1～5は土師器、6・7は須恵器である。

1は小型裏で、摩耗が激しく調整は不明瞭である。2・3・4は球胴裏で、2は口縁部が「く」の字状に屈曲し、口唇部が内面に肥厚する。3はハケメ後に横位ミガキが施されている。4は胴部下半～底部が残存し、胴部外面に密な横位ミガキ調整が認められる。5は坏で、口縁部と体部の境の稜が下方に位置し、口縁部は外へ開く。

6・7は須恵器無台碗で、内湾して立ち上がり、口縁部と体部の境に1条の沈線が巡る。遠江IV期後葉～末葉（V期初頭）頃に位置づけられる。

時期 SB18は須恵器とミガキ調整の土師器裏を考慮すれば、7世紀後半～8世紀前半に位置づけられる。SB17はそれ以前となるが、7世紀を遡るものは出土していないため、7世紀代の範囲に収まる。

4区第20号住居址（4-SB20 第52図・第53図）

131-34Gr・131-35Grで検出された。SD22・SD31により一部上端を切られている。平面形は方形を呈し、立ち上がりは深さ0.56m残存していた。

規模 東西2.49m×南北2.54m 重複関係（古）SB20→SD22・SD31（新）

主軸方位 N-9°-E 壁 溝 検出されない。

柱 穴 4基検出。いずれも主柱穴で、P1～P4の径は0.25～0.29m・深さ0.05～0.10mを測る。

貼 床 黒色の砂質土を使って床面としている。硬化面は検出されなかった。

カマド 北辺中央に位置する。崩壊していたため形状は確認できなかったが、カマドの構築土とみられる粘土の広がりや掘方を確認した。土器の破片が数点まとまって出土している。

遺 物 カマドの周囲からまとまって出土したが、図化できたものは、土師器の塙が1点のみであった。口縁部が極端に肥厚して幅の広い平坦部を有する。胴部はミガキ調整である。

時期 出土遺物から8世紀代と考えられるが、遺物が少なく詳細は不明である。

（2）掘立柱建物址 4-SH

中央からやや北側へかけて4棟が検出された。SH1のみ主軸方位がやや異なる。なお、調査時には認識していないが、調査区南西側にも直線配列を見いだせる柱穴群があり、これらもSH遺構であった可能性がある。

4区第1号掘立柱建物址（4-SH1 第54図）

132-36Gr・132-37Gr・133-36Gr・133-37Grで検出された。桁行（東西）3間、梁行（南北）3間の建物で、平面形はややいびつな方形を呈する。SD1・SD12と重複している。

規模 東西4.22m×南北4.01m 重複関係（古）SH1→SD12→SD1（新）

主軸方位 N-82°-W

柱 穴 平面形は円形、楕円形を呈する。P1のみやや不整な円形を呈し、径0.87m×0.72m・深さ0.42mを測る。P2～P12は径0.64～0.81m・深さ0.39～0.58mを測る。

桁 間 西から1.39m、1.38m、1.45m。 梁 間 北から1.36m、1.26m、1.39m。

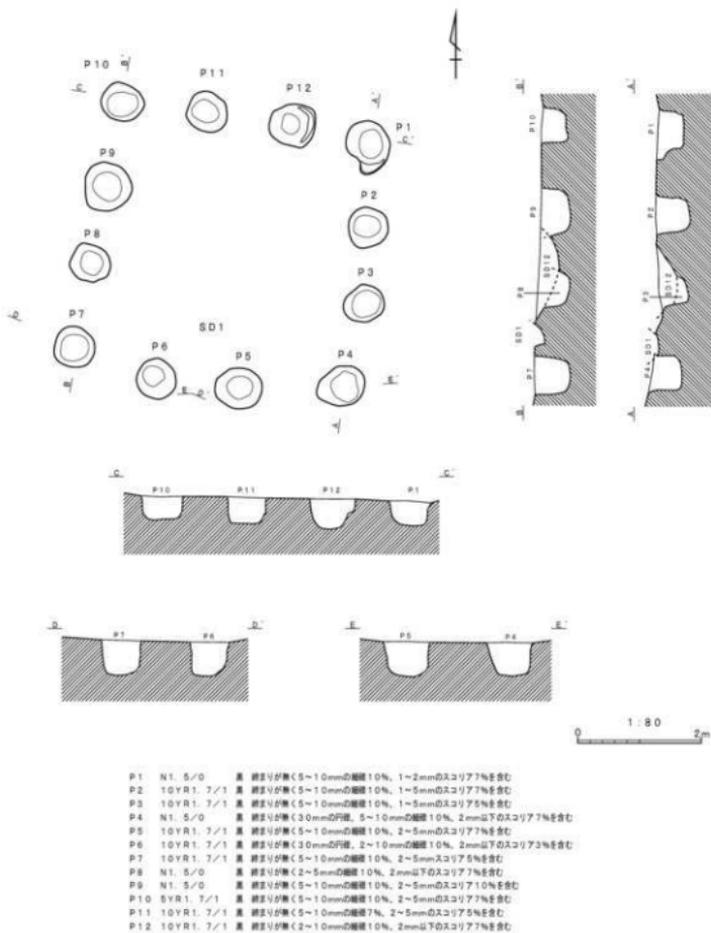
遺 物 P4・P6で3cm大の円礫が検出された。また、小片で図示できなかったが、須恵器を模倣した土師器破片が出土している。

時期 不明。土師器小片から7世紀か。

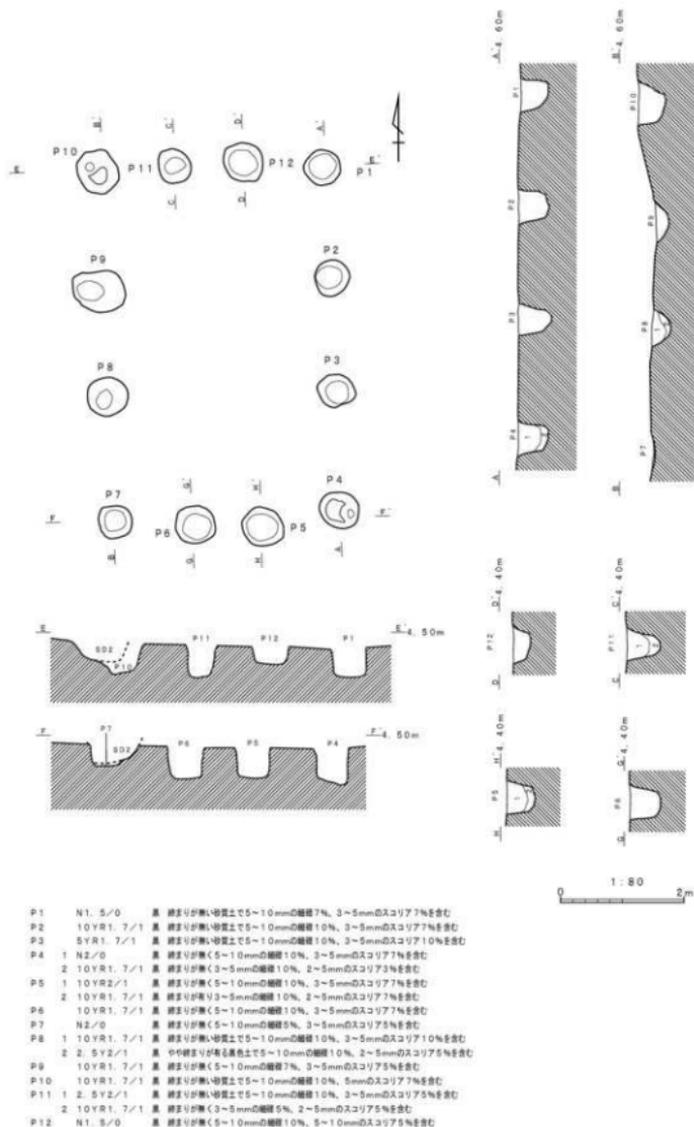
4区第2号掘立柱建物址（4-SH2 第55図）

133-37Gr・133-38Grで検出された。桁行（南北）3間、梁行（東西）3間の建物で、平面形は南北に長軸を持つ長方形を呈する。西辺がSD2と重複する。

規模 東西3.65m×南北5.67m 重複関係（古）SH2→SD2（新）



第54図 4区第1号掘立柱建物址実測図



第55図 4区第2号掘立柱建物址実測図

主軸方位 N-3°-W

柱 穴 平面形は円形もしくは楕円形を呈する。西側のP7～P9は他の柱穴に比べやや浅い。P7は円形で、径0.53m・深さ0.03mを測る。P8・P9は径0.63～0.78m・深さは0.21～0.31mを測る。3基の柱穴を除くP1～P12は径0.54～0.72m・深さ0.44～0.54mを測る。

桁 間 北から1.88m、1.79m、2.00m。 梁 間 西から1.27m、1.11m、1.27m。

遺 物 出土していない。

時 期 不明。

4区第3号掘立柱建物址 (4-SH3 第56図・第57図)

133-38Gr・134-38Grで検出された。桁行(南北)3間、梁行(東西)3間の建物で、平面形はやや南北に長軸を持つ方形を呈する。P11は攪乱、P12はSB4に切られる。

規 模 東西3.98m×南北4.23m 重複関係:(古)SH3→SB4(新)

主軸方位 N-5°-W

柱 穴 平面形は楕円形を呈する。P1～P10は径0.58～0.77m・深さ0.23～0.42mを測る。P11・P12は残存部を測定し、P11は径0.6m・深さ0.28m、P12は径0.78m・深さ0.11mを測る。

桁 間 北から1.51m、1.23m、1.24m。 梁 間 西から1.44m、1.36m、1.43m。

遺 物 P11から出土した灰軸陶器の皿1点を図示した。内外面に施軸される。三日月高台で、高台底面には、重ねた際の別個体からの軸が付着している。また糸切り痕が残る。0-53段階以降か。

時 期 出土遺物から10世紀以降の遺構と考えられるが、当該期の遺構は他になく、詳細は不明である。

4区第4号掘立柱建物址 (4-SH4 第58図)

132-37Gr・132-38Grで検出された。桁行(東西)3間、梁行(南北)3間の建物で、平面形は東西方向に長軸を持つ方形を呈する。P6はSD28と重複し、P11はSB12に切られる。

規 模 東西4.73m×南北3.85m 重複関係(古)SH4→SB12→SD28(新)

主軸方位 N-86°-W

柱 穴 平面形は楕円形を呈する。P6・P11は残存部を測定した。P6は径0.56m・深さ0.22m、P11は径0.63m・深さ0.29mを測る。P7はやや規模が大きく、径0.95×0.78m・深さ0.33mを測る。3基を除くP1～P12は、径0.54～0.72m・深さ0.36～0.56mを測る。

桁 間 西から1.71m、1.65m、1.37m。 梁 間 北から1.28m、1.30m、1.27m。

遺 物 出土していない。

時 期 SB12に切られるため、8世紀前半以前と考えられる。

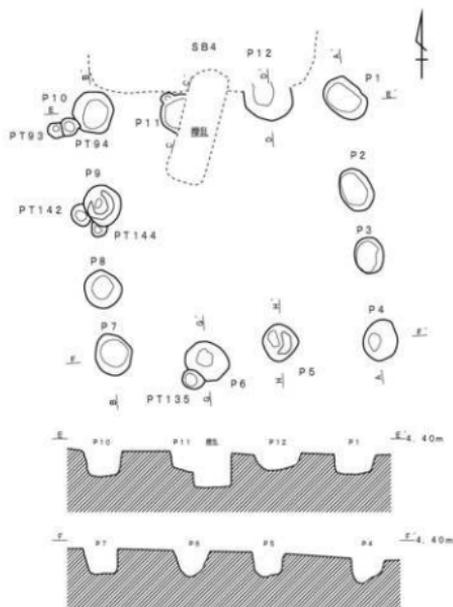
(3) 溝状遺構 4-SD

調査区の全域、特に東半に密集して検出された。中原遺跡4区においては、SD23～SD26・SD31で近世段階の遺物が出土している。全てが近世以後の遺構とは断定できないが、切り合い関係から奈良平安時代と断定できる溝状遺構はなかった。そのため年代については位置関係から類推したが、4区の溝状遺構の大多数は近世以後の遺構として捉えることが妥当と判断される。

SDの覆土や時代別出土遺物の有無は別表にて記した。また図示できた古墳時代後期～奈良平安時代の遺物は、遺構の記載の後に一括で第62図に掲載した。なおSD9・SD10・SD16は欠番である。

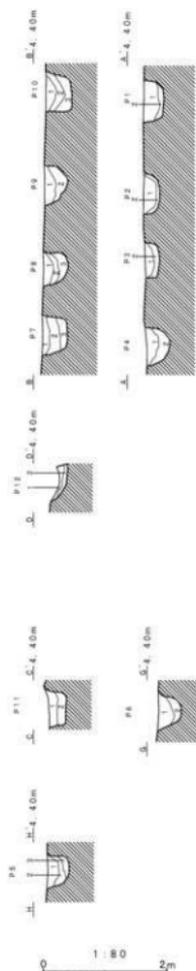
4区第1号溝状遺構 (4-SD1 第59図・第60図、第1表)

132-36Gr・132-37Gr・133-36Gr・134-36Grで検出された。東西方向に走る。西端はSD22に切れ、東端は調査区外へ延びるため総延長は不明である。またSD12と平行して延びるが、一部重複しており、SD12に切られている。SD1では礫が多量に検出された。



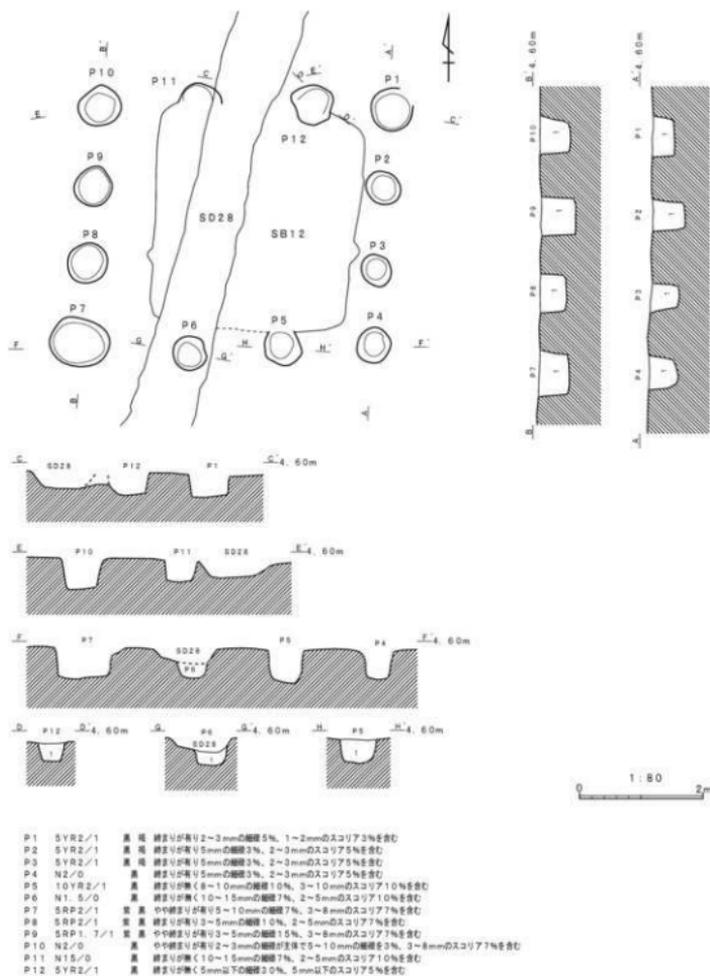
P1	1	10YR1	7/1	黒	跡まりが厚く(8-12mmの層厚)10%、2-5mmのスコリア7%を含む
	2	7.5R1	7/1	赤黒	跡まりが厚く(5-10mmの層厚)7%、2-5mmのスコリア10%を含む
P2	1	N1	5/0	黒	跡まりが厚く(8-15mmの層厚)10%、3-15mmのスコリア7%を含む
	2	5YR1	7/1	黒	跡まりが厚く(8-15mmの層厚)7%、3-10mmのスコリア7%を含む
P3	1	N1	5/0	黒	跡まりが厚く(2-5mmのスコリアを含む)
	2	5YR1	7/1	黒	跡まりが厚く(2-5mmのスコリアを含む)
P4	1	10YR1	7/1	黒	跡まりが厚く(8-12mmの層厚)15%、2-8mmのスコリア5%を含む
	2	N1	5/0	黒	跡まりが厚く(2-8mmのスコリア7%を含む)
P5	1	10YR2/1		黒	跡まりが厚く(1-3mmのスコリア10%を含む)
	2	10YR2/1		黒	跡まりが厚く(5-10mmの層厚)10%、3-5mmのスコリア7%を含む
	3	10YR2/1		黒	跡まりが厚く(1-5mmのスコリア10%を含む)
P6	1	10YR1	7/1	黒	跡まりが厚く(8-20mmの層厚)10%、1-8mmのスコリア7%を含む
	2	N1	5/0	黒	跡まりが厚く(5-10mmの層厚)10%、1-5mmのスコリア5%を含む
P7	1	7.5Y2/1		黒	跡まりが厚く(1-3mmのスコリア10%を含む)
	2	10YR2/1		黒	跡まりが厚く(3-8mmの層厚)7%、1-3mmのスコリア10%を含む
	3	10YR2/1		黒	跡まりが厚く(3-8mmの層厚)10%、1-3mmのスコリア7%を含む
P8	1	7.5Y2/1		黒	跡まりが厚く(5-10mmの層厚)10%、2-5mmのスコリア7%を含む
	2	5Y2/1		黒	跡まりが厚く(3-8mmの層厚)10%、2-5mmのスコリア10%を含む
	3	10YR2/1		黒	跡まりが厚く(5-8mmの層厚)7%、2-5mmのスコリア10%を含む
P9	1	N1	5/0	黒	跡まりが厚く(10-15mmの層厚)5%、1-5mmのスコリア10%を含む
	2	10YR1	7/1	黒	跡まりが厚く(3-8mmの層厚)10%、2-5mmのスコリア10%を含む
	3	10YR1	7/1	黒	跡まりが厚く(5-8mmの層厚)7%、2-5mmのスコリア5%を含む
P10	1	10YR1	7/1	黒	跡まりが厚く(5-8mmの層厚)10%、3-5mmのスコリア3%を含む
	2	N2/0		黒	跡まりが厚く(3-8mmのスコリア10%を含む)
	3	10YR1	7/1	黒	跡まりが厚く(3-8mmのスコリア10%を含む)
P11	1	N1	5/0	黒	跡まりが厚く(5-8mmの層厚)10%、2-5mmのスコリア7%を含む
	2	N1	5/0	黒	跡まりが厚く(3-8mmの層厚)7%、2-5mmのスコリア7%を含む
P12	1	N1	5/0	黒	跡まりが厚く(5-15mmの層厚)1-5mmのスコリア10%を含む
	2	10YR1	7/1	黒	跡まりが厚く(1-3mmのスコリア10%を含む)

第56図 4区第3号掘立柱建物址実測図



第57図 4区第3号掘立柱建物址出土遺物実測図





第58図 4区第4号掘立柱建物址実測図

規模 延長(調査区内) 18.95m × 幅 0.48 ~ 0.55m × 深さ 0.15 ~ 0.17m

重複関係 (古) SH1 → SD2・SD3・SD4 → SD1 → SD22 → SD12 (新)

時期 近世以後と判断される SD3 を切っているため、近世以後の溝と考えられる。

4区第2号溝状遺構(4SD2 第59図・第60図、第1表)

133-34Gr・133-35Gr・133-36Gr・133-37Gr・133-38Gr で検出された。北西-南東方向に走る。北端はSD21に切れ、南端は調査区外へ伸びているため、総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 42.80m × 幅 0.57 ~ 0.90m × 深さ 0.26 ~ 0.43m

重複関係 (古) SD3・SD7 → SD2 → SD1・SD12・SD21 (新)

時期 近世以後と判断される SD3 を切っているため、近世以後と考えられる。

4区第3号溝状遺構(4SD3 第59図・第60図、第1表)

133-34Gr・133-35Gr・133-36Gr・134-35Gr・134-36Gr で検出された。南北方向に走るが、南方向へおおよそ 11m 伸びたところで分岐し、東方向へ折れる溝と南方向へ伸びる溝が認められる。北端はSD1、南端はSD2に切れ、東端は調査区外へ伸びるため、総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 17.72m(南北方向) × 幅 0.79 ~ 1.63m × 深さ 0.19 ~ 0.41m

重複関係 (古) SD24 → SD3 → SD1・SD2 (新)

時期 出土資料は奈良平安時代のものが多いが、近世遺物が出土する SD24 を切っているため、近世以後の溝と考えられる。

4区第4号溝状遺構(4SD4 第59図・第60図、第1表)

132-35Gr・132-36Gr で検出された。南北方向に走り、北端はSD1、南端は攪乱に切られるため、総延長は不明である。

規模 延長(残存部) 11.92m × 幅 0.40 ~ 0.57m × 深さ 0.40m

重複関係 (古) SB2・SB3・SD19・SD20 → SD4 → SD1 (新)

時期 不明。

4区第5号溝状遺構(4SD5 第59図・第60図、第1表)

133-35Gr で検出された。南北方向に走る。幅が狭く、非常に浅い掘り込みである。

規模 延長 6.93m × 幅 0.30m × 深さ 0.09m

重複関係 (古) SD19 → SD5 (新)

時期 不明。

4区第6・18号溝状遺構(4SD6・4SD18 第59図・第60図、第1表・第2表)

133-39Gr・134-39Gr で検出された。東西方向に走る。いずれも西端がSD21に切られるため総延長は不明である。西寄りで攪乱により切られる部分もある。2本はほぼ平行して伸びるが、断面および平面からSD6がSD18を切っている。

規模 SD6 延長(残存部) 8.56m × 幅 0.36 ~ 0.91m × 深さ 0.14m

SD18 延長(残存部) 8.96m × 幅 0.71 ~ 0.90m × 深さ 0.28m

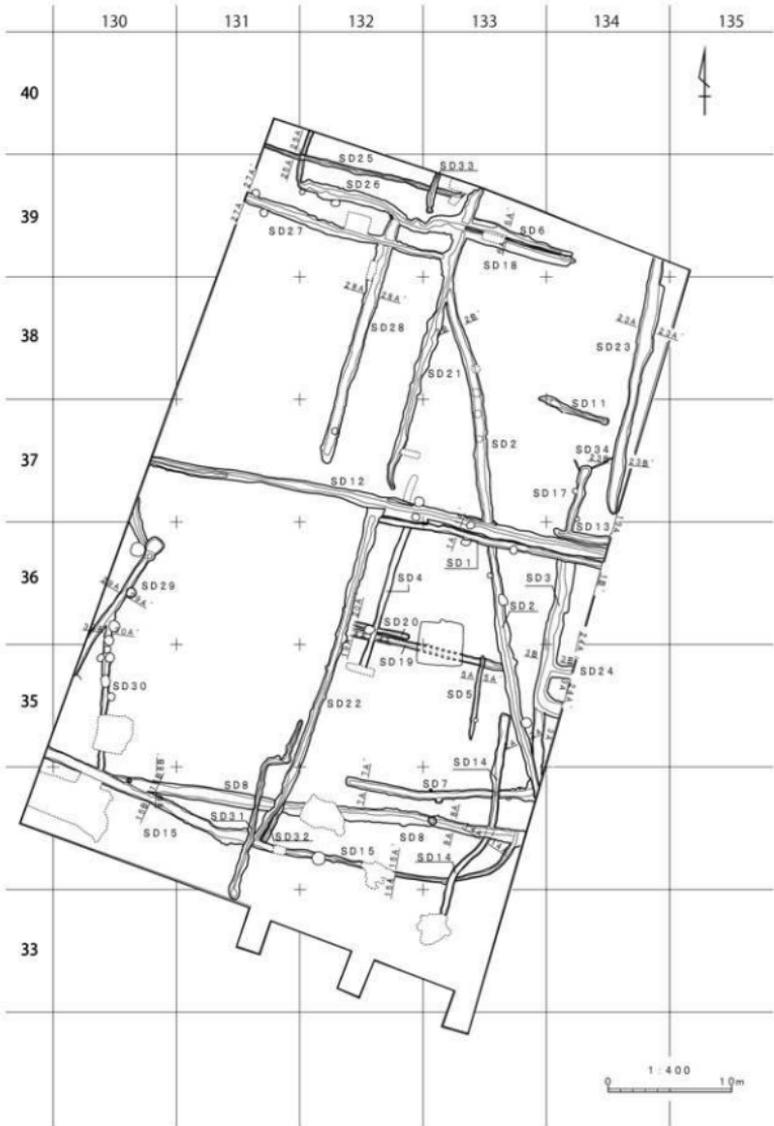
重複関係 (古) SD18 → SD6 → SD21 (新)

時期 近世遺物が出土する SD26 の延長に位置することから、近世であろう。

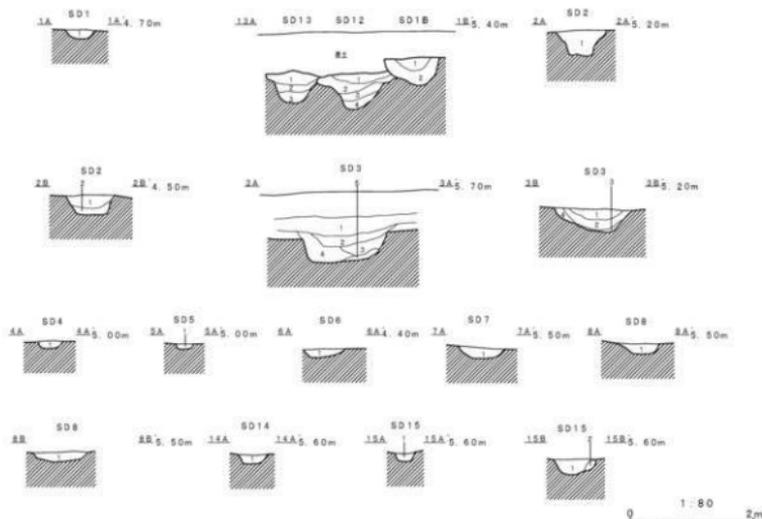
4区第7号溝状遺構(4SD7 第59図・第60図、第1表)

132-34Gr・133-34Gr で検出された。東西方向に走る。東端がSD2に切られていることや、東端が調査区外へ伸びると考えられるため総延長は不明である。

規模 延長(残存部) 15.37m × 幅 0.73 ~ 1.79m × 深さ 0.16 ~ 0.18m



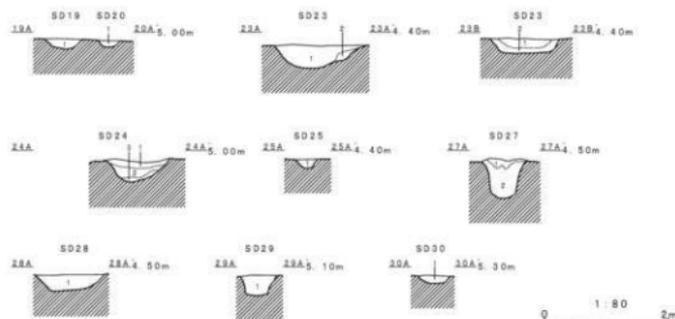
第59図 4区溝状遺構分布図



第60図 4区溝状遺構断面図(1)

第1表 4区溝状遺構計測表(1)

遺構名	層 色	備 考	断面形	遺物/古代/遺物/中世/遺物/近世
SD1	A 1 5YR1 7/1	3mm以上の細砂とスコリアを微量に含む	浅い丸形	
	B 1 5YR1 7/1	砂質土で50mm以下の円礫を3%、3mm以下のスコリア7%を含む	深い丸形	○
SD2	A 1 10YR2/1	3~8mmの細砂、10mm程度の細礫が多少含まれる	箱形	
	B 1 2 5Y2/1	20mm程度の細砂、1~1.5mmの細礫、3mm以下のスコリアを含む微塵い土	箱形	○
SD3	A 1 10YR2/1	10mmの細砂、1mm以下のスコリアを含むやや微塵い土		
	B 1 N1 5/0	1~10mmの細礫を多量、3mm以下のスコリアを少量含む		
	B 2 N1 5/0	砂質土で1~10mmの細礫を多量、3mm以下のスコリアを少量含む		
	B 3 10YR1 7/1	砂質土で1~10mmの細礫を多量、3mm以下のスコリアを少量含む	箱形	
	B 4 N1 5/0	砂質土で15mm程度の細礫、1mmのスコリアを微量に含む		
SD4	A 1 10YR1 7/1	砂質土と砂礫土の混成土		○
	B 1 7 5Y2/2	20mm以下の細砂、2mm以下のスコリア20%を含む		
	B 2 7 5Y2/1	10mmの細砂を多量、1mmのスコリアを微量に含む		
	B 3 7 5Y2/1	砂質土	浅い丸形	
SD5	A 1 5YR2/1	20mmの細砂20%、1mmのスコリアを微量に含む		
	B 1 10YR1 7/1	3~5mmの細砂10%、2~5mmのスコリア7%を含む	浅い丸形	○
SD6	A 1 5YR2/1	サラサラしていて3~5mmの細砂と10mm程度の細礫が若干含まれる	箱形	
SD7	A 1 10YR1 7/1	20mm以下の細砂5%、1mm以下のスコリア1%、土層片を含む	浅い丸形	○
SD8	A 1 10YR2/1	2~5mmの細砂と1mmのスコリアを含む、土層片やサラサラしている	浅い丸形	
	B 1 2 5Y2/1	3~8mm細砂を多量に、1~2mmのスコリア1%を含む	浅い丸形	○
SD9	B 1 10YR1 7/1		浅い丸形	
SD10		欠 番		
SD11		欠 番		
SD12	A 1 5YR1 7/1	断面無し		
	B 1 5YR1 7/1	砂質土で20mm以下の円礫を15%、3mm以下のスコリア7%を含む微塵い土		
	B 2 10YR1 7/1	やや締まりがある砂質土で70mm以下の円礫を15%、5mm以下のスコリア10%を含む	深い丸形	○
SD13	A 1 5YR1 7/1	やや締まりがある砂質土で20mm以下の円礫を3%、5mm以下のスコリア10%を含む		
	B 1 N1 5/0	やや締まりがある砂質土で10mm以下の円礫を7%、5mm以下のスコリア7%を含む		
	B 2 10YR1 7/1	やや締まりがある砂質土で20mm以下の円礫を15%、10mm以下のスコリア15%を含む	深い丸形	○
SD14	A 1 10YR1 7/1	やや締まりがある砂質土で20mm以下の円礫を15%、5mm以下のスコリア15%を含む		
	B 1 N1 5/0	やや締まりがあり2~8mmの細砂50%、3mm以下のスコリア5%を含む	箱形	
SD15	A 1 10YR1 7/1	締まりが無く10mmの円礫、5~8mmの細砂15%、2~5mmのスコリア10%を含む	箱形	○
	B 1 5YR1 7/1	締まりが無く3~8mmの細砂10%、2~5mmのスコリア7%を含む	浅い丸形	
SD16	A 1 10YR2/2	微れや小さい細砂の厚で2~3mmの細砂を主体とし、10mm程度の細礫を5%、2~5mmのスコリア7%を含む	浅い丸形	



第61図 4区溝状遺構断面図(2)

第2表 4区溝状遺構計測表(2)

遺構名	層	色	底土	断面形	遺物/古代	遺物/中世	遺物/近世
SD16			欠番				
SD17			断面無し	○			
SD18			断面無し				
SD19	A	1 SVR1 7/1	締まりが無く3～5mmの細砂10%、2～5mmのスコリア10%を含む	浅い丸形			
SD20	A	1 7 SVZ/1	締まりが無く5～10mmの細砂7%、2～5mmのスコリア10%を含む	浅い丸形			
SD21			断面無し	○			
SD22			断面無し	○			
SD23	A	1 10YR1 7/1	10～12mmの細砂10%、5～8mmのスコリア10%を含む	浅い丸形	○	○	○
		2 N1 5/0	締まりが無く5～10mmの細砂10%、2～8mmのスコリア10%を含む				
SD24	A	1 N1 5/0	締まりが無く10～12mmの細砂10%、5～8mmのスコリア10%を含む	浅い丸形	○	○	○
		2 7.5R1 7/1	やや締まりが有り8～10mmの細砂5%、5～8mmのスコリア10%を含む				
SD25	A		不明	浅い丸形	○		○
SD26	A		不明	浅い丸形	○		○
SD27	A		断面無し	○	○	○	
SD28	A		不明	浅い丸形	○		○
SD29	A	1 N1 5/0	締まりが無く10～15mmの細砂7%、2～5mmのスコリア10%を含む	浅い丸形			
SD30	A	1 10YR1 7/1	締まりが無く2～3mmの細砂を主体とし、5～10mmの細砂を10%、3～5mmのスコリア10%を含む	浅い丸形			
SD31			断面無し		○	○	○
SD32			断面無し				
SD33			断面無し				
SD34			第17・18段 SD7-15～17・20	浅い丸形			

重複関係 (古) SD7→SD2・SD14 (新)

時期 不明。

4区第8号溝状遺構(4SD8 第59図・第60図、第1表)

130-34Gr・131-34Gr・132-34Gr・133-34Grで検出された。東西方向に走る。東端は調査区外に延び、西端はSD15に切られているため総延長は不明である。残存部の中央付近が攪乱により切られる。

規模 延長(調査区内) 33.41m×幅0.90～1.22m×深さ0.16～0.18m

重複関係 (古) SB6→SD8→SD22→SD15→SD31→SD14 (新)

時期 不明。

4区第11号溝状遺構(4SD11 第59図、第1表)

133-37Gr・133-38Gr・134-37Gr・134-38Grで検出された。東西方向に走り、SB7を切る。幅が狭く、掘り込みが浅い。

規模 延長3.98m×幅0.19～0.35m×深さ0.01～0.12m

重複関係 (古) SB7→SD11 (新)

時期 不明。

4区第12号溝状遺構(4-SD12 第59図・第60図、第1表)

SD12は130-37Gr・131-37Gr・132-37Gr・133-36Gr・133-37Gr・134-36Grで検出された。東西方向に走る。東西端とも調査区外へ延びているため総延長は不明である。残存部のほぼ中央で幅が広くなる箇所が見られる。

規模 延長(調査区内)18.79m×幅0.49～1.16m×深さ0.59m

重複関係 (古)SB10・SB17・SB18・SD2→SD1→SD22→SD12(新)

時期 中世遺物が出土していることから、中世以後である。

4区第13号溝状遺構(4-SD13 第59図・第60図、第1表)

SD13は134-36Grで検出された。東西方向に走る。東端が調査区外へ延びるため総延長は不明である。

規模 延長(調査区内)2.25m×幅0.52～0.72m×深さ0.53m

重複関係 (古)SD17→SD13(新)

時期 不明。

4区第14号溝状遺構(4-SD14 第59図・第60図、第1表)

133-33Gr・133-34Gr・133-35Grで検出された。南北方向に延び、北からおよそ10m付近で南西方向に曲がり、4m程延びたところで再び南北方向へ延びる。南端が攪乱に切られるため総延長は不明である。

規模 延長(残存部)8.57m×幅0.47～0.86m×深さ0.14m

重複関係 (古)SD8→SD7・SD15→SD14(新)

時期 不明。

4区第15号溝状遺構(4-SD15 第59図・第60図、第1表)

129-35Gr・130-34Gr・130-35Gr・131-34Gr・132-34Gr・133-34Grで検出された。東端は北から南西方向におよそ6m延びた後、西側へ屈曲し、緩やかに北西方向へ延びる。西端は調査区外へ延びるため、総延長は不明である。

規模 延長(調査区内)38.87m×幅0.26～1.36m×深さ0.09～0.25m

重複関係 (古)SD8→SD22・SD30・SD32→SD15→SD14・SD31(新)

時期 不明。

4区第17号溝状遺構(4-SD17 第59図、第2表)

134-36Gr・134-37Grで検出された。南北方向に走る。北端はSD34、南端はSD13と重複するため総延長は不明である。

規模 延長(残存部)5.46m×幅0.52～0.86m×深さ0.02～0.14m

重複関係 (古)SD34→SD17→SD13(新)

時期 不明。

4区第19号溝状遺構(4-SD19 第59図・第61図、第2表)

SD19は132-35Gr・132-36Gr・133-35Grで検出された。東西方向に走る。東端はSD2、西端はSD22に切られるため総延長は不明である。

規模 延長(残存部)12.8m×幅0.52～0.86m×深さ0.02～0.14m

重複関係 (古)SB1→SD19→SD2・SD4・SD5・SD22(新)

時期 不明。

4区第20号溝状遺構(4-SD20 第59図・第61図、第2表)

SD20は132-36Grで検出された。東西方向に走る。西端はSD19と同様SD22に切られるため総延長は不明である。

規模 延長(残存部) 4.41m × 幅 0.35 ~ 0.44m × 深さ 0.10m

重複関係 (古) SD20 → SD22・SD4 (新)

時期 不明。

4区第21号溝状遺構(4-SD21 第59図、第2表)

131-37Gr・132-38Gr・133-38Gr・133-39Grで検出された。調査区中央を南北方向に走る。北端は調査区外へ延びるため、総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 25.59m × 幅 0.31 ~ 1.25m × 深さ 0.14 ~ 0.37m

重複関係 (古) SD2・SD6・SD18・SD26・SD27 → SD21 (新)

時期 不明。近世遺物が出土するSD26と直交することから、近世以後か。

4区第22号溝状遺構(4-SD22 第59図、第2表)

131-34Gr・131-35Gr・132-35Gr・132-36Gr・131-37Grで検出された。SD21の延長上に南北方向に向けて走る。北端はSD12、南端はSD15に切られるため総延長は不明である。

規模 延長(残存部) 28.93m × 幅 0.54 ~ 1.05m × 深さ 0.01 ~ 0.34m

重複関係 (古) SD1・SD8・SD19・SD20・SD32 → SD22 → SD12・SD15 (新)

時期 不明。SD21と同一軸であることから、両遺構は同時期であろう。

4区第23号溝状遺構(4-SD23 第59図・第61図、第2表)

134-37Gr・134-38Gr・134-39Grで検出された。SD21と平行に南北方向に走る。北端は調査区外へ延びるため総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 21.27m × 幅 0.62 ~ 1.55m × 深さ 0.24 ~ 0.37m

重複関係 (古) SB7・SB8・SB9・SD34 → SD23 (新)

時期 近世遺物が出土していることから、近世以後である。

4区第24号溝状遺構(4-SD24 第59図・第61図、第2表)

134-35Grで検出された。東西方向に走る。東端は調査区外へ延び、西端はSD3に切られるため総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 1.60m × 幅 0.96 ~ 1.06m × 深さ 0.35m

重複関係 (古) SD24 → SD3 (新)

時期 近世遺物が出土していることから、近世以後である。

4区第25号溝状遺構(4-SD25 第59図・第61図、第2表)

131-39Gr・131-40Gr・132-39Gr・133-39Grで検出された。東西方向に走る。西端からおおよそ16m延びたところで北側に屈曲していると考えられるが、東端は攪乱に切られている。また西端は調査区外へ延びることから総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 16.74m × 幅 0.26 ~ 0.44m × 深さ 0.15m

重複関係 (古) SB22 → SB14 → SD26 → SD25 → SD33 (新)

時期 近世遺物が出土していることから近世以後である。

4区第26号溝状遺構(4-SD26 第59図、第2表)

131-39Gr・132-39Gr・132-40Gr・133-39Grで検出された。西側は南北方向におおよそ4m延びたところで東に向けてL字に屈曲し、東西南方へ方向を変える。北端は調査区外へ延び、東端はSD21に切られるため総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 南北 4.64m・東西 13.05m × 幅 0.26 ~ 1.51m × 深さ 0.07 ~ 0.39m

重複関係 (古) SD6・SD18・SD28 → SD26 → SD21・SD25 (新)

時期 近世遺物が出土していることから近世以後である。

4区第27号溝状遺構(4-SD27 第59図・第61図、第2表)

131-39Gr・132-39Gr・133-39Grで検出された。SD25と平行して東西方向に走る。東端はSD21に切れ、西端は調査区外へ延びるため総延長は不明である。

規模 延長(調査区内)16.67m×幅0.51～1.04m×深さ0.63m

重複関係 (古)SB15・SB16・SB21→SD28→SD27→SD21(新)

時期 SD21やSD25との位置関係から近世以後の溝と考えられる。

4区第28号溝状遺構(4-SD28 第59図・第61図、第2表)

132-37Gr・132-38Gr・132-39Grで検出された。SD21と平行して南北方向に走る。北端がSD26に切られているため総延長は不明である。

規模 延長(調査区内)20.80m×幅0.94～1.14m×深さ0.26m

重複関係 (古)SB12・SB21→SD28→SD26・SD27(新)

時期 SD21・SD26・SD27との位置関係から近世以後と考えられる。

4区第29号溝状遺構(4-SD29 第59図・第61図、第2表)

130-35Gr・130-36Gr・130-37Grで検出された。南から北東方向におよそ11m延びたところで北西方向に向けて屈曲する。端部はいずれも調査区外へ延びるため、総延長は不明である。

規模 延長(調査区内)南東11.81m・北西4.89m×幅0.62～0.94m×深さ0.33～0.38m

重複関係 (古)SD30→SD29(新)

時期 不明。

4区第30号溝状遺構(4-SD30 第59図・第61図、第2表)

130-35Gr・130-36Grで検出された。南北方向に走る。北端はSD29、南端はSD15に切られているため総延長は不明である。

規模 延長(残存部)12.93m×幅0.41～0.71m×深さ0.13m

重複関係 (古)SD30→SD15・SD29(新)

時期 不明。

4区第31号溝状遺構(4-SD31 第59図、第2表)

131-33Gr・131-34Gr・131-35Gr・132-35Grで検出された。南北方向に走る。北から南方向に向けて、約3.5m延びたところで西に屈曲する。そこから約1.5m延びた地点でさらに南に向けて屈曲する。

規模 延長15.58m×幅0.33～0.89m×深さ0.12～0.17m

重複関係 (古)SD8→SD15→SD31(新)

時期 近世遺物が出土していることから、近世以後である。

4区第32号溝状遺構(4-SD32 第59図、第2表)

131-34Grで検出された。SD22とほぼ重なるように南北方向に走る。北端はSD22、南端はSD15に切られているため総延長は不明である。

規模 延長(残存部)3.65m×幅0.46m×深さ0.10m

重複関係 (古)SD8→SD32→SD15・SD22(新)

時期 不明。

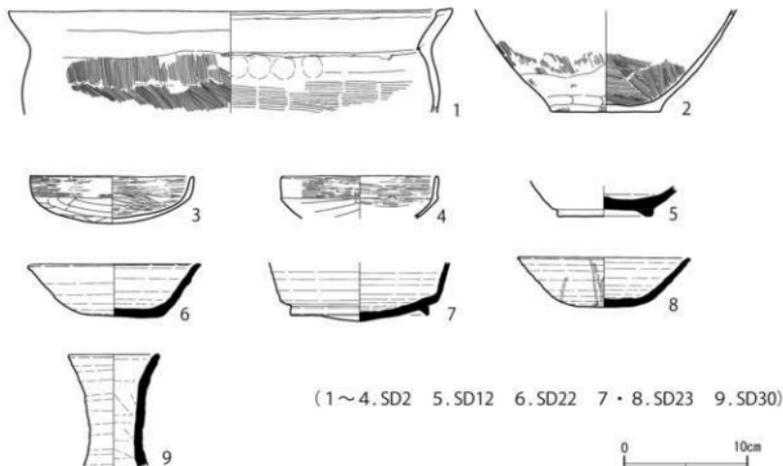
4区第33号溝状遺構(4-SD33 第59図、第2表)

133-39Grで検出された。南北方向に走る。北端が調査区外へ延びるため総延長は不明である。

規模 延長(調査区内)3.30m×幅0.35～0.61m×深さ0.09～0.16m

重複関係 (古)SD25→SD33(新)

時期 SD25を切っていることから近世以後である。



第62図 4区溝状遺構出土遺物実測図

4区第34号溝状遺構(4-SD34 第59図、第2表)

134-37Grで検出された。検出の時点ではSB7の南辺と認識し掘り下げを行ったが、セクションを確認したところ溝状遺構と判断した。調査所見にしたがってSD34としたが、SB7の建て替え前の掘り込みの可能性もある。

規模 延長(調査区内) 5.46m×幅0.52～0.86m×深さ0.02～0.14m

重複関係 (古) SD34→SD17→SD23(新)

時期 SB7に切られることから7世紀以前である。

4区溝状遺構出土遺物(第62図)

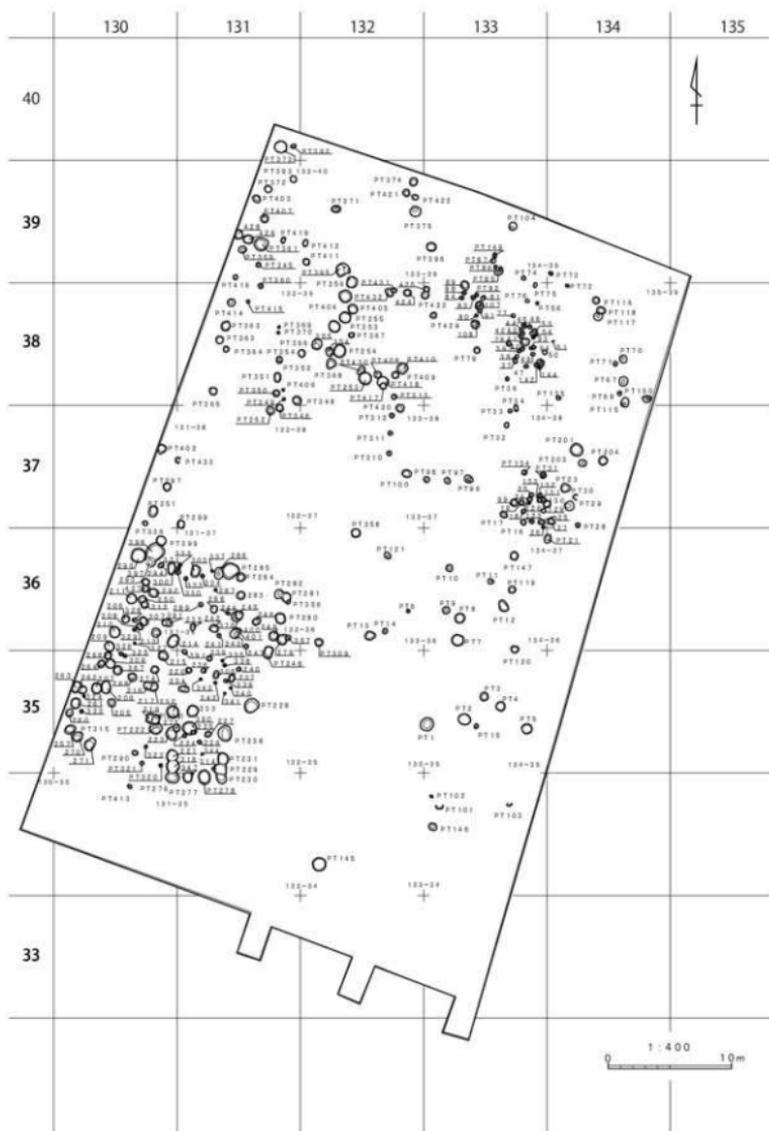
溝状遺構からは古墳時代後期～近世にかけての遺物が出土しているが、本書では奈良平安時代までの遺物のみを扱った。

SD2では4点図示した。1は甕もしくは埴で、2は駿東型球胴甕である。1は口縁部が肥厚する。胴部は内外面で異なる単位のハケメ調整が施される。2は残存部分から球胴を呈すると考えられる。底部はナデ調整によって仕上げられている。3・4は土師器の坏である。3は半球状の体部を有し、口縁部は直立する。4は体部と口縁部の境の稜は強く、口縁部は直立する。3は外面口縁部と内面に黒色処理、4は内外面に黒色処理を施す。

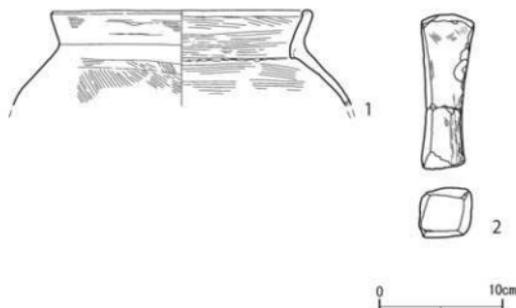
5はSD12から出土した。須恵器の壺底部と考えられる。貼付高台で底面にロクロ目が残る。6はSD22から出土した須恵器の無台碗である。内面に火燂状の黒斑が付着する。7・8はSD23から出土した。7は須恵器の有台坏身で、底部が高台よりも突出する。8は須恵器の無台碗である。9はSD30から出土した須恵器長径壺もしくは瓶類の口縁部である。

(4) ピット(PT 第63図・第64図、第3表～第8表)

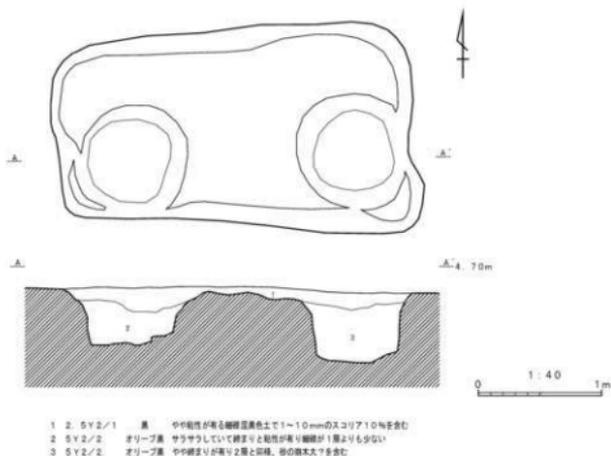
ここでは方形配列などの規則性を見出せなかったピットを扱った。調査区のほぼ全域で検出されているが、特に130-35Gr・130-36Gr・131-35Gr・131-36Grに集中している。調査区南西側には直線上に



第63図 4区ビット分布図



第64図 4区ピット出土遺物実測図(1.PT425 2.PT271)



第65図 4区第1号不明遺構実測図

並んだり、方形配列と思わせるピット配置があるが、残存状況では建物址とは判断できない。

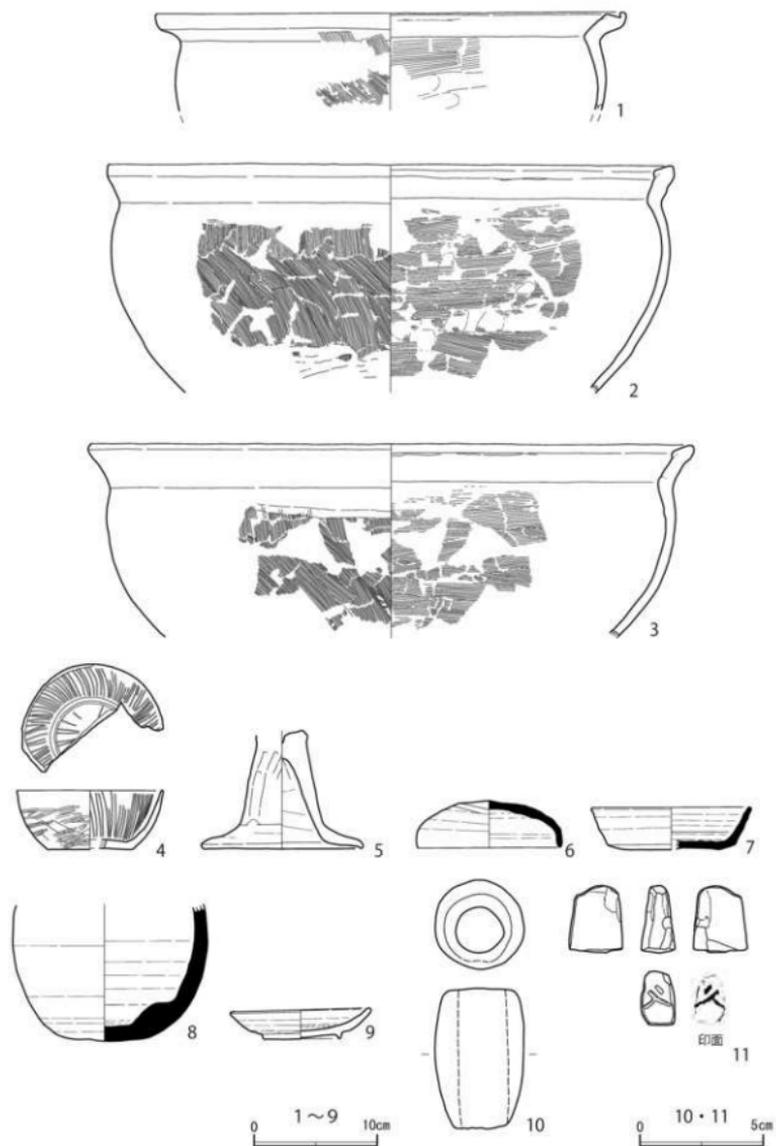
平面形は円形、楕円形ないし不整形である。直径は0.18~1.33m・深さは0.06~0.77mを測る。図化が可能な遺物は2点のみで、他区と同様、遺構の帰属時期を決定することは困難である。そのため、計測値を一覧で示した。欠番があり、遺構番号は連続しない。ピットの覆土は主に細砂・スコリアを含む締まりのない黒色土である。

遺物 1はPT425出土の粗いハケメを施した土師器甕である。2はPT271出土の凝灰岩製の砥石である。長さ12.4cm、幅4.19cm、厚さ3.97cm、重さ245.23gを測る。4面に使用面が認められる。

(5) 不明遺構(4-SX1 第65図)

131-38Grで検出された。平面形は東西に長軸を持つ長方形を呈し、東西壁にピットを有する。遺物は出土していないため、時期は不明である。

規模 長軸2.84m×短軸1.56m×深さ0.57m(東壁)・0.46m(西壁)



第66図 4区遺構外出土遺物実測図

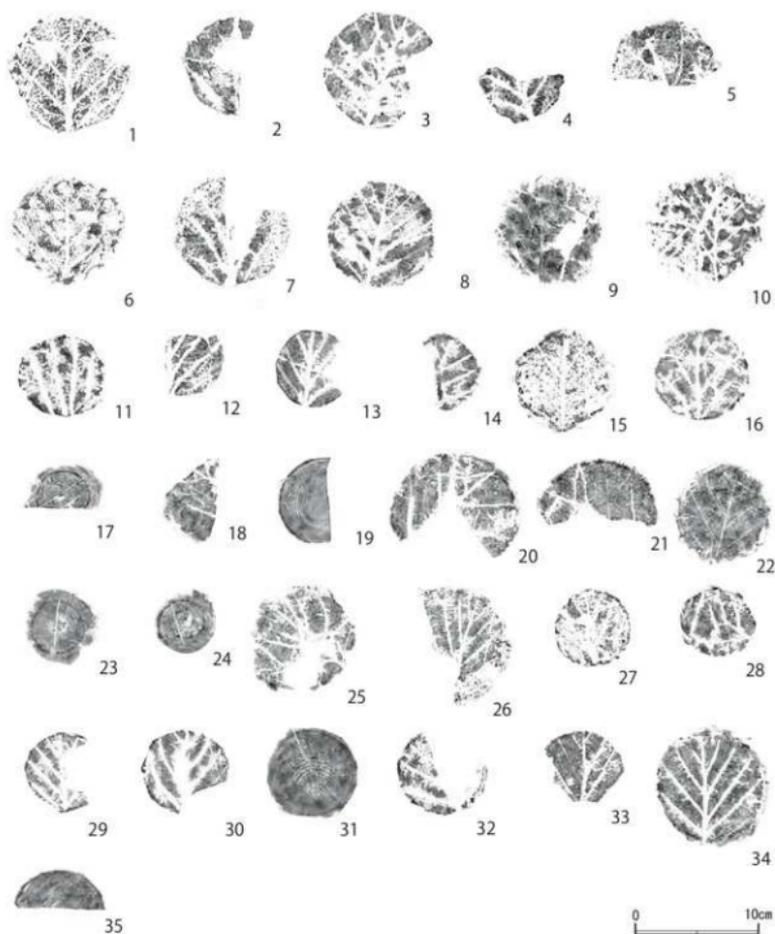
(6) 遺構外遺物 (第66図)

古墳時代後期～奈良平安時代にかけての土器9点、土製品1点の計10点と時期不明の石製品1点を図示した。

1～5は土師器である。1～3には塀を図化した。1は口唇部が上方へ折り返されている。2・3は口縁部が肥大化している。4は甲斐型環である。口径11.8cm、底径7.0cmとやや大型で、内面の見込み部に沈線が巡る。沈線の内と外で、ミガキ調整の様子が異なる。5は高環の脚部で、古墳時代後期(TK23並行段階頃)に位置づけられる。なお、中原遺跡ではこの時期に位置づけられる遺構は確認されていない。

6～8は須恵器である。6は环蓋で遠江Ⅳ期に位置づけられる。7は箱型环身で遠江Ⅴ期後半～Ⅵ期、8は壺の胴部～底部片で、内面に被熱による「ぶく」が生じている。9は灰釉陶器の皿である。削り出し高台で、底部にロク口痕が残る。10は土錘である。長さ5.7cm、幅3.6cmで、穿孔部径は1.9cmである。上面・下面ともに面取りがなされている。

11は、滑石性の印で、長さ2.69cm、幅1.35cm、厚さ2.17cmを測る。印面は拓本にて示した。時期は不明であるが、奈良平安時代の可能性も考慮し、掲載した。



- | | | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|
| 1.SB1-1 | 2.SB2-1 | 3.SB2-2 | 4.SB4-1 | 5.SB4-3 | 6.SB7-5 | 7.SB10-1 |
| 8.SB10-5 | 9.SB10-6 | 10.SB11-8 | 11.SB14-3 | 12.SB14-4 | 13.SB14-5 | 14.SB14-6 |
| 15.SB15-2 | 16.SB15-3 | 17.SB15-11 | 18.SB16-3 | 19.SB16-4 | 20.SB17-7 | 21.SB17-8 |
| 22.SB17-19 | 23.SB17-20 | 24.SB17-21 | 25.SB18-3 | 26.SB18-4 | 27.SB21-1 | 28.SB21-7 |
| 29.SB21-9 | 30.SB21-10 | 31.SB21-12 | 32.SB21-13 | 33.SB22-1 | 34.SD2-2 | 35.遺構外-4 |

第 67 図 4区出土土器拓本

第3表 4区ビット計測表(1)

道番号	平面形	断面形	径 (mm)	深さ (mm)	選 査	色	道土層序	道土/中粒	道土/道石
PF001	円形	浅い丸形	1.05	0.14	40mm以下の細粒、2mm以下の褐色スコリアを少量含む	N1.5/0	無し	○	
PF002	楕円形	扁形	1.00	0.21	20mm以下の細粒、1mm以下のスコリアを含む	N1.5/0	やや有り	○	
PF003	円形	扁形	0.69	0.19	10mm以下の細粒、5mm以下の褐色スコリアを少量含む	N1.5/0	無し		
PF004	円形	浅い丸形	0.73	0.07	5mm以下の細粒、褐色スコリアを含む	10R1/7/1	無し	○	
PF005	円形	浅い丸形	0.80	0.22	2mm以下のスコリアを含む	10R1/7/1	無し	○	
PF006	円形	浅い丸形	0.25	0.16	3~6mmの細粒、スコリアを含む	5R2/1	無し		
PF007	円形	浅い丸形	0.92	0.16	1~2mmの細粒とスコリアが混在	10R1/7/1	無し	○	
PF008	円形	扁形	0.79	0.18	サラサラした土 1~3mmの細粒を含む	N1.5/0	無し	○	
PF009	円形	扁形	0.60	0.13	1mmのスコリアを含む	N1.5/0	無し		
PF010	円形	浅い丸形	0.53	0.28	サラサラした土 2~3mmの細粒、1~2mmのスコリアを含む	N1.5/0	無し		
PF011	円形	浅い丸形	0.42	0.25	サラサラした土 1mm以下のスコリアを含む	10R1/7/1	無し		
PF012	楕円形	浅い丸形	0.95 × 0.66	0.16	サラサラした土 2~3mmの細粒を含む	10R1/7/1	無し		
PF013	円形	扁形	0.71	0.19	2~6mmの細粒を含む やや粘性有り	N1.5/0	無し	○	
PF014	円形	浅い丸形	0.45	0.44	細粒が主体、10~20mmの細粒7%、3~5mmの細粒、2~8mmのスコリア15%を含む	10R1/7/1	無し		
PF015	円形	浅い丸形	0.36	0.17	—	—	—	—	
PF016	円形	浅い丸形	0.45	0.27	8~10mmの細粒7%、2~5mmのスコリア5%を含む	5R1/7/1	やや有り		
PF017	楕円形	扁形	0.54	0.25	5~10mmの細粒10%以下、2~5mmのスコリア15%以下を含む	10R2/7/1 5R2/1	下部有り	○	
PF018	円形	浅い丸形	0.34	0.23	8~15mmの細粒7%、2~5mmのスコリア5%を含む	10R1/7/1	有り		
PF019	楕円形	浅い丸形	0.47	0.37	10~15mmの細粒10%、2~5mmのスコリア7%を含む	10R1/7/1	有り		
PF021	楕円形	浅い丸形	0.74 × 0.55	0.28	20mm以下の細粒10%、8mm以下のスコリア20%を含む	10R1/7/1	やや有り		
PF023	円形	浅い丸形	0.76	0.77	5~15mmの細粒10%、2~8mmのスコリア10%を含む	10R1/7 N1.5/0 N2.0	無し	○	
PF024	楕円形	浅い丸形	0.31	0.40	10mmの細粒5%、2~5mmのスコリア10%を含む	N2.0	無し		
PF025	円形	浅い丸形	0.36	0.23	10mmの細粒5%、2~5mmのスコリア15%を含む	10R1/7/1	無し		
PF026	円形	浅い丸形	0.22	0.14	2~8mmのスコリア10%を含む	N2.0	無し		
PF027	円形	扁形	0.61 × 0.53	0.23	5~10mmの細粒15%、2~10mmのスコリア15%を含む	10R1/7 10R2/1	無し		
PF028	円形	浅い丸形	0.37	0.26	10mmの細粒5%、1~5mmのスコリア10%を含む	N2.0	無し		
PF029	円形	浅い丸形	0.77	0.54	5~20mmの細粒15%、2~8mmのスコリア15%以下を含む	N2.0 N1.5/0	無し	○	
PF030	不明	扁形	0.42	0.17	—	—	—	—	
PF031	円形	浅い丸形	0.48	0.31	30mmと70mmの細粒、10mmの細粒5%、1~5mmのスコリア10%を含む	N2.0	無し		
PF032	楕円形	浅い丸形	0.43 × 0.35	0.30	8~10mmの細粒10%、1~8mmのスコリア10%を含む	10R1/7/1	無し		
PF034	楕円形	浅い丸形	0.54 × 0.29	0.25	5mmの細粒10%、1~5mmのスコリア10%を含む	N2.0	無し		
PF035	円形	浅い丸形	0.29	0.35	5mmの細粒10%、1~3mmのスコリアを含む	N2.0	無し	○	
PF036	楕円形	浅い丸形	0.27	0.20	10mmの細粒7%、1~5mmのスコリア10%を含む	10R1/7/1	無し	○	
PF037	楕円形	浅い丸形	0.42 × 0.30	0.22	5~10mmの細粒5%、1~5mmのスコリア10%を含む	N2.0	有り	○	
PF038	円形	浅い丸形	0.29	0.22	8~10mmの細粒5%、1~8mmのスコリア10%を含む	N2.0	無し		
PF039	円形	浅い丸形	0.31	0.25	5~8mmの細粒10%、1~5mmのスコリア5%を含む	10R1/7/1	無し		
PF040	円形	浅い丸形	0.30	0.24	5~10mmの細粒10%、2~5mmのスコリア5%を含む	N1.5/0	無し	○	
PF041	楕円形	浅い丸形	0.73 × 0.61	0.25	8~12mm以下の細粒10%、2~8mm以下のスコリア10%を含む	N2.0	無し	○	
PF042	円形	浅い丸形	0.32	0.28	5~10mmの細粒7%、1~5mmのスコリア10%を含む	N2.0	やや有り	○	
PF043	円形	浅い丸形	0.29	0.20	5~10mmの細粒7%、1~5mmのスコリア10%を含む	N2.0	やや有り		
PF044	円形	浅い丸形	0.31	0.25	5~10mmの細粒7%、1~5mmのスコリア7%を含む	N1.5/0	無し		
PF045	楕円形	浅い丸形	0.44 × 0.25	0.35	45mmの細粒、5~10mmの細粒10%、1~5mmのスコリア5%を含む	10R1/7/1	無し		
PF046	円形	浅い丸形	0.32	0.40	5~10mmの細粒7%、3~5mmのスコリア7%を含む	N1.5/0	無し		
PF047	円形	浅い丸形	0.38	0.35	8~10mmの細粒7%、1~3mmのスコリア5%を含む	10R1/7/1	無し		
PF049	円形	浅い丸形	0.34	0.42	10mmの細粒5%、1~3mmのスコリア7%を含む	10R1/7/1	無し	○	
PF050	円形	浅い丸形	0.36	0.24	8~10mmの細粒10%、1~3mmのスコリア10%を含む	N2.0	無し		
PF051	不明	浅い丸形	0.21	0.10	—	—	—	—	
PF053	楕円形	浅い丸形	0.54	0.48	25mmの内径、5~8mmの細粒20%、2~8mmのスコリア15%を含む	N1.5/0	無し	○	
PF054	円形	浅い丸形	0.25	0.41	8~10mmの細粒10%、2~5mmのスコリア10%を含む	N1.5/0	無し		
PF056	円形	浅い丸形	0.26	0.15	10mmの細粒5%、2~3mmのスコリア10%を含む	N1.5/0	無し	○	
PF067	楕円形	浅い丸形	0.77	0.61	5~10mmの細粒15%以下、2~5mm以下のスコリア15%を含む 上部に20mmの細粒を含む	10R1/7/1	下部のみ やや有り	○	
PF068	円形	浅い丸形	0.31	0.26	1~3mmのスコリア10%を含む	N1.5/0	有り		
PF070	円形	浅い丸形	0.63	0.60	5~10mmの細粒15%、2~5mmのスコリア10%を含む	N2.0 N1.5/0	無し	○	
PF071	円形	浅い丸形	0.32	0.27	3~5mmの細粒15%、1~5mmのスコリア10%を含む	N2.0	無し		
PF072	円形	浅い丸形	0.29	0.17	8~15mmの細粒7%、1~3mmのスコリア7%を含む	N2.0	無し		
PF074	円形	浅い丸形	0.33	0.15	—	—	—	—	
PF075	楕円形	扁形	0.39 × 0.25	0.16	8~12mmの細粒10%、2~5mmのスコリア10%を含む	5R2/1	無し		
PF076	楕円形	浅い丸形	0.29	0.23	8~10mmの細粒10%、1~5mmのスコリア10%を含む	N2.0	やや有り		
PF077	円形	浅い丸形	0.29	0.22	8~10mmの細粒10%、1~5mmのスコリア10%を含む	N1.5/0	やや有り		
PF078	円形	浅い丸形	0.38	0.23	25mmの細粒、10~12mmの細粒5%、1~3mmのスコリア10%を含む	N1.5/0	やや有り		
PF079	円形	扁形	0.50	0.23	—	—	—	—	○
PF080	円形	浅い丸形	0.26	0.23	8~10mmの細粒7%、2~5mmのスコリア15%を含む	7.5R2/1	無し		
PF081	楕円形	浅い丸形	0.32	0.39	5~8mmの細粒7%、2~8mmのスコリア10%を含む	N2.0	無し	○	
PF082	円形	浅い丸形	0.29	0.27	5~8mmの細粒10%、1~5mmのスコリア10%を含む	N2.0	無し		
PF083	楕円形	浅い丸形	0.38	0.44	10~15mmの細粒5%、1~3mmのスコリア10%を含む	10R1/7/1	無し		
PF084	円形	浅い丸形	0.32	0.41	5~10mmの細粒7%、1~3mmのスコリア7%を含む	N2.0	無し	○	

第4表 4区ビット計測表(2)

道標名	平面形	断面形	径 (mm)	深さ (mm)	備 考	地 盤	露土層あり	遺物/古代	遺物/中世	遺物/近世
PT05	不整形	深い丸形	0.71 × 0.41	0.32	5～12mmの繊維 10%、2～5mmのスコリア 15%を含む	N1/5.0				
PT06	円形	浅い丸形	0.27	0.29	5～10mmの繊維 7%、1～3mmのスコリア 7%を含む	N2/0		○		
PT07	円形	深い丸形	0.37	0.38	8～12mmの繊維 7%、1～5mmのスコリア 10%を含む	N1/5.0				
PT08	円形	深い丸形	0.34	0.32	8～12mmの繊維 5%、1～5mmのスコリア 10%を含む	N2/0			○	
PT09	円形	深い丸形	0.67	0.53	7～12mmの繊維 15%、2～5mmのスコリア 15%を含む	N2/0				○
PT091	円形	深い丸形	0.35	0.46	—	—				○
PT090	円形	深い丸形	0.25	0.42	10～15mmの繊維 10%、3～10mmのスコリア 10%を含む	N2/0				○
PT094	円形	深い丸形	0.29	0.36	10～15mmの繊維 10%、3～10mmのスコリア 7%を含む	N1/5.0				
PT096	楕円形	深い丸形	0.64	0.60	8～12mmの繊維 10%、3～15mmのスコリア 10%以下含む	SYR1/7/1 N2/0 N1/5.0				○
PT097	楕円形	深い丸形	0.53	0.54	5～12mmの繊維 10%、3～10mmのスコリア 10%を含む	N2/0 N1/5.0 10YR2/1				○
PT098	円形	深い丸形	0.48	0.47	5～10mmの繊維 15%、2～10mmのスコリア 15%以下含む	N1/5.0 N2/0				○
PT099	円形	深い丸形	0.58	0.49	5～10mmの繊維 15%、2～5mmのスコリア 15%を含む	N1/5.0 N2/0				
PT100	楕円形	深い丸形	0.73 × 0.56	0.49	15～20mmの繊維、1～5mmの繊維を含む 上層に鉄製品、下層に30mmの円柱を含む	SYR1/7/1				○
PT101	不明	楕形	0.59	0.25	—	—				
PT102	楕円形	浅い丸形	0.27 × 0.19	0.13	—	—				
PT103	不明	浅い丸形	0.37	0.13	—	—				
PT104	円形	深い丸形	0.62	0.38	8～15mmの繊維 7%、2～5mmのスコリア 10%を含む	N2/0				○
PT107	不整形	深い丸形	0.68	0.60	5～10mmの繊維 15%、2～5mmのスコリア 15%を含む	N2/0				○
PT108	円形	深い丸形	0.67	0.38	—	N2/0				○
PT113	楕円形	深い丸形	0.32	0.42	25mmの円柱、5～8mmの繊維、2～8mmのスコリアを含む	N2/0				
PT115	楕円形	深い丸形	0.78 × 0.64	0.37	5～12mmの繊維 15%、2～5mmのスコリア 15%を含む	N2/0 10YR2/1				
PT116	円形	深い丸形	0.55	0.37	5～10mmの繊維 10%、2～8mmのスコリア 10%以下を含む	10YR2/1 N2/0				○
PT117	円形	深い丸形	0.69	0.33	8～12mmの繊維 10%、3～5mmのスコリア 10%以下を含む	2.5Y2/1 N2/0				○
PT118	円形	浅い丸形	0.72	0.20	8～15mmの繊維 15%、2～8mmのスコリア 10%を含む	7.5Y2/1 N2/0				
PT119	円形	深い丸形	0.58	0.40	10～15mmの繊維 15%、2～8mmのスコリア 15%以下を含む	SYR1/7/1 N2/0 N1/5.0				
PT120	円形	楕形	0.63	0.16	20mmの円柱、5～8mmの繊維 10%、2～8mmのスコリア 15%を含む	7.5YR1/1				○
PT121	楕円形	深い丸形	0.58 × 0.43	0.32	5～8mmの繊維 15%、2～10mmのスコリア 10%を含む	N1/5.0				○
PT123	円形	深い丸形	0.38	0.34	8～10mmの繊維 7%、2～5mmのスコリア 10%を含む	N2/0				
PT126	円形	深い丸形	0.40	0.39	10mmの繊維 5%、2～5mmのスコリア 10%を含む	N2/0				○
PT129	円形	浅い丸形	0.35	0.24	30mmの円柱、8～10mmの繊維 7%、3～5mmのスコリア 10%を含む	N2/0				○
PT130	円形	浅い丸形	0.56	0.23	8～15mmの繊維 15%、2～10mmのスコリア 15%を含む	N2/0				○
PT131	不整形	浅い丸形	0.44	0.27	8～10mmの繊維 7%、2～8mmのスコリア 10%を含む	N2/0 N1/5.0				○
PT132	円形	浅い丸形	0.39	0.22	5～10mmの繊維 5%、2～5mmのスコリア 15%を含む	N1/5.0				
PT133	不整形	浅い丸形	0.39	0.18	5～10mmの繊維 7%、2～5mmのスコリア 10%を含む	N1/5.0				
PT134	円形	深い丸形	0.39	0.22	—	—				○
PT135	円形	深い丸形	0.34	0.36	8～10mmの繊維 7%、2～5mmのスコリア 10%を含む	10YR1/7/1				
PT142	円形	深い丸形	0.36	0.38	10mmの繊維 5%、3～5mmのスコリア 10%を含む	N2/0				
PT144	楕円形	浅い丸形	0.24	0.29	10mmの繊維 5%、3～5mmのスコリア 7%を含む	N2/0				○
PT145	円形	浅い丸形	1.66	0.16	—	—				○
PT146	楕円形	深い丸形	0.58	0.33	—	—				
PT147	楕円形	浅い丸形	0.70	0.22	—	—				
PT149	楕円形	浅い丸形	0.29	0.23	—	—				
PT150	不整形	深い丸形	0.63	0.46	5～15mmの繊維 10%以下、2～5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1 N2/0				
PT201	円形	楕形	1.00	0.24	—	—				
PT203	円形	浅い丸形	0.64	0.24	—	—				
PT204	円形	深い丸形	0.70	0.42	—	—				
PT205	円形	浅い丸形	0.63	0.23	—	—				
PT206	楕円形	浅い丸形	0.89	0.15	不明	10YR1/7/1				不明
PT207	円形	浅い丸形	1.03 × 0.72	0.12	不明	N2/0				不明
PT208	円形	浅い丸形	0.70	0.17	30mmの円柱、8～10mmの繊維 15%、3～8mmのスコリア 15%を含む	N1/5.0				
PT209	円形	浅い丸形	0.80	0.13	不明	2.5Y2/1 10YR2/1				不明
PT210	円形	浅い丸形	0.84	0.14	不明	10YR1/7/1				不明
PT211	円形	楕形	0.81	0.13	不明	7.5Y2/1				不明
PT212	方形?	深い丸形	0.56	0.42	8～10mmの繊維 10%、3～8mmのスコリア 10%を含む 下に50mmの繊維含む	上 10YR1/7/1 N1/5.0				
PT213	円形	浅い丸形	0.69	0.29	5～10mmの繊維 15%、3～5mmのスコリア 10%を含む	10YR1/7/1				下層浅い
PT214	楕円形	楕形	1.11 × 0.81	0.28	不明	5Y2/2				不明
PT215	円形	深い丸形	0.81	0.42	不明	2.5Y2/1 10YR2/1				不明
PT216	円形	深い丸形	0.73	0.41	—	—				
PT217	楕円形	浅い丸形	0.73	0.12	—	—				
PT218	円形	浅い丸形	1.03	0.20	8～10mmの繊維 15%、5～10mmのスコリア 10%を含む	N2/0				
PT219	方形	浅い丸形	1.65 × 0.78	0.25	—	—				
PT220	円形	浅い丸形	0.47	0.28	8～10mmの繊維 10%、3～8mmのスコリア 15%を含む	2.5Y2/1				

第5表 4区ビット計測表(3)

道標名	平面形	断面形	径 (mm)	深さ (mm)	塗 漆	色	塗土種類	道標/近代	道標/中世	道標/遺跡
PT221	円形	浅い丸形	0.93	0.68	5~10mmの細線 10%、3~5mmのスコリア 15%を含む	N2/0 10R1/3/1 10R2/1	無し			
PT222	楕円形?	浅い丸形 (楕円)	1.05 (楕円)	0.37 (楕円)	5~10mmの細線 15%、3~10mmのスコリア 10%を含む	N2/0	無し			
PT223	楕円形	浅い丸形	1.03 × 0.84	0.58	5~10mmの細線 15%、2~5mmのスコリア 10%を含む	N1.5/0 5R2/1	無し			
PT224	円形	浅い丸形	0.31	0.16	—	—	—			
PT225	円形	浅い丸形	1.11	0.10	5~10mmの細線 15%、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT226	円形	浅い丸形	0.32	0.15	—	—	—			
PT227	楕円形	浅い丸形	0.47	0.14	5~8mmの細線 10%、2~5mmのスコリア 5%を含む	N1.5/0	無し			
PT228	楕円形	浅い丸形	1.2 × 1.02	0.55	5~15mmの細線 15%、3~10mmのスコリア 10%を含む	N1.5/0 10R1/3/1	無し			
PT229	方形	浅い丸形	0.98	0.47	5~15mmの細線 10%、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1 10R2/1	下部無し			
PT230	楕円形	浅い丸形	0.63	0.36	5~10mmの細線 10%、3~5mmのスコリア 7%を含む	10R1/3/1 10R2/1	無し			
PT231	楕円形	浅い丸形	0.85	0.34	2~8mmの細線 10%、3~5mmのスコリア 7%を含む	10R1/3/1 10R2/1	無し			
PT232	円形	浅い丸形	0.94	0.45	5~10mmの細線 15%以下、3~8mmのスコリア 10%を含む	10R1/3/1 10R2/1	無し			
PT233	円形	浅い丸形	0.86	0.43	8~10mmの細線 10%、3~8mmのスコリア 10%を含む	10R1/3/1 10R2/1	無し			
PT234	楕円形	重葎形	0.82 × 0.45	0.41	—	—	—			
PT235	楕円形	浅い丸形	0.56 × 0.41	0.39	10~15mmの細線 15%、2~5mmのスコリア 10%を含む 下部に黄色い粒を含む	7.5R2/1 2.5Y2/1	無し			
PT236	円形	浅い丸形	0.41	0.46	5~10mmの細線、2~5mmのスコリア 10%を含む やや粗 れやすい	N1.5/0 10R2/1	無し			
PT237	楕円形	浅い丸形	0.82 × 0.45	0.27	5~10mmの細線 10%、3~8mmのスコリア 7%を含む 下に 層に黄色い粒の細線を多量に含む	2.4Y2/1 10R2/1	無し			
PT238	楕円形	浅い丸形	1.04 × 1.23	0.60	5~10mmの細線 10%、3~5mmのスコリア 7%を含む 中に 層に粗れやすい黄色い細線を含む	10R1/3/1 N1.5/0	無し			
PT239	円形	浅い丸形	0.44	0.30	—	—	—			
PT240	円形	浅い丸形	0.34	0.22	5~10mmの細線 7%、2~5mmのスコリア 10%を含む	N1.5/0	無し			
PT241	円形	浅い丸形	0.32	0.09	—	—	—			
PT242	方形	浅い丸形	0.72	0.34	10mmの細線 7%、3~5mmのスコリア 10%を含む	7.5R2/1 2.5Y2/1	無し			
PT243	不整形	浅い丸形	0.98 × 0.71	0.38	5~10mmの細線 10%、2~5mmのスコリア 10%を含む	10R2/1 N2/0	無し	○		
PT244	楕円形	浅い丸形	0.25	0.21	5~15mmの細線 10%、2~5mmのスコリア 7%を含む	N2/0	無し			
PT245	円形	浅い丸形	0.70 × 0.60	0.36	10~15mmの細線 7%、3~5mmのスコリア 10%を含む	5Y2/1	無し			
PT246	楕円形	浅い丸形	0.71	0.24	5~10mmの細線 10%、2~5mmのスコリア 10%を含む 下に 層に黄色い粒の細線を多量に含む	5Y2/1 2.5Y2/1	無し	○		
PT247	円形	浅い丸形	0.38	0.23	5~10mmの細線 15%、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT248	方形	浅い丸形	1.00 × 0.68	0.10	8~10mmの細線 7%、3~10mmのスコリア 7%を含む	10R1/3/1	無し			
PT249	円形	浅い丸形	0.76	0.54	5~15mmの細線 15%、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1	無し	○		
PT250	不整形	浅い丸形	0.63	0.41	8~10mmの細線 10%、3~8mmのスコリア 10%を含む	10R1/3/1	無し			
PT251	楕円形	浅い丸形	0.91 × 0.69	0.35	10mmの細線 7%、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1 10R2/1	無し			
PT252	円形	浅い丸形	0.66	0.37	10mmの細線 10%、3~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1 10R2/1	無し	○		
PT253	円形	浅い丸形	1.01	0.14	—	—	—			
PT254	楕円形	浅い丸形	1.10	0.07	5mmの細線 10%、3~5mmのスコリア 15%を含む	10R1/3/1	無し			
PT255	円形	葎形	0.89	0.18	10mmの細線 10%、2~5mmのスコリア 10%を含む	10R2/1	無し	○		
PT256	円形	浅い丸形	0.90	0.10	5~10mmの細線 15%、3~5mmのスコリア 10%を含む	10R1/3/1	無し	○		
PT257	楕円形	重葎形	0.82 × 0.69	0.06	5~10mmの細線 10%、2~5mmのスコリア 7%を含む	10R1/3/1	無し			
PT260	楕円形	浅い丸形	0.65	0.22	8~10mmの細線 10%、3~5mmのスコリア 7%を含む	10R2/1	無し			
PT261	楕円形	浅い丸形	0.89 × 0.73	0.20	10~15mmの細線 7%、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1	有り			
PT262	円形	葎形	0.97 (半)	0.26	10~15mmの細線 7%、2~5mmのスコリア 10%を含む 下に 層に粗れやすい黄色い粒を含む	5R1/3/1 5Y2/1	無し			
PT263	楕円形	葎形	0.67	0.34	10~20mmの細線 7%、2~5mmのスコリア 10%を含む 下に 層に粗れやすい粒の層	N1.5/0	無し			
PT264	楕円形	浅い丸形	0.64	0.33	—	—	—			
PT266	円形	浅い丸形	0.62	0.16	—	—	—			
PT267	円形	浅い丸形	0.74	0.36	—	—	—			
PT268	円形	浅い丸形	0.72	0.28	10~15mmの細線 10%、2~5mmのスコリア 10%を含む	10R2/1	無し			
PT270	円形	浅い丸形	0.87	0.29	5~10mmの細線 10%、3~8mmのスコリア 5%を含む 土の切り合い	N2/0	無し			
PT271	不整形	浅い丸形	1.12 × 0.8	0.30	砂質土で1~8mmの細線を多量に含む	10R4/2	無し	○		
PT274	円形	浅い丸形	0.61	0.33	5~10mmの細線 15%、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1 10R2/1	無し			
PT275	円形	浅い丸形	0.58	0.31	5~10mmの細線 15%、2~5mmのスコリア 10%以下を含む	N1.5/0 2.5Y2/1	やや有り			
PT276	楕円形	浅い丸形	1.13	0.62	5~10mmの細線 15%、2~3mmのスコリア 15%を含む 下に 層に粗れやすい黄色い部分有り	N3/0 10R2/1 2.5Y2/1	やや有り			
PT277	楕円形	浅い丸形	0.84	0.57	3~8mmの細線、3~5mmのスコリア 15%以下を含む	N1.5/0	やや有り			
PT278	楕円形	浅い丸形	1.16 × 0.92	0.51	5~10mmの細線 10%、2~5mmのスコリア 10%を含む 上に 20mmの内径を含む	2.5Y2/1	無し			
PT279	不整形	浅い丸形	0.73	0.10	8~10mmの細線 10%、3~5mmのスコリア 7%を含む	N1.5/0	無し	○		
PT280	楕円形	浅い丸形	0.88	0.21	5~10mmの細線 15%、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1	無し	○		
PT281	円形	葎形	0.73	0.26	2~3mmの細線が主体の層 2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1	?			
PT282	楕円形	浅い丸形	0.77	0.34	2~3mmの細線が主体の層 20mmの内径、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Y2/1	?			

第6表 4区ビット計測表(4)

道橋名	平面形	断面形	幅 (m)	深さ (m)	覆土	色	層土跡残り	遺物/古代	遺物/中世	遺物/近世
PT283	円形	深い丸形	0.66	0.51	5~10mmの繊維 7%、3~5mmのスコリア 10%を含む	10R2/1 10R1/ 7/1	無し			
PT284	円形	深い丸形	0.43	0.38	5~10mmの繊維 10%、2~5mmのスコリア 10%を含む	10R2/1/2 2.5Z/1	無し			
PT285	楕円形	浅い丸形	1.38 × 1.2	0.17	5~10mmの繊維 15%、2~5mmのスコリア 10%を含む	10R1/ 7/1 2.5Z/1	無し			
PT286	楕円形	深い丸形	0.94 × 0.67	0.48	5~10mmの繊維 15%、2~5mmのスコリア 10%を含む	10R1/ 7/1 N1/ 5/0	有り			
PT287	円形	浅い丸形	0.21	0.16	10~15mmの繊維 7%、2~5mmのスコリア 10%を含む	10R1/ 7/1	無し			
PT288	楕円形	深い丸形	0.62	0.34	10~15mmの繊維 10%、3~5mmのスコリア 10%を含む 下層に 30mmの円柱を含む	10R2/2 2.5Z/1/2	無し			
PT289	円形	深い丸形	0.35	0.47	無く 5~10mmの繊維 7%、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Z/1 10R2/1	無し			
PT290	楕円形	深い丸形	0.45	0.16			無し			
PT291	楕円形	深い丸形	0.82 × 0.57	0.41	10~15mmの繊維 5%、3~8mmのスコリア 10%以下含む	N2/0 N1/ 5/0	無し			
PT292	楕円形	楕形	0.79 × 0.69	0.21	5~10mmの繊維 10%、2~5mmのスコリア 7%を含む 繊維の層	10R2/1	無し	跡やすい		
PT293	楕円形	深い丸形	0.63	0.23	5~10mmの繊維 7%、2~5mmのスコリア 10%を含む	10R2/1	無し			
PT294	楕円形	浅い丸形	0.48 × 0.36	0.20	2~3mmの繊維を主体とし 30mmの円柱、2~5mmのスコリア 15%を含む	10R2/2	無し			
PT295	円形	浅い丸形	1.12	0.06	10mmの繊維 10%、2~5mmのスコリア 7%を含む	2.5Z/1	無し			
PT297	円形	浅い丸形	0.64	0.27	10mmの繊維 15%、3~5mmのスコリア 15%を含む	2.5Z/1 10R2/1	無し			
PT299	楕円形	楕形	0.99 × 0.62	0.43	5~10mmの繊維 10%、3~5mmのスコリア 7%を含む	10R2/1	無し			
PT300	方形	楕形	0.97 × 0.67	0.40	10mmの繊維 15%、2~5mmのスコリア 10%を含む	N2/0	無し	○		
PT303	方形	楕形	0.97 × 0.67	0.40	5~10mmの繊維 10%、2~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Z/1	無し			
PT305	楕円形	深い丸形	0.64 × 0.43	0.32	5~10mmの繊維 10%、2~5mmのスコリア 10%を含む	10R1/ 7/1	無し			
PT306	円形	深い丸形	0.60	0.40	8~10mmの繊維 15%、3~5mmのスコリア 10%を含む 下に黄色い粘土を含み跡やすい	2.5Z/1	無し			
PT307	楕円形	浅い丸形	0.76 × 0.55	0.27	5~10mmの繊維 7%、2~5mmのスコリア 10%を含む	10R2/1	無し			
PT308	楕円形	深い丸形	0.57 × 0.45	0.39	8~10mmの繊維 7%以下、3~8mmのスコリア 7%を含む	2.5Z/1	無し	○		
PT309	円形	浅い丸形	0.67	0.33	10~15mmの繊維 10%、2~5mmのスコリア 7%を含む	2.5Z/1	無し			
PT310	円形	浅い丸形	0.37	0.28	5mmの繊維 3%、2~3mmのスコリア 5%を含む	N2/0	有り			
PT311	円形	浅い丸形	0.36	0.15	5mmの繊維 3%、2~3mmのスコリア 5%を含む	5R2/1	有り			
PT312	円形	深い丸形	0.36	0.34			無し			
PT313	円形	深い丸形	0.43	0.52			無し			
PT314	円形	浅い丸形	0.28	0.15			無し			
PT315	不明	浅い丸形	0.34 (切り)	0.06	5~10mmの繊維 10%、3~8mmのスコリア 5%を含む	N2/0	有り			
PT320	円形	浅い丸形	0.28	0.12			無し			
PT321	円形	浅い丸形	0.31	0.22			無し			
PT322	楕円形	浅い丸形	0.30	0.12			無し			
PT323	円形	浅い丸形	0.29	0.28			無し			
PT324	円形	浅い丸形	0.23	0.22			無し			
PT325	円形	浅い丸形	0.27	0.13			無し			
PT326	円形	浅い丸形	0.31	0.13			無し			
PT327	円形	浅い丸形	0.20	0.12			無し			
PT328	円形	裏研形	0.40	0.17			無し			
PT329	円形	浅い丸形	0.26	0.08			無し			
PT330	円形	浅い丸形	0.40	0.18			無し			
PT331	円形	浅い丸形	0.25	0.19			無し			
PT332	円形	浅い丸形	0.23	0.19			無し			
PT333	円形	浅い丸形	0.29	0.18			無し			
PT334	円形	浅い丸形	0.30	0.20			無し			
PT335	円形	浅い丸形	0.21	0.13			無し			
PT336	円形	浅い丸形	0.41	0.10			無し			
PT337	円形	浅い丸形	0.22	0.14			無し			
PT338	円形	浅い丸形	0.28	0.20			無し			
PT339	円形	浅い丸形	0.36	0.16			無し			
PT340	円形	浅い丸形	0.20	0.13			無し			
PT341	円形	浅い丸形	0.19	0.10			無し			
PT342	円形	浅い丸形	0.25	0.19			無し			
PT343	円形	浅い丸形	0.22	0.17			無し			
PT344	円形	浅い丸形	0.18	0.09			無し			
PT345	円形	深い丸形	0.37	0.33			無し			
PT346	円形	浅い丸形	0.59	0.31	10mmの繊維 10%、3~8mmのスコリア 10%を含む	2.5Z/1 10R2/1	無し			
PT347	不明	浅い丸形	0.21	0.17			無し			
PT348	円形	深い丸形	0.71	0.51	3~10mmの繊維 10%、3~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Z/1 10R2/1	無し			
PT349	円形	浅い丸形	0.24	0.23			無し			
PT350	円形	深い丸形	0.56	0.38	10mmの繊維 10%、3~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Z/1 10R2/1	無し			
PT351	楕円形	深い丸形	0.78 × 0.52	0.41	5~10mmの繊維 15%、3~5mmのスコリア 10%を含む	10R2/1	無し	○		
PT352	楕円形	深い丸形	0.57 × 0.47	0.52	5~10mmの繊維 10%、3~5mmのスコリア 10%を含む	2.5Z/1	無し			
PT353	楕円形	深い丸形	0.92	0.39	上位に 厚れ やすい 黄色い 繊維 を 多量 に 含み 5mmの繊維 10%、3~5mmのスコリア 10%以下含む	2.5Z/1	無し			
PT354	楕円形	深い丸形	0.76 × 0.54	0.61	10mmの繊維 10%、3~5mmのスコリア 7%を含む	2.5Z/1 10R2/1	無し			
PT355	円形	裏研形	0.77	0.48	5~10mmの繊維 15%、3~8mmのスコリア 10%を含む	2.5Z/1 10R2/1	無し			
PT356	不整形	深い丸形	0.34	0.50			無し			
PT357	楕円形	浅い丸形	0.46	0.23			無し			

第7表 4区ビット計測表(5)

道標名	平面形	断面形	径 (mm)	深さ (mm)	層 位	色	結晶様子	産物/古代	産物/中世	産物/近世
PT358	円形	浅い丸形	0.71	0.23	10～15mmの繊維7%、3～5mmのスコリア7%を含む 下位に黄色い細かい粘を含む	2.5Y2/1	無し			
PT359	円形	浅い丸形	0.63	0.20	10～15mmの繊維5%、3～5mmのスコリア10%を含む	N1.5/0	無し	○		
PT360	楕円形	浅い丸形	0.43	0.29	10～15mmの繊維10%、3～5mmのスコリア15%を含む	7.5YR2/2	無し			
PT361	円形	浅い丸形	1.15	0.23	5～10mmの繊維5%、2～5mmのスコリア5%を含む	7.5R1/3	無し	○		
PT362	不整形	浅い丸形	0.73	0.26	5～10mmの繊維15%、3～5mmのスコリア10%を含む	5YR2/1 7.5R1/3	無し			
PT363	円形	扁形	0.58	0.31	10～15mmの繊維10%、3～5mmのスコリア10%を含む 下位は細かく崩れやすい繊維層	10YR2/1	無し			
PT364	円形	浅い丸形	0.44	0.30	5mmの繊維10%、3～5mmのスコリア10%を含む	10YR2/1	無し			
PT365	不整形	浅い丸形	0.61	0.38	10mmの繊維10%、3～5mmのスコリア10%を含む	10YR2/1	無し			
PT366	円形	浅い丸形	0.56	0.37	3～10mmの繊維15%、3～5mmのスコリア10%を含む	2.5Y2/1 10YR2/1	無し			
PT367	楕円形	浅い丸形	0.48	0.29	5～10mmの繊維7%、3～5mmのスコリア10%を含む	2.5Y2/1 N2/0	無し			
PT368	不整形	浅い丸形	0.87	0.28	5～10mmの繊維15%、3～5mmのスコリア10%を含む	2.5Y2/1	無し	○		
PT369	円形	浅い丸形	0.20	0.40	—	—	無し			
PT370	円形	浅い丸形	0.23	0.39	—	—	無し			
PT371	楕円形	浅い丸形	0.74 × 0.56	0.63	5～10mmの繊維7%、3～5mmのスコリア10%を含む	2.5Y2/1 10YR2/1	無し	○		
PT372	円形	浅い丸形	0.61	0.34	5mmの繊維10%、3～5mmのスコリア10%を含む	10YR1/3 2.5Y2/1	無し			
PT373	円形	浅い丸形	0.98	0.11	10mmの繊維10%、3～5mmのスコリア15%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT374	円形	浅い丸形	0.7 × 0.6	0.57	5～10mmの繊維10%、5mmのスコリア15%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT375	不整形	浅い丸形	0.89	0.37	10mmの繊維10%、3～5mmのスコリア15%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT376	方形	浅い丸形	0.79	0.08	5～15mmの繊維10%、3～5mmのスコリア10%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT390	円形	浅い丸形	0.46 × 0.3	0.37	—	—	無し			
PT391	円形	浅い丸形	0.39	0.24	—	—	無し			
PT392	楕円形	浅い丸形	0.48	0.13	5～8mmの繊維10%、3～5mmのスコリア10%を含む	N2/0	無し			
PT393	楕円形	扁形	0.49	0.14	5～8mmの繊維10%、2～5mmのスコリア7%を含む	10YR1/3	無し			
PT395	不整形	扁形	1.13	0.20	5～8mmの繊維10%、2～5mmのスコリア7%を含む	N1.5/0 2.5Y2/1	無し	○		
PT396	楕円形	浅い丸形	0.79	0.41	5～10mmの繊維15%、2～5mmのスコリア10%を含む	2.5Y2/1 10YR1/3	無し			
PT397	円形	浅い丸形	0.72	0.40	—	—	無し			
PT398	不整形	浅い丸形	1.33	0.15	—	—	無し			
PT399	楕円形	浅い丸形	0.79	0.08	5～10mmの繊維10%、2～5mmのスコリア7%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT400	楕円形	浅い丸形	0.62	0.28	—	—	無し			
PT401	円形	浅い丸形 (切り合い)	0.23	0.23	—	—	無し			
PT402	不整形	浅い丸形	0.79	0.18	8～10mmの繊維7%、2～5mmのスコリア10%を含む	10YR1/3	やや有り			
PT403	楕円形	浅い丸形	0.66	0.51	—	—	無し			
PT404	円形	扁形	1.03	0.28	5～10mmの繊維10%、2～5mmのスコリア5%を含む	10YR1/3 7.5YR2/1	有り	○		
PT405	円形	浅い丸形	0.80	0.39	5～8mmの繊維7%、2～5mmのスコリア7%を含む	N1.5/0 10YR1/3	やや有り	○		
PT406	円形	浅い丸形	0.22	0.37	—	—	無し			
PT407	円形	浅い丸形	0.64	0.61	—	—	無し			
PT408	円形	浅い丸形	0.58	0.25	5～10mmの繊維10%、3～5mmのスコリア7%を含む	2.5YR2/1 2.5Y2/1	無し	○		
PT409	円形	浅い丸形	0.54	0.23	5～10mmの繊維7%、3～5mmのスコリア7%以下を含む	10YR1/3 2.5Y2/1	無し			
PT410	円形	浅い丸形	0.82	0.40	5～10mmの繊維7%、2～8mmのスコリア5%を含む	10YR1/3	無し			
PT411	楕円形	浅い丸形	0.57	0.29	3～5mmの繊維7%、2～5mmの7%を含む 上位はやや粘りがある粘土層じり土	5YR2/1 7.5R1/3	有り	○		
PT412	楕円形	扁形	0.59 × 0.39	0.18	5～10mmの繊維7%、3～5mmのスコリア7%を含む	7.5R1/3 N2/0	有り	○		
PT413	楕円形	浅い丸形	0.38	0.11	—	—	無し			
PT414	円形	浅い丸形	0.59	0.54	5mmの繊維5%、2～5mmのスコリア5%を含む	N2/0	無し			
PT415	円形	浅い丸形	0.27	0.11	5mmの繊維3%、2～3mmのスコリア5%を含む	N2/0	やや有り			
PT416	楕円形	浅い丸形	0.41	0.12	20mmの円盤、5～10mmの繊維5%、2～3mmのスコリア7%を含む	N2/0	無し			
PT417	円形	扁形	0.50	0.17	砂質土で2～3mmのスコリア2%を含む	5YR2/1	無し			
PT418	円形	扁形	0.91	0.21	砂質土で2～3mmの繊維5%、1～2mmのスコリア3%を含む	5YR2/1	無し			
PT419	楕円形	扁形	0.5 × 0.31	0.22	5～10mmの繊維7%、3～5mmのスコリア7%を含む 粘り土と粘性的な粘土層じり土	5YR2/1	有り			
PT420	円形	重岩形	0.64	0.13	—	—	無し			
PT421	円形	浅い丸形	0.58	0.46	3～6mmの繊維10%、2～3mmのスコリア5%を含む砂質土	N2/0	無し			
PT422	楕円形	浅い丸形	0.52	0.37	5～7mmの繊維5%、3mmのスコリア1%を含む砂質土	N2/0	無し			
PT423	円形	浅い丸形	0.60	0.45	10mm以下の繊維30%、5mm以下のスコリア20%を含む砂質土	N1.5/0 10YR1/3	無し			
PT424	楕円形	浅い丸形	0.61	0.28	5mm以下の繊維10%、5mm以下のスコリア5%を含む砂質土	10YR2/1	無し			
PT425	楕円形	浅い丸形	0.47	0.56	10mm以下の繊維20%、5mm以下のスコリア10%を含む砂質土	2.5Y2/1 10YR1/3	無し	○		
PT426	円形	扁形	0.79	0.22	下部に1～2mmの繊維がやや多い 5mm以下の繊維30%、5mm以下のスコリア5%を含む砂質土	N2/0	無し	○		
PT427	楕円形	浅い丸形	0.56	0.28	10mm以下に繊維30%、5mm以下のスコリア3%を含む砂質土	5R1/3	やや有り	○		
PT428	楕円形	浅い丸形	0.77	0.15	5mm以下の繊維10%、5mm以下のスコリア5%を含む結晶りのない砂質土	7.5YR2/1	無し			
PT429	円形	浅い丸形	0.52	0.38	5mm以下の繊維10%、5mm以下のスコリア5%を含む砂質土	2.5Y2/1	上部有り	○		
PT430	楕円形	浅い丸形	0.74 × 0.46	0.38	5mm以下の繊維30%、5mm以下のスコリア5%を含む結晶りのない砂質土	5YR2/1	無し	○		

第8表 4区ビット計測表(6)

道標名	平面形	断面形	径 (m)	深さ (m)	層 土	色	層土様張り	遺物/古代	遺物/中世	遺物/近世
PF431	楕円形	深い丸形	0.40	0.45	5 mm以下の細砂 20%、5 mm以下のスコリア 3%を含む様まりのある砂質土	7.5R2/1	有り	○		
PF432	方形	深い丸形	0.72	0.36	5 mm以下の細砂 20%、5 mm以下のスコリア 5%を含み 20 mm 大の 1.5R2/1 ブロックが埋入している砂質土	10R2/1	無し	○		
PF433	楕円形	深い丸形	0.49	0.54	5 mm以下の細砂 20%、5 mm以下のスコリア 7%を含む砂質土	5RP1. 7/1	やや有り			

第Ⅶ章 7区の調査

第Ⅵ章 7区の調査

第1節 7区の調査経過

中原遺跡7区は、全体調査区の中で最東端に位置する。開発予定地が東端に向けて取束するのに合わせた東西に長軸を持つ3,770㎡の調査区である。

調査は平成21年8月19日から重機による表土掘削を開始し、これと並行して表土掘削の終了した箇所から遺物包含層の掘り下げを行った。排土場は調査区の東隣接地とし、人力による掘削土はベルトコンベアによって搬出した。

遺物包含層の掘り下げは西側から東側に向けて実施し、9月24日までに完了させた。引き続き調査区西側の遺構検出面の精査および遺構プランの確認を行い、調査区西側を先行して10月1日から検出した遺構の掘り下げに着手した。調査区東側は全体の表土掘削を10月28日に、遺物包含層の掘り下げを11月19日にそれぞれ終了させ、11月24日から遺構検出面の精査とこれに並行しながら検出遺構の掘り下げを行った。

2月24日までに調査の大部分が終了したことから、同日には空中写真撮影を行った。2月25日からは残る遺構調査と測量作業を実施し、これら作業も3月5日には大部分を完了させた。このことから、一部の地点で測量作業と並行して実施しつつも、調査が完了した地点を対象にして重機による埋め戻し作業を開始した。3月19日には全ての埋め戻し作業が終了、その後フェンス等の資材撤去作業を行い、7区の作業を完了させた。

第2節 7区の遺構と遺物

遺構は調査区全域で検出された。遺構には古墳時代後期から奈良平安時代にかけての竪穴住居址36軒と、これらと同時期と思われる掘立柱建物址4棟、多くが中世以降と考えられる溝状遺構38条が認められた。また組み合わせの判明しなかったピットは415基が検出された。

なお7区では調査段階においてSB37・SB38の名称が与えられている遺構が存在した。これらは整理作業における検討の結果、竪穴住居址ではないと判断されたが、遺構の検討段階時には全ての遺物への注記作業が完了していたため、混乱を防ぐためにも新規に遺構番号を振り直すことはせず、調査時に付けられた番号のままとした。またSB13は検出時には住居址と認識していたが、掘削を進めた結果、不明遺構SX1に変更した。ただし遺物についてはSB13のまま注記がなされている。

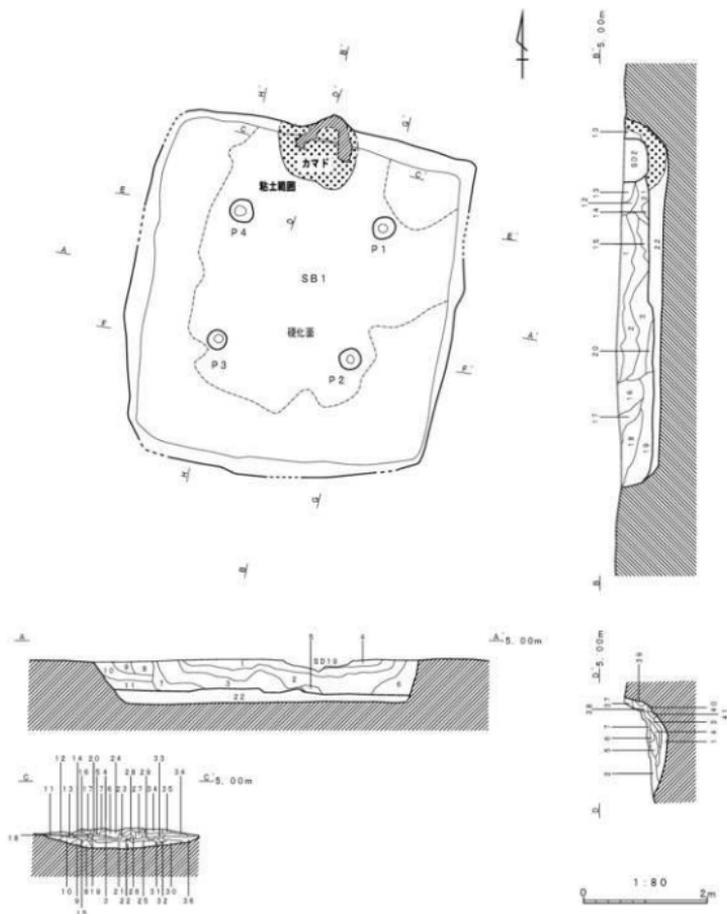
出土遺物は遺構出土以外でも、遺物包含層においてまとまった量が確認できたが、遺構出土で古墳時代後期から奈良平安時代に帰属するものを中心に掲載した。中世以降の遺物も出土しているが、特に7区は近世以後の遺物が多量に出土しており、大部分の溝状遺構や組み合わせが判断できなかった柱穴は、この年代に帰属する可能性がある。

(1) 竪穴住居址 7-SB

全域で検出しているが、調査区西端部に3軒、中央西寄りにかけて4軒、そして中央から東半にかけて29軒と、東側に密集して検出された。また重複や切り合っている住居址が8か所で見られる。主軸方位から北東-南西に軸を持つグループ(SB26・SB34・SB39)、北北東-南南西に軸を持つグループ(SB1・SB2・SB4・SB5・SB7・SB12・SB14・SB16・SB18・SB19・SB21・SB23・SB24・SB27・SB28・SB31・SB32・SB33)、北北西-南南東に軸を持つ(SB3・SB11・SB15・SB25・SB29・SB30)、北西-南東に軸を持つ(SB6・SB8・SB10・SB17・SB20・SB22)、例外的に西北西-東南東軸のSB9で、以上、5つのグループがあるが、大きく分類すれば、北東-南西軸、北-南軸、北西-南東軸の3グループである(第69図)。



第68図 7区遺構配置図



第70図 7区第1号住居址実測図(1)

7区第1号住居址(7-SB1 第70図～第72図)

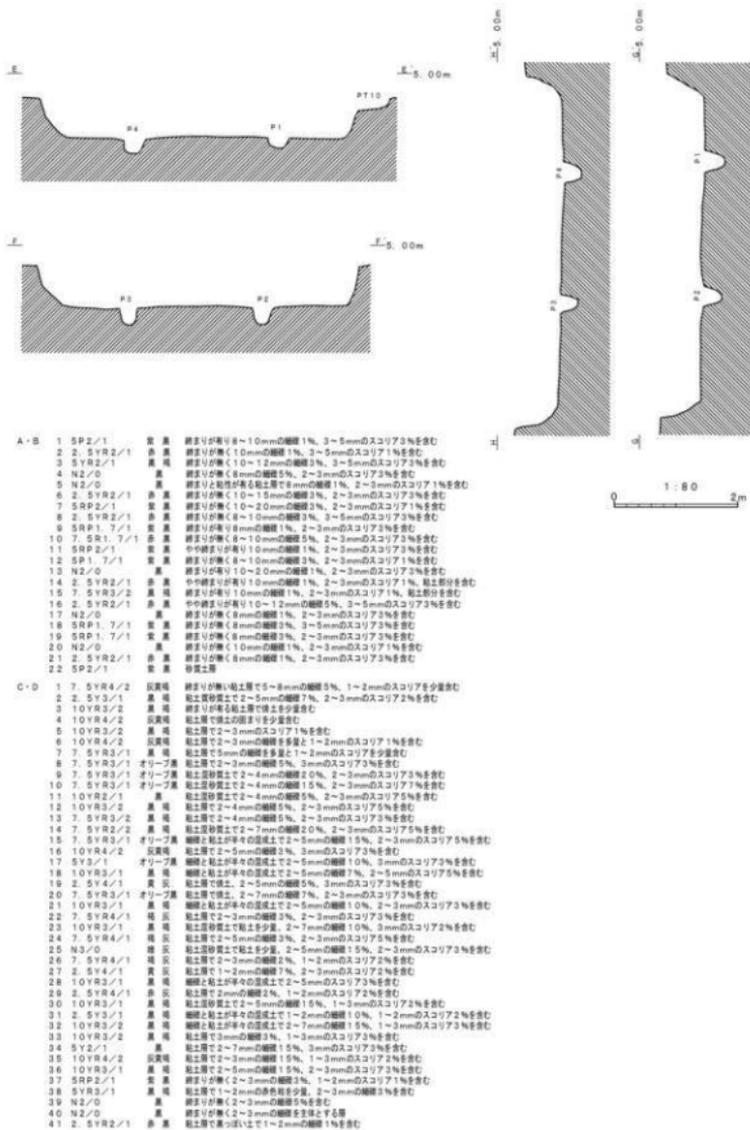
141-34Gr・141-35Grで検出された。SD2・SD19 およびピットに切られており、一部では上端が確認できなかったが、残存状況は良好で、ほぼ全容を捉えることができた。平面形は方形を呈し、立ち上がりは深さ0.53mが残存していた。

規模 東西5.15m×南北5.61m 重複関係 (古)SB1→SD2→SD19(新)

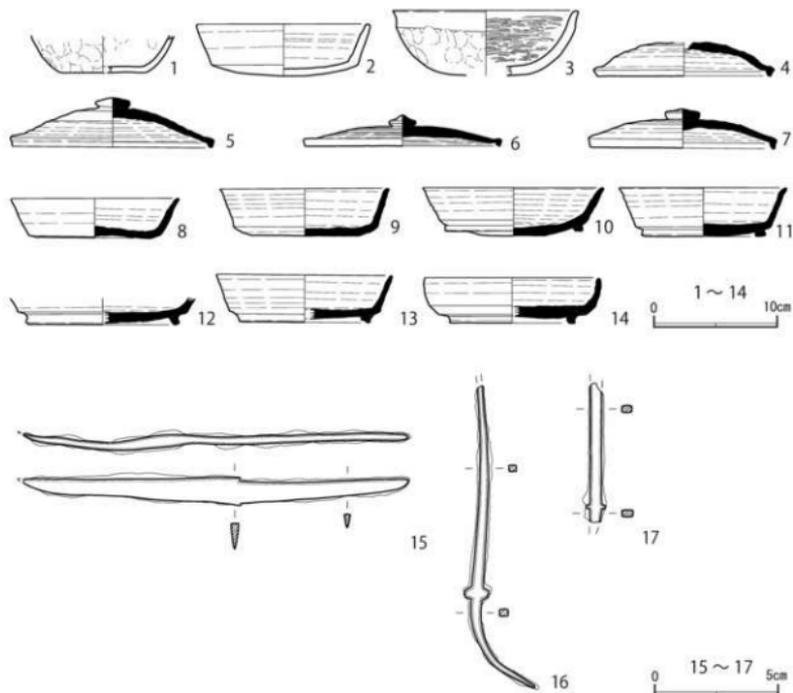
主軸方位 N-11°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4は径0.31～0.39m・深さ0.28～0.33mを測る。

貼床 紫黒色の砂質土を使って床面を構築している。また中央から北側にかけて硬化面が検出された。



第71図 7区第1号住居実測図(2)



第72図 7区第1号住居址出土遺物実測図

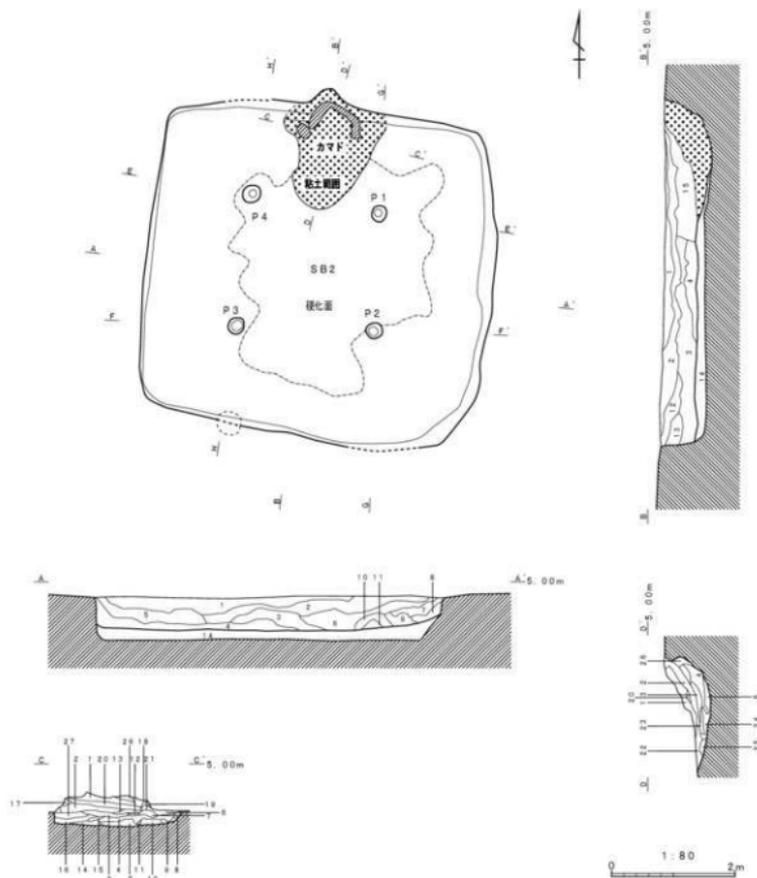
カマド 北辺の中央に位置し、両袖の下部が検出され、その周囲には崩壊に伴う粘土の広がり認められた。袖部の周囲は角礫が検出されたことから、礫を芯材として使っていたと考えられる。

遺物 土器14点、鉄製品3点の計17点を図示した。1～3は土師器である。1は甕の底部である。外面が大きく摩耗し、指頭圧痕以外の調整は不明瞭である。内面には煤が多量に付着し、また胎土には白雲母が多量に含まれていることから、遠江系水平口縁甕の底部片と推測される。2は底部を回転ケズリによって仕上げる坏である。3は碗で、体部はナデによる整形で指頭圧痕が明瞭に残る一方、内面は丁寧なミガキ調整である。

4～14は須恵器である。4～7は摘み蓋で、天井部の断面形は4が弧状、5が陣笠形、6・7が扁平を呈す。8～14は坏身で8・9は無台、10以下は有台である。10～12は腰部が弱く屈曲し、底部が丸く仕上げられているため、底部が高台より張り出す。一方13・14は高台より下に突出しない。出土した須恵器はおおむね遠江V期前半（新段階）頃に位置づけられる。6・8はカマドから、5・11・12は床面直上から出土した。

15は刀子、16・17は鉄鎌である。15は刃部の先端部のみ欠損しているが、ほぼ完形品である。茎間は両角間で、茎尻に向けて先細る。16は鎌身が欠損する。茎間は棘間で、茎部は先端に向けて大きく屈曲している。17は鉄鎌としたが、錐や別の工具の可能性もある。茎間は棘間である。

時期 須恵器の年代から8世紀前半（～中葉頃）に位置づけられる。



第73図 7区第2号住居址実測図(1)

7区第2号住居址(7-SB2 第73図～第76図)

141-34Gr・142-34Grで検出された。平面形は方形だが、東壁がやや弧状に張り出す。立ち上がりは深さ0.52mが残存していた。

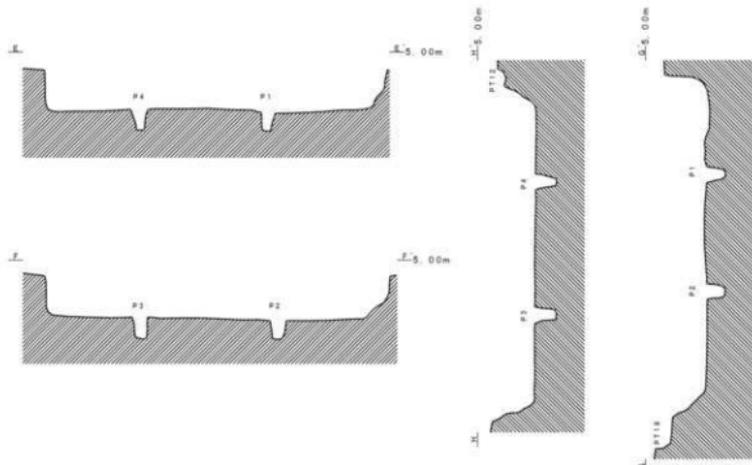
規模 東西5.34m×南北5.06m 重複関係 なし

主軸方位 N-8°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4は径0.25～0.32m・深さ0.30～0.35mを測る。いずれも支柱穴と考えられる。

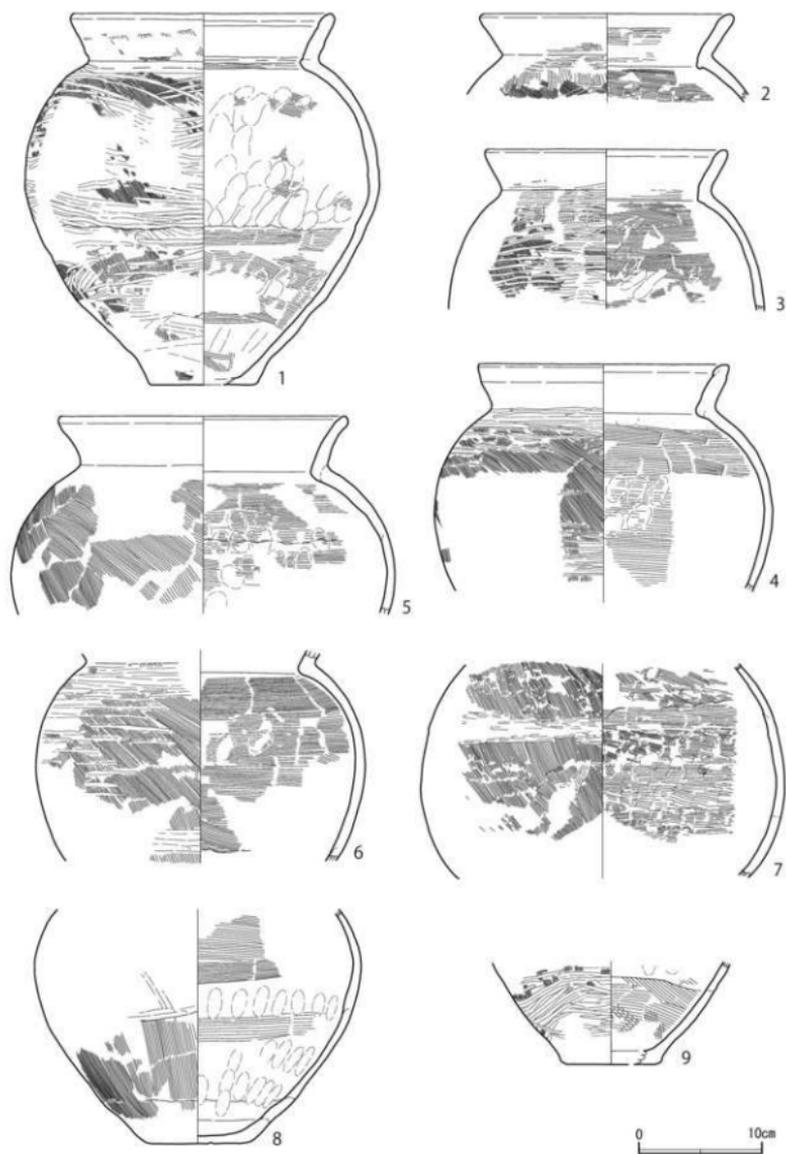
貼床 紫黒色の砂質土を使って床面を構築している。住居址中心部に硬化面が認められる。

カマド 北辺のほぼ中央に位置する。やや崩壊しているが、袖部と燃焼部が確認され、袖部には芯材

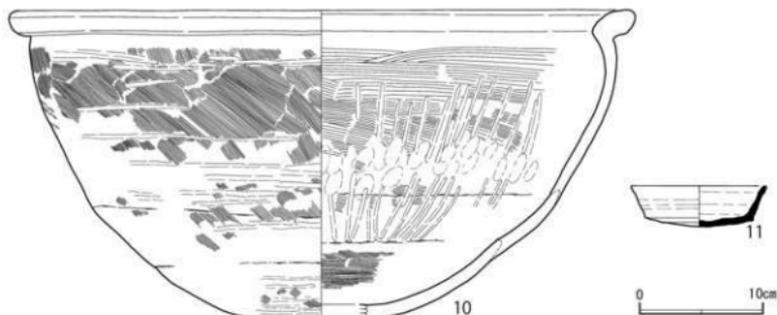


- A-B
- | | | | |
|----|----------|---|---------------------------------------|
| 1 | 5P2/1 | 竪 | 跡残りが横(8~15mmの幅)3%、3~5mmのスコリア3%を含む |
| 2 | N2/0 | 黒 | 跡残りが横(10~20mmの幅)3%、3~5mmのスコリア3%を含む |
| 3 | 5RP2/1 | 竪 | 跡残りが横(8~10mmの幅)7%、3~5mmのスコリア7%を含む |
| 4 | 5RP2/1 | 竪 | 跡残りが横(10~15mmの幅)1%、2~3mmのスコリア3%を含む |
| 5 | N2/0 | 黒 | 跡残りが横(10~12mmの幅)3%、3~5mmのスコリア5%を含む |
| 6 | 5P2/1 | 竪 | 跡残りが横(10~20mmの幅)1%、3~5mmのスコリア3%を含む |
| 7 | 5RP2/1 | 竪 | 跡残り有り(10~15mmの幅)1%、2~3mmのスコリア3%を含む |
| 8 | N2/0 | 黒 | 跡残り有り(粘土を多量と10mmの幅)3%、1~2mmのスコリア3%を含む |
| 9 | N2/0 | 黒 | 跡残り有り(粘土を多量と10mmの幅)3%、2~3mmのスコリア1%を含む |
| 10 | 5RP2/1 | 竪 | 跡残り有り(10~20mmの幅)1%、2~3mmのスコリア3%を含む |
| 11 | 5RP1.7/1 | 竪 | 跡残りが横(8mmの幅)3%、2~3mmのスコリア3%を含む |
| 12 | N2/0 | 黒 | 跡残りが横(10mmの幅)3%、2~3mmのスコリア3%を含む |
| 13 | 5P2/1 | 竪 | 跡残りが横(10~15mmの幅)5%、2~3mmのスコリア3%を含む |
| 14 | 5RP2/1 | 竪 | 砂状土層 |
| 15 | | | 注記不明 |
- C-D
- | | | | |
|----|----------|-----|---|
| 1 | 7.5YR4/2 | 灰黄褐 | 跡残り無し(粘土層で5~8mmの幅)5%、1~2mmのスコリアを少量含む |
| 2 | 10YR4/2 | 灰黄褐 | 跡残り有り(粘土層で5mmの幅)を少量と2~3mmのスコリアを少量含む |
| 3 | 10YR3/2 | 黒 | 跡残り有り(粘土層で粘土を少量含む) |
| 4 | 10YR4/2 | 灰黄褐 | 粘土層で粘土を少量含む |
| 5 | 10YR3/2 | 黒 | 粘土層で2~3mmのスコリア1%を含む |
| 6 | 10YR4/2 | 灰黄褐 | 粘土層で2~3mmの幅を多量と1~2mmのスコリア1%を含む |
| 7 | 5YR3/1 | 黒 | 粘土層で5mmの幅を多量と1~2mmのスコリアを少量含む |
| 8 | 5YR3/1 | 黒 | 跡残り無し(2~3mmの幅が主体の層で1~2mmのスコリア1%を含む) |
| 9 | 5YR4/1 | 褐 | 跡残り無し(塊状)粘土で8mmの幅)3%、1~2mmのスコリア1%を含む |
| 10 | 5YR4/2 | 灰 | 跡残り無し(3~5mmの幅を多量と1~2mmのスコリア1%を含む) |
| 11 | 5YR4/2 | 灰 | 跡残り無し(2~3mmの幅を少量含む) |
| 12 | 5YR4/2 | 灰 | 粘性が有り(粘土層) |
| 13 | 10YR3/2 | 黒 | 1~2mmの幅を少量と1~2mmのスコリア1%を含む |
| 14 | 5YR4/2 | 灰 | 2~3mmの幅が主体で粘土層 |
| 15 | 5YR3/2 | 黒 | 2~3mmの幅を少量と2~3mmのスコリア1%を含む |
| 16 | 10YR3/2 | 黒 | 粘土層で幅を多量と粘土を少量含む |
| 17 | 10YR2/1 | 黒 | 跡残り有り(粘土層で1~2mmの幅と1~2mmのスコリアを少量含む) |
| 18 | 10YR4/2 | 灰黄褐 | 跡残り有り(粘土層で8mmの幅)1%を含む |
| 19 | 7.5YR4/2 | 灰黄褐 | 2~3mmの幅を多量と粘土を少量含む(粘土層で1~2mmのスコリア1%を含む) |
| 20 | 10YR4/2 | 灰黄褐 | 跡残り有り(粘性が有り(粘土層で2~3mmの幅を少量含む) |
| 21 | 10YR4/2 | 灰黄褐 | 跡残り有り(粘土層で8mmの幅)1%を含む |
| 22 | 7.5YR4/2 | 灰 | 粘土層で8mmの幅)3%、2~3mmのスコリア1%を含む |
| 23 | 10YR2/1 | 黒 | 跡残り無し(粘土層で粘土と5mmの幅)を含む |
| 24 | 5YR4/2 | 灰 | 粘土層で5~8mmの幅を多量と1~2mmのスコリア1%を含む |
| 25 | 10YR2/1 | 黒 | 跡残り無し(粘土層で粘土と5mmの幅)を含む |
| 26 | 2.5Y4/1 | 黄 | 2~3mmの幅を多量と粘土を少量含む(粘土層で1~2mmのスコリア1%を含む) |
| 27 | | | 計測次第 |

第74図 7区第2号住居址実測図(2)



第75図 7区第2号住居址出土遺物実測図(1)



第76図 7区第2号住居址出土遺物実測図(2)

と考えられる礫が検出された。

遺物 11点を図示した。2を除き、全てカマド周辺からの出土である。

1～9は土師器球胴甕である。1は胴部上半に最大径があり、外面胴部にはミガキ調整が施される。その他は完形品ではないものの、5と9を除き1と同様の調整がなされている。例外とした5はミガキ調整が認められない個体、9は底部に光沢があるが、丁寧なヘラナデによるものである。10は塙で、甕と同じくミガキ調整が施される。11は須恵器無台環で、底部が張り出す。遠江V期に位置づけられる。
時期 胴部にミガキ調整を施す駿東型球胴甕や11がカマド周辺から出土していることから、8世紀前半に位置づけられる。

7区第3号住居址(7-SB3 第77図・第78図)

141-35Gr・142-34Gr・142-35Grで検出された。平面形は南北方向に長軸を持つ長方形を呈する。長方形という形状に加え、明確な主柱穴やカマドも持たないことから、他のSBとは性格が異なる可能性がある。立ち上がりは深さ0.21mが残存していた。

規模 東西4.67m×南北7.19m 重複関係なし

主軸方位 N-13°-W 壁溝 検出されない。

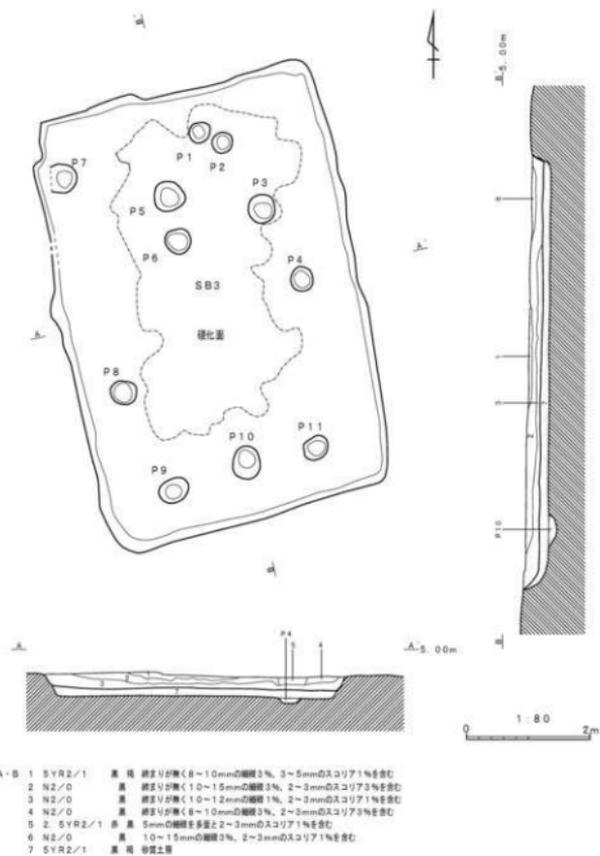
柱穴 11基検出。P1は径0.36m・深さ0.21m、P2は径0.35m・深さ0.16m、P3は径0.47m・深さ0.18m、P4は径0.40m・深さ0.07m、P5は径0.50m・深さ0.20m、P6は0.42m・深さ0.08m、P7は径0.46m・深さ0.15m、P8は径0.42m・深さ0.06m、P9は径0.5m・深さ0.11m、P10は0.54m・深さ0.11m、P11は径0.44m、深さ0.09mを測る。主柱穴は不明である。

貼床 黒褐色の砂質土を使って床面を構築している。床面中央部には硬化面が認められる。

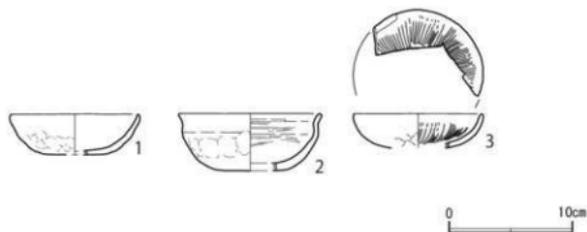
カマド 検出されない。

遺物 3点を図示した。いずれも土師器の環である。1は胎土が粗く、体部には指頭圧痕が明瞭に残る。2の胎土は密であるが、1と同じく外面には指頭圧痕が観察されるのみである。内面にはミガキ調整が施される。3は内面に放射状暗文ミガキを施すが、底部は丸底である。小片のため図示できなかった須恵器には小型化した环身があり、遠江IV期後葉頃に位置づけられる。

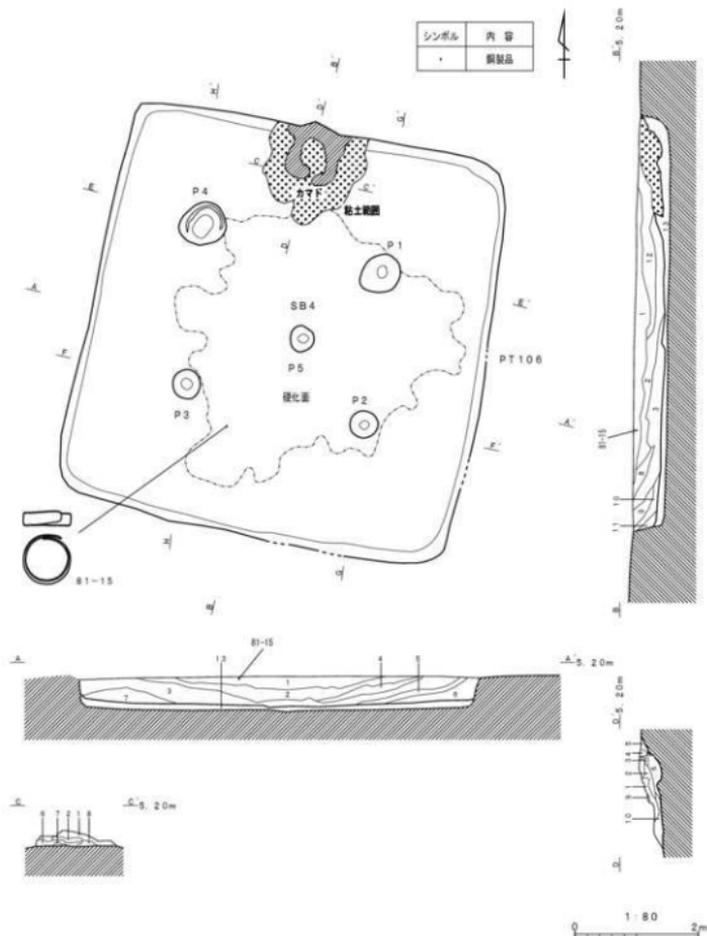
時期 須恵器環身から7世紀後半、平底化した環からは8世紀前半に位置づけられる。このことから、幅をもって7世紀後半～8世紀前半頃と推測される。



第77図 7区第3号住居址実測図



第78図 7区第3号住居址出土遺物実測図



第79図 7区第4号住居址実測図(1)

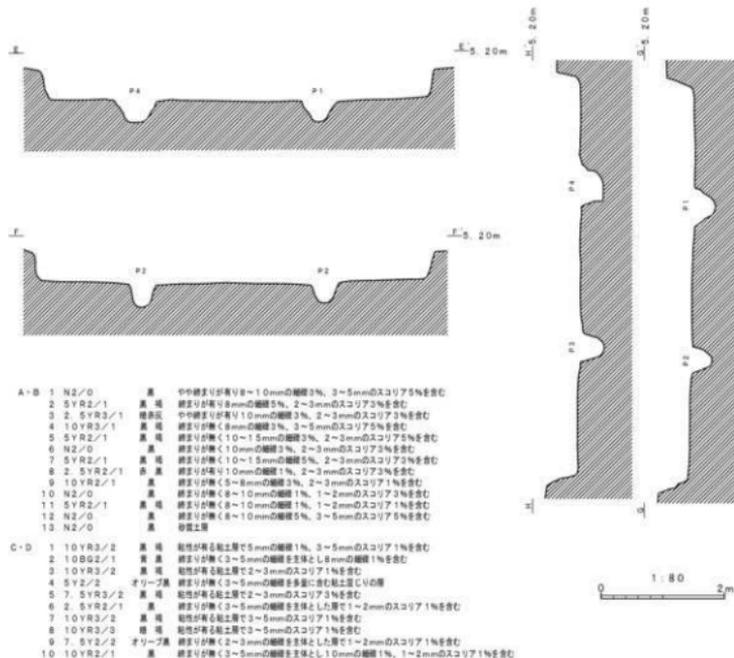
7区第4号住居址(7SB4 第79図～第81図)

145-33Gr・145-34Gr・146-33Grで検出された。平面形は方形を呈し、立ち上がりは深さ0.34mが残存していた。良好な状態でカマドが残存しており、燃焼部や袖部が検出された。

規模 東西6.51m×南北6.61m 重複関係なし

主軸方位 N-13°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 5基検出。P1・P4は径0.71～0.76m・深さ0.34～0.36m、P2・P3は径0.46～0.47m・深さ0.30～0.37m、P5は径0.40m・深さ0.17mを測る。主柱穴はP1～P4と考えられる。



第80図 7区第4号住居址実測図(2)

貼床 黒色の砂質土層を使って床面を構築している。床面中央部の一部には硬化面が認められる。

カマド 北辺の中央付近に位置する。燃焼部と両袖部を検出した。芯材は出土していない。

遺物 土器14点、銅製品1点の計15点を図示した。土器は1~12が土師器、13・14が須恵器である。

1~4は球胴甕である。1・2は頸部と胴部にミガキ調整を施すが、3・4はハケメ調整のみである。4は底部外面が剥離している。5は小型の長胴甕である。6~11は坏である。6~10は胎土が密で、外面体部下半をケズリ、内面には丁寧なミガキ調整を施す。11は粗製胎土で、深さがあり器形は埴に似る。12は埴で、11と同じ粗製胎土である。11・12ともに底部木葉痕が残る。3・4・6・9~11はカマド周辺から出土した。

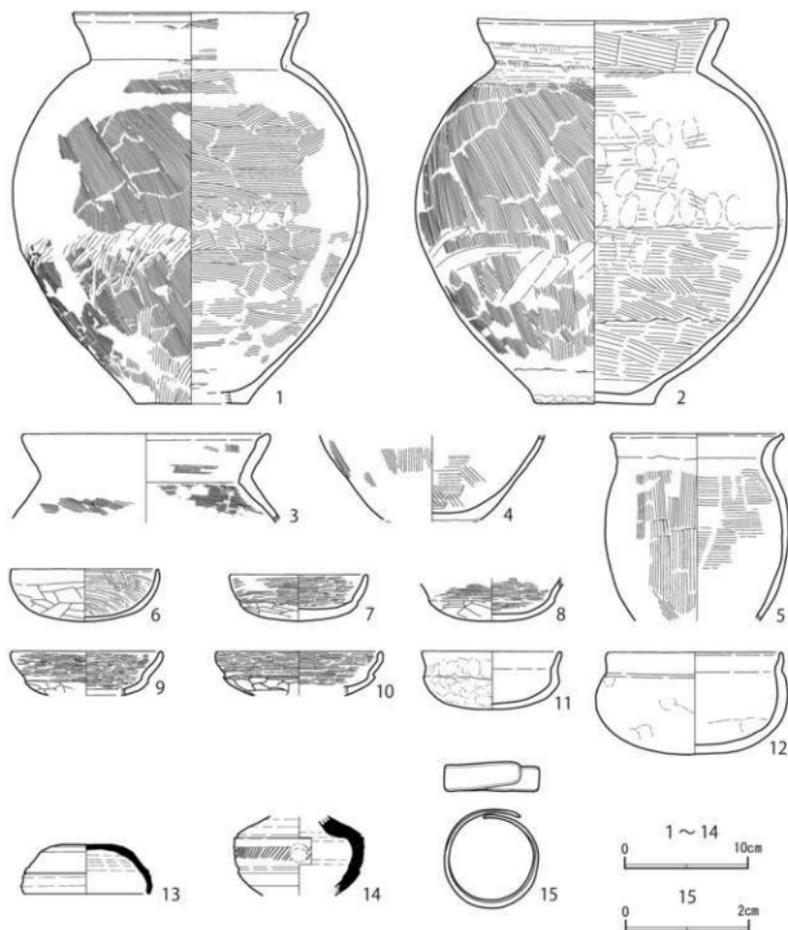
13は坏蓋で、口縁部付近に一条の沈線が巡る。14はハソウで下部に回転ヘラケズリの痕跡が明瞭である。最大径は肩部にあり、肩部には細い突帯が巡り、その下に文様帯が施される。

15は銅環で、0.1cm程度の薄い銅片が環状にまかれる。長軸2.0cm、短軸1.9cm、厚み0.57cm、重さ2.5gを測る。覆土上層からの出土である。

時期 須恵器やミガキ調整を施す裏から7世紀後半に位置づけられる。

7区第5号住居址(7-SB5 第82図~第84図)

146-33Grで検出された。一部ピットに切られているが、ほぼ全容を捉えることができた。平面形は方形を呈し、立ち上がりは深さ0.38mが残存していた。またカマドが良好な状態で残存し、燃焼部と



第81図 7区第4号住居址出土遺物実測図

両袖部を検出した。

規模 東西 5.04m × 南北 4.85m 重複関係 なし

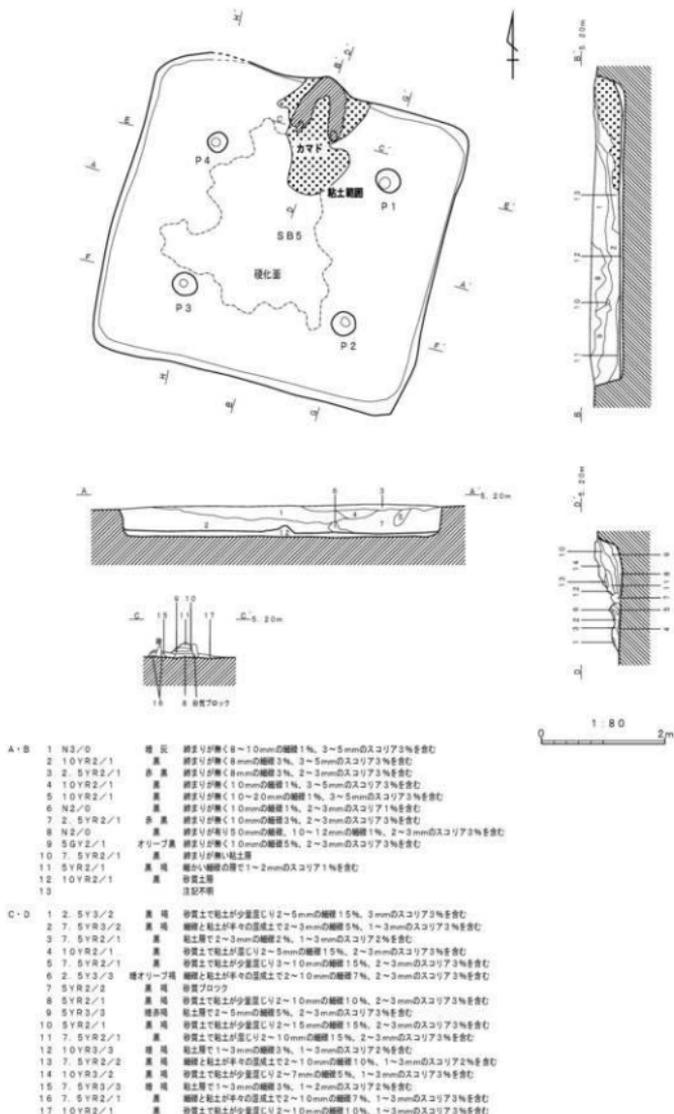
主軸方位 N-16°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4の径は0.32～0.41m・深さ0.22～0.33mを測る。いずれも主柱穴と考えられる。

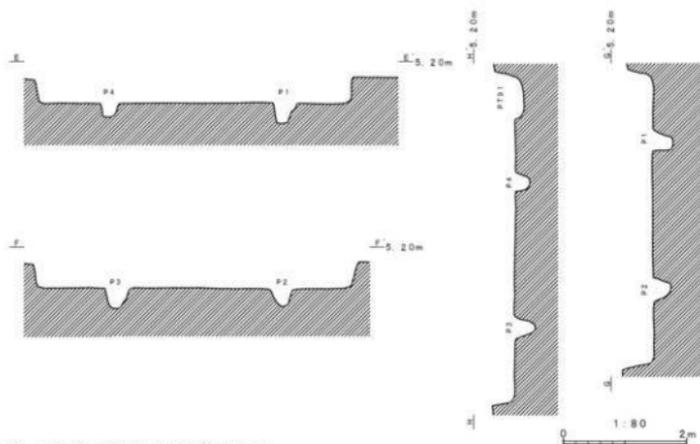
貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また床面の中央部に一部硬化面が認められる。

カマド 北辺の中央に位置する。芯材として西袖では礫を、東袖では砂質ブロックを検出した。

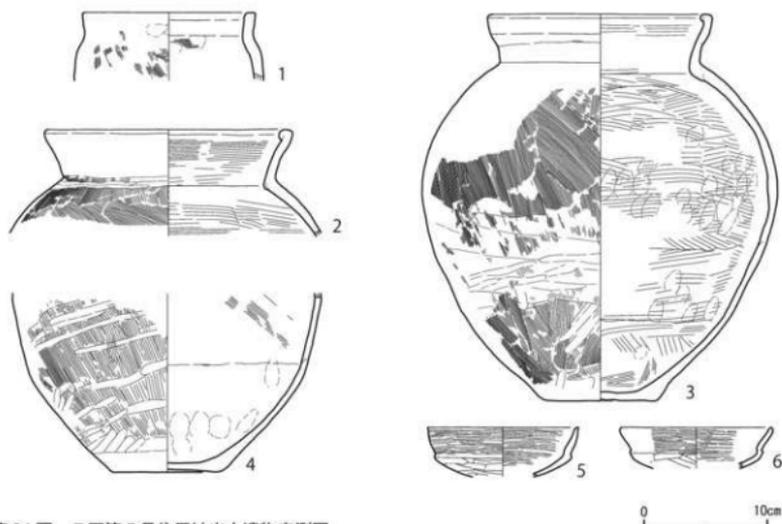
遺物 遺物はカマド周辺での出土は少なかったが、住居址南東側に集中して出土した。ここでは6



第 82 図 7区第5号住居址実測図(1)



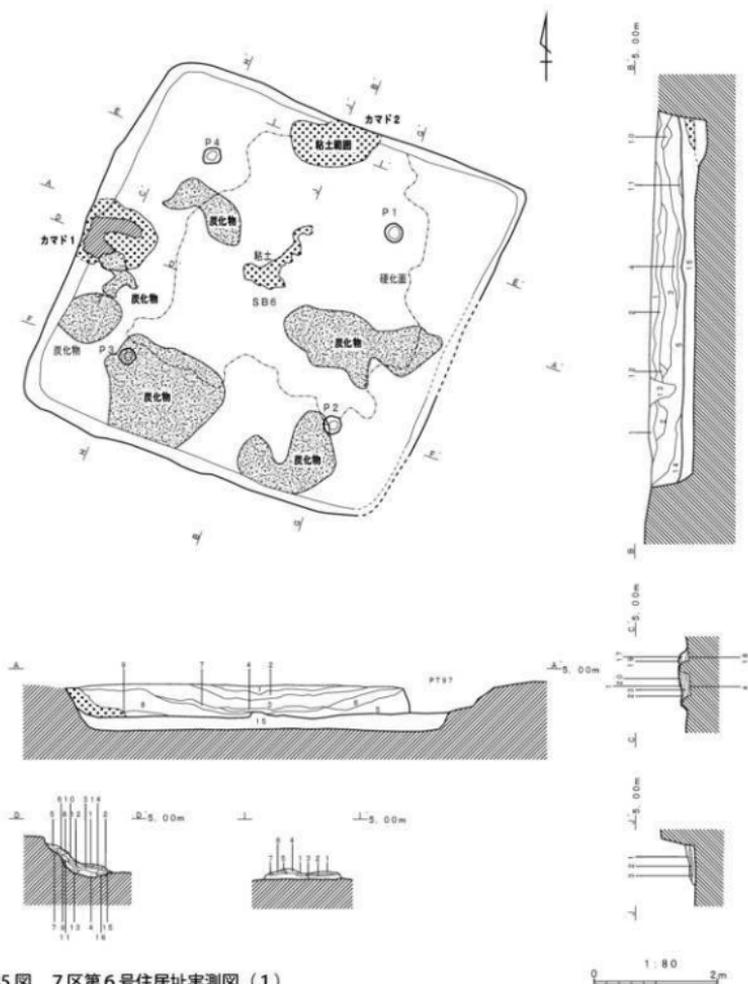
第83図 7区第5号住居址実測図(2)



第84図 7区第5号住居址出土遺物実測図

点を図示した。いずれも土師器である。1は図示できた中で唯一カマドから出土した小型甕で、口縁部の器壁は厚く、まっすぐに立ち上がり、口唇部は面取りされている。2～4は球胴甕である。2と4にはミガキ調整が認められる。3はSB10出土の破片と接合した。5・6は須恵器模倣坏で、ともに稜は強く、丁寧なミガキ調整を施す。6は内外面ともに黒色処理である。

時期 ミガキ調整を施す球胴甕や須恵器模倣坏などから7世紀後半に位置づけられる。



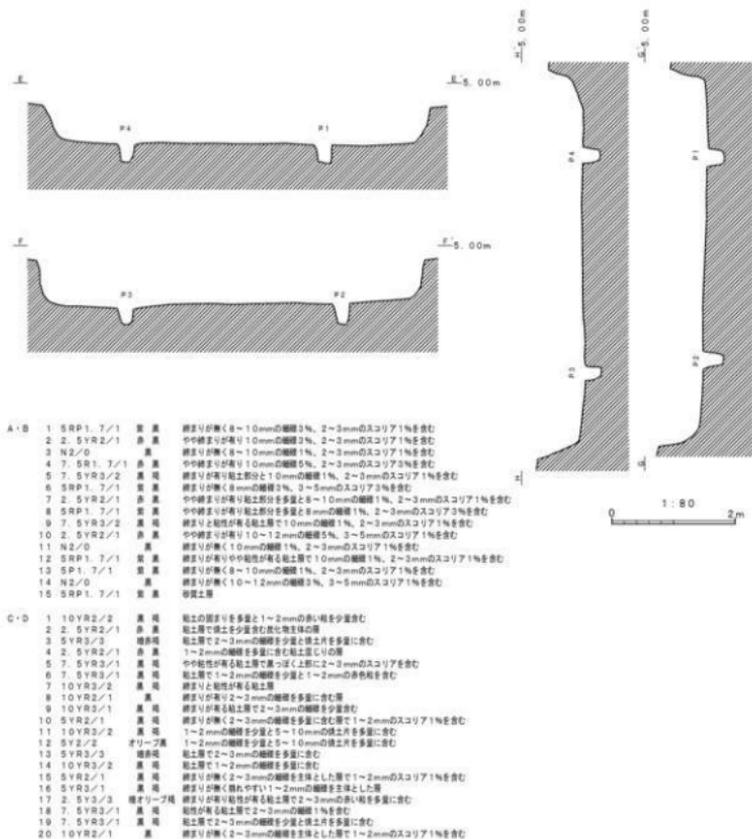
第85図 7区第6号住居址実測図(1)

7区第6号住居址(7-SB6 第85図~第88図)

146-34Gr・147-34Grで検出された。東辺上端の一部をピットに切られているが、ほぼ全容を捉えることができた。平面形は正方形で、立ち上がりは深さ0.47mが残存していた。カマドは北辺(カマド2)と西辺(カマド1)の2か所で検出されており、残存状況や他のカマドの検出状況から、北から西への造り替えが想定される。また床面からは炭化物が多量に出土したため、焼失住居の可能性がある。

規模 東西6.23m×南北6.23m 重複関係 なし

主軸方位 N-68°-W(カマド1段階) 壁溝 検出されない。

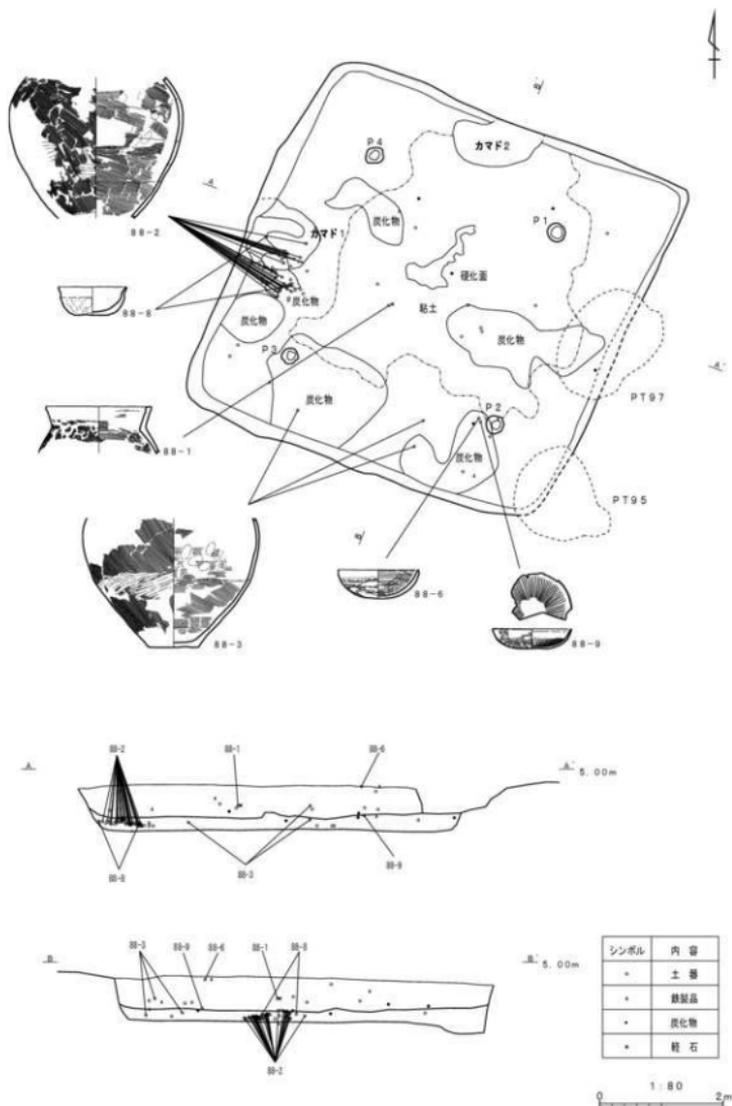


第 86 図 7 区第 6 号住居址実測図 (2)

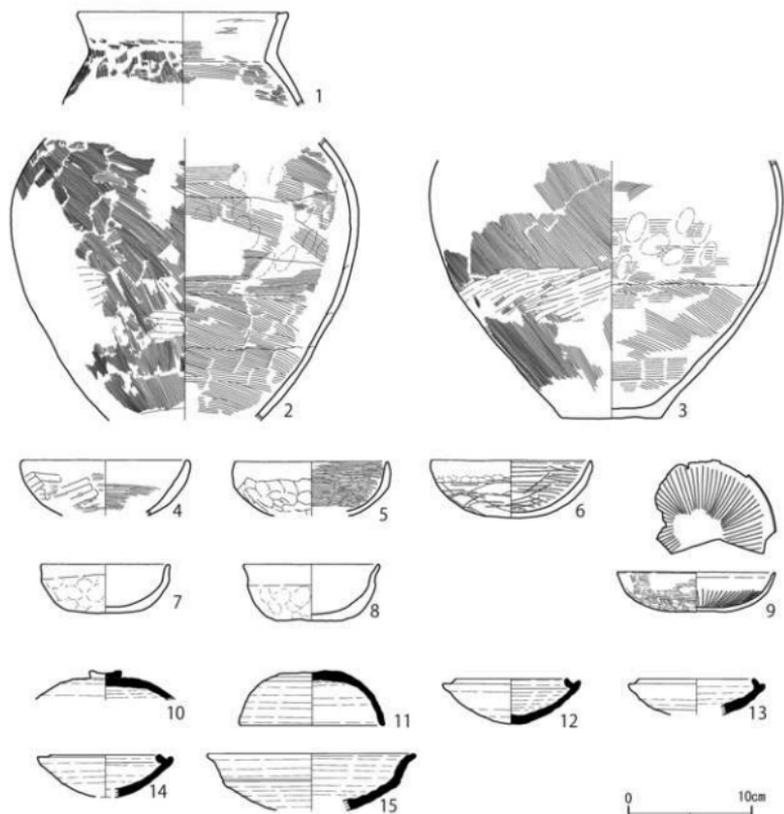
柱 穴 4 基検出。P1～P4 の径は 0.27～0.32m・深さ 0.25～0.34m である。いずれも主柱穴と考えられる。

貼 床 紫黒色の砂質土を使って床面を構築している。床面直上にはやや締まりのある黒褐色土が堆積しているほか、住居址のほぼ中央には粘土の広がり認められる。また、中央から南側にかけて、炭化物の広がり6か所検出された。

カマド 2 基検出された。西辺の中央で検出されたものをカマド 1、北辺の中央で検出されたものをカマド 2 とした。カマド 1 はやや崩壊しているが、袖部と燃燒部が確認された。土器片や礫が出土し



第 87 図 7区第6号住居址遺物出土状況図



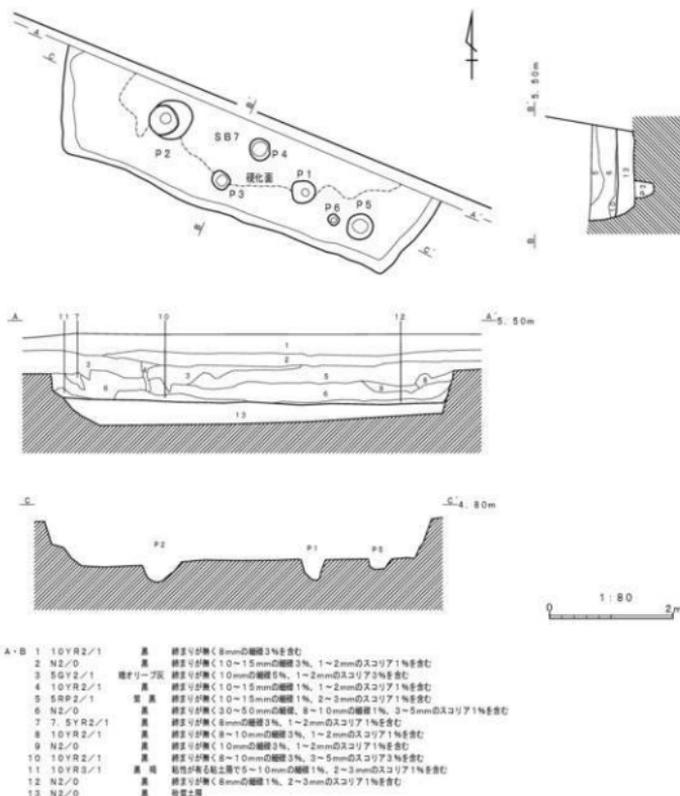
第88図 7区第6号住居址出土物実測図

ており、礫は芯材であった可能性がある。またカマド周辺には崩壊に伴う粘土の広がりが認められた。

カマド2はほぼ崩壊しており、形状や芯材などは確認できなかったが、粘土と掘方と思われる落ち込みを検出した。

遺物 遺物は住居址内のほぼ全域で出土しており、カマドおよびその周辺で多く認められる。計15点を図示した。1～9は土師器、10～15は須恵器である。

1～3はやや胴長の球胴甕で、1はハケメ調整のみでミガキ調整は認められない。2・3も同様であるが、胴部の接合部に丁寧なナデ調整を施すため、一部にミガキのような光沢が認められる。4～9は坏で、4・5は外面ケズリ調整および内面にミガキ調整を施す。6も同様の調整方法であるが、内外面ともに細かな単位のヨコミガキがまばらに施され、暗文のようになっている。覆土上層からの出土である。7・8は粗製胎土の坏で、径0.2～0.3cm大の黒色粒をまばらに含む。9は内面に放射状暗文ミガキが施されるが、甲斐型坏とは異なり、外面底部にはケズリ調整ではなく、連続する指頭圧痕が観察できる。なお、7はSB10とSB22の破片と接合した。



第89図 7区第7号住居址実測図

10は摘み蓋で、天井部全面に自然軸がかかる。11は環蓋で、後述する坯身よりも一回り大きい。12~14は坯身で、小型化が進行しているため、遠江IV期後葉頃と考えられる。15は高環の坯部である。時期 7世紀後半頃に位置づけられる。

7区第7号住居址 (7-SB7 第89図・第90図)

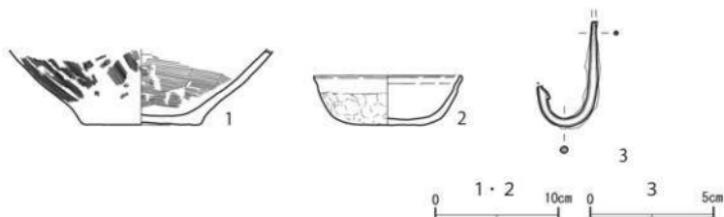
146-34Gr・147-34Grで検出された。北半は調査区外へと続くため、全容は明らかではない。平面形は東西の辺がやや弧状を呈すことから不整形な方形と推定される。立ち上がりは深さ0.42mが残存していた。

規模 東西6.42m×南北1.58m (調査区内) 重複関係 なし

主軸方位 N-23°-E (推定: 調査区内B-B'セクションの角度) 壁溝 検出されない。

柱穴 6基検出。P1は径0.39m・深さ0.34m、P2は径0.71m・深さ0.34m、P3は径0.29m・深さ0.30m、P4は径0.36m・深さ0.16m、P5は径0.42m・深さ0.17m、P6は径0.19m・深さ0.08mを測る。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また硬化面が住居址中央部に確認されている。



第90図 7区第7号住居址出土遺物実測図

カマド 検出されない。

遺物 2点の土師器と1点の鉄製品を图示した。1は球胴甕の底部片である。2は環で、胎土は密であるが、外面はナデ調整のみで、指頭圧痕が明瞭に残る。1・2の底部には木炭痕がある。图示できなかった遺物には遠江Ⅳ期に位置づけられる須恵器環身の小片が出土している。

3は鉄製の釣針である。残存長は4.3cmで、アグの先端部が欠損している。

時期 須恵器環身から7世紀代に位置づけられる。

7区第8・35・36号住居址(7-SB8・7-SB35・7-SB36 第91図～第94図)

SB8・SB35・SB36は143-34Gr・143-35Gr・144-34Gr・144-35Grで検出された。3軒の住居址が切り合い関係を持つが、検出段階では3軒の住居址との認識は困難で、大型のSB8を完掘したのちに、SB8の壁面とは異なる落ち込みが確認されたことから、別の2軒の住居址との重複関係を有していることを認識した。だがこの段階で覆土の掘削を終えていたため、SB35・SB36については土層堆積の確認ができなかった。

SB8は7区において最大規模の住居址であり、上端の一部が溝状遺構およびピットに切られているものの、全容は確認することができた。平面形は方形で、立ち上がりは深さ0.52mが残存していた。

SB35は144-34Grで検出された。SB8に全体を切られており、南東隅のみを検出した。立ち上がりは残存部で深さ0.40mである。柱穴・貼床・カマドはいずれも検出されていない。

SB36もSB35と同じく144-34Grで検出された。SB8・SB35の両方に切られている住居址で、南東隅のみを確認した。柱穴・貼床・カマドはいずれも検出されていない。

重複関係 (古) SD17→SB36→SD16・SB35→SB8→SD7・SD9・SD20 (新)

規模 SB8 東西8.35m×南北8.64m

SB35 東西1.80m×南北1.70m SB36 東西1.40m×南北1.40m(ともに残存部)

主軸方位 SB8 N-37°-W SB35・SB36 いずれも不明。壁溝 いずれも検出されない。

柱穴 SB8 7基検出。P1～P4は径0.31～0.60m・深さ0.45～0.52mである。P5は径0.24m・深さ0.08m、P6は径0.49m・深さ0.14m、P7は径0.55m・深さ0.18mである。主柱穴はP1～P4と考えられる。

貼床 SB8 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また北側にかけて硬化面が確認されるほか、床面で土坑SK1が検出された。SK1の規模は長径1.87m・短径0.78m・深さ0.34mを測り、平面形は楕円形を呈する。

カマド SB8 北西辺の中央に位置する。袖部と燃焼部を確認し、燃焼部から礫が出土した。また燃焼部のやや北側では砂質ブロックによる支脚が検出され、カマド周辺には崩壊に伴う粘土の広がり認められた。SB35・SB36では検出されていない。

遺物 SB8は土器16点、銅製品1点、玉製品3点の計20点を図示した。土器は、全て土師器である。

1～8は甕である。4には外面肩部に暗文のようにミガキ調整が施される。5は広口甕(もしくは罎)であるが、外面は球胴甕と同じく、ハケメとミガキによる調整痕が観察できる。6～8は甕の底部片で、8のみミガキで調整されている。8はSB11の破片と接合した。9～16は坏である。9は非常に薄手に作られており、内外面ともに赤彩され、胎土には白雲母を少量ながらも含む。10・11は須恵器模倣坏である。10は丸底、11は平底を呈す。12は10・11と比べて稜は弱い。また内面に黒色処理が施される。13は口縁部が内傾し、体部下半のケズリ調整が明瞭に残る。14～16は粗製胎土の坏で、外面には指頭圧痕、底部に木葉痕が残る。その他図示できなかった小片に須恵器の坏身がある。小型化していることから遠江Ⅳ期に位置づけられる。1・2・4・5・6・8・9・12・14・16がカマド周辺から出土し、15は掘方面から出土した。

土器以外にSB8では耳環(17)、管玉(18)、丸玉(19)、ガラス小玉(20)が出土した。17は銅製で、金属箔の痕跡が確認できる。蛍光X線分析(第Ⅷ章参照)によれば、鍍金は銀を主成分とし、金は含まれなかったが、鉛を含んでいる。最大長が2.4cm、最大幅2.6cm、厚さ0.6cm、重量は10.83gである。18は最大長2.04cm、最大幅0.76cm、最大厚0.76cm、重量は2.09gを測る。19は最大長0.78cm、径0.76～0.80cm、重量は0.38gである。20は、最大長0.27cm、径0.44～0.48cm、重量は0.07gである。17～20は全て床面もしくは掘方面から出土した。

SB35では図示可能な遺物は出土しなかった。また時期の特定が可能な小片も出土していない。

SB36では須恵器坏蓋を1点図示した。遠江Ⅳ期に位置づけられる。その他に小型化した須恵器坏身が出土しており、図示された蓋と同時期と考えられる。

時期 SB8 7世紀後半に位置づけられる。

SB35 出土遺物からは判断できないが、SB8に切られるため7世紀後半以前である。

SB36 出土遺物から7世紀代であり、また切り合い関係からSB35よりも古い。

7区第9号住居址(7SB9 第95図)

147-33Grで検出された。上端の一部がピットや攪乱に切られているが、全容はほぼ確認できた。平面形は方形で、立ち上がりは深さ0.33mが残存していた。

規模 東西4.22m×南北4.20m **重複関係** (古)SB10→SB9(新)

主軸方位 N-81°-W **壁溝** 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4は径0.38～0.47m・深さ0.15～0.24mを測る。いずれも支柱穴と考えられる。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また住居址中央に硬化面が認められる。

カマド 西辺の中央に位置する。やや崩壊していたが袖部、燃焼部が認められた。燃焼部においては、まとまって礫が出土している。またカマドの覆土には他の住居址と比較して多量の焼土が確認されている。

遺物 図示可能な遺物は出土していない。

時期 後述するSB10よりも新しいため、7世紀後半以降である。

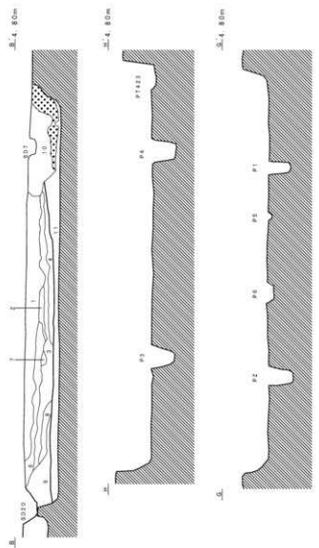
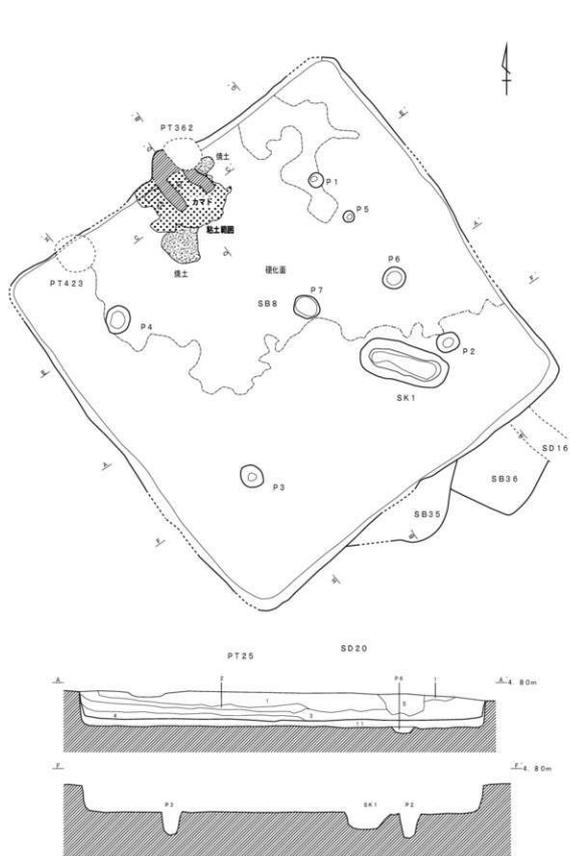
7区第10号住居址(7SB10 第96図～第98図)

147-33Gr・147-34Grで検出された。SB9に東辺が切られている。平面形は方形で、立ち上がりは深さ0.34mが残存していた。また掘方面でSX1を検出した。

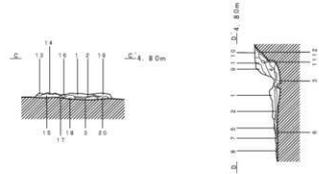
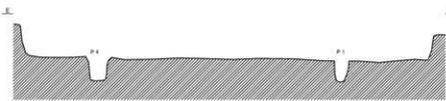
規模 東西5.58m×南北5.51m(残存部) **重複関係** (古)SB10→SB9(新)

主軸方位 N-48°-W **壁溝** 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4は径0.41～0.49m・深さ0.24～0.26mである。いずれも支柱穴と考えられる。

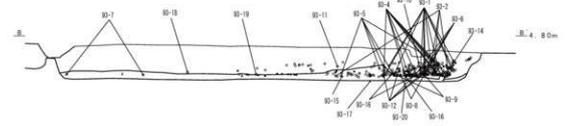
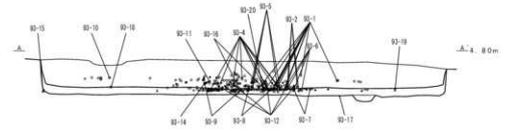
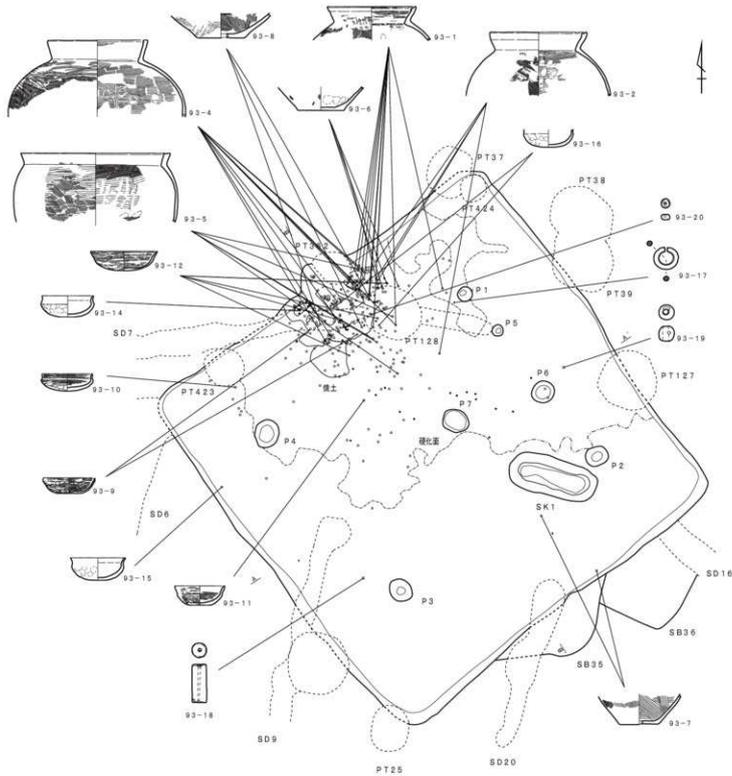


- A: 6 1 2. 5VR2/1 赤 黒
2 N2/0 黒
3 5V2/1 黒
4 N1 5/0 黒
5 10VR1 7/1 黒
6 N2/0 黒
7 2. 5VR2/1 赤 黒
8 N2/0 黒
9 5V2/1 黒
10 10VR1 7/1 黒
11 5V2/1 黒
- C: D 1 7. 5VR3/2 黒 粘土層で厚く10~12mmの繊維3%, 5~8mmのスコリア10%を含む
2 5VR3/2 黒 粘土層で中厚かすく、塊土を含む
3 5VR2/1 黒 粘土少量混じり厚で2~3mmのスコリア1%を含む
4 5VR2/1 黒 粘土少量混じり厚で塊土を含む
5 10VR3/2 黒 粘土層で2~3mmのスコリア1%を含む
6 10VR3/1 黒 粘土層で5mmの繊維を主とし1~2mmのスコリアを少量含む
7 2. 5V4/2 粘 粘土層で厚く10~15mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア5%を含む
8 2. 5V3/1 黒 粘土層で厚く5mmの繊維を主とし2~3mmのスコリア1%を含む
9 N2/0 黒 粘土層で厚く5~8mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア1%を含む
10 N2/0 黒 粘土層で厚く5~8mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア1%を含む
11 5VR2/1 黒 粘土少量混じり厚で10層
12 10VR3/1 黒 粘土層で厚く5mmの繊維を主とし5~8mmの繊維1%を含む
13 10VR2/1 黒 粘土層で厚く5mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア1%を含む
14 7. 5VR2/2 黒 粘土少量混じり厚で2~3mmのスコリア1%を含む
15 2. 5V3/1 黒 粘土層で厚く5mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア1%を含む
16 10VR3/2 黒 粘土層で厚く1~2mmのスコリアを少量含む
17 10VR3/2 黒 粘土少量混じり厚で塊土を少量含む
18 10VR2/2 黒 粘土少量混じり厚で塊土を少量含む
19 2. 5V3/2 黒 粘土層で厚く5mmの繊維10%, 3~5mmのスコリア5%を含む
20 5V4/2 粘 灰ナール層 カマドの内部

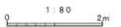


0 1:80 2m

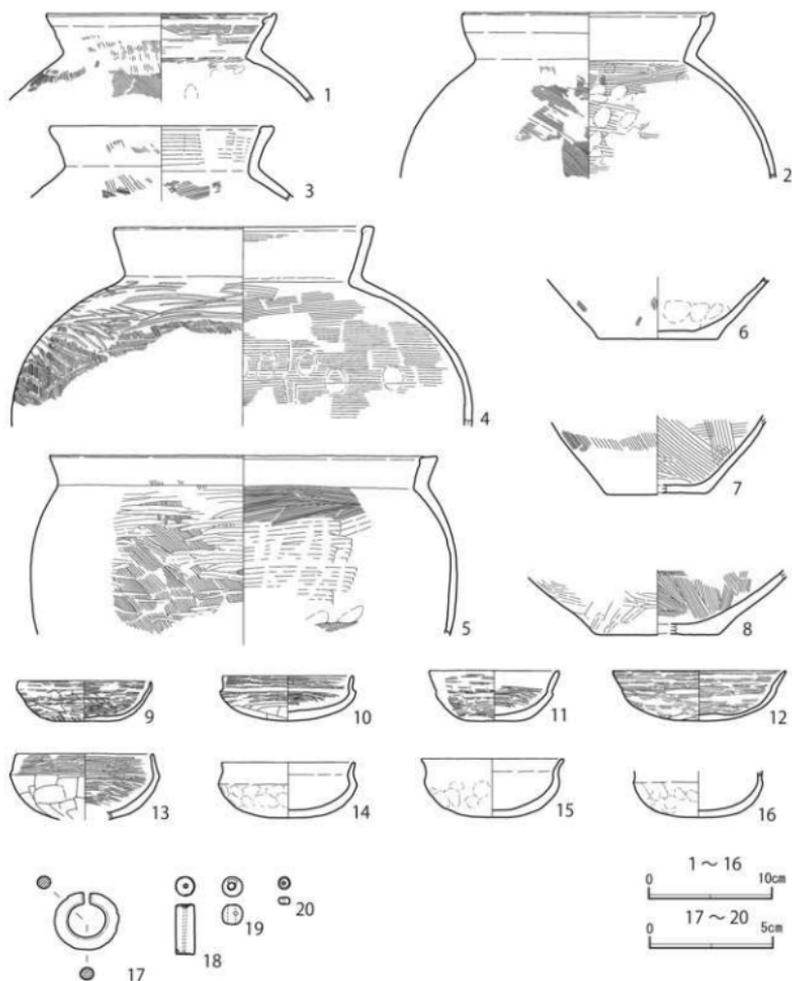
第91図 7区第8・35・36号住居址実測図



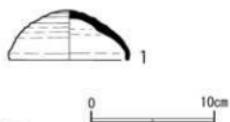
シンボル	内容
+	土層
+	石層
+	銅製品
+	鉄製品
+	玉製品
+	炭化物
+	軽石
+	砂質ブロック



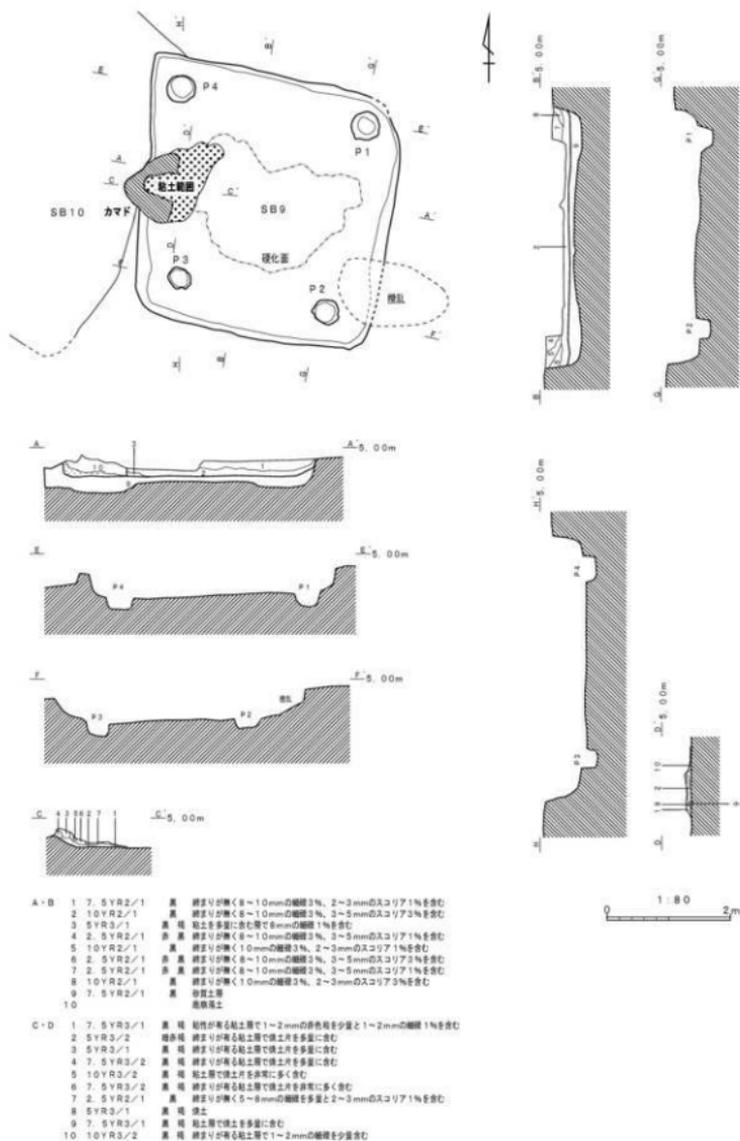
第 92 図 7区第 8号住居址遺物出土状況図



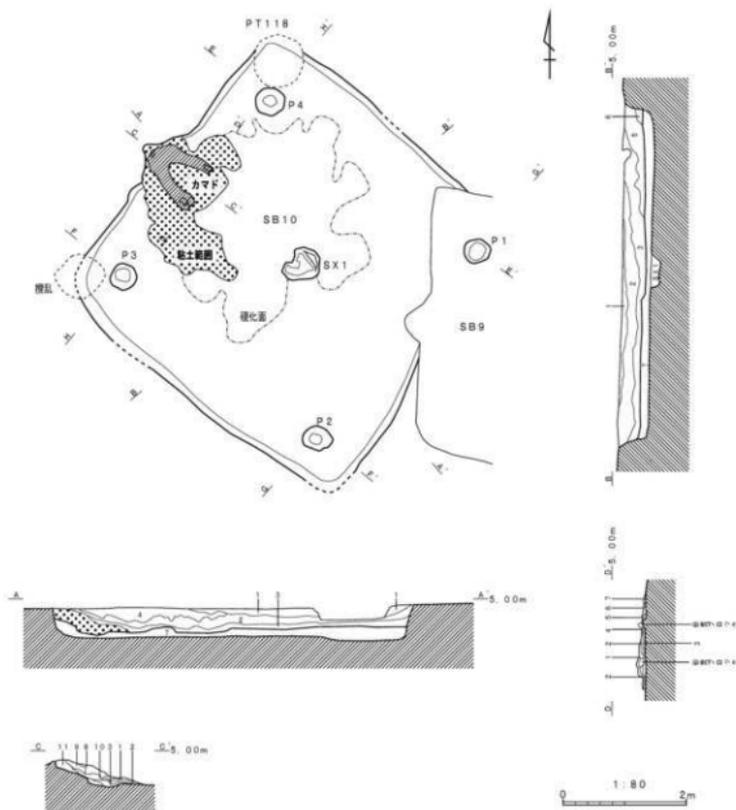
第93図 7区第8号住居址出土遺物実測図



第94図 7区第36号住居址出土遺物実測図



第95図 7区第9号住居址実測図



第96図 7区第10号住居址実測図(1)

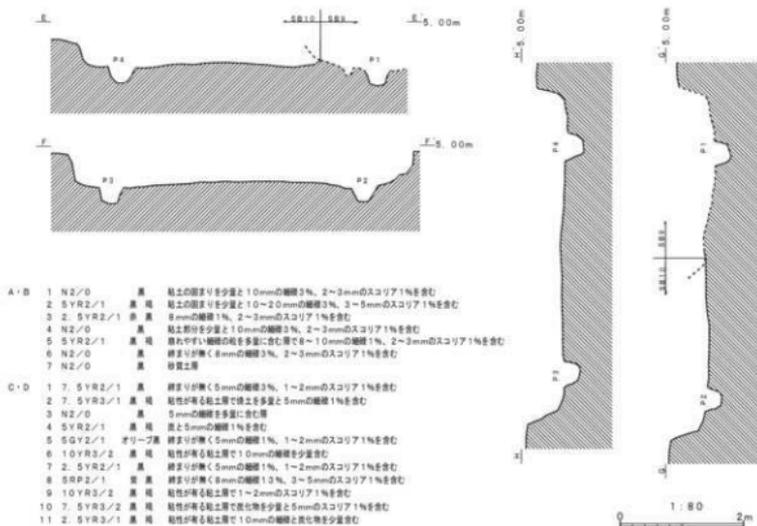
貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築しており、住居址中央部に硬化面が認められる。また床面のほぼ中央では不明遺構 SX1 が検出された。規模は長径 0.62m・短径 0.54m・深さ 0.16m を測り、平面形は不整形を呈する。

カマド 西辺の中央に位置する。やや崩壊していたが袖部と燃焼部が残存し、袖部には芯材と思われる砂質ブロックが検出された。カマド周辺、特に南西側にかけて崩壊に伴う粘土の広がりが見られた。

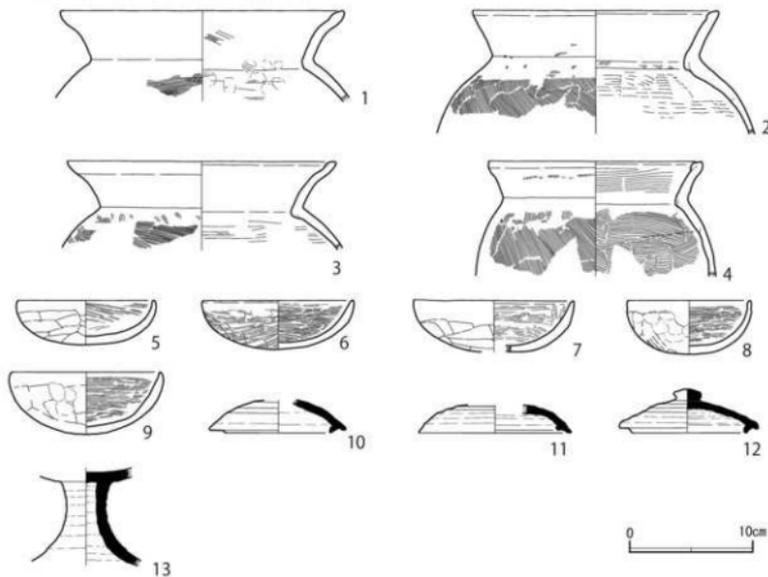
遺物 13点を図示した。1～9が土師器、10～13は須恵器である。

1～3は裏で、ハケメのみの調整でミガキ調整は認められない。4は小型裏で、調整は1～3と共通する。5～9は丸底環で、体部に稜を持たず、丸みを持って立ち上がる。7～9には黒色処理が施される。3のみカマド周辺から出土し、その他は覆土中層から出土している。

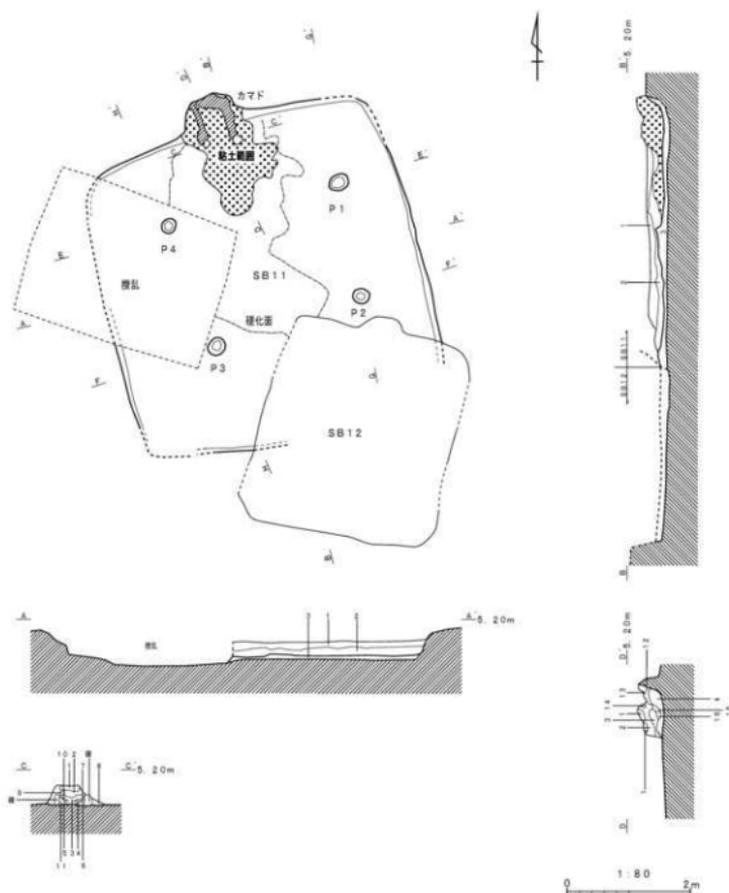
10～12は返り蓋で、12は掴みが残存する。10・11は天井部が欠損している。13は高環の脚部で



第97図 7区第10号住居址実測図(2)



第98図 7区第10号住居址出土遺物実測図



第99図 7区第11号住居址実測図(1)

ある。出土した須恵器は遠江IV期後葉～末葉に位置づけられる。

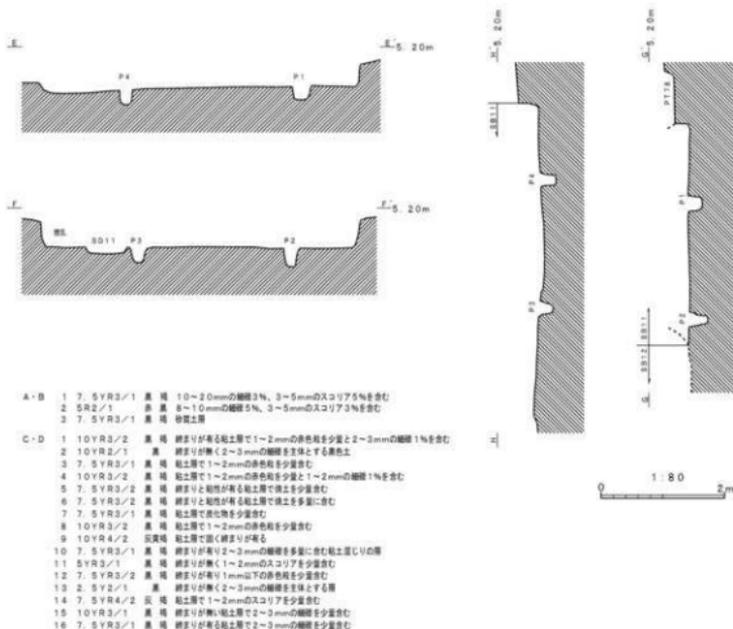
時期 出土した須恵器から7世紀後半～末葉頃と考えられる。

7区第11号住居址(7-SB11 第99図～第102図)

146-32Gr・146-33Grで検出された。南東部をSB12に切られ、中央付近から北西方向にかけて攪乱を受けている。残存部から平面形は方形と考えられる。立ち上がりは深さ0.25mが残存していた。

規模 東西5.12m×南北4.96m(残存部) 重複関係 (古)SB11→SB12→SD11・SD18(新)
 主軸方位 N-15°-W 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4は径0.25～0.33m・深さ0.22～0.30mである。いずれも主柱穴と考えられる。



第100図 7区第11号住居址実測図(2)

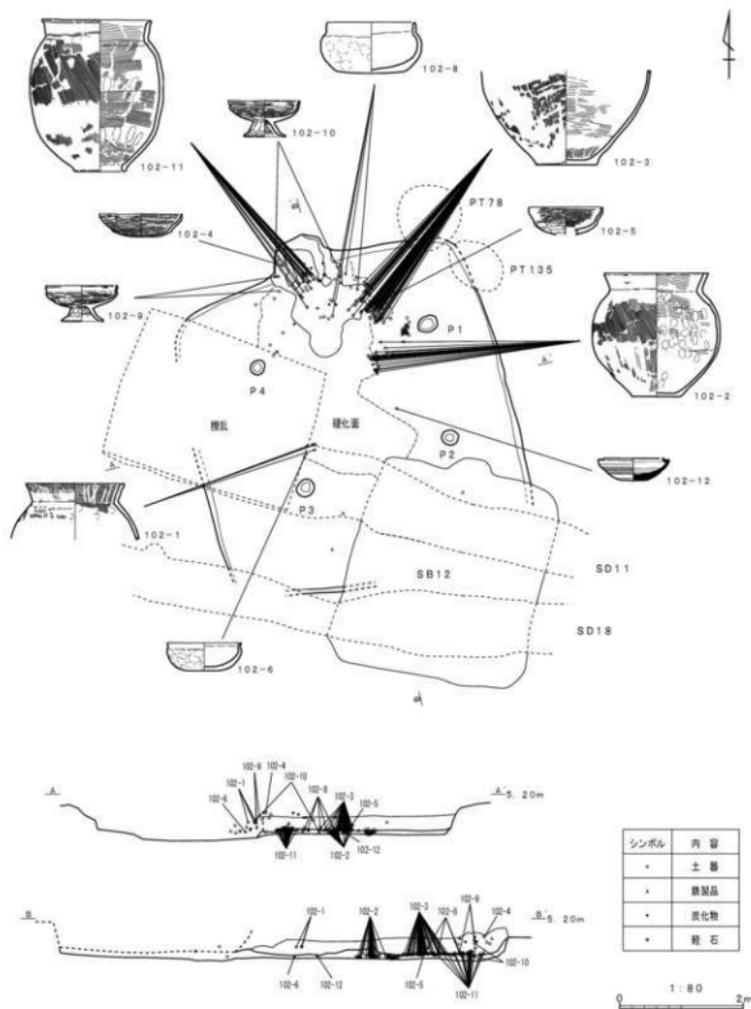
貼床 黒褐色の砂質土を使って床面を構築している。住居址中央部から北側にかけて硬化面が認められる。

カマド 北辺の中央に位置する。やや崩壊していたが袖部と燃焼部が残存し、袖部には大形の礫が2点検出された。

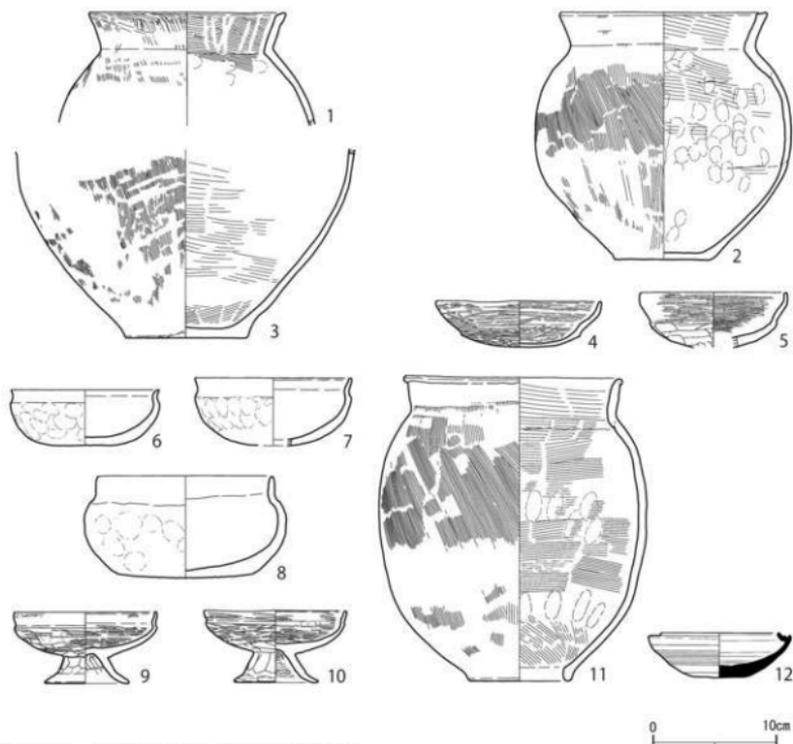
遺物 12点を図示した。1~11は土師器で、12のみ須恵器である。

1~3は裏でハケメによる調整である。1は口縁部内面のハケメが窪位のナデによって消されている。4~7は坏である。4・5は須恵器模倣坏で、内外面ともに黒色処理が施される。6・7は胎土に黒色粒をまばらに含む粗製胎土の坏である。8は埴で、6・7と胎土・調整技法ともに共通する。9・10は短脚の高坏で、坏部に対し脚部は小さい。坏部内外面および脚部外面に黒色処理が施される。11は甗で、器形・調整は甗と共通するが、底部は焼成前に穿孔されている。12は須恵器坏身で、遠江Ⅲ期末葉~Ⅳ期前葉頃に位置づけられる。3~5・8~11はカマド、もしくはその周辺から出土した。2・6・12は床面からの出土である。7はSB12出土の小破片と接合した。

時期 須恵器から7世紀前半に位置づけられる。



第101図 7区第11号住居址遺物出土状況図



第102図 7区第11号住居址出土遺物実測図

7区第12号住居址 (7-SB12 第103図・第104図)

146-32Gr で検出された。SD11・SD18 に上端を切られる。平面形は方形で、立ち上がりは深さ 0.30m が残存していた。

規模 東西 3.02m × 南北 3.46m 重複関係 (古) SB11 → SB12 → SD11・SD18 (新)

主軸方位 N-14°-E (残存部) 壁溝 検出されない。

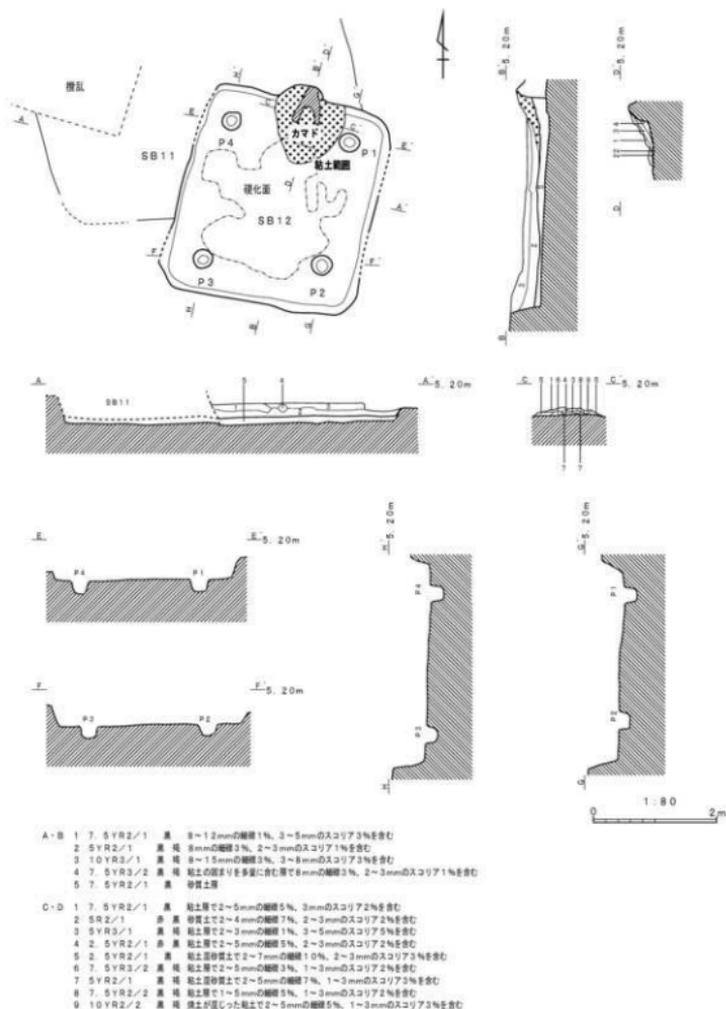
柱穴 4基検出。P1～P4の径は 0.37～0.45m・深さ 0.29～0.33mを測り、いずれも主柱穴と考えられる。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また住居址中央部に硬化面が認められる。

カマド 北辺中央に位置し、袖部と燃焼部を確認した。袖部では粘土混じりの砂質土が認められた。

遺物 3点を図示した。1・2は土師器の球胴甕で、外面にはミガキによる調整が認められる。3は須恵器の有台坏で遠江V期前半(新段階)頃に位置づけられる。

時期 須恵器から8世紀前半～中頃と考えられる。

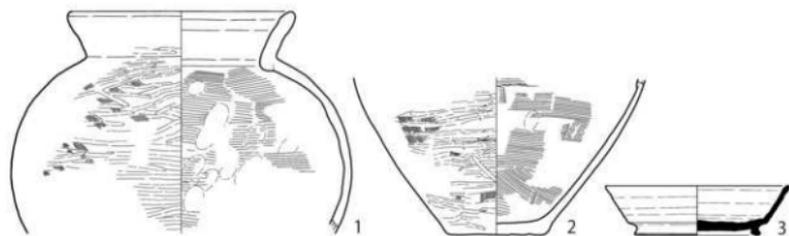


第103図 7区第12号住居址実測図

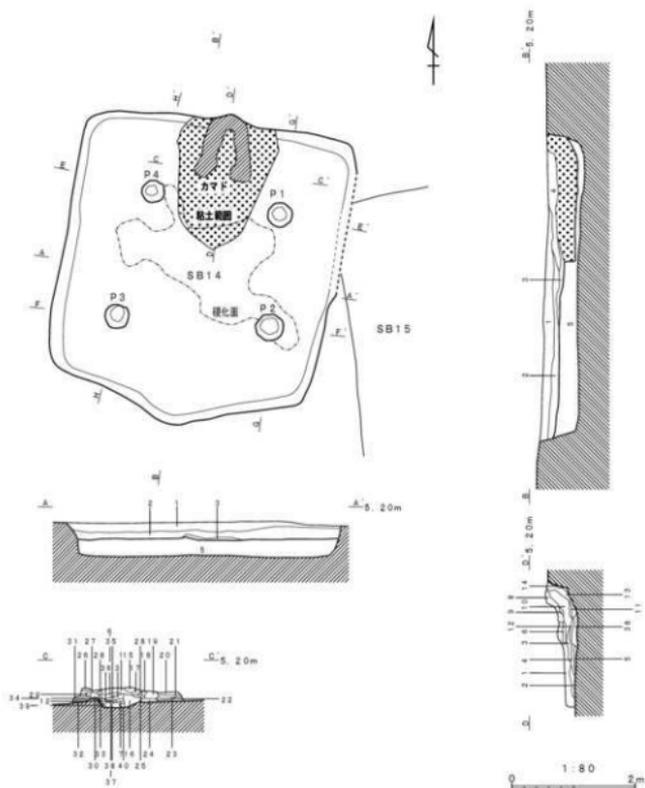
7区第14号住居址 (7-SB14 第105図・第106図)

148-32Gr・148-33Grで検出された。SB15と隣接するが、PT246によってSB15との重複部が失われているため、SB14・SB15の先後関係は明らかではない。SB14の平面形は南壁中央が張り出した五角形で、立ち上がりは深さ0.27mが残存していた。

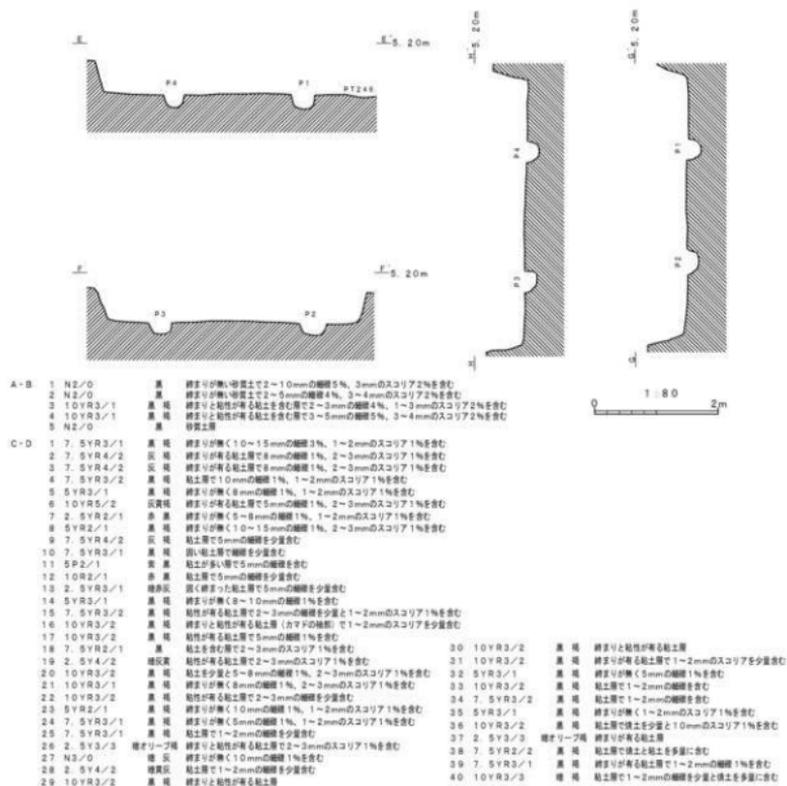
規模 東西4.30m×南北4.66m 重複関係 不明。



第 104 図 7区第 12号住居址出土遺物実測図



第 105 図 7区第 14号住居址実測図 (1)



第106図 7区第14号住居址実測図(2)

主軸方位 N-11°-E 壁 溝 検出されない。

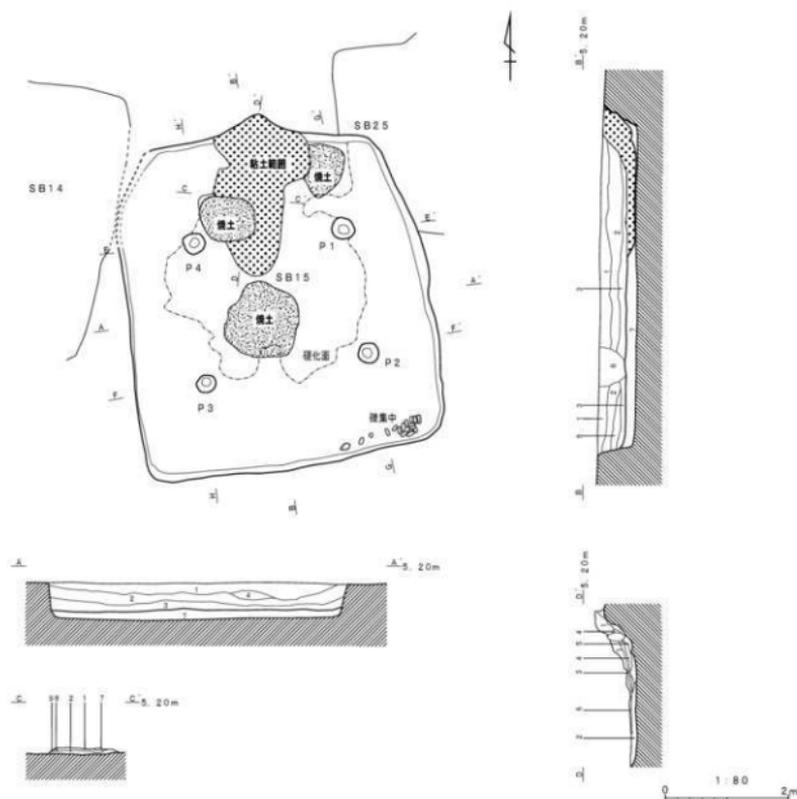
柱 穴 4基検出。P1~P4の径は0.37~0.45m・深さ0.18~0.23mを測り、いずれも主柱穴と考えられる。

貼 床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また住居址中央部に硬化面が認められる。

カマド 北辺中央に位置する。カマドの掘方は住居址の掘方に接するほどまで深く掘削されている。カマド本体はやや崩壊していたが、袖部や燃焼部が検出された。芯材は検出されていない。

遺 物 カマドの残存状況は良好であったが、図示可能な遺物は出土しなかった。なお、小片には遠江Ⅳ期後葉~Ⅴ期頃の須恵器有台坏身が出土している。

時 期 7世紀後半から8世紀前半に位置づけられる。



第107図 7区第15号住居址実測図(1)

7区第15号住居址(7-SB15 第107図～第111図)

148-32Gr・148-33Gr・149-32Gr・149-33Grで検出された。東辺はやや弧状に張り出し、北辺は南辺に比べやや短い。上端の一部がピットにより切られているが、全容はほぼ確認できた。平面形は方形で、立ち上がりは深さ0.45mが残存していた。また住居址の床面南東部では円礫が集中して出土した。

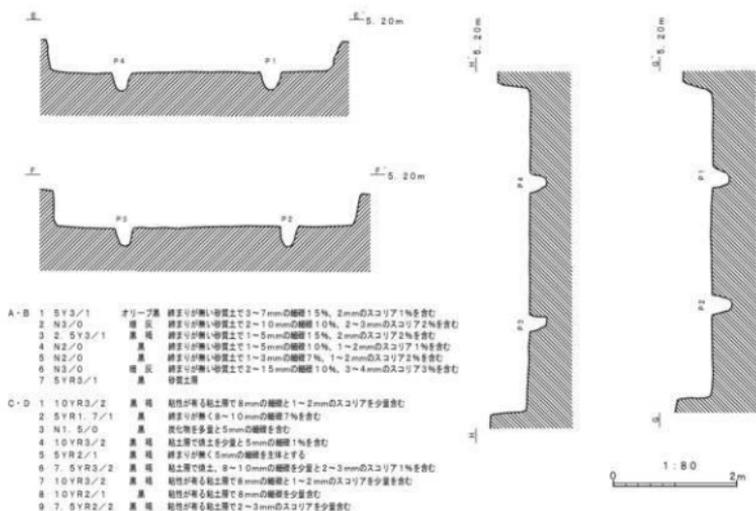
規模 東西4.77m×南北5.30m 重複関係 (古)SB25→SB15(新)

主軸方位 N-7°-W 壁溝 検出されない。

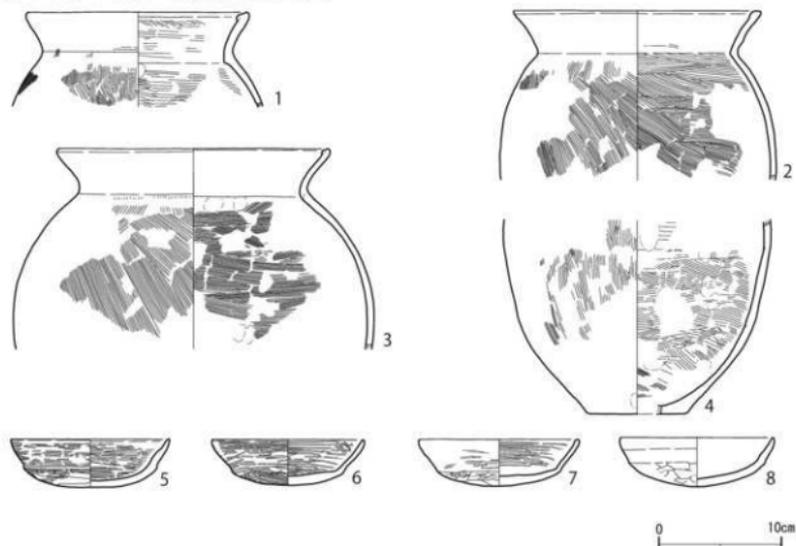
柱穴 4基検出。P1～P4は径0.31～0.38m・深さ0.29～0.33mである。いずれも主柱穴と考えられる。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。住居址中央部において硬化面が認められ、また床面直上の3か所において、焼土の広がり確認されている。特に住居址中央部の焼土には多量の炭化物が出土した。

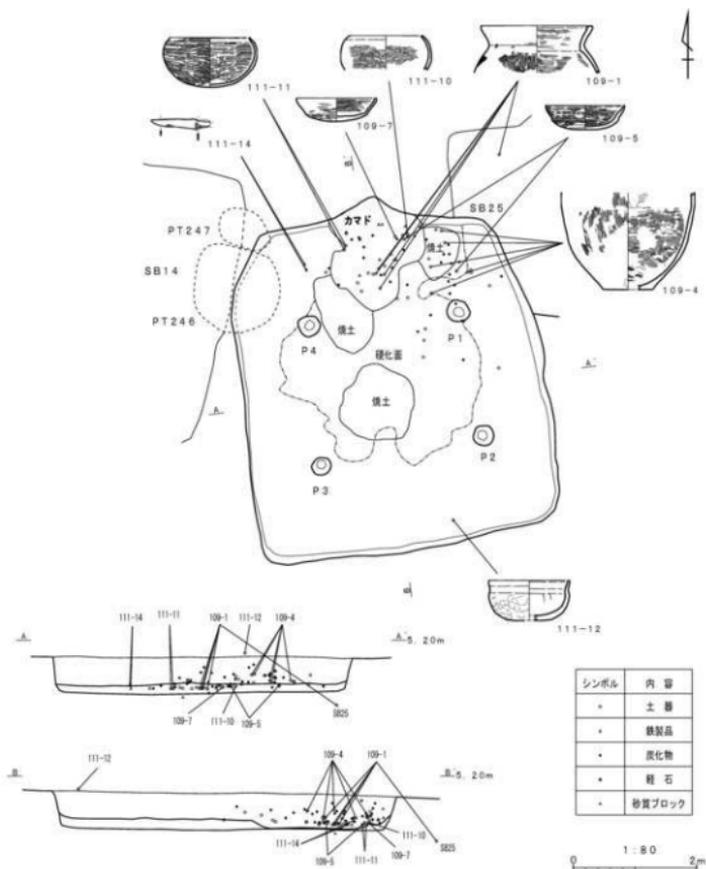
カマド 北辺の中央に位置している。ほぼ崩壊しており、構築土と考えられる粘土のみが検出された。



第108図 7区第15号住居址実測図(2)



第109図 7区第15号住居址出土遺物実測図(1)



第110図 7区第15号住居址遺物出土状況図

遺物 土器13点、鉄製品2点の計15点を図示した。1～12は土師器、13は須恵器である。

1～4は甕で、いずれもミガキによる調整は認められない。4は薄手で、やや長胴である。5～9は丸底甕で、5には黒色処理が施される。10～12は埴で、10・11は鉢形を呈し、ミガキによる調整である。12は粗製胎土で指頭圧痕が明瞭に残る。13は須恵器の返り蓋で、遠江IV期後葉頃に位置づけられる。

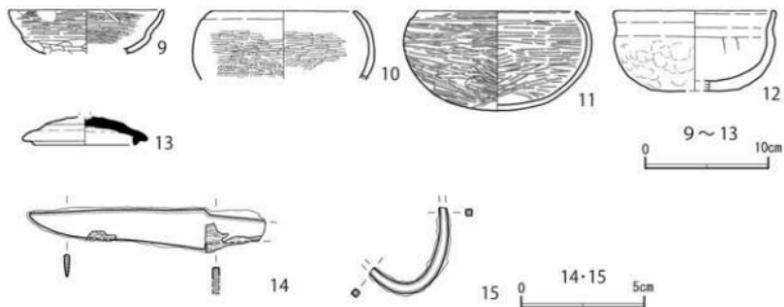
14は刀子、15は釣針である。14は刃部から茎部の一部が残存する。木質や錯が附着していることから、不明瞭であるが、茎間は角（もしくは撫）間と推定される。15はアグが欠損する。

1・5・7・10・11がカマドもしくはその周辺から出土した。1はSB25の小破片と接合した。

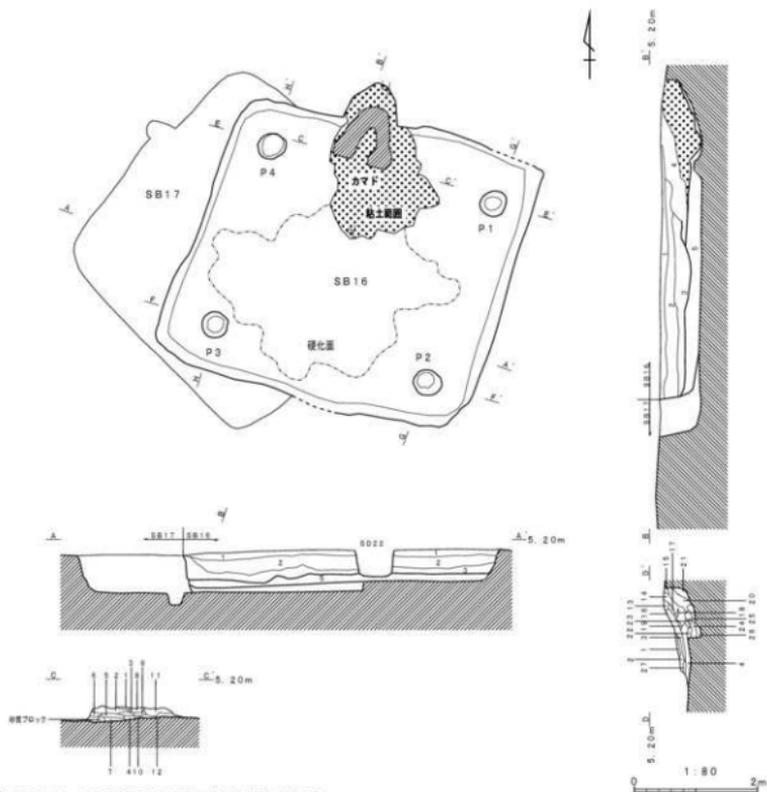
時期 カマド周辺の遺物から7世紀前半～中頃に比定される。

7区第16号住居址(7SB16 第112図～第116図)

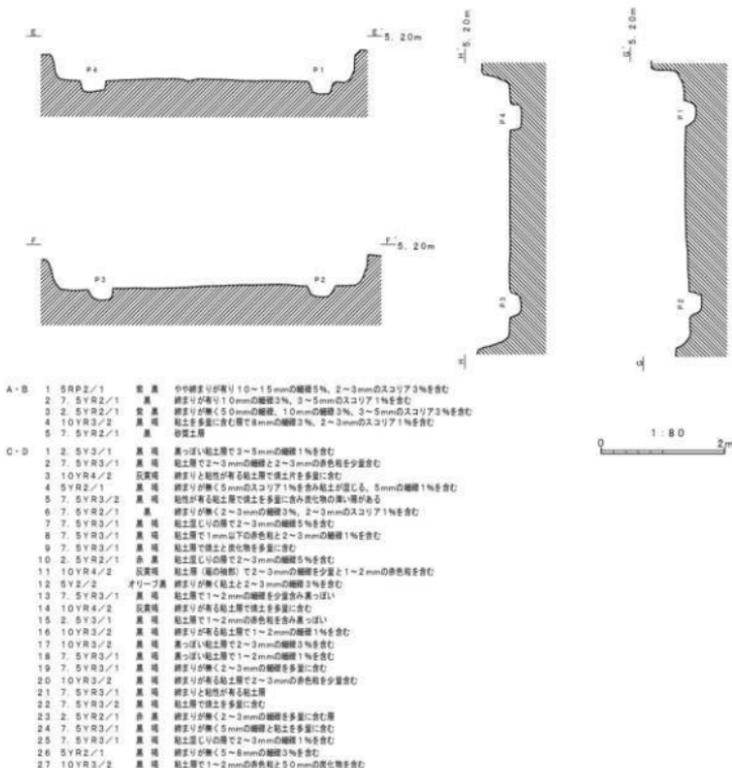
149-32Grで検出された。SB17と重複しているが、掘削はSB17よりも浅い。平面形は方形で、立ち上



第111図 7区第15号住居址出土遺物実測図(2)



第112図 7区第16号住居址実測図(1)



第113図 7区第16号住居址実測図(2)

がりは深さ0.40mが残存していた。

規模 東西5.07m×南北4.47m 重複関係 (古)SB17→SB16→SD22(新)

主軸方位 N-17°-E 壁溝 検出されない。

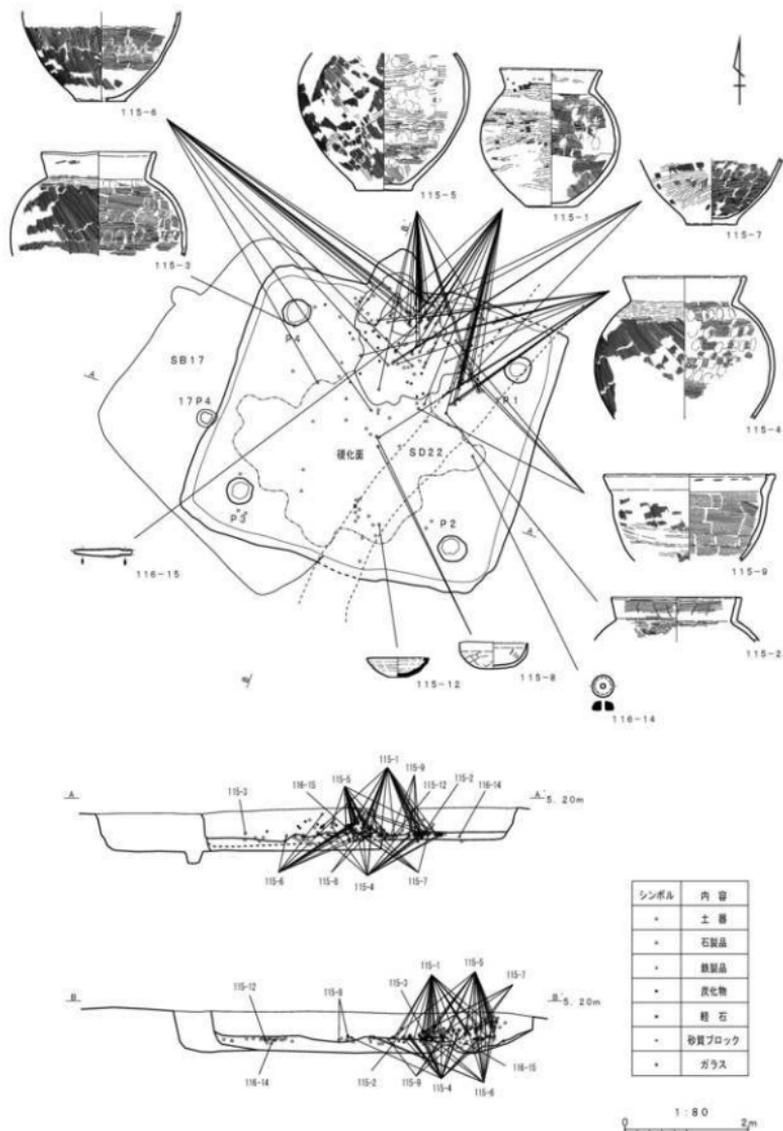
柱穴 4基検出。P1～P4は径0.42～0.47m・深さ0.18～0.19mである。いずれも主柱穴と考えられる。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築し、住居址中央から南側に向けて硬化面が認められる。またSB16の床面は、住居址掘削時に認識できなかったが、断面精査時に認識した(A-A'セクション5層)。

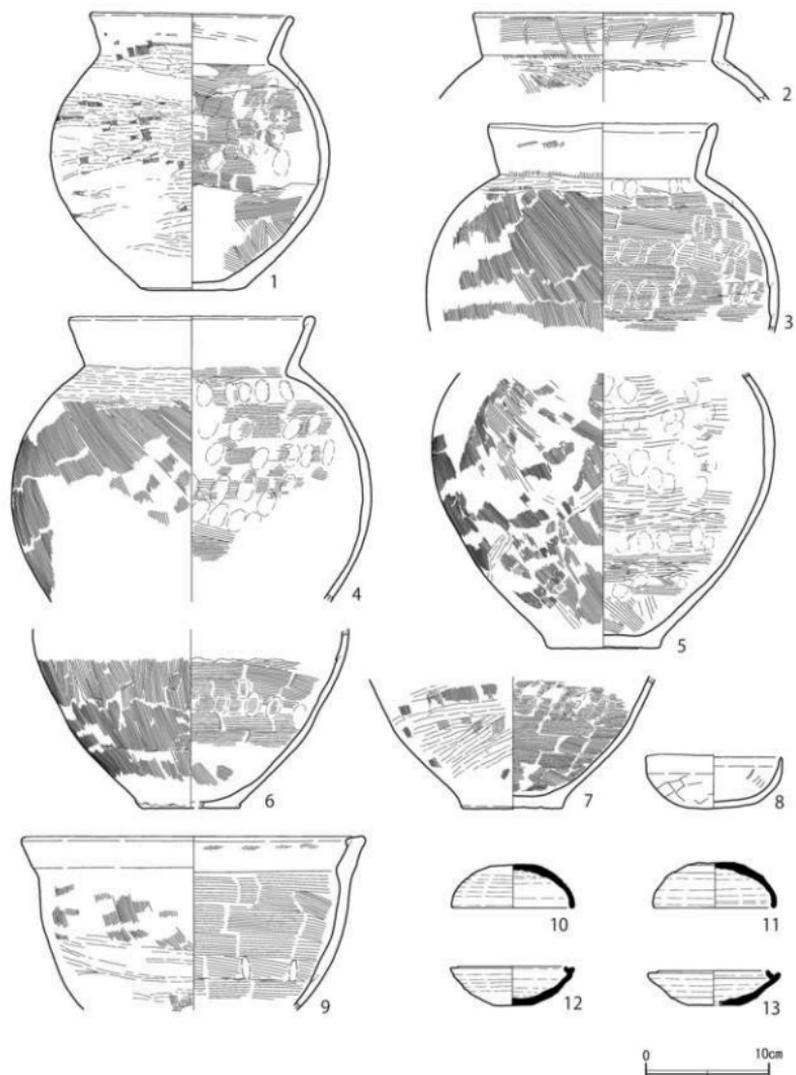
カマド 北辺の中央に位置する。やや崩壊していたが、袖部と燃焼部が認められ、芯材と考えられる砂質ブロックが検出された。

遺物 土器13点、石製品1点、鉄製品1点の計15点を図示した。土器は1～9が土師器、10～13が須恵器である。

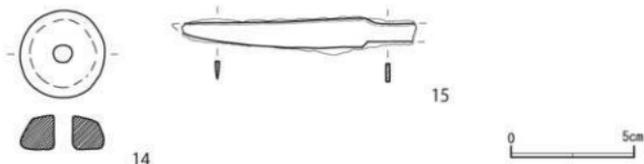
1～7は球胴甕で、6を除きミガキ調整を施す。8は粗製胎土の丸底甕で、ヘラケズリ痕が明瞭に残る。底部には木葉痕が認められる。9はやや小型の甕で、器面の調整は裏と共通する。



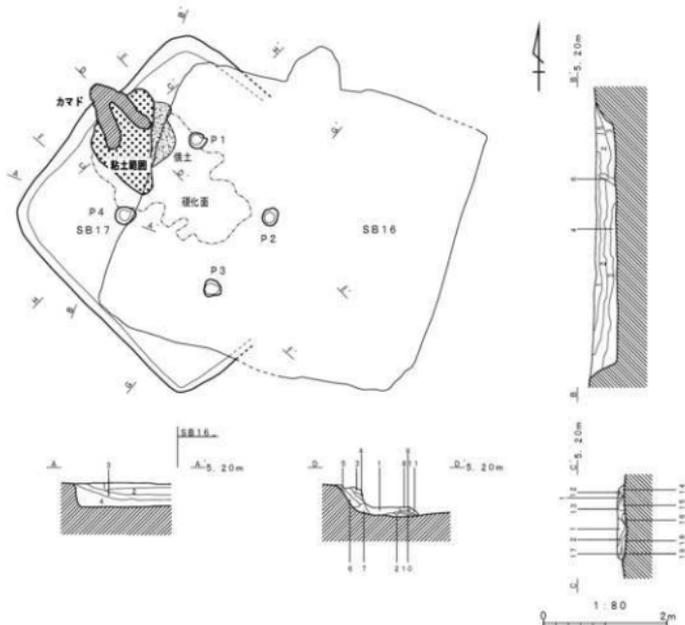
第 114 図 7区第 16号住居址遺物出土状況図



第115図 7区第16号住居址出土遺物実測図(1)



第116図 7区第16号住居址出土遺物実測図(2)



第117図 7区第17号住居址実測図(1)

10～13は須恵器で、10・11は坏蓋、12・13は坏身である。小型化が進行しており、遠江Ⅳ期後葉～末葉に位置づけられる。11はSB22出土の小破片と接合した。

14は紡錘車である。滑石製で、大きさは径3.4cm、厚さ1.4cmを測る。形態は円形で、上面は平たく面取りされており、断面形は半円形を呈する。穿孔の径は表面0.75cm、裏面0.80cmである。重さは26.16gを測る。

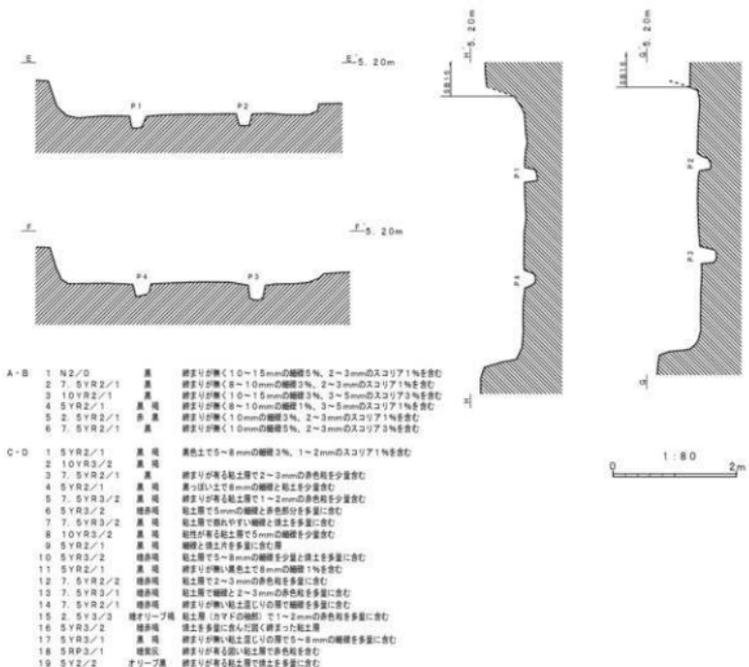
15は刃部先端部と茎尻が欠損している刀子である。茎尻は両撫間である。

1・4～7・9はカマド、もしくはその周辺から出土し、12・14は掘方面、15は床面直上から出土した。

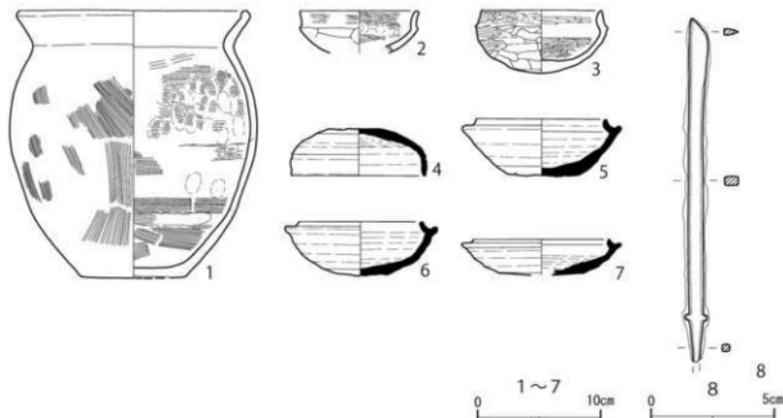
時期 7世紀後半に位置づけられる。

7区第17号住居址(7-SB17 第117図～第119図)

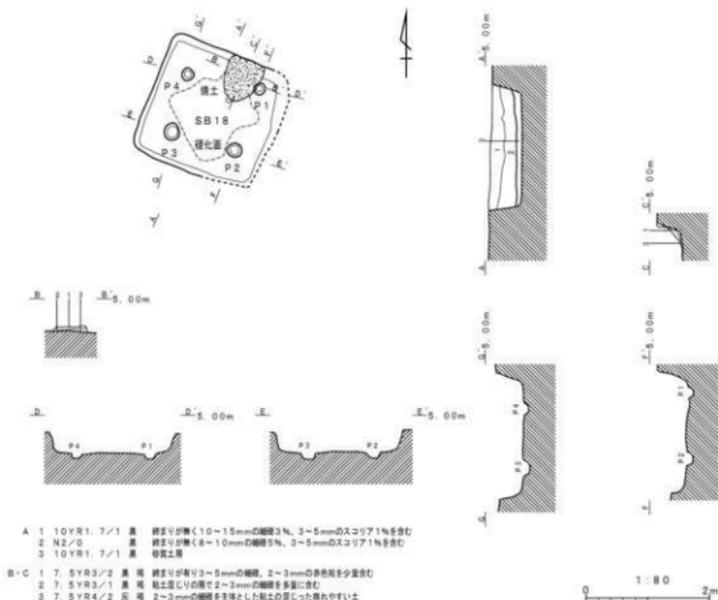
149-32Grで検出された。SB16と重複しているが、掘方から平面形は方形と考えられる。立ち上がりは最大で深さ0.41mが残存していた。



第118図 7区第17号住居址実測図(2)



第119図 7区第17号住居址出土遺物実測図



第120図 7区第18号住居址実測図

規模 東西4.37m×南北4.17m 重複関係 (古)SB17→SB16(新)

主軸方位 N-23°-W 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P4を除きSB16と重複するが、SB16の深度は浅く、検出が可能であった。P1～P4は径0.27～0.33m・深さ0.19～0.24mを測る。いずれも主柱穴と考えられる。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築し、カマドから住居中央にかけて硬化面が認められる。

カマド 北西辺の中央に位置する。やや崩壊していたが袖部と燃焼部を確認した。粘性土のみの検出で、芯材は確認されなかった。

遺物 土器を7点、鉄製品1点の計8点を図示した。土器の1～3は土師器、4～7は須恵器である。

1はハケメ調整の小型甕で、底部が剥離している。2・3は丸底環で、ともに稜は明瞭で体部をケズリ調整し、その後マガキ調整を施す。2は黒色処理が施される。4は坏蓋、5～7は坏身である。7はSB16で取り上げが行われているが、遺物の年代から本来はSB17に帰属するものと考えられる。出土した須恵器は遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉に位置づけられる。

8は片刃箭式の鉄鎌で、鎌身は丸みを持ち、鋭利さは失われている。鎌身間は撫間、茎間は棘間である。茎尻に向けてやや先細っている。

1・3・4・6はカマドから、3・7は床面よりそれぞれ出土した。

時期 須恵器から7世紀前半～中頃に位置づけられる。

7区第18号住居址 (7-SB18 第120図・第121図)

149-32Grで検出された。SD22により上端が一部切られているが、全容はほぼ確認できた。7区において最小の住居址である。平面形は方形で、立ち上がりは深さ0.44mが残存していた。

規模 東西2.09m×南北1.98m 重複関係 (古)SB18→SD22(新)

主軸方位 N-23°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4は検出面で径0.18～0.28m・深さ0.08～0.10mを測る。いずれも主柱穴と考えられる。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また住居中央に硬化面が認められる。

カマド 焼土の広がりから北辺の中央に位置すると考えられるが、ほぼ崩壊しており、形状の確認はできなかった。周辺では構築土と考えられる粘土と細礫が認められた。

遺物 5点を図示した。1～4はミニチュアの手づくね土器である。住居址覆土第2層から礫とともに4点がまとまって出土した。底部に木葉痕が観察できる。5は須恵器の高坏脚である。その他、図示できなかった小片に遠江IV期(後葉か)頃に位置づけられる小型化した須恵器坏身片が出土している。

時期 7世紀(後半)に位置づけられる。

7区第19号住居址(7-SB19 第122図)

150-32Gr・151-32Grで検出された。ピットにより上端が一部切られているが、全容はほぼ確認できた。平面形は南西側がやや張り出す方形で、立ち上がりは深さ0.43mが残存していた。

規模 東西3.13m×南北2.91m 重複関係 なし

主軸方位 N-24°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4は径0.26～0.34m・深さ0.15～0.19mを測る。いずれも主柱穴と考えられる。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また住居中央部に硬化面が認められる。

カマド 北辺のやや東寄りに位置する。袖部と燃焼部が認められた。西側袖部では袖石が検出されたが、その他に芯材は出土しなかった。

遺物 いずれも小片で図示可能な遺物は出土しなかったが、遠江IV期後葉～末葉に位置づけられる小型化した須恵器坏身が出土している。

時期 7世紀後半に位置づけられる。

7区第20号住居址(7-SB20 第123図～第125図)

149-31Grで検出された。SB21と重複する。平面形は北角がやや張り出す方形で、立ち上がりは深さ0.30mが残存していた。

規模 東西3.23m×南北3.60m 重複関係 (古)SB21→SB20(新)

主軸方位 N-60°-W 壁溝 検出されない。

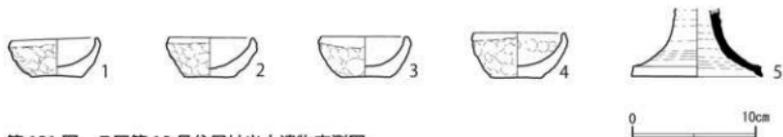
柱穴 4基検出。P1～P4は径0.20～0.26m・深さ0.25～0.28mを測る。いずれも主柱穴と考えられる。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築し、床面の大部分に硬化面が認められた。また炭化物と拳大の礫が住居東半でまばらに出土した。

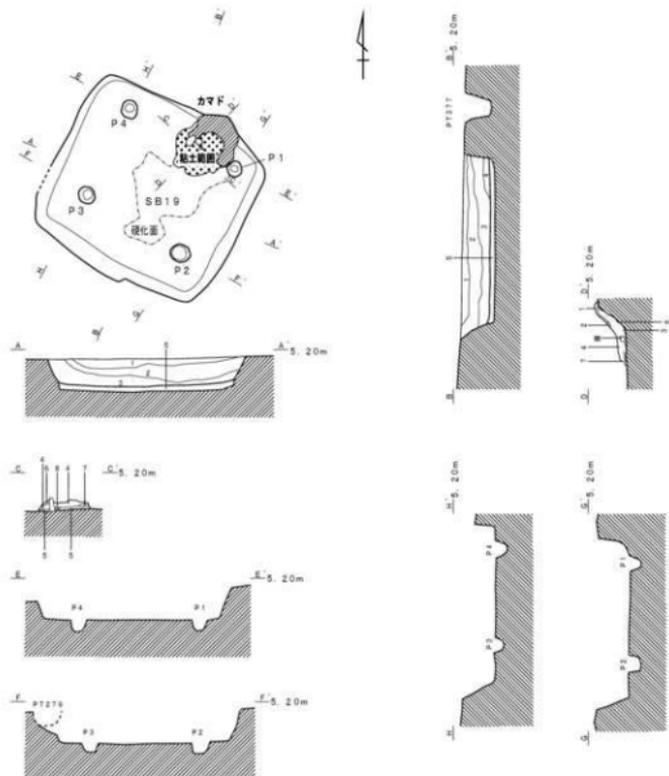
カマド 西辺の中央に位置する。やや崩壊していたが、両袖部と燃焼部が確認された。袖部では砂質ブロックが検出され、燃焼部では支脚が出土した。

遺物 4点の土師器を図示した。1・2は甕で、1はカマドから、2は床面直上から出土した。ともにミガキ調整は認められない。3は坏である。稜は明瞭で内外面ともに黒色処理が施される。4は粗製胎土の坏で、底部に木葉痕が残る。なお図示できなかった小片に遠江IV期頃に位置づけられる須恵器坏身が出土している。

時期 7世紀の範囲に位置づけられるが、7世紀前半～中頃と考えられるSB21より新しい。7世紀中頃～後半頃か。

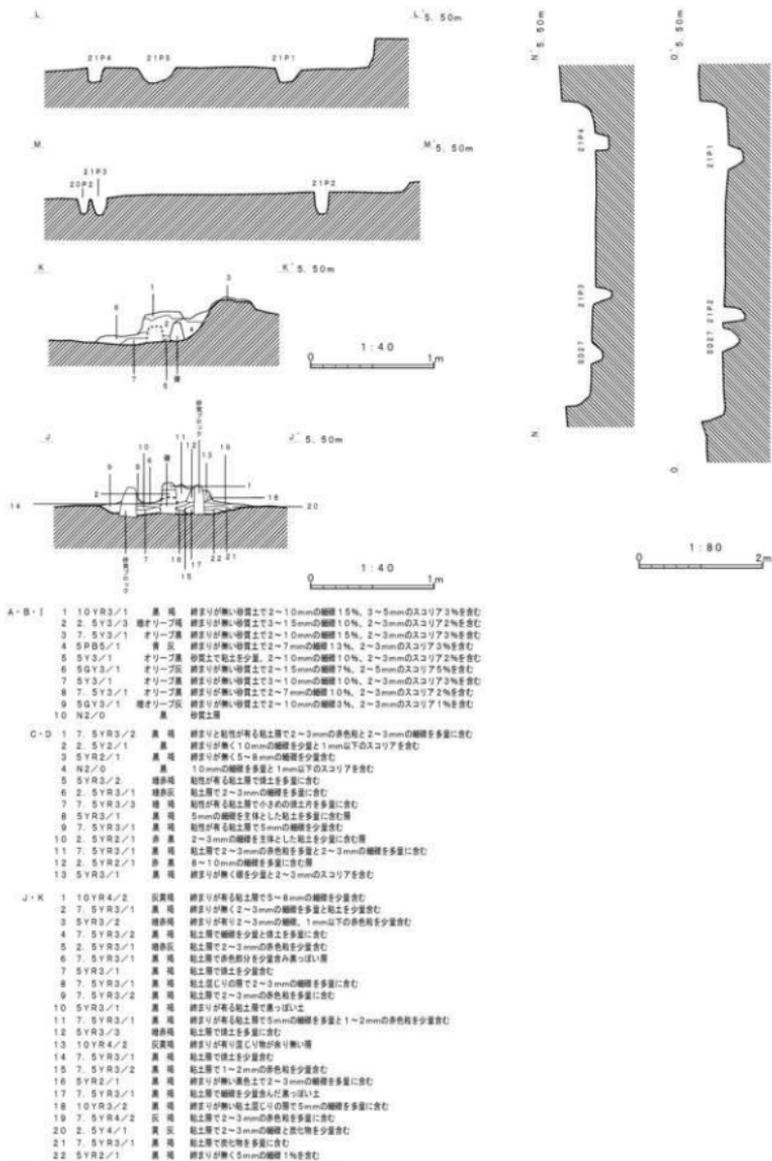


第121図 7区第18号住居址出土遺物実測図

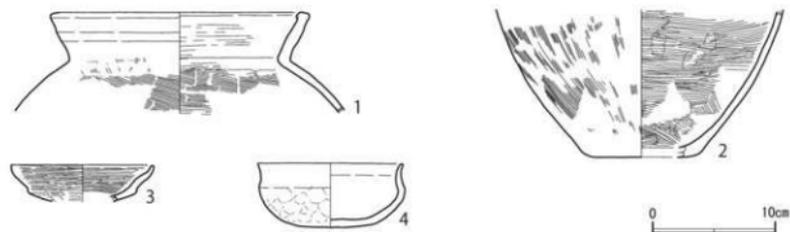


- | | | | |
|-----|------------|-------|--|
| A・B | 1 SRP4/1 | 焼成瓦 | 跡まりが薄い砂瓦士で2-2.0mmの繊維20%, 2-3mmのスコリア5%を含む |
| | 2 10R4/1 | 焼成瓦 | 跡まりが薄い砂瓦士で2-2.0mmの繊維15%, 2-3mmのスコリア3%を含む |
| | 3 10YR2/2 | 黒 埴 | 跡まりが薄い砂瓦士で5-2.0mmの繊維2%, 2-4mmのスコリア3%を含む |
| | 4 2 5YR2/1 | 赤 埴 | 跡まりが薄い砂瓦士で2-3mmの繊維7%, 1-2mmのスコリア2%を含む |
| | 5 N2/O | 黒 | 砂瓦士層 |
| C-D | 1 7 5YR4/2 | 灰 埴 | 粘性がある粘土層で1-2mmの赤色粒を多量に含む |
| | 2 2 5Y3/1 | 黒 埴 | 粘土層で2-3mmの繊維を少量含む |
| | 3 10YR2/1 | 黒 埴 | 粘土層で2-3mmの繊維を少量含む |
| | 4 7 5YR2/1 | 黒 埴 | 粘性がある粘土層で1-2mmの赤色粒を多量に含む |
| | 5 5YR2/1 | 黒 埴 | 粘土層で小さな赤色粒を少量含む |
| | 6 10YR5/3 | にじみ埴埴 | 固く締まった粘土層で2-3mmのスコリア1%を含む |
| | 7 10YR3/2 | 黒 埴 | 跡まりが薄い(8mmの繊維1%, 2-3mmのスコリア1%)を含む |
| | 8 10YR3/2 | 黒 埴 | 粘土成分が多量、1.0mmの繊維1%, 2-3mmのスコリアを少量含む |

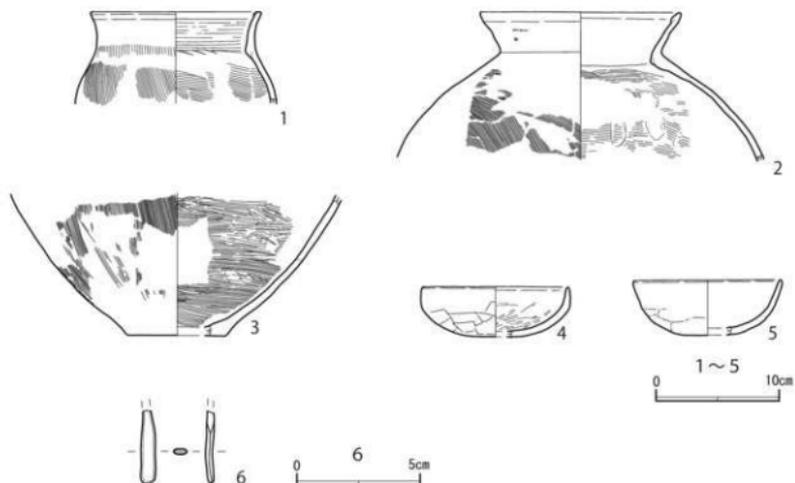
第122図 7区第19号住居址実測図



第124図 7区第20・21号住居址実測図(2)



第125図 7区第20号住居址出土遺物実測図



第126図 7区第21号住居址出土遺物実測図

7区第21号住居址 (7-SB21 第123図・第124図・第126図)

149-30Gr・149-31Gr・150-30Gr・150-31Grで検出された。SD27により南側の一部が切られている。またSB20に西側を切られており、西辺の上端は不明である。平面形は方形と推定され、立ち上がりは深さ0.23mが残存していた。

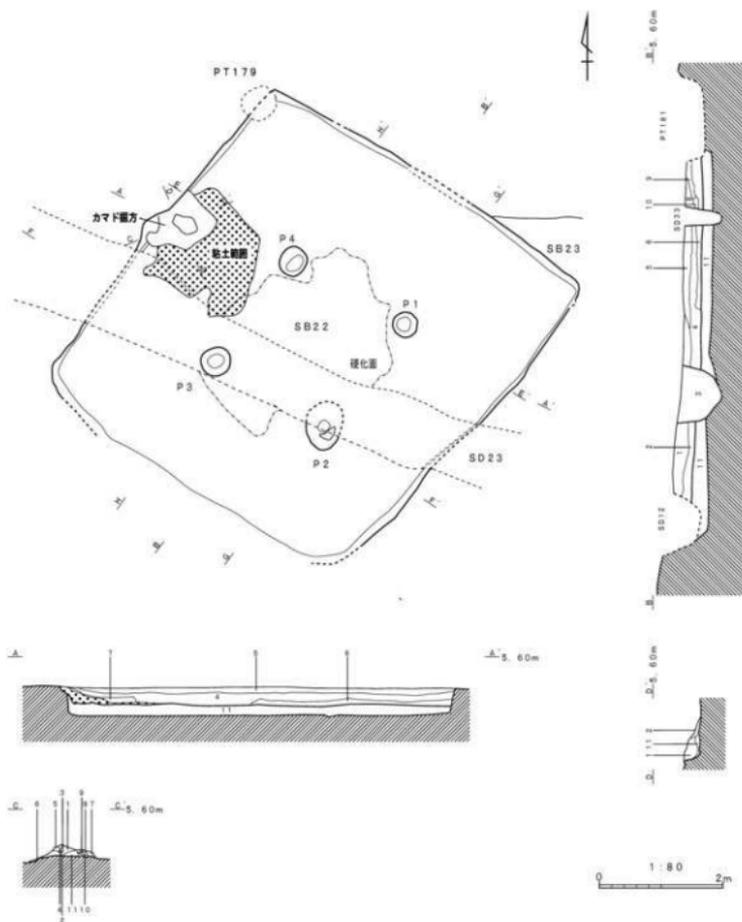
規模 東西5.78m×南北5.11m(残存部) 重複関係 (古)SB21→SB20→SD27(新)

主軸方位 N-17°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 7基検出。P1～P4は径0.28～0.44m・深さ0.22～0.36mである。P5は径0.67m・深さ0.24m、P6は径0.38m・深さ0.35m、P7は径0.22m・深さ0.19mである。主柱穴はP1～P4と考えられる。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また住居址中央部に硬化面が認められる。

カマド 北辺の中央に位置する。やや崩壊しているが、両袖部と燃焼部を確認し、袖部では砂質ブロックが検出された。また燃焼部において支脚として利用したと考えられる礫が直立した状態で検出された。



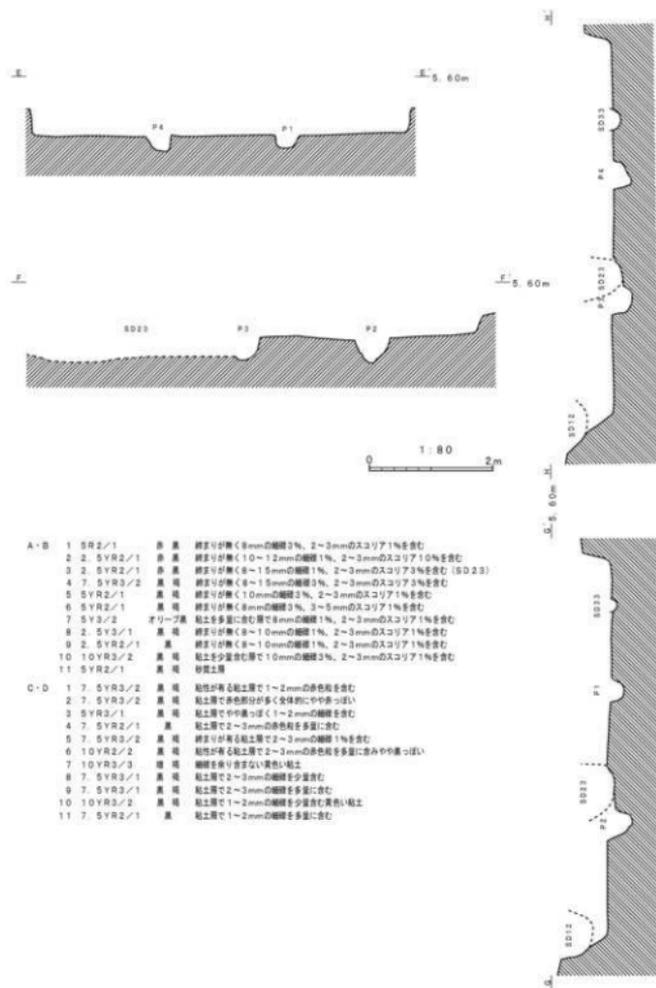
第127図 7区第22号住居址実測図(1)

遺物 土師器5点、銅製品1点の計6点を図示した。

1～3は(小型)球胴甕で、2は口縁部が肥大化しておらず、また2・3ともに器壁が薄手である。4・5は丸底環で、4の胎土は密で口縁が内傾する。一方、5は粗製胎土で、口縁部と体部の境は明瞭でない。4・5ともにカマド周辺からの出土である。

6は銅製鉸具の刺金と考えられる。残存する長さが3.1cm、幅0.6cm、重さは3.06gを測る。蛍光X線分析によると、鍍金は銀を主成分とし、金と水銀が含まれている(第Ⅷ章参照)。

時期 7世紀前半～中頃に位置づけられる。



第128図 7区第22号住居址実測図(2)

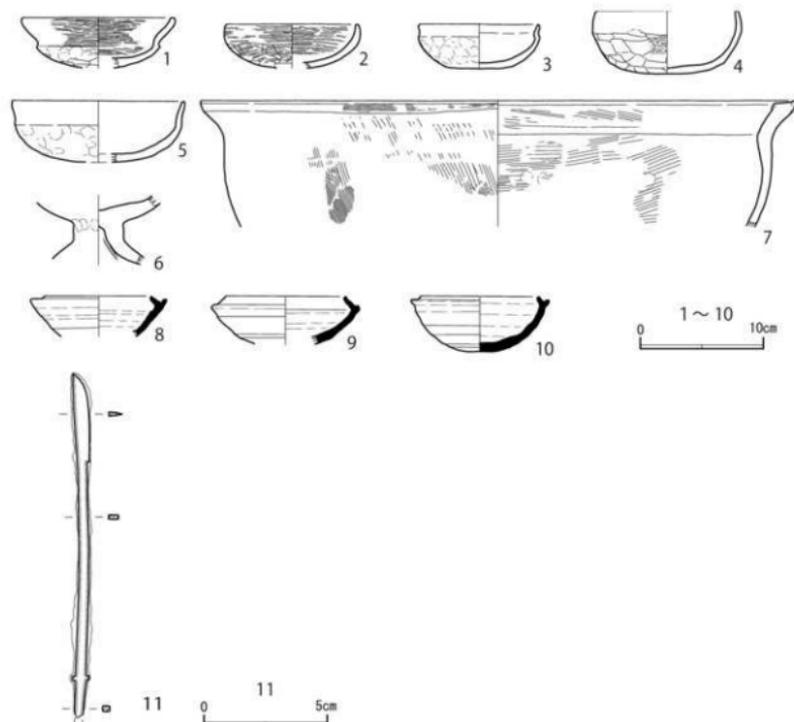
7区第22号住居址(7-SB22 第127図~第129図)

147-31Gr・147-32Grで検出された。SB23と重複する。中央からやや南側を東西方向にSD12・SD23に切られているが、平面形は方形と推定される。立ち上がりは深さ0.28mが残存していた。

規模 東西5.96m×南北6.58m 重複関係(古)SB23→SB22→SD12・SD23・SD33(新)

主軸方位 N-51°-W 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1~P4は径0.40~0.55m・深さ0.21~0.39mを測る。いずれも主柱穴と考



第129図 7区第22号住居址出土遺物実測図

えられるが、全体的に住居址中央に寄っている。

貼床 黒褐色の砂質土を使って床面を構築している。また住居址中央部に硬化面が認められる。

カマド 西辺の中央に位置する。ほぼ崩壊していたが、構築土と考えられる粘土と袖部に伴っていたと考えられる礫が2点出土した。

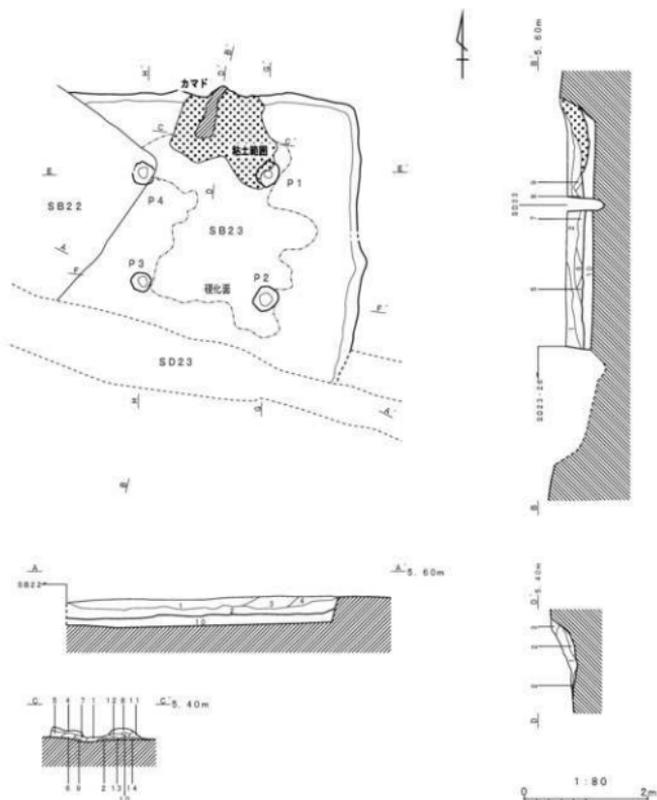
遺物 土器10点、鉄製品1点の計11点を図示した。1～7は土師器、8～10は須恵器である。

1～3は丸底坏である。1・2は内面に黒色処理が施される。3は粗製胎土の坏で、底部に木葉痕が残る。4・5は碗である。4は胎土が密で、体部には粗くケズリ痕が残されている。5は粗製胎土で、調整方法は3と共通する。6は低脚高坏の脚部である。焼成は悪く、軟質で粉っぽい。7は場でハケメ調整が施されるのみでミガキ調整は認められない。

8～10は須恵器の坏身である。これらは遠江Ⅳ期に位置づけられるが、9はやや大型で、Ⅳ期の中でも古相である。

11は片刃箭式の鉄鏃で、茎尻が欠損する。鏃身間は直角閃、茎閃は棘閃である。

時期 切り合い関係を持つSB23の遺物が混入している可能性があるが、須恵器から7世紀に位置づけられる。



第130図 7区第23号住居址実測図(1)

7区第23号住居址(7-SB23 第130図～第132図)

147-31Gr・148-31Grで検出された。西側をSB22に、南側をSD23・SD26に切られているが、残存部から平面形は方形と推定される。立ち上がりは深さ0.36mが残存していた。

規模 東西4.83m×南北4.55m(残存部)

重複関係 (古)SB23→SB22→SD23・SD26・SD33(新)

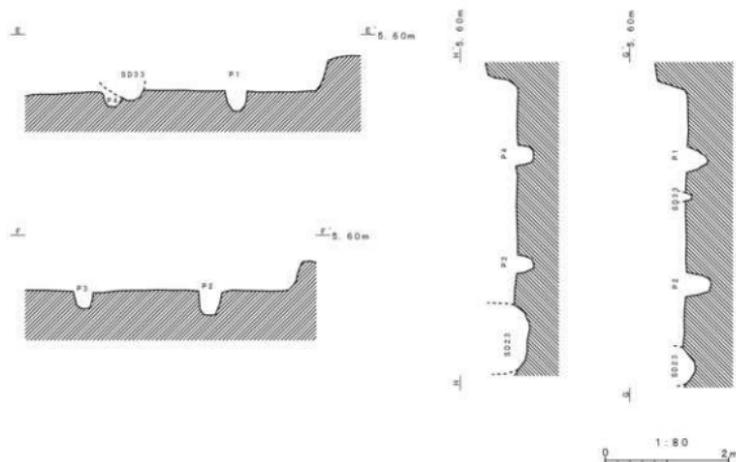
主軸方位 N-1°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4は径0.33～0.43m・深さ0.23～0.38mを測る。いずれも主柱穴と考えられる。

貼床 黒褐色の砂質土を使って床面を構築している。また住居址中央部に硬化面が認められる。

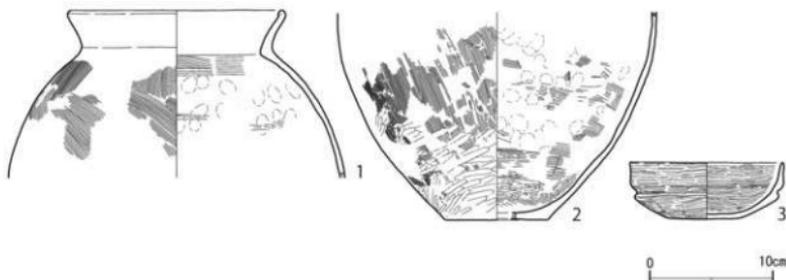
カマド 北辺の中央に位置している。ほぼ崩壊しており、西側袖部のみを検出した。

遺物 3点を図示した。1・2は土師器の甕である。2の底部には丁寧なナデ調整が施され、ミガキ調整のように光沢を持っている。一方、器壁は薄手であり、球胴甕としては古相である。3は体部に

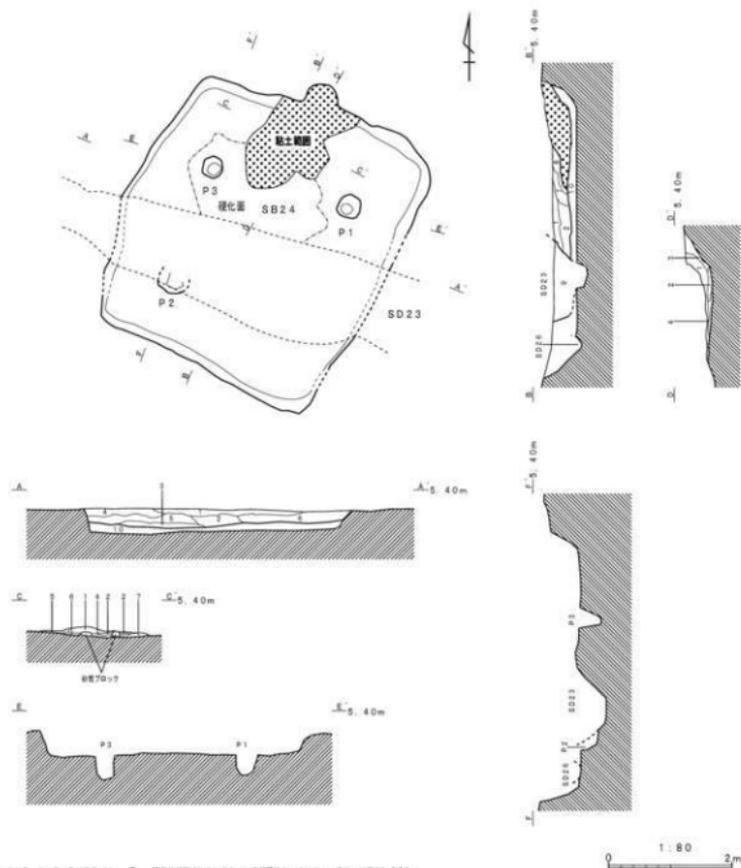


- A・B
- 1 10YR2/1 黒 跡まわりが概く8~12mmの繊維5%, 2~3mmのスコリア5%を含む
 - 2 5YR2/1 黒 跡まわりが概く10~20mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア3%を含む
 - 3 7.5Y2/1 黒 跡まわりが概く10~15mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア3%を含む
 - 4 10YR3/2 黒 跡まわりが概く15~20mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア3%を含む
 - 5 10YR3/2 黒 粘土まじりの層で8~10mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア1%を含む
 - 6 2.5Y3/2 黒 跡まわりが概く10~15mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア3%を含む
 - 7 10YR3/2 黒 粘土まじりの層で8~10mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア1%を含む
 - 8 10YR3/2 黒 粘土まじりの層で15~20mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア3%を含む
 - 9 10YR4/2 灰黒 跡まわりが概く粘土層で5mmの繊維を含む
 - 10 5YR2/1 黒 砂質土層
- C・D
- 1 10YR4/2 灰黒 粘性が有る粘土層で1~2mmの繊維を少量含む
 - 2 N2/O 黒 2~3mmの繊維を主体とした黒っぽい土で粘土の跡まわりを少量含む
 - 3 10YR3/1 黒 粘土層で5mmの繊維1%, 1~2mmのスコリアを少量含む, やや黒っぽい
 - 4 10YR3/3 暗黒 跡まわりが有る層から粘土層で1~2mmの繊維を少量含む
 - 5 2.5YR2/1 赤 跡まわりが概く流石状で10~20mmの繊維1%を含む
 - 6 7.5YR2/1 黒 跡まわりが概く粘土層で2~3mmの繊維1%を含む
 - 7 10YR3/2 黒 粘性が有る粘土層で1~2mmの繊維を少量含むホマドの堆
 - 8 10YR4/2 灰黒 跡まわりが有る粘土層で1~2mmの繊維を少量含む
 - 9 10YR2/1 黒 跡まわりが有る粘土層で1~2mmの繊維を少量含む
 - 10 10YR3/2 黒 跡まわりが有る粘土層で1~2mmの繊維を少量含む
 - 11 10YR3/2 黒 跡まわりが有る粘土層で2~3mmの繊維1%, 1~2mmのスコリア1%を含む
 - 12 10YR3/2 黒 粘性が有る粘土層で5mmの繊維を少量含む
 - 13 7.5YR3/2 黒 粘土層で2~3mmのスコリアを含む
 - 14 5YR3/1 黒 5~8mmの繊維を多量と粘土を少量含む

第131図 7区第23号住居址実測図(2)

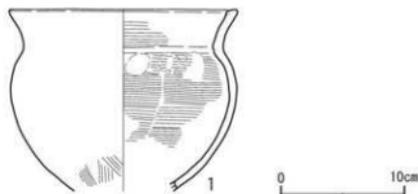


第132図 7区第23号住居址出土遺物実測図



- A・B 1 7. 5YR2/1 黄 細まりが概(10~20mm)の礫層3%, 2~3mmのスコリア3%を含む
 2 7. 5YR2/1 黄 細まりが概(10~12mm)の礫層3%, 3~5mmのスコリア5%を含む
 3 10YR3/2 黄 概がく黄色い珪を多量に含む層で10mmの礫層1%, 1~2mmのスコリア1%を含む
 4 10YR2/1 黄 細まりが概(10~15mm)の礫層3%, 2~3mmのスコリア1%を含む
 5 7. 5YR2/1 黄 細まりが概(10~12mm)の礫層3%, 3~5mmのスコリア5%を含む
 6 7. 5YR2/1 黄 細まりが概(8mm)の礫層3%, 2~3mmのスコリア3%を含む
 7 10YR3/2 黄 粘土を多量に含む層で8mmの礫層3%, 2~3mmのスコリア1%を含む
 8 7. 5YR3/2 黄 粘土を多量に含む層で8mmの礫層3%, 2~3mmのスコリア3%を含む
 9 5YR2/1 黄 礫 0.5~1.0mmの内径, 1.0~2.0mmの礫層3%, 2~3mmのスコリア1%を含む(SD23の埋土?)
 10 5YR3/1 黄 砂 硬土層
- C・D 1 7. 5YR2/2 黄 細まりが概粘土層で礫層はほとんど含まず2~3mmの赤鉄屑と炭化物を少量含む
 2 5YR3/1 黄 細まりが概粘土層で鉄土を多量に含む
 3 7. 5YR3/1 黄 珪 3mmの礫層を多量に含む
 4 2. 5YR2/1 赤 概れがく1層の厚で2~3mmの礫層を含む
 5 5YR2/1 黄 細まりが概粘土層で2~3mmの礫層を多量に含む層に属し
 6 5YR3/1 黄 粘土層で礫層を多量と2~3mmの赤鉄屑を多量に含む
 7 5YR2/1 黄 珪 細まりが概(2~3mm)のスコリアを多量に含む

第 133 図 7区第 24号住居址実測図



第134図 7区第24号住居址出土物実測図

強い屈曲を持つ円で、内外面に丁寧なミガキ調整と黒色処理が施される。1はカマド周辺から、3は床面からそれぞれ出土した。

時期 SB22に切られることから、7世紀（前半～中頃か）に位置づけられる。

7区第24号住居址（7-SB24 第133図・第134図）

148-30Gr・148-31Gr・149-31Grで検出された。南側をSD23・SD26に切られている。平面形は方形で、立ち上がりは深さ0.26mが残存していた。

規模 東西4.29m×南北4.53m 重複関係（古）SB24→SD23・SD26（新）

主軸方位 N-24°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 3基検出。P1・P2は径0.34～0.40m・深さ0.29～0.33mである。P3は径0.34m・深さ0.29mを測る。主柱穴はP1～P3と考えられる。

貼床 黒褐色の砂質土を使って床面を構築している。また住居址中央部に硬化面が認められる。

カマド 北辺の中央に位置している。ほぼ崩壊していたが、砂質ブロックが2か所で検出されたことから、これらが袖部であったと考えられる。

遺物 土師器の小型甕を1点図示した。やや口唇部が肥大化しているが、全体的に薄手の作りである。外面は摩耗しているため、調整痕は明らかではないが、胴部下半において、わずかにハケメ調整を観察できる。図示できなかった小片に遠江IV期後葉頃に位置づけられる非常に小型化した須恵器環身がある。

時期 須恵器の小片から7世紀後半頃に位置づけられる。

7区第25号住居址（7-SB25 第135図・第136図）

148-33Gr・149-32Gr・149-33Grで検出された。SB15により南西部が切られているため、上端の一部が検出されていないが、平面形は方形と推定される。立ち上がりは深さ0.44mが残存していた。

規模 東西3.22m×南北3.11m（残存部） 重複関係（古）SB25→SB15（新）

主軸方位 N-4°-W 壁溝 検出されない。

柱穴 4基検出。P1～P4は径0.31～0.37m・深さ0.23～0.29mを測る。いずれも主柱穴と考えられるが、P3はやや軸が東へずれている。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。住居址東寄りに硬化面が認められる。

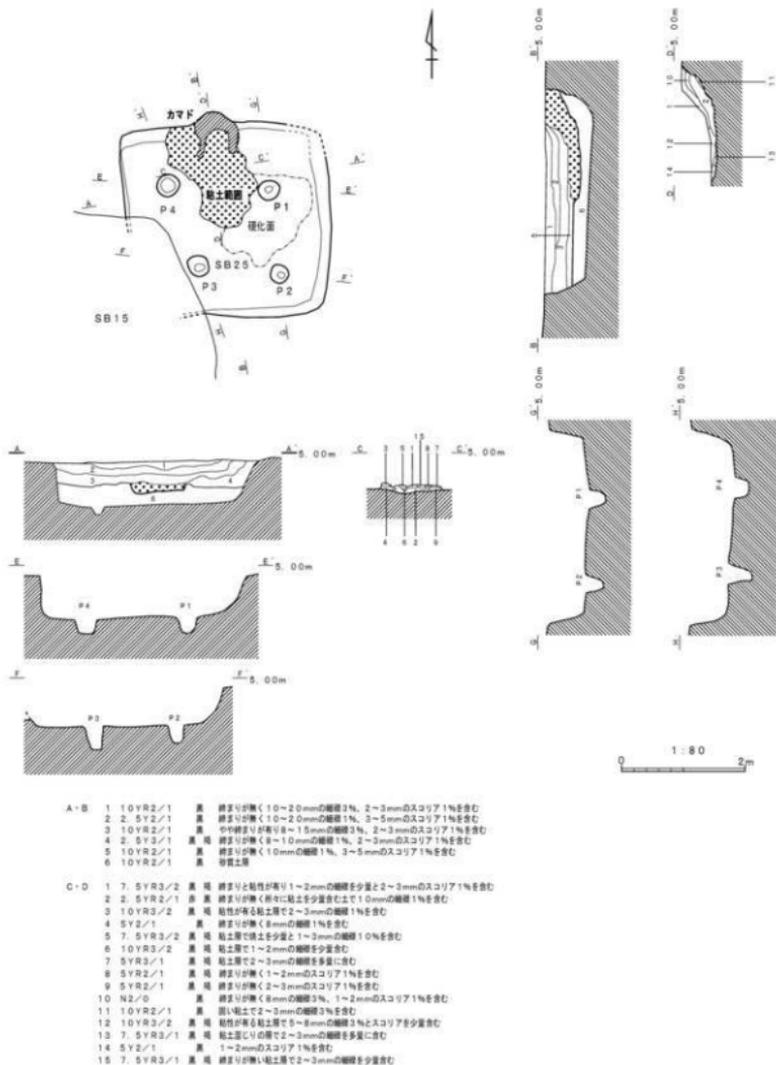
カマド 北辺の中央に位置する。カマドは南側へ向けて大きく崩壊していたが、袖部と燃焼部を検出した。袖部では2点の大形の礫が出土している。

遺物 2点を図示した。ともに土師器の甕で、ミガキ調整が施される。1は掘方面から、2は床面から出土した。また図示できなかった小片には遠江IV期後葉頃に位置づけられる須恵器環身がある。

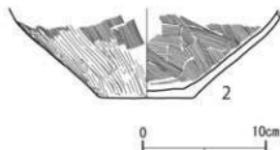
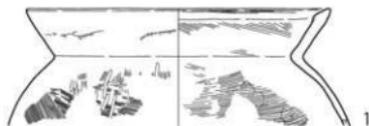
時期 7世紀後半に位置づけられる。

7区第26号住居址（7-SB26 第137図）

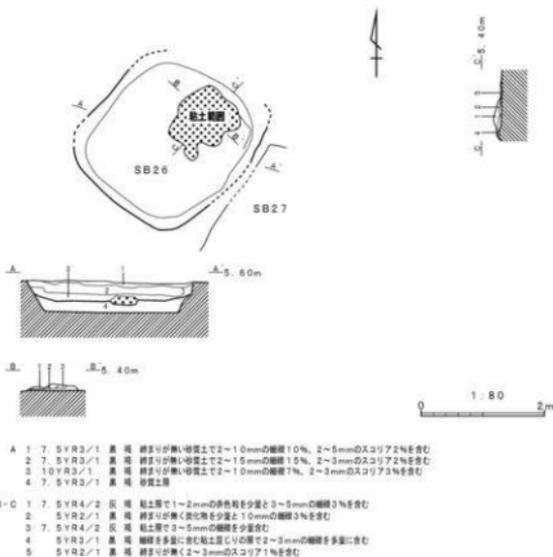
148-30Gr・149-30Grで検出された。小型のSBでSD12・SD26と重複するが、平面形は隅丸方形



第135図 7区第25号住居址実測図



第136図 7区第25号住居址出土遺物実測図



第137図 7区第26号住居址実測図

と推定される。立ち上がりは深さ0.27mが残存していた。

規模 東西2.36m×南北2.67m(残存部) 重複関係 (古)SB26→SD12・SD26(新)

主軸方位 N-39°-W 壁溝 検出されない。柱穴 検出されない。

貼床 黒褐色の砂質土を使って床面を構築している。硬化面は検出されなかった。

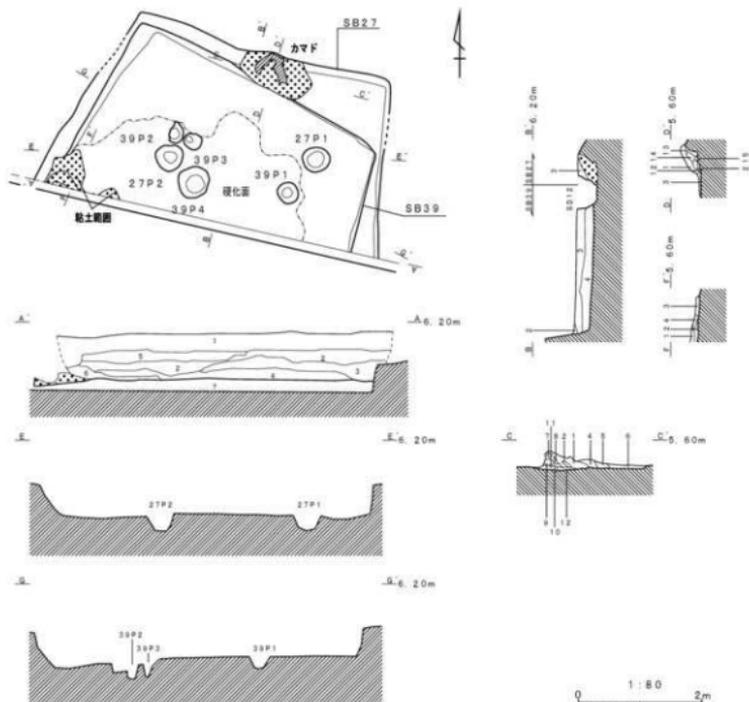
カマド 形状の確認はできなかったが、北辺のやや東寄りに粘土の広がり確認されたため、この位置に造られたものと考えられる。

遺物 図示可能な出土遺物はなかった。また時期を比定できるような遺物も出土していない。

時期 不明。

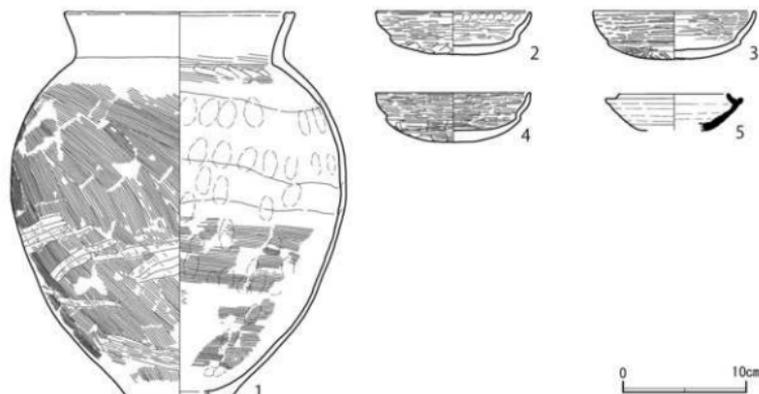
7区第27・39号住居址(7-SB27・7-SB39 第138図・第139図)

149-30Grで検出された。SB39がSB27を切っているが、SB39の方が小型で、SB27の範囲内に収まる。したがって、検出段階では一つの住居址として認識しており、掘削途中でSB39を認識した。両遺構ともに南側が調査区外へ広がっており、検出部は全体のおよそ半分であるが、平面形は方形と推定される。



- A・B
- 1 10YR3/2 オリーブ 中砂まりが厚り3～7mmの層厚1%、2mmのスコリアを少量含む
 - 2 10Y2/1 黒 中砂まりが厚り3～7mmの層厚10%、1～3mmのスコリアを少量含む
 - 3 N2/O 黒 中砂まりが厚り3～5mmの層厚10%、1～3mmのスコリアを少量含む
 - 4 7.5Y2/1 黒 中砂まりが厚り2～7mmの層厚10%、1～2mmのスコリアを少量含む
 - 5 N2/O 黒 中砂まりが厚り2～5mmの層厚10%、1～2mmのスコリアを少量含む
 - 6 10Y3/1 オリーブ 粘性がある粘土層で2～7mmの層厚5%、3mmのスコリアを含む、カマド
 - 7 7.5Y2/1 黒 砂質土層
- C・D
- 1 10YR3/2 灰黄緑 跡まりが有る粘土層で1～2mmの赤色粉を少量と2～3mmの層厚1%を含む
 - 2 10YR3/2 黒 焼 1～2mmの層厚を少量含む焼土層
 - 3 7.5YR3/1 黒 焼 跡まりが焼く2～3mmの層厚1%、1～2mmのスコリアを少量含む
 - 4 7.5YR3/1 黒 焼 5mmの層厚を少量と2～3mmの赤色粉を少量含む
 - 5 7.5YR3/1 黒 焼 跡まりが焼く5mmの層厚1%を含む
 - 6 7.5YR2/1 黒 焼 跡まりが焼く2～3mmの層厚を多量に含む層
 - 7 5YR2/1 黒 焼 跡まりが有る土層で1～2mmの層厚1%を含む
 - 8 10YR3/2 灰黄緑 焼土層で1～2mmの層厚を少量含む
 - 9 10YR3/2 黒 焼 粘土層で2～3mmの赤色粉を多量に含む
 - 10 7.5YR3/2 黒 焼 跡まりが有る土層で1～2mmの赤色粉と1～2mmの層厚を含む
 - 11 10YR3/2 黒 焼 極小の焼土粉を多量に含む層
 - 12 7.5YR3/2 黒 焼 極小の焼土粉を多量に含む層
 - 13 5YR3/1 黒 焼 跡まりが有る土層で2～3mmの層厚1%を含む
 - 14 7.5YR3/2 黒 焼 跡まりが有る粘土層で1～2mmの層厚1%を含む
 - 15 5YR3/1 黒 焼 跡まりが有る土層で2～3mmの層厚1%を含む
- F
- 1 10YR3/3 焼 焼土層で2～3mmの層厚と6～10mmの焼土粉を少量含む
 - 2 3.5Y2/1 黒 焼 2～3mmの層厚を多量に含む中砂質土層
 - 3 10YR2/1 黒 焼 跡まりが焼く5～6mmの層厚1%を含む
 - 4 5YR2/1 黒 焼 粘土質の層で焼化物を少量と層厚を多量に含む

第138図 7区第27・39号住居址実測図



第139図 7区第27号住居址出土遺物実測図

SB27の立ち上がりは深さ0.27mが残存していた。SB39は認識ができず、掘削を終えていたため、確認されていない。

規模 SB27 東西4.97m×南北2.94m(調査区内)

SB39 東西4.59m×南北2.43m(調査区内)

重複関係 (古) SB27→SB39→SD12(新)

主軸方位 SB27 N-15°-E SB39 N-48°-W 壁溝 いずれも検出されない。

柱穴 SB27 2基検出。P1・P2は径0.44～0.45m・深さ0.25～0.27mを測る。

SB39 4基検出。P1は径0.35m・深さ0.18m、P2は径0.34m・深さ0.22m、P3は径0.29m・深さ0.36m、P4は径0.54m・深さ0.17mを測る。

なお柱穴の帰属遺構は、調査時の所見に従った。

貼床 SB27 検出されなかった。

SB39 黒色の砂質土を使って床面を構築しており、住居址の中央から南西側にかけて硬化面も認められる。

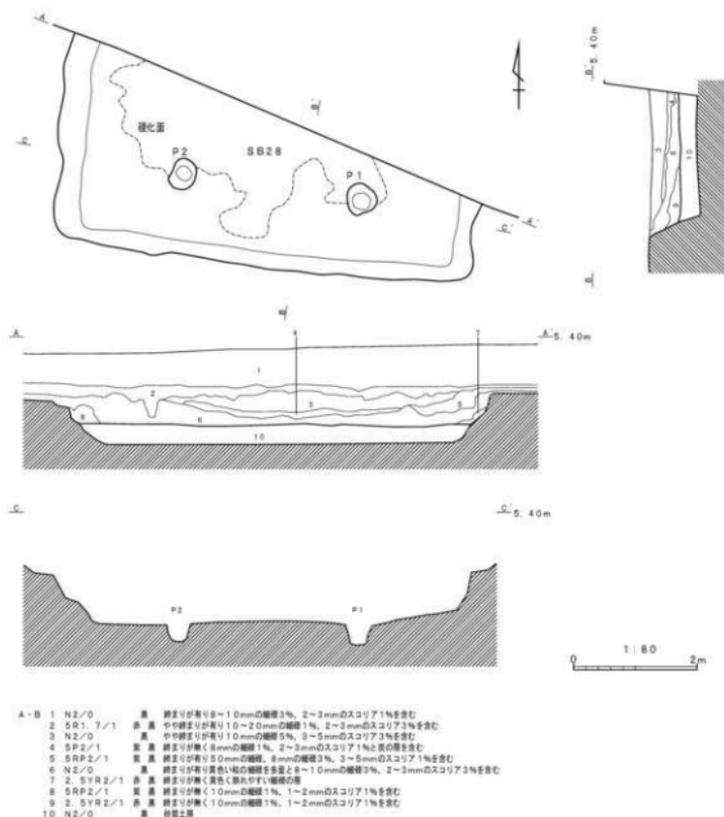
カマド SB27 北辺に位置する。やや崩壊しているが、袖部と燃焼部が確認された。また芯材と考えられる砂質ブロックが検出された。

SB39 西辺に位置するが、大半が調査区外へ続く。北側の袖部を確認した。

遺物 遺物はSB27で大部分を取り上げているが、出土遺物の古相のものをSB27の遺物として、土師器4点、須恵器1点の計5点を図示した。1～5は全てカマド周辺からの出土である。1は球胴甕で、胴部中央の接合部に丁寧なヘラナデを施す。2～4は丸底環で、それぞれ明確な稜が認められ、体部下半をケズリで調整した後に内外面ともにミガキ調整を施す。4のみ内外面ともに黒色処理が施される。5は遠江Ⅳ期の須恵器の坏身で、外面全面に降灰がかかる。

一方、SB39の遺物はSB27として一括で取り上げを行っている遺物の中に遠江Ⅴ期前半の須恵器有台坏身の小破片が出土している。これはSB27出土遺物とは時期が異なるものであることから、SB39の遺物である可能性がある。

時期 SB27は7世紀に位置づけられる。SB39は西カマドを持っていることやSB27との切り合い関係を根拠に、遠江Ⅴ期前半がSB39の年代を表している可能性がある。8世紀前半であろう。



第140図 7区第28号住居址実測図

7区第28号住居址 (7-SB28 第140図・第141図)

145-35Grで検出された。北側は調査区外へと広がり、南半のみを検出した。平面形はやや不整な方形と推定される。立ち上がりは深さ0.49mが残っていた。

規模 東西6.84m×南北2.40m(調査区内) 重複関係 なし

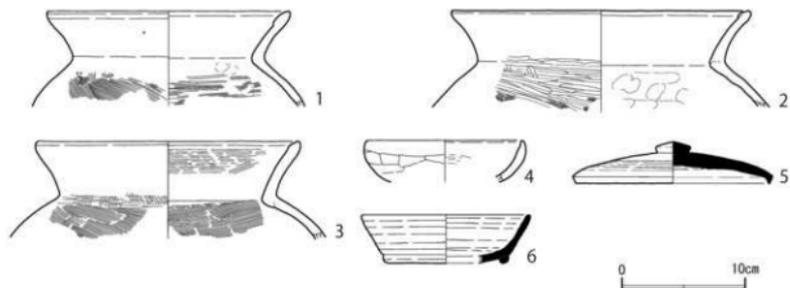
主軸方位 不明。壁溝 検出されない。

柱穴 2基検出。P1・P2は径0.50m・深さ0.29~0.33mを測る。いずれも主柱穴と考えられる。

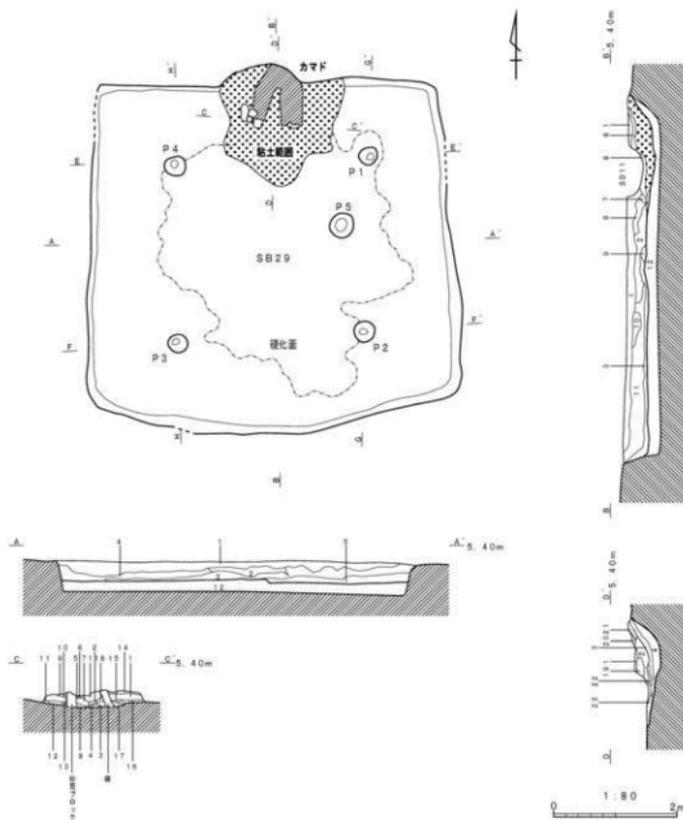
貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また住居址中心部に硬化面が認められる。

カマド 検出されない。

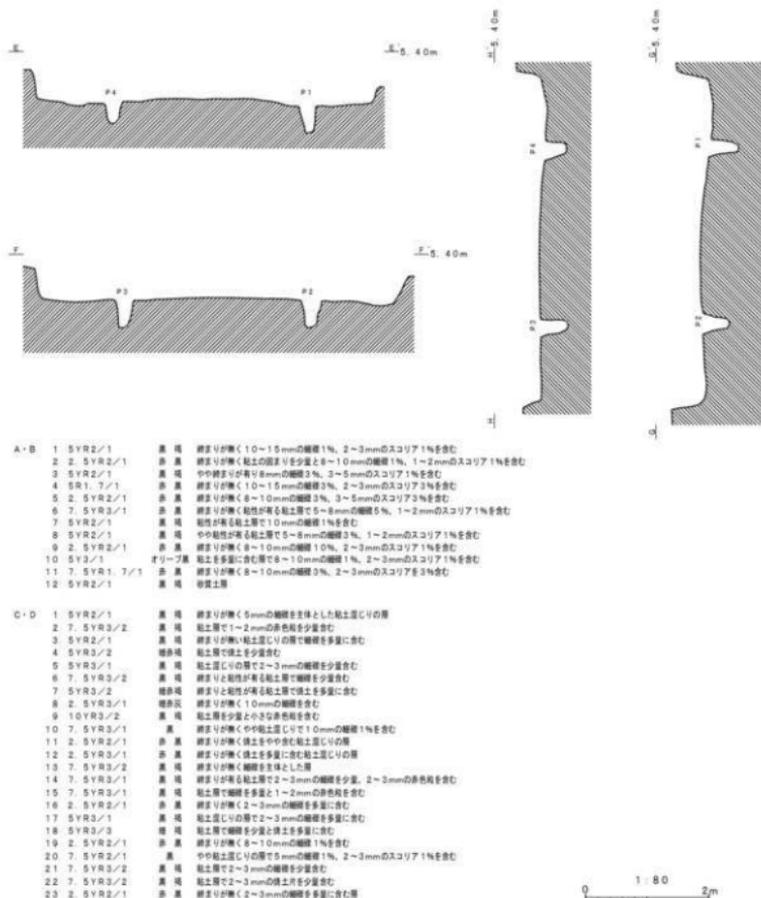
遺物 土器6点を図示した。1~3は土師器の球胴甕で、それぞれ口縁部は肥大化し、2・3の頸部にはミガキ調整が施されている。4の土師器丸底甕で、外面はやや摩耗している。5は須恵器の摘み蓋、6は底部が張り出す須恵器の有台杯身で、ともに遠江V期前半頃に位置づけられる。いずれも覆土中層から出土した。



第141図 7区第28号住居址出土遺物実測図



第142図 7区第29号住居址実測図(1)



第143図 7区第29号住居址実測図(2)

時 期 8世紀前半に位置づけられる。

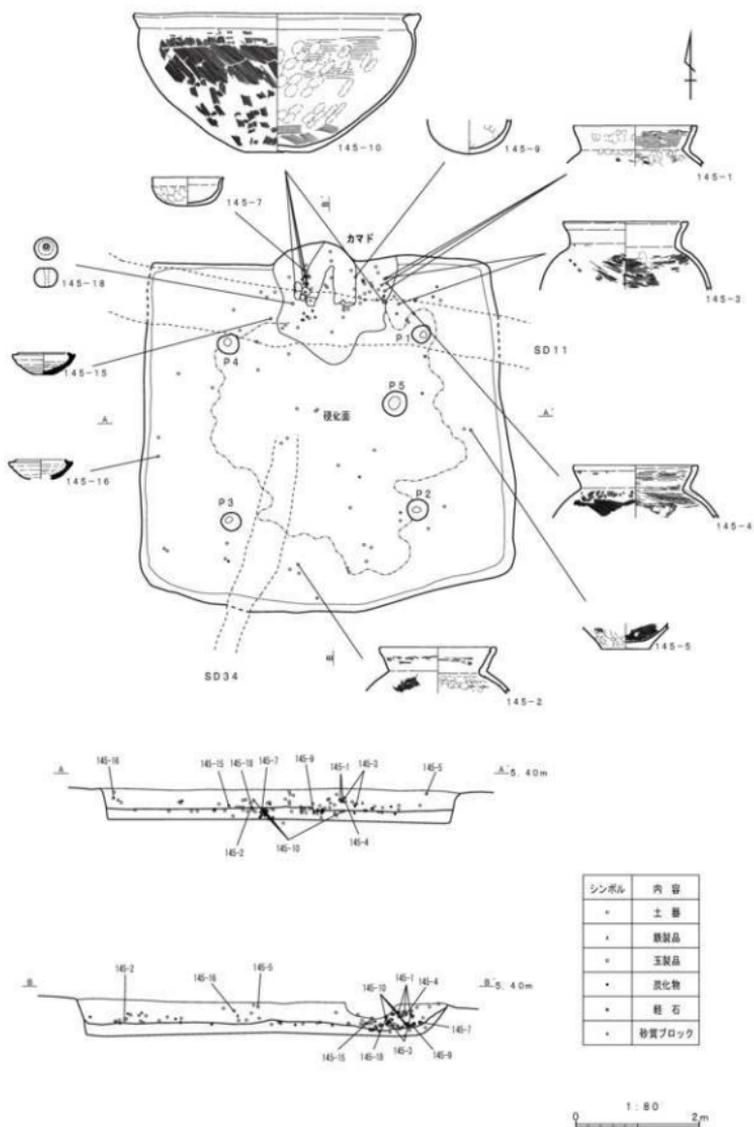
7区第29号住居址(7SB29 第142図～第145図)

148-31Gr・148-32Gr・149-31Gr・149-32Grで検出された。SD11・SD34に切られ、上端が一部検出されていないが、全容はほぼ確認できた。平面形は南辺中央がやや張り出す五角形で、立ち上がりは深さ0.36mが残存していた。

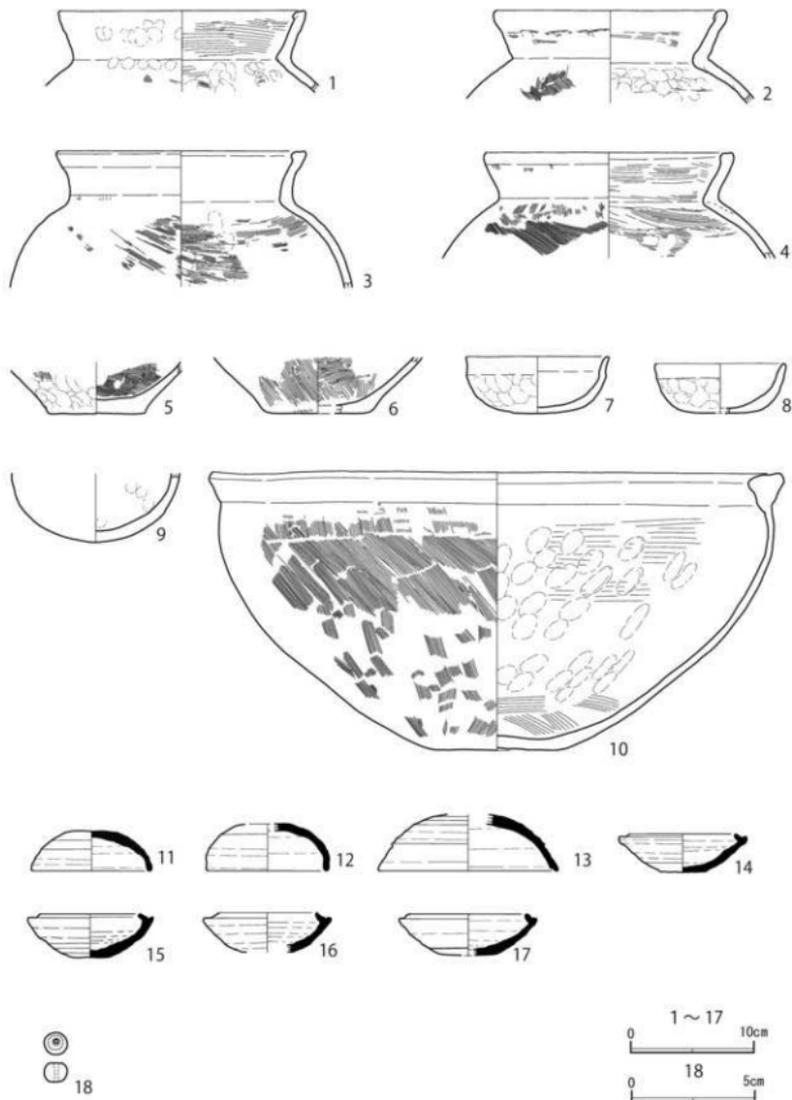
規 模 東西6.05m×南北5.48m 重複関係 (古)SB29→SD11・SD34(新)

主軸方位 N-2°-W 壁 溝 検出されない。

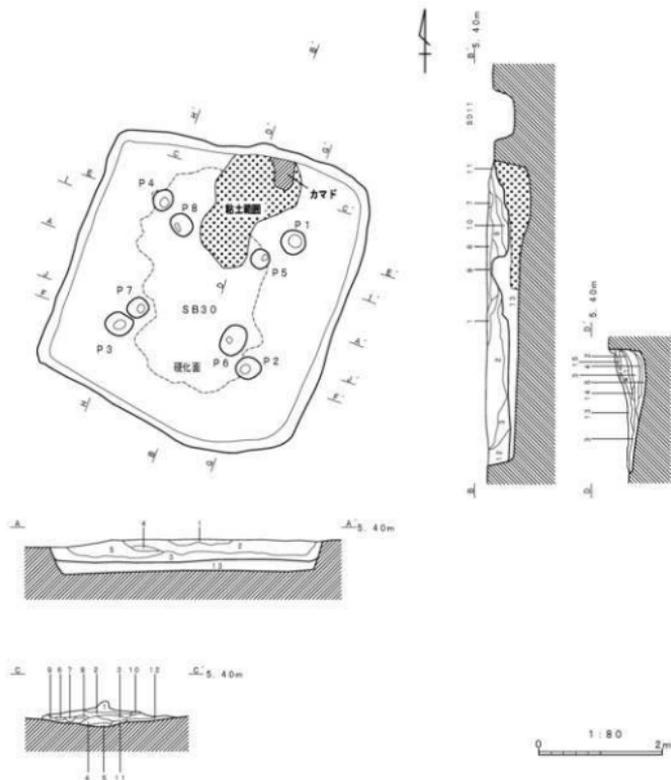
柱 穴 5基検出。P1～P4は径0.30～0.35m・深さ0.34～0.45mを測る。P5は住居址中央東寄り検出され、径0.40m・深さ0.09mを測る。主柱穴はP1～P4と考えられる。



第144図 7区第29号住居址遺物出土状況図



第145図 7区第29号住居址出土遺物実測図



第146図 7区第30号住居址実測図(1)

貼床 黒褐色の砂質土を使って床面を構築している。また住居址中央には硬化面が認められる。

カマド 北辺中央に位置している。袖部と燃焼部を確認し、袖部では礫や砂質ブロックが検出された。またカマド周辺には崩壊に伴う粘土の広がりが認められた。

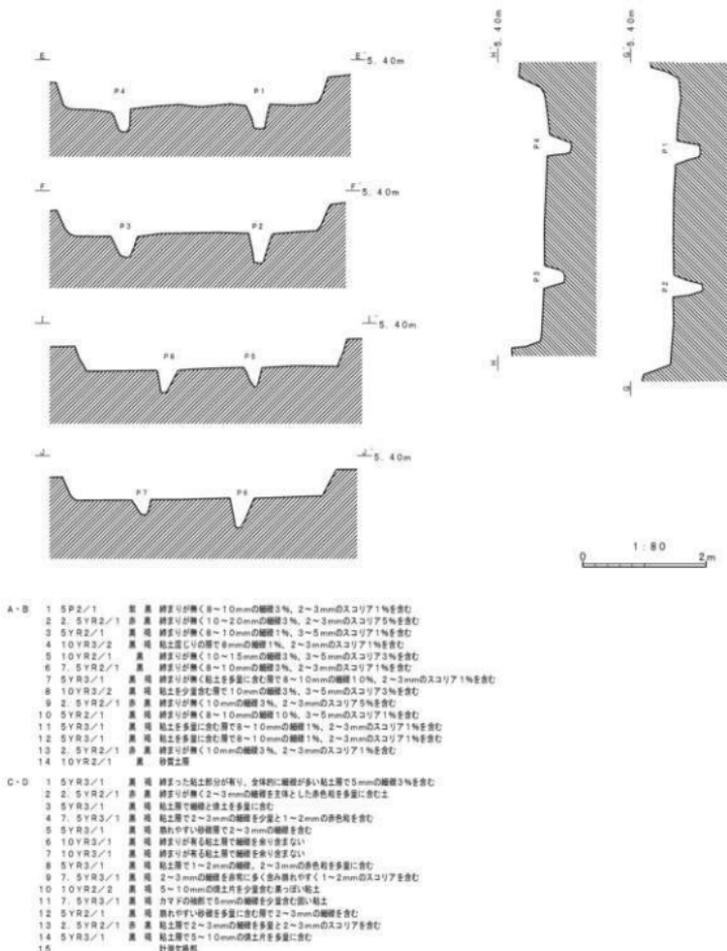
遺物 土器17点、玉製品1点の計18点を図示した。1～10が土師器、11～17は須恵器である。

1～6は球胴甕で、ミガキ調整は認められない。7・8はやや平底を呈す坏で、ともに黒色粒をまばらに含んだ粗製の胎土であり、指頭圧痕が明瞭に残る。9は7・8と同様の粗製胎土の丸底碗である。10は塙で、張と調整方法が共通する。10はSB31で出土した破片と接合した。

11～13は坏蓋、14～17は坏身である。やや大形の13を除き、それぞれ遠江Ⅳ期後葉頃に位置づけられるが、覆土中層以上からの出土である。18は土製の丸玉で最大長0.76cm、径0.89～0.92cm、重さは0.54gを測る。

1・3・4・7・8・9・10・18はカマド周辺からの出土である。なお、8は出土位置の記録はないが、カマドの写真に写っていたため、カマド出土とした。

時期 7世紀後半頃に位置づけられる。



第147図 7区第30号住居址実測図(2)

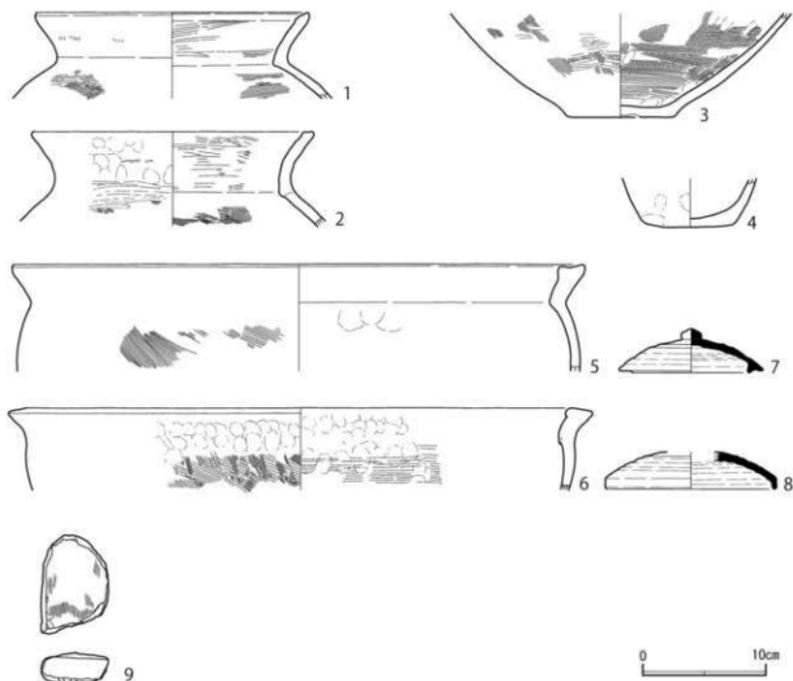
7区第30号住居址(7SB30 第146図~第148図)

149-31Gr・149-32Grで検出された。平面形は北東角および南北角がやや張り出す不整な方形で、立ち上がりは深さ0.33mが残存していた。

規模 東西4.42m×南北4.69m 重複関係 なし

主軸方位 N-22°-E 壁溝 検出されない。

柱穴 8基検出。P1~P4は径0.36~0.45m・深さ0.34~0.45mである。P5~P8は、P1~P4に隣接して掘られた柱穴で、P5は径0.30m・深さ0.31m、P6は径0.51m・深さ0.47m、P7は径0.34m・



第148図 7区第30号住居址出土遺物実測図

深さ0.23m、P8は径0.39m・深さ0.36mを測る。2基ずつ組になっていることから、柱穴を掘り直した可能性がある。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。また住居址中央に硬化面が認められる。

カマド 北辺のほぼ中央に位置する。ほぼ崩壊しており、粘土の広がりや東袖の一部のみが検出された。

遺物 土器8点、石器1点の計9点を図示した。1～6は土師器、7・8は須恵器である。3のみ床面からの出土で、その他は覆土中層から出土している。

1～3は球胴甕で、2の頸部と3の胴部にはミガキ調整が認められる。4は小型の平底杯で、器壁はやや厚手である。5・6は壺で、ハケメのみの調整で、張とは異なりミガキ調整は施されていない。

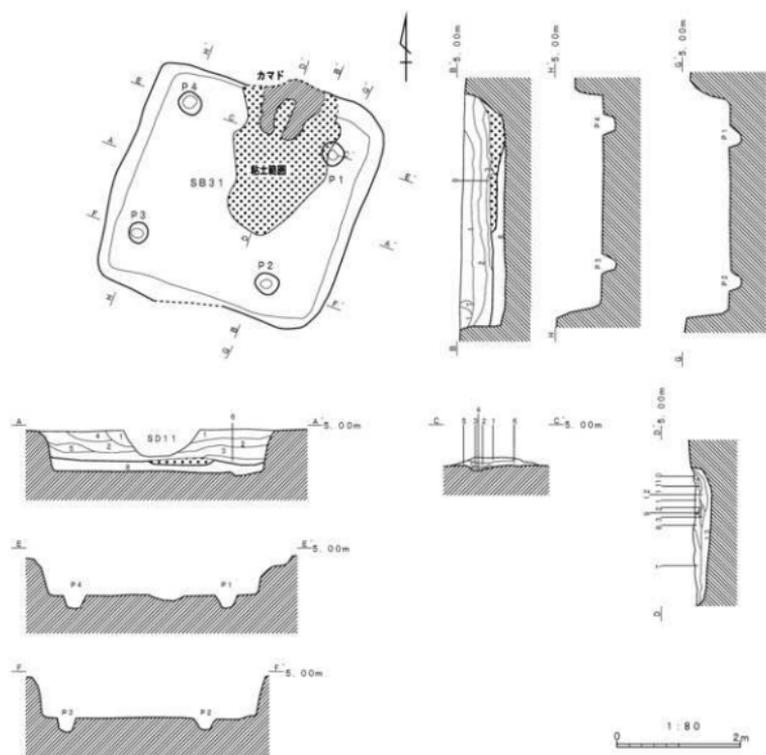
7は返り蓋、8は摘み部が失われているが、摘み蓋である。8は口縁部を垂直に折り返す。ともに遠江IV期後葉～V期前半頃に位置づけられる。

9は砥石である。材質は凝灰石で、表と裏面の2面に砥面がある。

時期 7世紀後半～8世紀前半に位置づけられる。

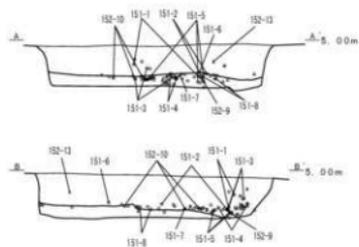
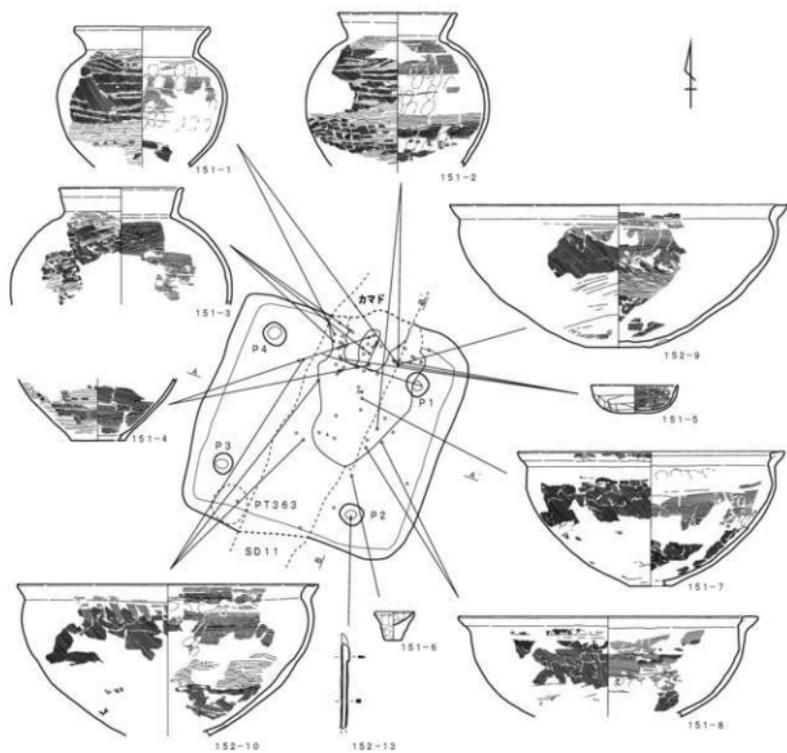
7区第31号住居址 (7-SB31 第149図～第152図)

150-32Grで検出された。北辺、南辺ともにSD11により上端が切られているが、SD11の深度は浅く、SB31のカマドの下部は残存していた。平面形は方形で、立ち上がりは深さ0.51mが残存していた。大形の壺4個体やミニチュア土器が出土するなど、他のSBとは遺物相がやや異なる。



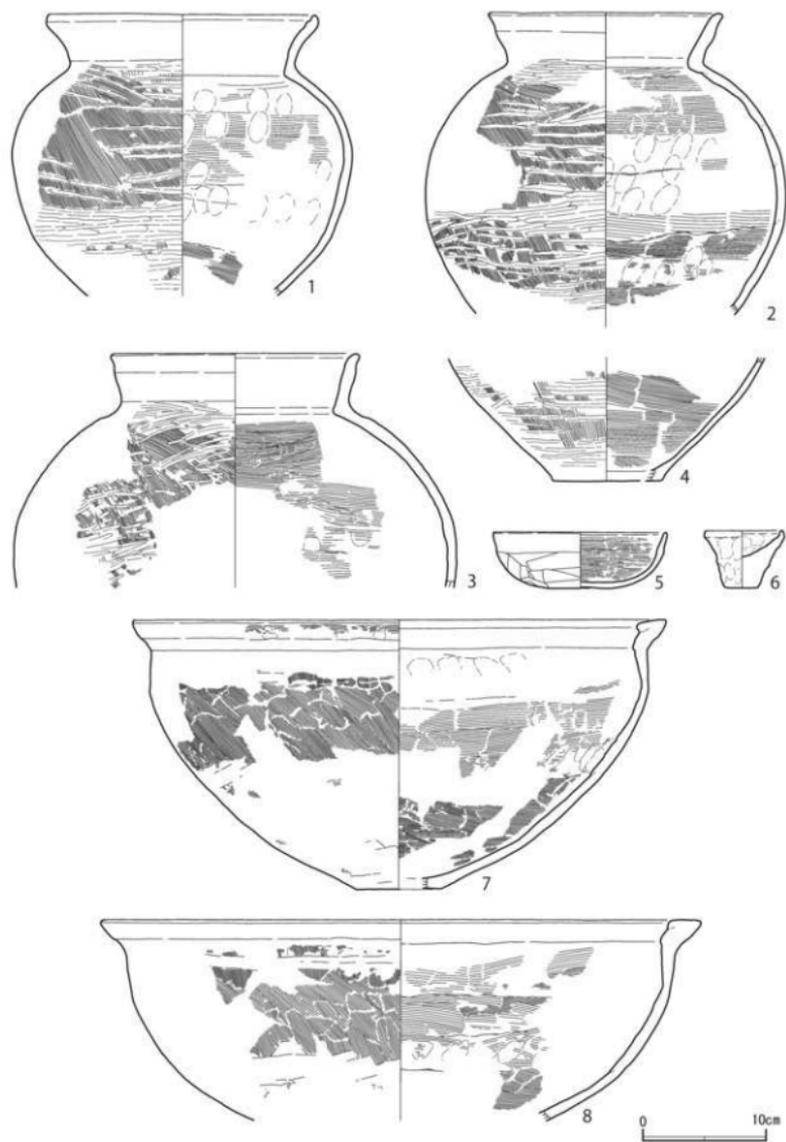
- A・D
- 1 2. 5YR2/1 漆 跡まりが軟く(8~10mm)の繊維3%、2~3mmのスコリア1%を含む
 - 2 5YR2/1 漆 跡まりが軟く10mmの繊維3%、1~2mmのスコリア1%を含む
 - 3 N2/0 漆 跡まりが軟く10~15mmの繊維5%、2~3mmのスコリア1%を含む
 - 4 N2/0 漆 跡まりが軟く(8~10mm)の繊維3%、2~3mmのスコリア1%を含む
 - 5 2. 5YR2/1 赤 跡まりが軟く(5~8mm)の繊維3%、1~2mmのスコリア1%を含む
 - 6 5YR2/1 漆 跡まりが軟く(5~8mm)の繊維1%、2~3mmのスコリア1%を含む
 - 7 5YR2/1 漆 粘土質にして5~8mmのスコリア1%、2~3mmのスコリア1%を含む
 - 8 2. 5YR2/1 漆 砂質土層
- C・D
- 1 10YR3/3 漆 跡まりと粘性が有り2~3mmの繊維を少量と3~5mmの赤色粒を含む
 - 2 7. 5YR3/3 漆 粘土で10cm以下の粘土と炭化物を少量含む
 - 3 7. 5YR3/2 漆 跡まりと粘性が有り2~3mmの繊維を少量、3~5mmのスコリアと3~5mmの赤色粒を含む
 - 4 5YR2/1 漆 繊維を多量に含む粘土質にして5mmの繊維を含む
 - 5 7. 5YR2/1 漆 跡まりが軟く(5~8mm)の繊維を多量と2~3mmのスコリア1%を含む
 - 6 2. 5YR2/1 赤 跡まりが軟く(5~8mm)の繊維を多量と2~3mmのスコリア1%を含む
 - 7 10YR3/3 漆 粘土質にして3~5mmの繊維を少量と5~10mmの粘土を含む
 - 8 5YR2/1 赤 跡まりが軟く(5~8mm)の繊維を多量と2~3mmのスコリア1%を含む
 - 9 2. 5YR2/1 赤 跡まりが軟く(5~8mm)の繊維を多量と2~3mmのスコリア1%を含む
 - 10 7. 5YR3/2 漆 跡まりと粘性が有り粘土層で5mm以上の粘土を少量含む
 - 11 10YR3/2 漆 跡まりと粘性が有り粘土層で5mm以上の粘土を少量含む
 - 12 5YR2/1 赤 繊維を多量に含む粘土質にして5~8mmの繊維を含む

第 149 図 7区第31号住居址実測図

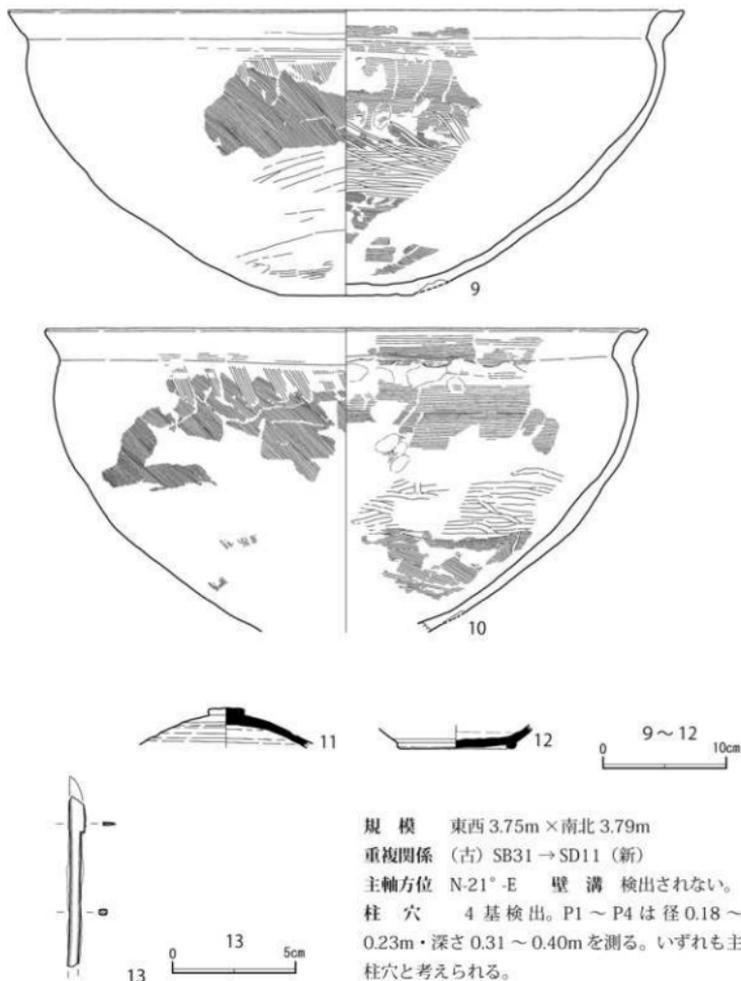


シンボル	内容
*	土器
*	石製品
*	鉄製品
*	炭化物
*	砂質ブロック

第150図 7区第31号住居址遺物出土状況図



第151図 7区第31号住居址出土遺物実測図(1)

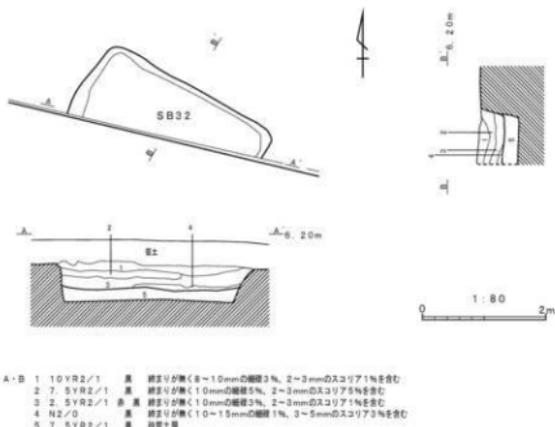


第152図 7区第31号住居址出土遺物実測図(2) 貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。硬化面は認められなかった。

カマド 北辺の中央に位置する。カマドの上端はSD11によって滅失していたが、袖部は検出することができた。また崩壊に伴う粘土が住居址中央部にまで広がっている。

遺物 土器12点、鉄製品1点の計13点を図示した。1～10は土師器、11・12は須恵器である。

1～4は球胴甕で、それぞれ頸部や胴部にミガキ調整を施す。5はやや平底を呈す坏で、緩やかに外反しながら立ち上がる。6は手づくねによるミニチュア土器で、坏形を呈し、底面の器壁は厚く、外面



第153図 7区第32号住居址実測図

には指頭圧痕が明瞭に残る。また底部には木葉痕が認められる。7～10は塙で、9と10は内面にもミガキ調整を施す。また9は口径と底径の差が他の個体よりも大きい。

11は摘み蓋、12は底部がやや張り出す有台坏身である。ともに遠江V期前半に位置づけられる。

13は片刃箭式の鉄鏃である。先端部は欠損するが、鏃身～頸部上半が残存する。鏃身間は直角間である。

1・2・3・4・5・9はカマド、もしくはカマド周辺からの出土である。

時期 8世紀前半に位置づけられる。

7区第32号住居址 (7-SB32 第153図)

147-30Gr・147-31Grで検出された。住居址南半は調査区外へ広がるため全容は明らかではないが、平面形は方形と推定される。立ち上がりは深さ0.37mが残存していた。

規模 東西3.06m×南北0.95m(調査区内) 重複関係 なし

主軸方位 不明。壁溝 検出されない。

柱穴 検出されない。

貼床 黒色の砂質土を使って床面を構築している。硬化面は認められなかった。

カマド 検出されない。

遺物 図示できる遺物はなかったが、小片遺物に遠江V期頃と推測される須恵器有台坏身がある。

時期 8世紀前半頃に位置づけられる。

7区第33・34号住居址 (7-SB33・7-SB34 第154図～第156図)

147-34Gr・148-34Grで検出された。両遺構とも北半が調査区外へ広がるため全容は明らかではないが、ともに平面形は方形と推定される。立ち上がりはSB33が深さ0.36m、SB34が0.60m残存していた。

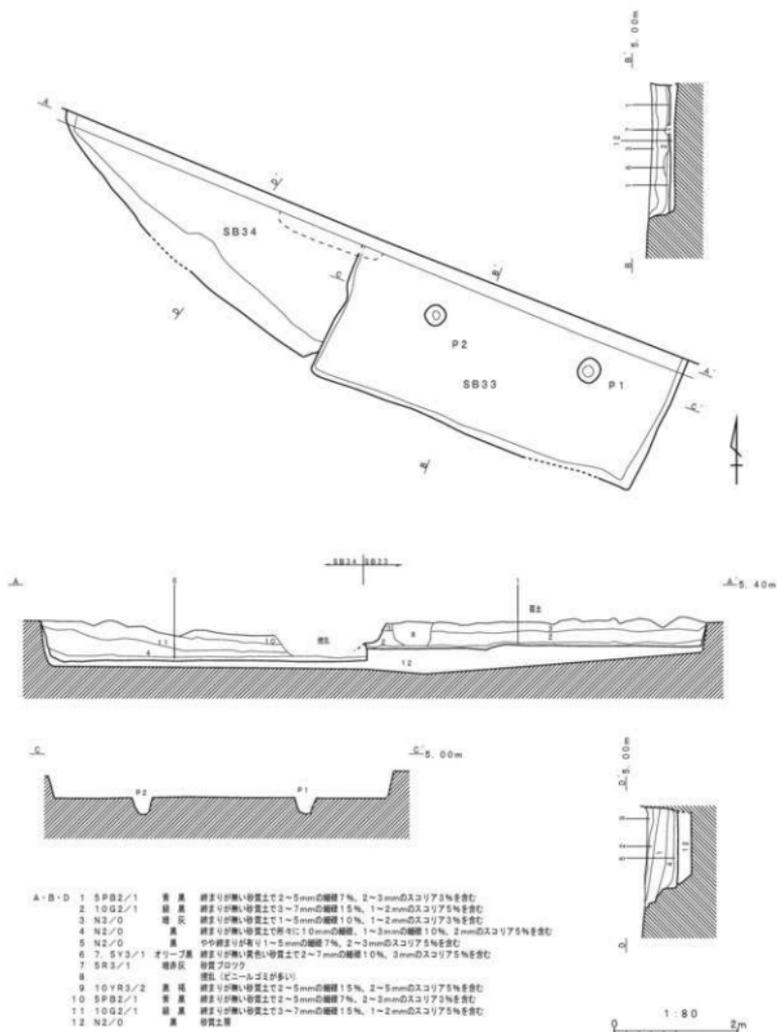
規模 SB33 東西5.50m×南北2.18m(調査区内)

SB34 東西5.81m×南北1.28m(調査区内)

重複関係 (古)SB34→SB33(新)

主軸方位 SB33 N-24°-E(カマド未検出のため推定) SB34 N-51°-E(カマド未検出のため推定)

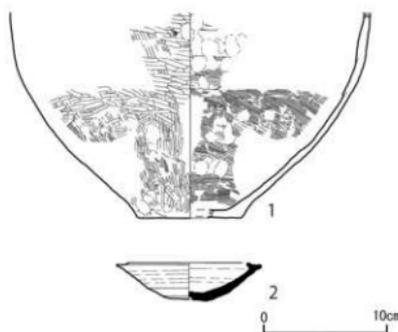
壁溝 ともに検出されない。



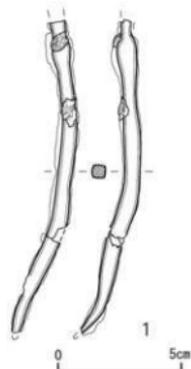
第154図 7区第33・34号住居址実測図

柱 穴 SB33 2基検出。P1・P2は径0.34～0.41m・深さ0.27～0.28mである。いずれも主柱穴と考えられる。

SB34 検出されない。



第155図 7区第33号住居址出土遺物実測図



第156図 7区第34号住居址出土遺物実測図

貼床 ともに黒色の砂質土を使って床面を構築している。硬化面は認められなかった。

カマド 検出されない。

遺物 SB33は2点を図示した。1は土師器の裏で、胴部にミガキ調整が施される。2は須恵器の坏身で、遠江IV期頃に位置づけられる。その他小片遺物として、頸部にミガキ調整を施す土師器甕がある。

SB34では図示可能な土器は出土しなかったが、不明鉄製品1点を図示した。棒状を呈し、ゆがみが極めて激しい。

時期 SB33はミガキ調整の裏と須恵器坏身から7世紀後半に位置づけられる。SB34は遺物が出土していないが、SB33に切られることからそれ以前の年代である。

(2) 掘立柱建物址 7-SH

SH遺構は調査区東半に集中する傾向があるが、SH遺構は調査区の中央から西半にかけて4棟確認された。SH1～SH4の主軸方位はほぼ同じであるが、大型のSH2のみがやや東へ振れている。なお、4棟のSHからの出土遺物は皆無であったが、他区の状況を踏まえると、柱穴の規模から全て古墳時代後期～奈良平安時代に位置づけられるものと考えられる。

7区第1号掘立柱建物址(7-SH1 第157図)

144-33Gr・144-34Gr・145-34Grで検出された。桁行(南北)3間、梁行(東西)3間の建物で、平面形は南北方向に長軸を持つ長方形を呈する。SH2と柱穴を共有するが、両遺構の新旧関係は不明である。

規模 東西3.98m×南北5.26m 重複関係 SH1・SH2の新旧関係は不明。

主軸方位 N-33°E

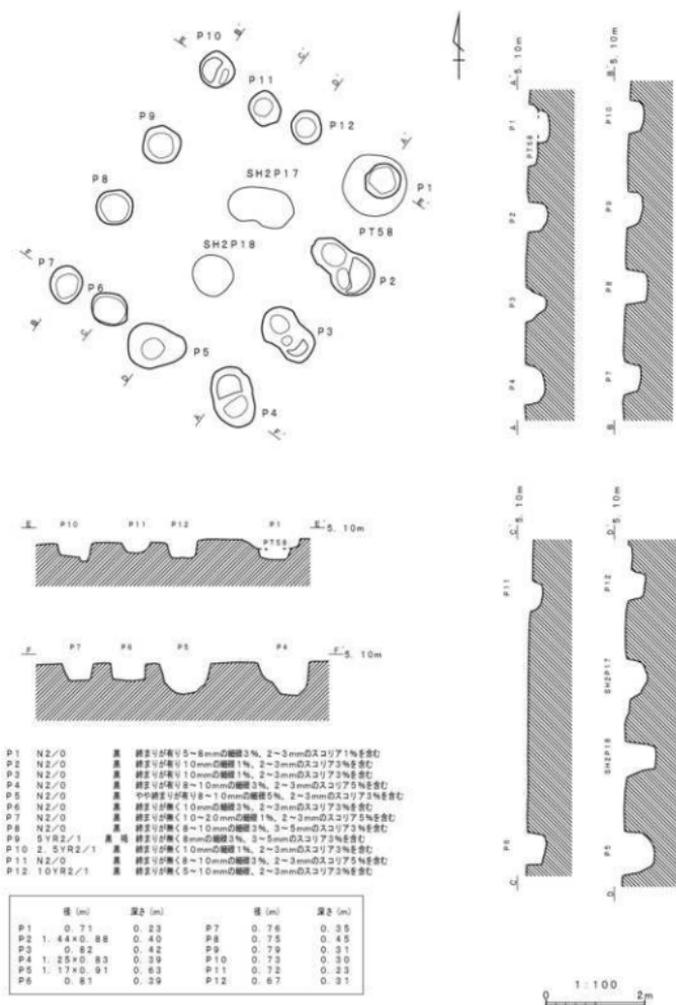
柱穴 平面形は円形および楕円形を呈する。北東-南西ライン(エレベーション図A-A'、B-B')における柱穴の規模・深さはほぼ一定であるが、これに直行するライン(E-E'、F-F')の規模・深さには、ばらつきがある。またP2とP5はSH2の柱穴列に共用されている。柱穴規模は第157図参照。

桁間 北から1.84m、1.69m、1.73m。 梁間 西から1.15m、1.05m、1.88m。

時期 不明。

7区第2号掘立柱建物址(7-SH2 第158図・第159図)

144-32Gr・144-33Gr・144-34Gr・145-33Gr・145-34Grで検出された。全体で桁行(南北)5間、梁行(東西)4間(庇を除けば3間)の建物で、7区の中で最大規模のSHである。平面形は南北方向に長軸を持つ長方形を呈し、西辺には二重柱穴列が認められるため、片面庇付建物と考えられる。



第157図 7区第1号掘立柱建物址実測図

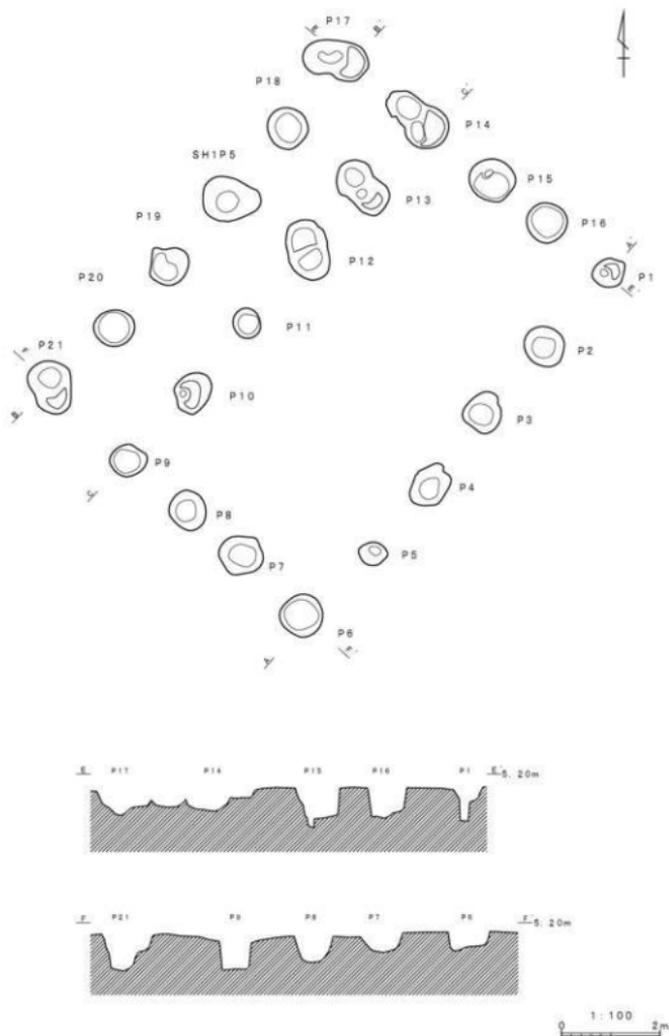
規模 全体 東西7.08m×南北9.40m

身舎 東西(3間)5.18m×南北(5間)9.40m

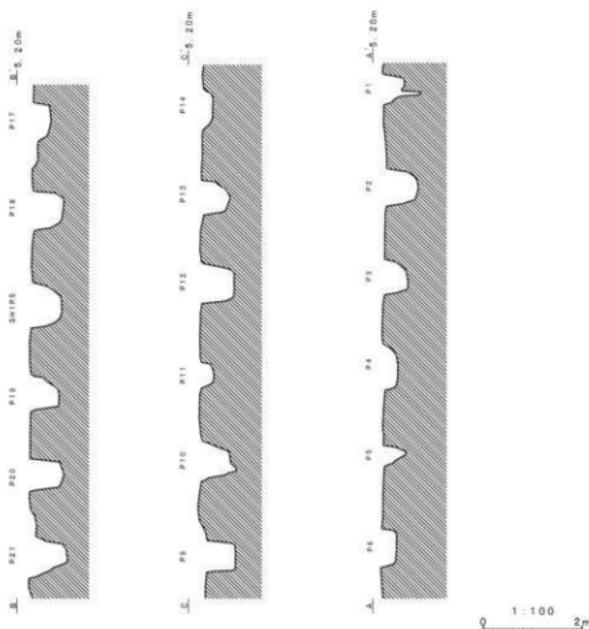
庇 東西(1間)2.00m×南北(5間)8.78m

重複関係 (古)SH2→SD10・SD11(新) 主軸方位 N-41°E

柱 穴 平面形は円形および楕円形を呈する。SH1と比べて規模や深さに均一性があるが、P5や



第158図 7区第2号掘立柱建物址実測図(1)



P1	5RP1, 7/1	溝	跡残りが概く10~20mmの幅残1%, 3~5mmのスコリア73%を含む
P2	N2/0	溝	跡残りが概く8mmの幅残3%, 10mmのスコリア5%を含む
P3	2.5YR2/1	溝	跡残りが概く10mmの幅残3%, 5~8mmのスコリア5%を含む
P4	N2/0	溝	跡残りが概く10~20mmの幅残1%, 3~5mmのスコリア73%を含む
P5	2.5YR2/1	溝	跡残りが概く8~10mmの幅残1%, 3~5mmのスコリア71%を含む
P6	5RP1, 7/1	溝	跡残りが概く8~10mmの幅残1%, 2~3mmのスコリア73%を含む
P7	5RP1, 7/1	溝	跡残りが概く10~12mmの幅残1%, 2~3mmのスコリア75%を含む
P8	N2/0	溝	跡残りが概く8~10mmの幅残3%, 2~3mmのスコリア73%を含む
P9	N2/0	溝	跡残りが概く10~12mmの幅残3%, 2~3mmのスコリア75%を含む
P10	5YR2/1	溝	跡残りが概く10mmの幅残1%, 2~3mmのスコリア73%を含む
P11	2.5YR2/1	溝	跡残りが概く10mmの幅残1%, 2~3mmのスコリア73%を含む
P12	N2/0	溝	跡残りが概く10mmの幅残1%, 2~3mmのスコリア73%を含む
P13	N2/0	溝	跡残りが概く8~10mmの幅残1%, 2~3mmのスコリア75%を含む
P14	N2/0	溝	跡残りが概く10~15mmの幅残3%, 3~5mmのスコリア73%を含む
P15	N2/0	溝	跡残りが概く10mmの幅残1%, 2~3mmのスコリア73%を含む
P16	N2/0	溝	跡残りが概く10~20mmの幅残1%, 2~3mmのスコリア73%を含む
P17	N2/0	溝	跡残りが概り8~10mmの幅残1%, 2~3mmのスコリア73%を含む
P18	N2/0	溝	跡残りが概り8~10mmの幅残3%, 3~5mmのスコリア73%を含む
P19	2.5Y2/1	溝	跡残りが概く8mmの幅残3%, 3~5mmのスコリア73%を含む
P20	N2/0	溝	跡残りが概く10~20mmの幅残3%, 2~3mmのスコリア73%を含む
P21	N2/0	溝	跡残りが概く8mmの幅残1%, 2~3mmのスコリア73%を含む

P1	径 (m)	深さ (m)	P9	径 (m)	深さ (m)	P17	径 (m)	深さ (m)
P1	0.70	0.76	P9	0.76	0.59	P17	1.34×0.78	0.39
P2	0.87	0.85	P10	0.87	0.71	P18	0.84	0.40
P3	0.64	0.47	P11	0.61	0.25	P19	0.96	0.57
P4	0.98	0.28	P12	1.25×0.83	0.66	P20	0.81	0.59
P5	0.58	0.45	P13	1.25×0.79	0.55	P21	1.11×0.87	0.72
P6	0.87	0.31	P14	1.44×0.88	0.19			
P7	0.88	0.36	P15	0.85	0.80			
P8	0.83	0.53	P16	0.80	0.81			

第159図 7区第2号掘立柱建物址実測図(2)

P11のようにやや小型のものも認められる。柱穴の規模は第159図参照。

桁間 北から1.81m、1.90m、1.84m、1.64m、1.80m。

梁間 西から2.09m、1.94m、1.41m、1.63m。

時期 不明。SH1と柱穴を共有するので、SH1とは近い時期と推測される。

7区第3号掘立柱建物址(7-SH3 第160図)

144-34Gr・145-34Gr・145-35Grで検出された。桁行(南北)4間、梁行(東西)3間の建物で、平面形は南北方向に長軸を持つ長方形を呈し、SH1とほぼ同軸を持つ。P1は軸からやや外れる。なお北西隅においては柱穴は検出されなかった。

規模 東西5.23m×南北7.43m 重複関係 (古)SH3→SD16(新)

主軸方位 N-31°-E

柱穴 平面形は円形および楕円形を呈する。

P1は径0.71m・深さ0.52m、P2は径0.86m・深さ0.62m、P3は径0.72m・深さ0.51m、P4は径0.75m・深さ0.45m、P5は径0.80m・深さ0.58m、P6は径0.76m・深さ0.63m、P7は径0.69m・深さ0.43m、P8は径1.07m・深さ0.55m、P9は径0.78m・深さ0.33m、P10は径0.89m・深さ0.71m、P11は径0.89m・深さ0.70m、P12は径0.61m・深さ0.30m、P13は径0.64m・深さ0.41mを測る。

桁間 北から1.86m、1.85m、1.73m、1.92m。 梁間 西から1.77m、1.67m、1.57m。

時期 不明。SH1と同時期か。

7区第4号掘立柱建物址(7-SH4 第161図)

145-32Grで検出された。7区のSHにおいて、SH4のみが他のSHとは離れた地点での検出である。桁行(南北)3間、梁行(東西)3間の建物で、平面形は方形を呈する。P1とP2の間には柱穴は確認されなかった。

規模 東西3.88m×南北3.58m 重複関係:(古)SH4→SD23(新)

主軸方位 N-35°-E

柱穴 平面形は円形および楕円形を呈する。規模・深さともにおおよそ均一性がある。

P1は径0.84m・深さ0.33m、P2は径0.62m・深さ0.33m、P3は径0.68m・深さ0.37m、P4は径0.80m・深さ0.34m、P5は径0.87m・深さ0.47m、P6は径0.90m・深さ0.38m、P7は径0.75m・深さ0.38m、P8は径0.80m・深さ0.36m、P9は径0.91m・深さ0.37m、P10は径0.72m・深さ0.42m、P11は径0.86m・深さ0.42mを測る。

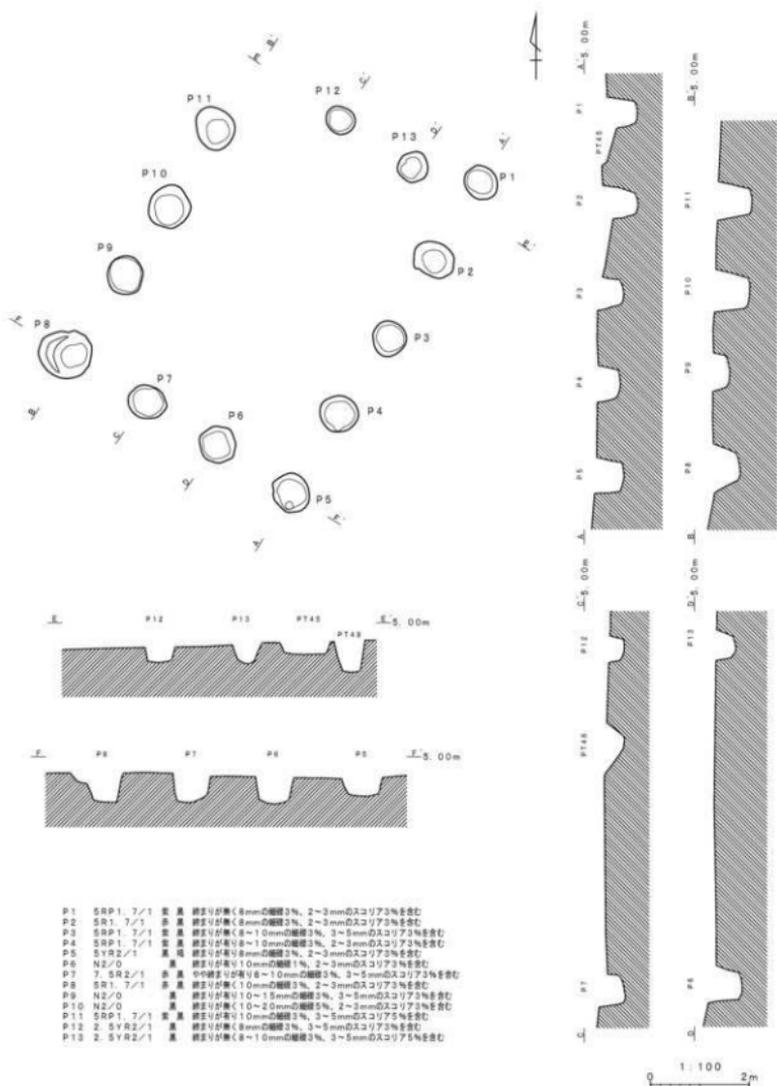
桁間 北から1.27m、1.12m、1.49m。 梁間 西から1.19m、1.12m、1.27m。

時期 不明。

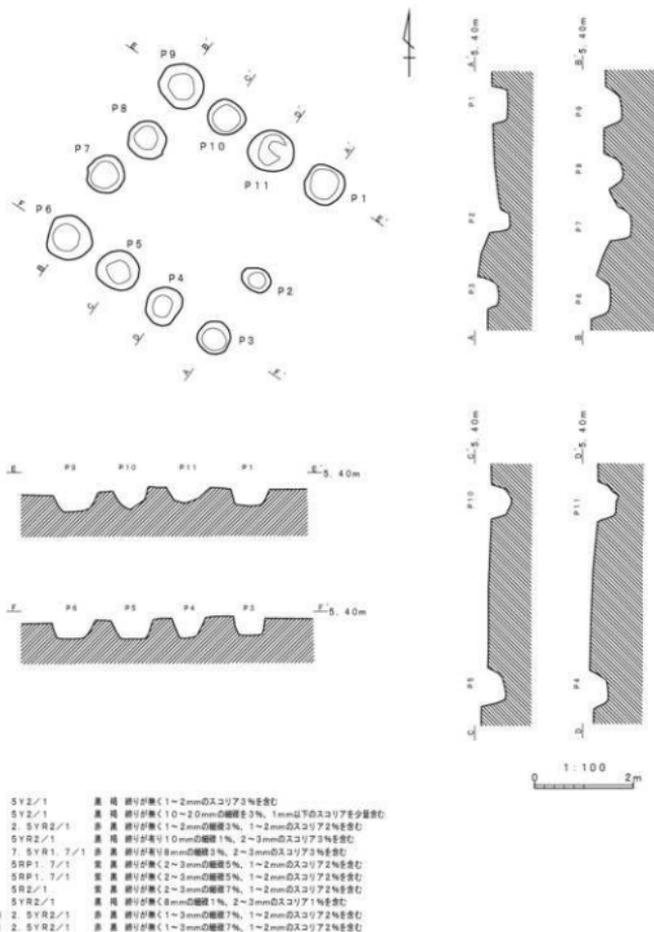
(3) 溝状遺構 7-SD

調査区のほぼ全域で検出されているが、調査区を横断する溝は南側に多く、これらは古墳時代後期～奈良平安時代に位置づけられる住居址と切り合い関係が認められる。7区において近世遺物が出土しているSDは、SD5・SD11～SD14・SD21・SD23・SD26・SD27である。これらはSD5を除いて、全て調査区を東西に走るSDである。このことから、これらと並行するSD2・SD10・SD38、もしくは直行するSD1・SD3・SD19・SD22・SD25・SD37は近世に位置づける可能性が高い。

出土遺物や切り合い関係がなく、さらに位置関係からでは年代を推定することができないSDもあるが、近世と確定できたSDと規模・深さなどを比較する限り、多くのSDは近世以後に位置づけるのが妥当と判断される。



第160図 7区第3号掘立柱建物址実測図



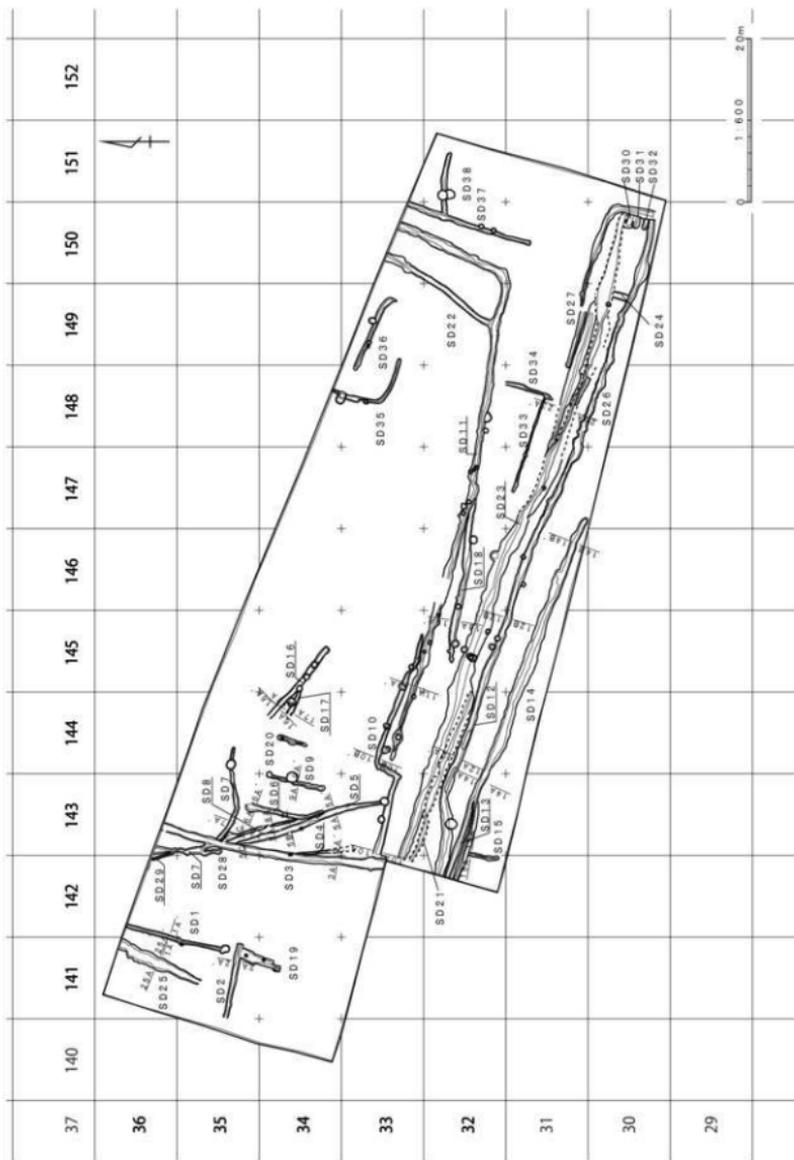
第161図 7区第4号掘立柱建物址実測図

なお、類推によって時期を判断したSDも多いため、覆土や時代別の出土遺物の有無は別表に一覧で示した。多くのSDで古墳時代後期~奈良平安時代に位置づけられる遺物が出土しているが、これらは混入と考えられる。図示ができた遺物は遺構の記載の後に、一括で第164図に掲載した。

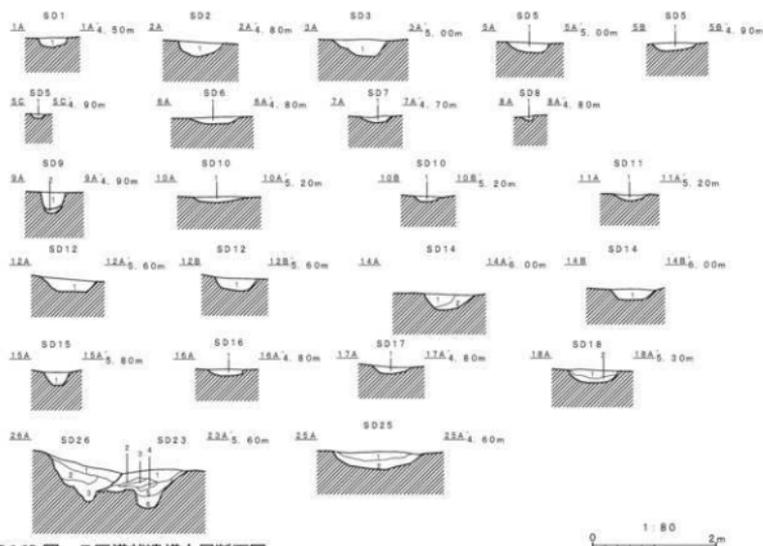
7区第1号溝状遺構 (7-SD1 第162図・第163図、第9表)

141-35Gr・141-36Gr・142-36Grで検出された。北北東-南南西方向に走る。北端が調査区外へと続くため、総延長は不明である。南端はピットに切られている。

規模 延長(調査区内)11.79m×幅0.35~0.50m×深さ0.16m



第162図 7区溝状遺構分布図



第 163 図 7 区溝状遺構土層断面図

第 9 表 7 区溝状遺構計測表 (1)

遺構名	層	色	備 考	断面形	遺物/古銭	遺物/中銭	遺物/近銭
SD1	A	N2/O	締まりが無く 8~10mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 3%を含む	溝形	○		
SD2	A	N2/O	締まりが無く 10~20mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 3%を含む	浅い丸形	○		
SD3	A	N2/O	やや締まりがあり 10~20mmの粗粒 3%, 2~5mmのスコリア 5%を含む	浅い丸形	○		
SD4			断面無し				
SD5	A	10YR2/1	締まりが無く 8mmの粗粒 3%, 2~3mmのスコリア 3%を含む	浅い丸形	○		
	B	N2/O	締まりが無く 8mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 5%を含む	浅い丸形	○		○
	C	2.5YR2/1	締まりが無く 8mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 1%を含む	浅い丸形	○		
SD6	A	N2/O	締まりが無く 8~10mmの粗粒 7%, 2~3mmのスコリア 5%を含む	浅い丸形	○		
SD7	A	10YR2/1	締まりが無く 8mmの粗粒 3%, 2~3mmのスコリア 1%を含む	浅い丸形	○		
SD8	A	10YR2/1	締まりが無く 8mmの粗粒 3%, 2~3mmのスコリア 1%を含む	浅い丸形	○		
SD9	A	10YR2/1	締まりが無く 10~20mmの粗粒 1%, 3~5mmのスコリア 3%を含む	浅い丸形	○		
	B	N2/O	締まりが無く 8~10mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 1%を含む	浅い丸形	○		
SD10	A	N2/O	締まりが無く 8mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 1%を含む	浅い丸形	○		
	B	2.5YR2/1	締まりが無く 8mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 1%を含む	浅い丸形	○		
SD11	A	5YR2/1	締まりが無く 8mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 1%を含む	浅い丸形	○		○
SD12	A	5P2/1	締まりがあり 8~10mmの粗粒 1%, 1~2mmのスコリア 1%を含む	溝形	○		○
	B	N2/O	締まりがあり 10~12mmの粗粒 5%, 2~3mmのスコリア 1%を含む	溝形	○		○
SD13			断面無し				
SD14	A	10YR2/1	締まりがあり 10mmの粗粒 1%, 1~2mmのスコリア 1%を含む	浅い丸形	○		
	B	N2/O	締まりと粘性があり 1~2mmのスコリア 1%を含む	溝形	○		○
	C	N2/O	締まりがあり 10~20mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 1%を含む	溝形	○		○
SD15	A	N2/O	締まりが無く 8mmの粗粒 1%, 5~8mmのスコリア 3%を含む	浅い丸形	○		
SD16	A	10YR2/1	締まりがあり 10~15mmの粗粒 1%, 5~8mmのスコリア 3%を含む	浅い丸形	○		
SD17	A	N2/O	締まりが無く 8mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 5%を含む	浅い丸形	○		
SD18	A	N2/O	締まりがあり 8mmの粗粒 3%, 2~3mmのスコリア 3%を含む	浅い丸形	○		
	B	5YR2/1	締まりがあり 8mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 1%を含む	浅い丸形	○		
SD19			断面無し				
SD20			断面無し				
SD21			断面無し				○
SD22			断面無し				○
SD23	A	1	2.5YR2/1 締まりが無く 20mmの粗粒と 3~5mmのスコリアを少量含む	浅い丸形			
		2	7.5YR2/1 締まりが無く 10mmの粗粒 1%を含む				
		3	7.5YR2/1 締まりが無く 8~10mmの粗粒 5%を含む				
		4	7.5YR2/1 締まりが無く 10mmの粗粒を少量含む				○
		5	2.5YR2/1 締まりが無く 8~10mmの粗粒 5%と 1~2mmのスコリアを少量含む				
		6	2.5YR2/1 8~10mmの粗粒を少量含む粒れやすい部分がある				
SD24			断面無し				○
SD25	A	N2/O	8~10mmの粗粒を少量含む粒れやすい部分がある	浅い丸形			
	B	5P2/1	やや締まりがあり 10mmの粗粒 1%, 2~3mmのスコリア 1%を含む				

第10表 7区溝状遺構計測表(2)

遺構名	層	色	遺土	断面形	遺物/古代遺物/中世遺物/近世
SD26	A	1	SYR2/I 練まりが無く10～20mmの細砂3%、1mm以下のスコリアを少量含む	扇形	○
	2	SYR2/I 練まりが無く大型の磁器を多量と8～10mmのスコリア1%を含む			
	3	SYR2/I 練まりが無く10mmの磁器1%、1～2mmのスコリアを少量含む			
SD27				○	○
SD28			新面無し		
SD29			新面無し		
SD30			新面無し	○	
SD31			新面無し	○	
SD32			新面無し	○	
SD33			新面無し	○	
SD34			新面無し		
SD35			新面無し		
SD36			新面無し		
SD37			新面無し		
SD38			新面無し		

重複関係 (古) SD1 → PT126・PT159 (新)

時期 近世以後に位置づけられる。

7区第2号溝状遺構(7SD2 第162図・第163図、第9表)

141-35Grで検出された。東西方向に走り、SD1と直交する。西端が残くなって、途中で切れることから、総延長は不明である。

規模 延長(残存部) 9.29m × 幅 0.51～0.76m × 深さ 0.24m

重複関係 (古) SB1 → SD2 → SD19 (新)

時期 近世以後に位置づけられる。

7区第3号溝状遺構(7SD3 第162図・第163図、第9表)

142-33Gr・142-34Gr・143-34Gr・143-35Gr・143-36Grで検出された。北北東-南南西方向に走り、SD23と直交すると考えられるが、両SDの交点部は調査区外となる。SD3は南北端ともに調査区外へ延びるため、総延長は不明である。北端部に礫が集中して出土した。

規模 延長(調査区内) 27.38m × 幅 0.83～1.75m × 深さ 0.20～0.30m

重複関係 (古) SD4 → SD3 (新)

時期 近世以後に位置づけられる。

7区第4号溝状遺構(7SD4 第162図、第9表)

143-33Gr・143-34Grで検出された。北北西-南南東方向に走り、SD5と同軸を持つ。南端は排水管跡、北端はSD3に切られているため、総延長は不明である。

規模 延長(残存部) 5.94m × 幅 0.23～0.35m × 深さ 0.07m

重複関係 (古) SD4・SD5・SD7 → SD8 → SD3 (新)

時期 不明。

7区第5号溝状遺構(7SD5 第162図・第163図、第9表)

143-33Gr・143-34Gr・143-35Grで検出された。南北方向に走る。南端はPT105、北端はSD3に切られているため、総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 18.43m × 幅 0.39～0.82m × 深さ 0.14～0.17m

重複関係 (古) SD5 → SD6 (新)

時期 近世遺物が出土しているため、近世以後である。

7区第6号溝状遺構(7SD6 第162図・第163図、第9表)

143-34Gr・143-35Grで検出された。北北東-南南西方向に走り、SD9やSD20と並行する。

規模 延長 9.37m × 幅 0.32～1.10m × 深さ 0.11m

重複関係 (古) SD5・SD8→SD6 (新)

時期 不明。

7区第7号溝状遺構 (7-SD7 第162図・第163図、第9表)

143-35Gr・143-36Gr・144-35Grで検出された。調査区北端から南北方向に伸び、弧を描くように東に向けて屈曲し、東西方向へ走る。北端はSD29と接し、二又に分かれ、調査区外へと続く。そのため、総延長は不明である。

規模 延長(残存部分) 東西11.41m・南北8.10m×幅0.31～0.92m×深さ0.06～0.14m

重複関係 (古) SB8・SD28→SD7・SD29→SD3・PT128 (新)

時期 不明。

7区第8号溝状遺構 (7-SD8 第162図・第163図、第9表)

143-34Gr・143-35Grで検出された。北北西-南南東方向に走る。南端はSD6、北端はSD3に切られているため、総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 9.71m×幅0.24～1.01m×深さ0.08～0.23m

重複関係 (古) SD8→SD3・SD6 (新)

時期 不明。

7区第9号溝状遺構 (7-SD9 第162図・第163図、第9表)

143-34Grで検出された。北北東-南南西方向に走り、SD6やSD20と並行する。

規模 延長6.58m×幅0.32～0.59m×深さ0.16～0.40m

重複関係 (古) SB8→SD9→PT26・PT164 (新)

時期 SD6やSD20と並行し、それぞれの規模や覆土の状況から近世以後に位置づけられる。

7区第10号溝状遺構 (7-SD10 第162図・第163図、第9表)

143-33Gr・144-33Gr・145-33Grで検出された。東西方向に10m程延びた後、北へ向かって屈曲し、再び東側に折れる。西端は攪乱に切られているため総延長は不明である。

規模 延長(残存部) 東西27.53m・南北3.00m×幅0.28～0.90m×深さ0.09～0.13m

重複関係 (古) SH2→SD10→SD3 (新)

時期 不明。近世遺物が出土するSD23と並行することから近世以後か。

7区第11号溝状遺構 (7-SD11 第162図・第163図、第9表)

144-33Gr・145-32Gr・145-33Gr・146-32Gr・147-32Gr・148-32Gr・149-31Gr・149-32Gr・150-31Gr・150-32Gr・150-33Grで検出された。西から東西方向に約62m延びた後、北へと延びる。北端は調査区外へと続くため、総延長は不明である。西端はSD10の屈曲部で掘削を終えているため、両遺構は併存していた可能性がある。

規模 延長(調査区内) 東西61.56m・南北14.11m×幅0.31～1.31m×深さ0.08～0.35m

重複関係 (古) SB11・SB12・SB29・SB31→SD18→SD11 (新)

時期 近世遺物が出土しているため、近世以後に位置づけられる。

7区第12号溝状遺構 (7-SD12 第162図・第163図、第9表)

142-32Gr・143-32Gr・144-32Gr・145-31Gr・145-32Gr・146-31Gr・147-31Gr・148-30Gr・148-31Gr・149-30Gr・150-30Grで検出された。北西-南東方向に軸を持ち、西端部にてやや南に弧を描きながら屈曲したのち、さらに西方向へ延びる。西端は調査区外となり、東端はSD27に切られる。SD14・SD23と並行する。

規模 延長(調査区内) 84.33m×幅0.50～1.56m×深さ0.14～0.39m

重複関係 (古) SB22・SB26・SB27・SB39・SD24→SD12→SD27 (新)

時期 近世遺物が出土していることに加え、SD23と並行することから近世以後に位置づけられる。

7区第13号溝状遺構 (7-SD13 第162図、第9表)

142-32Gr・143-32Grで検出された。SD12と同軸で北西-南東方向に延びる。西端は調査区外、東端はSD14に切られている。

規模 延長(調査区内) 10.12m×幅0.68～0.83m×深さ0.16～0.28m

重複関係 (古) SD13→SD14 (新)

時期 SD12と並行することから近世以後に位置づけられる。

7区第14号溝状遺構 (7-SD14 第162図・第163図、第9表)

142-32Gr・143-32Gr・144-31Gr・144-32Gr・145-31Gr・146-31Gr・147-31Grで検出された。SD13を切っているが、軸方向はほぼ同じである。西端は調査区外へと続く。144-31Gr・145-31Gr付近にて海浜礫の集中箇所が5か所検出された。また覆土は2層に分かれ、上層は他のSDと同じように細礫やスコリアを含んだ黒色土であるが、下層は粘性のある黒色土で、南側からの流れ込みが認められる。

規模 延長(調査区内) 47.1m×幅0.63～1.63m×深さ0.18～0.33m

重複関係 (古) SD13・SD15→SD14 (新)

時期 近世遺物が出土していることから近世以後に位置づけられる。

7区第15号溝状遺構 (7-SD15 第162図・第163図、第9表)

142-32Gr・143-32Grで検出された。南北方向に走る。北端はSD14に切られているため総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 3.78m×幅0.33～0.60m×深さ0.21～0.28m

重複関係 (古) SD15→SD14 (新)

時期 不明。

7区第16号溝状遺構 (7-SD16 第162図・第163図、第9表)

144-34Gr・145-34Grで検出された。北西-南東方向に走る。西端はSB8やSH3と重複する。

SD16の規模や覆土の状況は他の近世と位置づけたSDと大差はなく、黒色土である。調査所見においては、SB8に切られるとされているが、遺構の切り合い関係の確認であろう。

規模 延長(調査区内) 11.22m×幅0.56～0.79m×深さ0.07～0.14m

重複関係 (古) SH3→SD16→SB8 (新) (調査所見のまま)

時期 不明。

7区第17号溝状遺構 (7-SD17 第162図・第163図、第9表)

144-34Gr・145-34Grで検出された。北西-南東方向に走る。西端は浅くなって消滅する。東端はSD16と重複する。

規模 延長(残存部) 2.95m×幅0.40～0.72m×深さ0.07～0.11m

重複関係 (古) SD17→SB36・SH3 (新)

時期 不明。SB36に切られることから7世紀以前か。

7区第18号溝状遺構 (7-SD18 第162図・第163図、第9表)

145-32Gr・146-32Gr・147-32Grで検出された。東西方向に走り、東端はSD11と重複する。覆土は基本的に黒色土であるが、締まりがあり、下層の土はやや赤みをおびる。

規模 延長(残存部) 20.43m×幅0.31～1.04m×深さ0.15～0.21m

重複関係 (古) SB11→SB12→SD18→SD11 (新)

時期 不明。

7区第19号溝状遺構 (7-SD19 第162図、第9表)

141-34Gr・141-35Grで検出された。北北東-南南西方向に走る。幅は異なるものの、SD1の延長にて検出した。北端はSD2と重複する。

規模 延長5.23m×幅0.73～1.38m×深さ0.12～0.19m

重複関係 (古)SD2→SD19(新)

時期 近世以後に位置づけられる。

7区第20号溝状遺構 (7-SD20 第162図、第9表)

144-34Grで検出された。北北東-南南西方向に走り、SD6やSD9と並行する。

規模 延長(調査区内)3.70m×幅0.31～0.66m×深さ0.17～0.26m

重複関係 (古)SB35→SB8→SD20(新)

時期 不明。

7区第21号溝状遺構 (7-SD21 第162図、第9表)

142-33Gr・143-32Gr・143-33Gr・144-32Grで検出された。北西-南東方向に走る。SD23と同軸で、ほぼ位置もたえずに重複している。西端は調査区外へ延び、東端は徐々に浅くなり、SD23内で消滅する。

規模 延長(調査区内)22.04m×幅0.53～1.03m×深さ0.09～0.43m

重複関係 (古)SD23→SD21(新)

時期 近世遺物が出土していることから近世以後に位置づけられる。

7区第22号溝状遺構 (7-SD22 第162図、第9表)

149-32Gr・150-32Gr・150-33Grで検出された。北北東-南南西方向に走る。南北方向のSD11と並行しており、東西方向のSD11に切られる。北側は調査区外へと続く。

規模 延長(調査区内)15.19m×幅0.66～1.21m×深さ0.16～0.40m

重複関係 (古)SD22→SD11(新)

時期 SD11に切られるが、ほぼSD11と同軸・同規模であることからSD11と同時期、すなわち近世以後に位置づけられる。

7区第23号溝状遺構 (7-SD23 第162図・第163図、第9表)

142-33Gr・143-32Gr・143-33Gr・144-32Gr・145-32Gr・146-31Gr・146-32Gr・147-31Gr・148-30Gr・148-31Gr・149-30Gr・149-31Grで検出された。北西-南東方向に走る。西端は調査区外へと続き、東端はSD26を切っている。147-31Grにおいて海浜礫の集中箇所が認められる。またそれより東においても少量ながらも海浜礫が堀底からまばらに出土している。

規模 延長(調査区内)72.35m×幅0.95～2.78m×深さ0.13～0.61m

重複関係 (古)SD26→SD23→SD21・SD27(新)

時期 近世遺物が出土していることから近世以後に位置づけられる。

7区第24号溝状遺構 (7-SD24 第162図、第9表)

149-30Grで検出された。北東-南西方向に走る。南端はSD12、北端はSD26に切られているため、検出できた範囲は限定的である。SD37とほぼ同軸である。

規模 延長(残存部)1.95m×幅0.80～0.83m×深さ0.12～0.25m

重複関係 (古)SD24→SD12・SD26(新)

時期 不明。

7区第25号溝状遺構 (7-SD25 第162図・第163図、第9表)

141-35Gr・141-36Grで検出された。北北東-南南西方向に走る。南端は浅くなって消滅しており、北端は調査区外へ延びる。覆土は2層に分かれ、上層は他のSDと同じく締まりのない黒色土であるが、下層

の覆土は、やや紫がかり、締まりがある。

規模 延長(調査区内) 10.92m × 幅 0.66 ~ 1.76m × 深さ 0.15 ~ 0.29m

重複関係 なし

時期 近世遺物が出土していることから近世以後であろう。

7区第26号溝状遺構(7-SD26 第162図・第163図、第10表)

147-31Gr・148-31Gr・149-30Gr・149-31Gr・150-30Grで検出された。SD23とほぼ位置をたがえずに重複し、北西—南東方向に走る。西端はSD23に、東端はSD27に切られているため総延長は不明である。SD23と異なり、海浜礫は検出されなかった。

規模 延長(残存部) 40.92m × 幅 0.68 ~ 2.90m × 深さ 0.17 ~ 0.72m

重複関係 (古) SD26 → SD23・SD27 (新)

時期 近世遺物が出土していることから、近世以後に位置づけられる。

7区第27号溝状遺構(7-SD27 第162図、第10表)

149-31Gr・150-30Gr・150-31Grで検出された。SD23等と並行して北西—南東方向に20m程延びた後、南へ向かって屈曲する。南端は調査区外へ延びる。

規模 延長(調査区内) 東西 20.10m・南北 4.62m × 幅 0.28 ~ 1.19m × 深さ 0.15 ~ 0.52m

重複関係 (古) SB21・SD12・SD23・SD26・SD30・SD31・SD32 → SD27 (新)

時期 近世遺物が出土していることに加え、SD23との重複関係から近世以後である。

7区第28号溝状遺構(7-SD28 第162図、第10表)

142-35Gr・143-35Grで検出された。南北方向に走る。北端はSD7と切り合うため総延長は不明である。

規模 延長(残存部) 2.67m × 幅 0.43 ~ 0.59m × 深さ 0.07 ~ 0.13m

重複関係 (古) SD28 → SD7 (新)

時期 不明。

7区第29号溝状遺構(7-SD29 第162図、第10表)

142-36Gr・143-36Grで検出された。北北西—南南東方向に走る。北端は調査区外へと続き、南端はSD7と交わって二又となる。

規模 延長(残存部) 3.11m × 幅 0.27 ~ 0.35m × 深さ 0.06 ~ 0.09m

重複関係 SD7・SD29(同時期か)

時期 不明。

7区第30・31・32号溝状遺構(7-SD30・7-SD31・7-SD32 第162図、第10表)

150-30Grで検出された。それぞれ北西—南東方向に走る。東端はSD27に切られるため、総延長は不明であり、調査区東端部でも検出されないことから土坑の可能性もあるが、深度が0.10m程度であったため、SDとした。

規模 SD30 延長(残存部) 1.73m × 幅 0.78m × 深さ 0.11m

SD31 延長(残存部) 1.48m × 幅 0.63m × 深さ 0.09m

SD32 延長(残存部) 1.36m × 幅 0.81m × 深さ 0.09m

重複関係 (古) SD30・SD31・SD32 → SD27 (新)

時期 不明。

7区第33号溝状遺構(7-SD33 第162図、第10表)

147-31Gr・148-31Grで検出された。北西—南東方向に走る。東端でSD34と直交する。

規模 延長(残存部) 12.20m × 幅 0.19 ~ 0.40m × 深さ 0.08 ~ 0.16m

重複関係 (古) SB23 → SB22 → SD33 → SD34 (新)

時期 不明。

7区第34号溝状遺構 (7-SD34 第162図、第10表)

148-31Grで検出された。SD33と直交する。北端は浅くなって、消滅している。

規模 延長(残存部) 6.15m × 幅 0.25 ~ 0.57m × 深さ 0.13 ~ 0.21m

重複関係 (古) SB29・SD33 → SD34 (新)

時期 不明。

7区第35号溝状遺構 (7-SD35 第162図、第10表)

148-33Gr・148-34Gr・149-33Grで検出された。東西方向に6m延びた後、北へ向かって屈曲する。北端は調査区外へ延びているため総延長は不明である。

規模 延長(調査区内) 東西 6.00m・南北 5.90m × 幅 0.31 ~ 0.72m × 深さ 0.04 ~ 0.16m

重複関係 なし

時期 不明。

7区第36号溝状遺構 (7-SD36 第162図、第10表)

148-33Gr・149-33Grで検出された。北西-南東方向に走る。

規模 延長 9.89m × 幅 0.54 ~ 0.70m × 深さ 0.11 ~ 0.20m

重複関係 なし

時期 不明。SD23と並行することや隣接するSD35と規模や覆土の状況が一致することから、近世以後か。

7区第37号溝状遺構 (7-SD37 第162図、第10表)

150-31Gr・150-32Gr・150-33Grで検出された。北北東-南南西方向に走る。北端は調査区外へ延びている。SD38と直交する。

規模 延長(調査区内) 15.63m × 幅 0.43 ~ 0.68m × 深さ 0.04 ~ 0.20m

重複関係 (古) SD38 → SD37 (新)

時期 南北軸のSD11と並行することから、近世以後に位置づけられる。

7区第38号溝状遺構 (7-SD38 第162図、第10表)

150-32Gr・151-32Grで検出された。東西方向に走る。西端はSD37に切られる。

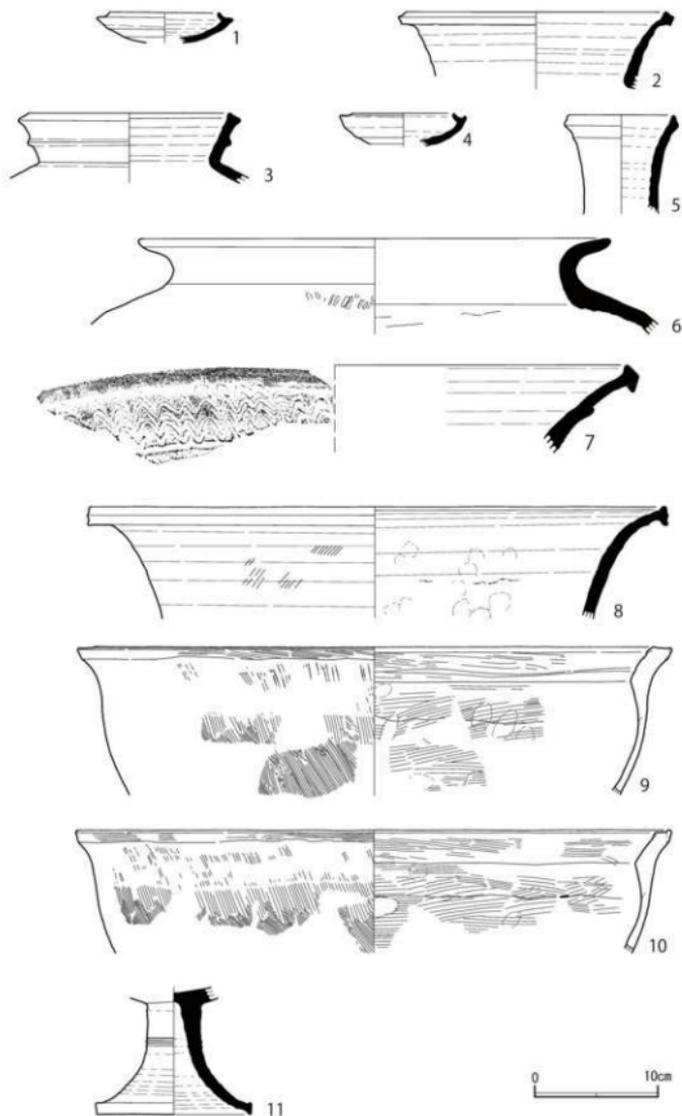
規模 延長(残存部) 7.59m × 幅 0.54 ~ 0.75m × 深さ 0.08 ~ 0.13m

重複関係 (古) SD38 → SD37 (新)

時期 SD37に切られるが、規模や覆土の状況から近世以後に位置づけられる。

7区溝状遺構出土遺物 (第164図)

古墳時代後期～奈良平安時代の遺物を計11点図示した。1はSD5より出土した須恵器の坏身である。小型化しており、遠江IV期後葉頃であろう。2はSD7より出土した須恵器甕の口縁部である。残存部の下端に刺突痕が見られる。3はSD8より出土した須恵器甕もしくは広口壺である。外面に緑色の自然釉がかかる。4はSD9より出土した須恵器坏身である。1とほぼ同じ年代であろう。5はSD12より出土した須恵器の壺類もしくは瓶類の口縁部である。外面に緑色の自然釉、内面口縁部に黄色かかった釉がかかる。6はSD13より出土した須恵器の甕である。頸部から胴部へかけた広がりが大きく、胴部にも灰色の釉がかかる。また外面頸部にタタキ痕が観察できる。7はSD14から出土した須恵器壺もしくは甕である。外面に波状文が施される。8はSD21より出土した須恵器甕である。口縁部に斜方向の筋(タタキ痕か)が観察でき、その上から釉がかかる。9・10はSD23より出土した土師器の罎で、ともに口縁部が肥大化している。またミガキ調整は観察できず、ハケメによる調整のみである。11はSD25より出土



第164図 7区溝状遺構出土遺物実測図

(1.SD5 2.SD7 3.SD8 4.SD9 5.SD12 6.SD13 7.SD14 8.SD21 9・10.SD23 11.SD25)

した須恵器の高坏脚部である。脚部には2条の沈線が入る。

(4) ビット (PT 第165図・第166図、第11表～第16表)

ここでは方形配列などの規則性を見出せなかったビットを扱った。調査区のほぼ全域で検出されているが、調査区の中央付近から東側にかけて特にまとまっている。なかには直線上に並ぶビットもあり、柵遺構であった可能性も想定されるが、断定するための材料に乏しいため、全てビットとして扱った。

ビットの平面形は円形、楕円形、不整形などがある。直径は0.22～1.54m・深さは0.06～1.02mを測る。図示が可能な遺物は1点のみであり、他区と同様、遺構の帰属時期を決定することは困難であるため、形状・計測値・ビットの覆土・小片遺物などの出土内容は一覧で示した。なお、欠番があり、遺物番号は連続しない。

第166図にはビット遺物として実測が可能であった1点を掲載した。土師器の裏でPT91から出土した。口縁部～胴部が残存し、ミガキ調整は認められない。口縁部に指頭圧痕が強く残る。

(5) 第1号不明遺構 (7-SX1 第167図・第168図)

147-33Gr・148-33Grで検出された。検出時に堅穴構造をしていたため、SB13として調査をしていたが、立ち上がりを検出面から深さ0.10m程度と他の住居址と比べて浅く、またカマドや柱穴も検出されなかったことから、完掘した段階でSX1と名称を変更した。ビットにより一部上端が切られているが、平面形は東西に長軸を持つ長方形である。

規 模 東西3.25m×南北2.39m 重複関係 なし

主軸方位 N-13°-E 壁 溝 検出されない。

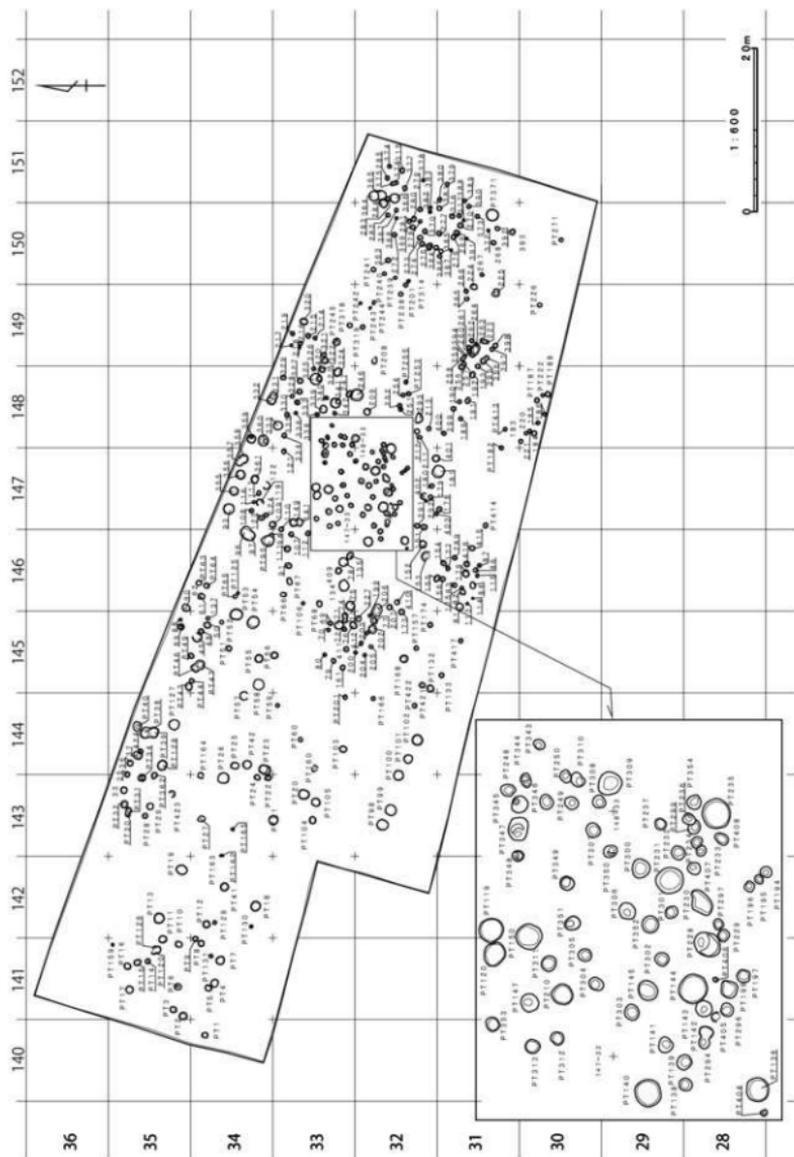
柱 穴 検出されない。

遺 物 6点を図示した。いずれも土師器である。1～3は球胴甕で、2には頸部にはミガキ調整が認められる。4～6は丸底坏で、4は内面に黒色処理が施される。5・6は粗製胎土で黒色粒をまばらに含む。また図示できなかった小片に須恵器の返り蓋がある。

時 期 7世紀後半～8世紀前半頃と考えられる。

(6) 遺構外出土遺物 (第169図)

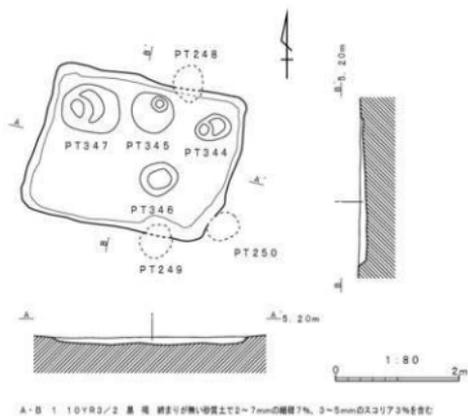
遺構外から出土した計10点を図示した。1～5は土師器、6以下は須恵器である。1～3は甕で、全てハケメによる調整のみである。4は埴で、甕と調整を共通する。5は甕で外面に、縦方向のケズリ調整を施すが、粗い調整であるため、輪積み痕が明瞭に残っている。内面はミガキによる調整である。6・7は須恵器の坏身で、ともに遠江Ⅳ期頃に位置づけられる。8は有台坏身で、底部が張り出す。9は、透かしが認められる高坏の坏部～脚部片である。7区に見られる遺構の年代とは異なり、遠江Ⅲ期後葉以前である。10は壺類もしくは瓶類の口縁部である。



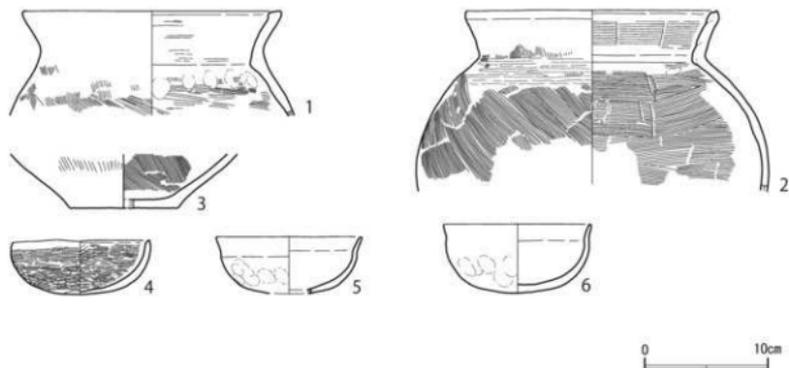
第165図 7区ヒット分布図



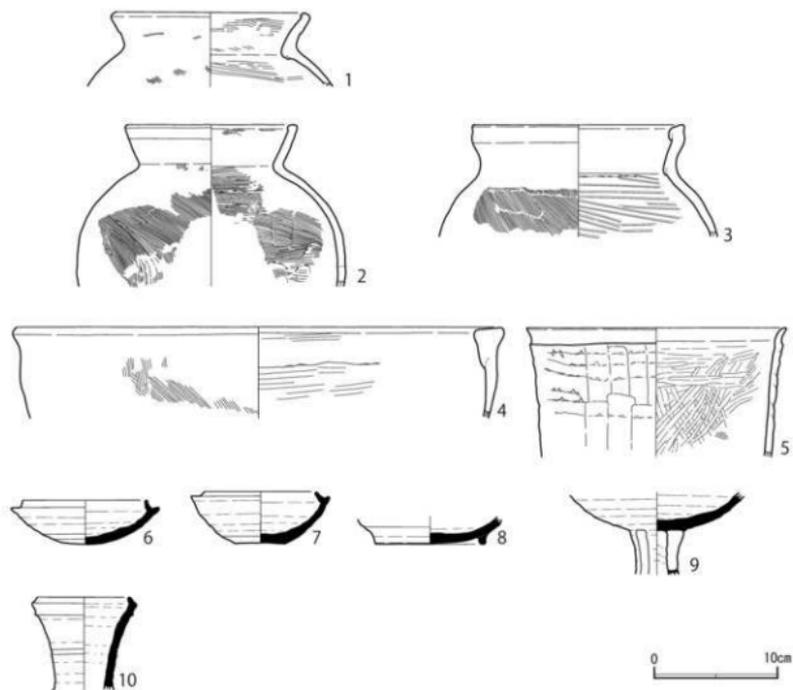
第166図 7区ビット出土遺物実測図(PT91)



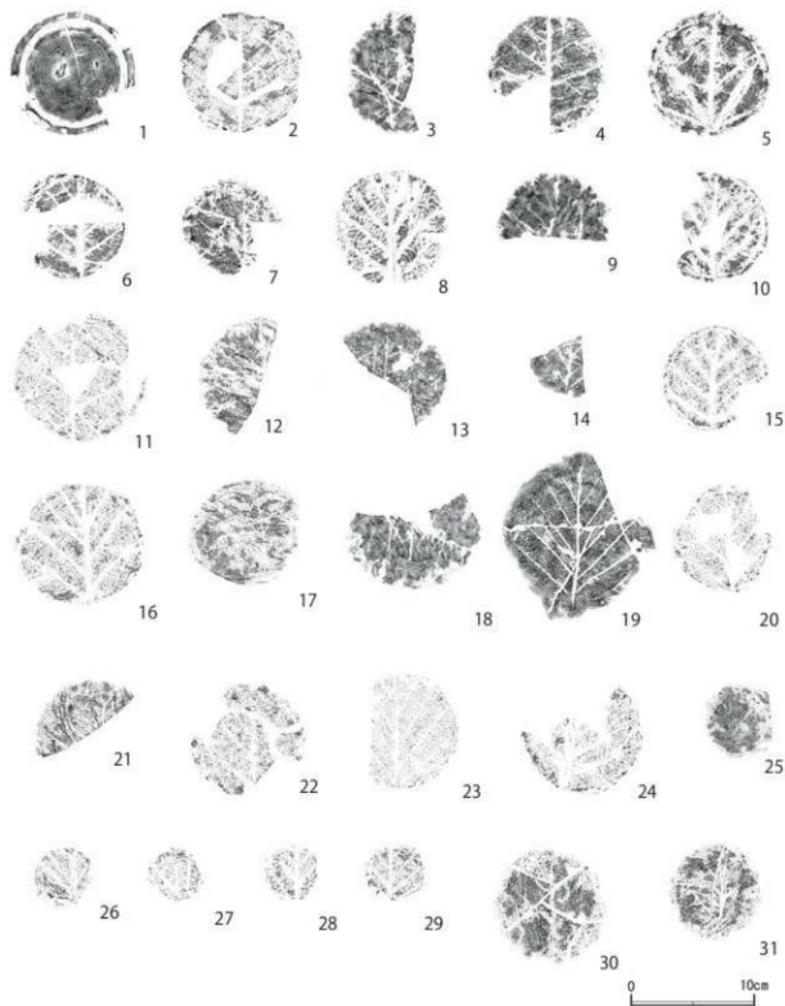
第167図 7区第1号不明遺構実測図



第168図 7区第1号不明遺構出土遺物実測図

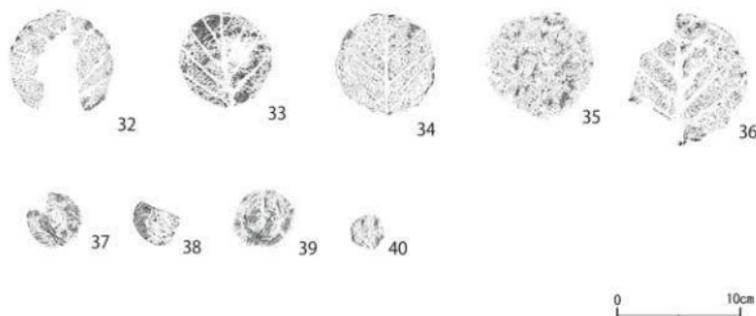


第169図 7区遺構外出土遺物実測図



- | | | | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|-----------|
| 1.SB1-11 | 2.SB4-2 | 3.SB4-11 | 4.SB5-3 | 5.SB5-4 | 6.SB6-3 | 7.SB6-8 | 8.SB7-1 |
| 9.SB7-2 | 10.SB8-7 | 11.SB8-8 | 12.SB8-14 | 13.SB8-15 | 14.SB8-16 | 15.SB11-2 | 16.SB11-3 |
| 17.SB11-6 | 18.SB11-7 | 19.SB11-8 | 20.SB12-2 | 21.SB15-12 | 22.SB16-1 | 23.SB16-5 | 24.SB16-7 |
| 25.SB16-10 | 26.SB18-1 | 27.SB18-2 | 28.SB18-3 | 29.SB18-4 | 30.SB20-4 | 31.SB22-3 | |

第170図 7区出土土器拓本(1)



32.SB23-2 33.SB25-2 34.SB29-5 35.SB29-7 36.SB29-10 37.SB29-11 38.SB29-14 39.SB29-15
40.SB31-6

第171図 7区出土土器拓本(2)

第11表 7区ビット計測表(1)

遺構名	平面形	断面形	径 (mm)	深さ (mm)	土	色	遺土様子	遺物/古代	遺物/中世	遺物/近世
PT001	内形	浅い丸形	0.73	0.32	10mmの繊維3%, 3~5mmのスコリア3%を含む	10YR2/2	無し	○		
PT002	内形	扁形	0.98	0.29	8~10mmの繊維3%, 2~5mmのスコリア3%を含む	10YR2/1	やや青り			
PT003	内形	浅い丸形	0.84	0.19	10mmの繊維1%, 2~5mmのスコリア3%を含む	N2/0	青り			
PT004	内形	浅い丸形	0.84	0.15	8~10mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア5%を含む	7.5YR2/1	青り	○		
PT005	内形	蓋形	0.84	0.22	8~10mmの繊維1%, 3~5mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	青り			
PT006	内形	蓋形	0.86	0.54	10mmの繊維1%, 3~5mmのスコリア3%を含む	N2/0	青り	○		
PT007	横内形	浅い丸形	1.09	0.23	10~20mmの繊維1%, 3~5mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	青り	○		
PT008	内形	浅い丸形	0.73	0.22	8~10mmの繊維1%, 3~5mmのスコリア5%を含む	2.5Y2/1	青り	○		
PT009	内形	扁形	0.69	0.10	10~15mmの繊維1%, 2~5mmのスコリア5%を含む	2.5Y2/1	青り	○		
PT010	横内形	扁形	0.84	0.21	10mmの繊維1%, 3~5mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	やや青り	○		
PT011	内形	扁形	0.86	0.30	10mmの繊維1%, 2~5mmのスコリア3%を含む	50Y2/1	やや青り	○		
PT012	内形	扁形	0.86	0.24	10mmの繊維3%, 3~5mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	青り	○		
PT013	内形	扁形	1.25	0.23	10~20mmの繊維3%, 2~5mmのスコリア3%を含む	N2/0	青り	○		
PT014	内形	浅い丸形	0.65	0.33	8~10mmの繊維5%, 2~3mmのスコリア3%を含む	N2/0	青り	○		
PT015	横内形	扁形	0.89 × 0.70	0.31	10mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	青り	○		
PT016	内形	扁形	0.83	0.25	10~20mmの繊維3%, 2~5mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	青り	○		
PT017	内形	浅い丸形	0.92	0.18	10~20mmの繊維3%, 2~5mmのスコリア3%を含む	N2/0	青り	○		
PT018	内形	浅い丸形	1.20	0.25	8~10mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	青り	○		
PT019	横内形	浅い丸形	1.37 × 1.15	0.10	10~20mmの繊維3%, 3~5mmのスコリア3%を含む	5Y2/1	青り	○		
PT020	横内形	浅い丸形	1.30	0.11	8~10mmの繊維3%, 1~3mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	青り	○		
PT021	内形	浅い丸形	1.18	0.10	8~10mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	青り	○		
PT022	横内形	浅い丸形	0.77 × 0.58	0.20	10~20mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	無し	○		
PT023	方形	浅い丸形	1.41 × 1.13	0.30	10~15mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	N2/0	やや青り	○		
PT024	横内形	浅い丸形	0.75 × 0.57	0.22	8~10mmの繊維7%, 2~3mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	無し	○		
PT025	横内形	浅い丸形	0.98 × 0.78	0.07	8~10mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア3%を含む	10YR1/1	やや青り	○		
PT026	内形	扁形	1.37	0.11	10mmの繊維3%, 2~5mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	やや青り	○		
PT027	横内形	蓋形	0.91 × 0.69	0.73	10~20mmの繊維1%, 2~5mmのスコリア3%を含む	10YR1/1	無し	○		
PT028	内形	浅い丸形	0.62	0.43	8~10mmの繊維2%, 2~3mmのスコリア3%を含む	10YR2/1	無し	○		
PT029	内形	浅い丸形	0.80	0.10	10~20mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア1%を含む	N2/0	無し			
PT030	横内形	浅い丸形	0.61	0.14	8~10mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	やや青り			
PT031	内形	浅い丸形	0.70	0.22	10mmの繊維5%, 2~3mmのスコリア3%を含む	5Y2/1	無し			
PT032	内形	浅い丸形	0.88	0.14	8~10mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	無し	○		
PT033	内形	浅い丸形	0.79	0.12	8~10mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア5%を含む	2.5Y2/1	無し	○		
PT034	内形	蓋形	0.90	0.22	8~10mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	無し	○		
PT035	内形	浅い丸形	0.65	0.39	10~20mmの繊維1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	5Y2/1	無し	○		
PT036	内形	浅い丸形	0.73	0.28	8~10mmの繊維5%, 2~3mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	やや青り			
PT037	方形	浅い丸形	1.10	0.29	10mmの繊維5%, 2~3mmのスコリア5%を含む	7.5YR2/1	無し			
PT038	方形	浅い丸形	1.32	0.17	10~20mmの繊維5%, 2~3mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	無し			
PT039	方形	浅い丸形	1.29	0.15	10~20mmの繊維5%, 2~3mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	無し	○		
PT040	内形	浅い丸形	1.12	0.15	8~10mmの繊維3%, 2~3mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	無し	○		
PT041	内形	扁形	0.98	0.24	10mmの繊維5%, 2~3mmのスコリア3%を含む	N3/0	無し			
PT042	内形	扁形	1.01	0.19	8~10mmの繊維5%, 2~3mmのスコリア3%を含む	10YR2/1	やや青り	○		

第12表 7区ビット計測表(2)

道標名	平面形	断面形	幅(m)	高さ(m)	备注	色	竣工年(月)	道標/年代	道標/中継	道標/道標
PT043	楕円形	扇形	0.95	0.21	10～15mmの縦線3本、3～5mmのスコリア3本を含む	5YR2/1	有り	○		
PT044	円形	深い丸形	0.57	0.59	8～10mmの縦線5本、3～5mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT045	円形?	扇形	1.05	0.25	10mmの縦線3本、3～5mmのスコリア5本を含む	5R1/1	有り	○		
PT046	円形	扇形	1.14	0.29	8～10mmの縦線7本、3～5mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	有り	○		
PT047	方形	扇形	1.01	0.32	8～10mmの縦線5本、3～5mmのスコリア5本を含む	7.5YR2/1	有り	○		
PT048	円形	深い丸形	0.64	0.68	8mmの縦線3本、3～5mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT049	楕円形	深い丸形	0.70	0.37	10～15mmの縦線3本、3～5mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT050	楕円形	深い丸形	0.83×0.75	0.25	8～10mmの縦線3本、3～5mmのスコリア5本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT051	楕円形	深い丸形	0.70	0.47	8mmの縦線5本、3～5mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	有り	○		
PT052	円形	深い丸形	0.51	0.30	5～8mmの縦線7本、3～5mmのスコリア3本を含む	5R1/1	有り	○		
PT053	楕円形	深い丸形	1.52×1.33	0.37	10mmの縦線5本、2～5mmのスコリア3本を含む	7.5YR2/1	有り	○		
PT054	円形	深い丸形	1.51	0.34	10～15mmの縦線3本、2～5mmのスコリア5本を含む	5YR2/1	有り	○		
PT055	円形	深い丸形	0.88	0.39	3～10mmの縦線3本、2～5mmのスコリア3本を含む	5YR2/1	有り	○		
PT056	円形	深い丸形	0.90	0.29	10～12mmの縦線3本、2～5mmのスコリア3本を含む	10YR2/1	無し	○		
PT057	円形	深い丸形	1.02	0.10	5～8mmの縦線3本、3mmのスコリア3本を含む	10YR2/1	無し	○		
PT058	円形	深い丸形	0.47	0.38	8mmの縦線3本、2～5mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT060	円形	深い丸形	0.51	0.23	10～15mmの縦線5本、2～3mmのスコリア3本を含む	10YR2/2	無し	○		
PT061	楕円形	扇形	0.72	0.65	2～3mmの縦線5本、1～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT062	不整形	深い丸形	0.41	0.37	1～3mmの縦線5本、1～2mmのスコリア2本を含む	5P2/1	無し	○		
PT063	円形	深い丸形	0.63	0.42	2～3mmの縦線5本、1～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT064	円形	深い丸形	0.67	0.64	1～3mmの縦線7本、1～3mmのスコリア2本を含む	N2/0	無し	○		
PT065	円形	扇形	0.46	0.35	2～3mmの縦線5本、1～3mmのスコリア2本を含む	N2/0	無し	○		
PT066	楕円形	扇形	0.70×0.49	0.36	1～3mmの縦線3本、1～2mmのスコリア2本を含む	N2/0	無し	○		
PT067	長方形	深い丸形	0.88×0.56	0.43	3～5mmの縦線5本、1～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT068	楕円形	深い丸形	0.77	0.08	2～5mmの縦線3本、1～3mmのスコリア2本を含む	N2/0	無し	○		
PT069	楕円形	深い丸形	0.59	0.32	3～7mmの縦線5本、1～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT070	円形	深い丸形	0.44	0.38	3～10mmの縦線3本、1～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT071	円形	扇形	1.12	0.30	3～10mmの縦線3本、1～5mmのスコリア3本を含む	5P2/1	無し	○		
PT072	楕円形	深い丸形	0.55	0.41	1～3mmの縦線5本、1～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT073	円形	深い丸形	0.60	0.44	3～7mmの縦線5本、1～3mmのスコリア3本を含む	10YR2/1	無し	○		
PT074	円形	深い丸形	0.66	0.38	2～7mmの縦線7本、1～3mmのスコリア3本を含む	10YR2/1	無し	○		
PT075	円形	扇形	1.10	0.45	3～5mmの縦線5本、1～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT076	楕円形	扇形	0.89	0.35	3～5mmの縦線5本、1～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT077	円形	深い丸形	0.78	0.53	1～3mmの縦線5本、1～2mmのスコリア5本を含む	5P2/1	無し	○		
PT078	円形	扇形	1.11	0.21	1～5mmの縦線5本、1～2mmのスコリア3本を含む	5R1/1	有り	○		
PT079	楕円形	扇形	0.58	0.18	2～7mmの縦線3本、1～2mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT080	円形	深い丸形	0.44	0.28	1～3mmの縦線5本、1～2mmのスコリア3本を含む	10YR2/1	有り	○		
PT081	円形	深い丸形	0.91	0.16	2～5mmの縦線5本、1～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT082	方形?	扇形	0.66	0.56	1～3mmの縦線3本、1～3mmのスコリア2本を含む	2.5YR2/1	有り	○		
PT083	円形	深い丸形	0.56	0.40	1～3mmの縦線3本、1～2mmのスコリア2本を含む	N2/0	無し	○		
PT084	不整形	扇形	0.82	0.35	2～3mmの縦線3本、1～2mmのスコリア2本を含む	2.5YR2/1	有り	○		
PT085	円形	深い丸形	0.58	0.26	10mmの縦線3本、0.5～2mmのスコリア2本を含む	N2/0	無し	○		
PT087	円形	深い丸形	0.45	0.39	2～3mmの縦線3本、1～2mmのスコリア2本を含む	N2/0	無し	○		
PT088	円形	深い丸形	0.40	0.34	10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT089	円形	深い丸形	0.72	0.80	10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT090	不整形	深い丸形	0.91	0.47	10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT091	楕円形	深い丸形	0.81	0.60	8～10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	5R1/1	有り	○		
PT093	円形	扇形	1.28	0.28	10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	2.5YR2/1	有り	○		
PT094	円形?	深い丸形	0.47	0.38	10～20mmの縦線2本、2～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT095	円形	扇形	1.50	0.53	10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT096	不整形	深い丸形	1.05	0.38	8～10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	有り	○		
PT097	不整形	深い丸形	1.36	0.36	10～12mmの縦線2本、2～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	有り	○		
PT098	楕円形	扇形	1.41	0.23	10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	N2/0	無し	○		
PT099	円形	扇形	1.31	0.63	8mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	N2/0	有り	○		
PT100	円形	扇形	1.21	0.49	8mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	N2/0	有り	○		
PT101	円形	扇形	1.20	0.26	10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	N2/0	有り	○		
PT102	円形	扇形	1.05	0.25	10～12mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	N2/0	有り	○		
PT103	楕円形	深い丸形	0.93	0.33	10mmの縦線3本、2～3mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT104	楕円形	深い丸形	0.88	0.13	8～10mmの縦線3本、2～3mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT105	円形	深い丸形	1.07	0.15	8～10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT106	円形	扇形	0.42	0.21	8mmの縦線3本、3～5mmのスコリア3本を含む	10YR1/1	有り	○		
PT107	楕円形	深い丸形	0.76	0.63	5～8mmの縦線3本、2～3mmのスコリア1本を含む	5YR2/1	無し	○		
PT108	円形	深い丸形	0.52	0.32	10～15mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	10YR2/1	無し	○		
PT109	楕円形	深い丸形	0.79	0.47	10～15mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT110	円形	深い丸形	0.58	0.46	10mmの縦線3本、2～3mmのスコリア5本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT111	円形	扇形	0.57	0.34	8～10mmの縦線3本、2～3mmのスコリア3本を含む	N1/5/0	無し	○		
PT112	楕円形	扇形	0.62	0.41	10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT113	円形	深い丸形	0.32	0.18	8mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	10YR2/1	無し	○		
PT114	円形	深い丸形	0.26	0.30	8mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	10YR2/1	無し	○		
PT115	楕円形	深い丸形	0.45	0.24	10mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	N2/0	無し	○		
PT116	円形	深い丸形	0.38	0.17	8～10mmの縦線3本、2～3mmのスコリア3本を含む	N2/0	無し	○		
PT117	楕円形	深い丸形	0.61	0.24	8mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT118	円形?	深い丸形	0.66	0.12	8mmの縦線1本、2～3mmのスコリア1本を含む	N1/5/0	無し	○		
PT119	円形	深い丸形	0.99	0.12	10mmの縦線3本、3～5mmのスコリア1本を含む	N2/0	無し	○		
PT120	楕円形	扇形	1.02	0.20	8mmの縦線1本、3～5mmのスコリア1本を含む	N1/5/0	無し	○		
PT121	楕円形	深い丸形	0.59	0.15	10mmの縦線3本、2～3mmのスコリア3本を含む	N1/5/0	無し	○		
PT122	円形	扇形	0.90	0.28	10～20mmの縦線1本、2～3mmのスコリア3本を含む	10YR1/1	有り	○		

第13表 7区ビット計測表(3)

道番号	平面形	断面形	径 (mm)	長さ (m)	量	色	量と量り	造物/年代	造物/年代	造物/年代
PT123	楕円形	深い丸形	0.71	0.40	10 ~ 15 mmの細線 3%, 5 ~ 10 mmのスコリア 3%を含む	NY2/1	無し	○		
PT124	方形	蓋形	0.53	0.34	10 ~ 15 mmの細線 3%, 5 ~ 10 mmのスコリア 3%を含む	SYR2/1	無し	○		
PT125	楕円形	深い丸形	0.34	0.19	5 ~ 10 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 1%を含む	NZ/0	無し			
PT126	不整形	深い丸形	1.26 × 0.97	0.17	8 ~ 10 mmの細線 5%, 2 ~ 3 mmのスコリア 5%を含む	10YR2/1	無し			
PT127	円形	蓋形	1.25	0.36	10 ~ 15 mmの細線 5%, 3 ~ 5 mmのスコリア 5%を含む	N1. 5/0	無し	○		
PT128	円形	深い丸形	1.26 × 1.05	0.26	5 ~ 10 mmの細線 3%, 3 ~ 5 mmのスコリア 5%を含む	10YR1. 7/1	無し			
PT129	円形	深い丸形	0.43	0.33	8 ~ 10 mmの細線 3%, 3 ~ 5 mmのスコリア 5%を含む	10YR1. 7/1	無し	○		
PT130	円形	深い丸形	0.40	0.26	8 ~ 10 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 5%を含む	NZ/0	無し			
PT131	円形	蓋形	0.49	0.26	10 ~ 15 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	無し	○		
PT132	円形	蓋形	0.89	0.45	8 ~ 10 mmの細線 1%, 3 ~ 5 mmのスコリア 1%を含む	N3/0	無し			
PT133	円形	深い丸形	0.59	0.36	10 mmの細線 1%, 3 ~ 5 mmのスコリア 1%を含む	NZ/0	無し			
PT134	楕円形	蓋形	1.42 × 1.16	0.32	8 ~ 10 mmの細線 1%, 3 ~ 5 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	有り			
PT135	楕円形	蓋形	0.97 × 0.71	0.30	8 ~ 10 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	無し	○		
PT136	円形	蓋形	0.97	0.35	8 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	SP1. 7/1	有り	○		
PT137	円形	蓋形	0.43	0.39	5 ~ 10 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 1%を含む	NZ/0	無し			
PT138	円形	深い丸形	0.52	0.35	10 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	有り	○		
PT139	円形	深い丸形	0.62	0.33	10 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	SPR2/1	無し	○		
PT140	円形	深い丸形	1.12	0.13	10 ~ 20 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	やや有り	○		
PT141	円形	深い丸形	0.64	0.35	8 ~ 10 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	SP1. 7/1	無し			
PT142	楕円形	深い丸形	0.58	0.15	10 ~ 15 mmの細線 7%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	無し	○		
PT143	円形	深い丸形	0.64	0.62	10 ~ 15 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%, 黄色く細かい粒を多量に含む	10YR2/1	無し			
PT144	円形	深い丸形	1.20	0.06	10 ~ 12 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	無し	○		
PT145	楕円形	蓋形	0.82	0.32	8 ~ 10 mmの細線 5%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	やや有り	○		
PT147	円形	蓋形	0.73	0.66	10 ~ 20 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 1%を含む	SP2/1	無し	○		
PT148	不整形	深い丸形	0.93	0.09	10 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 1%を含む	NZ/0	無し	○		
PT149	円形	深い丸形	0.93	0.32	10 ~ 12 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 5%を含む	NZ/0	無し	○		
PT150	楕円形	深い丸形	0.53	0.64	10 ~ 20 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 1%を含む	10YR2/1	無し	○		
PT151	楕円形	深い丸形	0.74	0.45	8 mmの細線 1%, 1 ~ 2 mmのスコリア 1%を含む	10YR1. 7/1	無し			
PT152	楕円形	深い丸形	0.94	0.22	10 mmの細線 1%, 1 ~ 2 mmのスコリア 1%を含む	SP1. 7/1	無し			
PT153	不明	深い丸形	1.17	0.22	10 mmの細線 1%, 1 ~ 2 mmのスコリア 1%を含む	SP1. 7/1	無し	○		
PT154	楕円形	深い丸形	0.76 × 0.60	0.31	8 ~ 10 mmの細線 2%, 3 ~ 5 mmのスコリア 3%を含む	SP1. 7/1	無し			
PT155	楕円形	深い丸形	0.89 × 0.60	0.12	8 ~ 10 mmの細線 3%, 3 ~ 5 mmのスコリア 1%を含む	SP1. 7/1	無し			
PT156	円形	蓋形	0.60	0.39	8 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	有り	○		
PT157	円形	深い丸形	0.53	0.23	8 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	10Y1. 7/1	有り	○		
PT158	円形	深い丸形	0.76	0.19	10 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	SYR2/1	有り			
PT159	楕円形	蓋形	0.36	0.16	10 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 1%を含む	SPR2/1	無し			
PT160	円形	深い丸形	0.79	0.33	8 ~ 10 mmの細線 3%, 2 ~ 3 mmのスコリア 1%を含む	NZ/0	無し			
PT161	楕円形	深い丸形	0.64	0.26	8 ~ 10 mmの細線 1%, 1 ~ 2 mmのスコリア 1%を含む	SP1. 7/1	無し			
PT162	楕円形	深い丸形	0.31	0.11	10 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	無し			
PT163	円形	深い丸形	0.23	0.16	10 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 1%を含む	NZ/0	無し			
PT164	不整形	深い丸形	0.70	0.13	8 ~ 12 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 3%を含む	NZ/0	無し	○		
PT165	楕円形	深い丸形	0.39	0.22	10 mmの細線 1%, 1 ~ 2 mmのスコリア 1%を含む	SYR2/1	無し			
PT166	円形	深い丸形	0.47	0.34	1 ~ 3 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SPR2/1	無し			
PT167	不整形	深い丸形	1.01 × 0.83	0.42	2 ~ 3 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SP1. 7/1	無し	○		
PT168	楕円形	深い丸形	0.88	0.33	2 ~ 3 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SP1. 7/1	無し			
PT169	楕円形	深い丸形	0.71	0.42	2 ~ 3 mmの細線 7%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SP2/1	無し			
PT170	円形	深い丸形	0.77	0.26	1 ~ 3 mmの細線 7%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SYR2/1	無し			
PT171	円形	深い丸形	0.94	0.34	1 ~ 3 mmの細線 7%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	2. 5YR2/1	無し	○		
PT172	円形	蓋形	0.78	0.32	1 ~ 2 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 3%を含む	SYR2/1	無し	○		
PT173	楕円形	深い丸形	0.70	0.29	1 ~ 2 mmの細線 3%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	2. 5YR2/1	無し	○		
PT174	円形	深い丸形	0.62	0.30	1 ~ 2 mmの細線 3%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	2. 5YR2/1	無し			
PT175	楕円形	深い丸形	0.63	0.17	2 ~ 3 mmの細線 3%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SPR2/1	無し	○		○
PT176	楕円形	深い丸形	0.41	0.35	5 mmの細線 3%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	NZ/0	無し			
PT177	楕円形	深い丸形	0.59	0.41	1 ~ 3 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 3%を含む	SP3/1	無し	○		
PT178	楕円形	深い丸形	0.70 × 0.56	0.52	7 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	2. 5YR2/1	無し	○		
PT179	円形	深い丸形	0.58	0.33	3 ~ 5 mmの細線 2%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	NZ/0	無し			
PT180	円形	深い丸形	0.53	0.19	1 ~ 3 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	10YR2/1	無し	○		
PT181	円形	蓋形	1.49	0.32	3 ~ 10 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	10YR2/1	無し	○		
PT182	円形	深い丸形	0.50	0.37	1 ~ 3 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SYR2/1	無し	○		
PT183	円形	深い丸形	0.51	0.33	2 ~ 5 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SYR2/1	無し	○		
PT184	楕円形	深い丸形	0.65	0.42	3 ~ 7 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	NZ/0	無し	○		
PT185	円形	深い丸形	0.47	0.35	1 ~ 7 mmの細線 7%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	NZ/0	無し			
PT186	楕円形	深い丸形	0.47	0.39	3 ~ 5 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	NZ/0	無し	○		
PT187	楕円形	深い丸形	0.62	0.36	3 ~ 7 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	NZ/0	無し	○		
PT188	方形	深い丸形	0.67	0.29	1 ~ 5 mmの細線 7%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	2. 5YR2/1	無し			
PT189	円形	深い丸形	0.48	0.30	1 ~ 5 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SYR2/1	無し	○		
PT190	円形	深い丸形	0.48	0.43	1 ~ 3 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SP1. 7/1	有り			
PT191	楕円形	深い丸形	0.77 × 0.56	0.56	1 ~ 5 mmの細線 7%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SPR2/1	無し			
PT192	楕円形	深い丸形	0.76	0.34	2 ~ 3 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	2. 5YR2/1	無し	○		
PT193	楕円形	深い丸形	0.61	0.42	2 ~ 3 mmの細線 5%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	SYR2/1	無し			
PT194	円形	深い丸形	0.45	0.13	8 ~ 10 mmの細線 1%, 1 ~ 2 mmのスコリア 1%を含む	7. 5YR2/1	無し			
PT195	円形	深い丸形	0.39	0.15	10 mmの細線 1%, 1 ~ 2 mmのスコリア 1%を含む	NZ/0	無し			
PT196	方形	深い丸形	0.45	0.29	10 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 1%を含む	N1. 5/0	無し			
PT197	円形	深い丸形	0.53	0.42	8 ~ 10 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 2%を含む	NZ/0	無し			
PT198	楕円形	蓋形	0.77	0.30	8 ~ 10 mmの細線 2%, 1 ~ 2 mmのスコリア 2%を含む	NZ/0	無し	○		
PT199	不整形	蓋形	0.43 × 0.36	0.41	8 mmの細線 1%, 2 ~ 3 mmのスコリア 1%を含む	NZ/0	無し			

第14表 7区ビット計測表(4)

道標名	平面形	断面形	径 (mm)	深さ (mm)	蓋 上	蓋 色	蓋土跡あり	遺物/古什	遺物/中骨	遺物/定骨
P1200	楕円形	浅い丸形	0.43	0.18	10mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア1%を含む	黒	無し			
P1201	円形	浅い丸形	0.87	0.40	8mmの縦線5%, 2~3mmのスコリア5%を含む	SPR1/2	有り			
P1202	楕円形	浅い丸形	1.07	0.36	10mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	10SR1/2	無し			
P1203	楕円形	浅い丸形	0.58 × 0.37	0.26	10mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア1%を含む	SP1/2	無し			
P1204	円形	浅い丸形	0.41	0.15	10mmの縦線3%, 2~3mmのスコリア1%を含む	10SR2/2	無し			
P1205	楕円形	蓋形	0.47	0.19	8~10mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	10SR2/1	無し			
P1206	楕円形	浅い丸形	1.52 × 1.09	0.37	8~10mmの縦線3%, 2~3mmのスコリア3%を含む	10SR2/1	無し	○		
P1207	円形	蓋形	0.64	0.23	8~10mmの縦線3%, 2~3mmのスコリア1%を含む	10SR2/1	無し			
P1208	楕円形	浅い丸形	0.85 × 0.56	0.21	8~10mmの縦線1%, 1~2mmのスコリア1%を含む	SP1/2	無し	○		
P1209	楕円形	蓋形	1.56 × 1.44	0.51	8mmの縦線1%, 1~2mmのスコリア3%を含む	5SR2/1	有り			
P1210	円形	浅い丸形	0.88	0.29	10mmの縦線1%, 1~2mmのスコリア1%を含む	2.5SR2/2	無し			
P1211	楕円形	浅い丸形	0.52	0.20	10mmの縦線1%, 1~2mmのスコリア1%を含む	10SR2/1	無し			
P1212	円形	浅い丸形	0.43	0.20	8~10mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア1%を含む	10SR2/1	無し			
P1213	円形	浅い丸形	0.53	0.27	8~10mmの縦線3%, 2~3mmのスコリア1%を含む	10SR2/1	無し			
P1214	円形	蓋研砂	0.47	0.16	8mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア1%を含む	N2/0	有り			
P1215	円形	浅い丸形	0.63	0.28	8~10mmの縦線1%, 1~2mmのスコリア1%を含む	10SR2/1	無し			
P1216	楕円形	浅い丸形	0.53	0.27	10mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	N2/0	無し			
P1217	円形	浅い丸形	0.35	0.28	10mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア1%を含む	5SR2/2	無し			
P1218	楕円形	浅い丸形	0.39	0.15	10mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア1%を含む	10SR2/1	無し	○		
P1219	円形	浅い丸形	0.52	0.42	10mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア1%を含む	10SR2/1	無し			
P1220	楕円形	浅い丸形	0.48	0.31	10mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア1%を含む	N2/0	無し			
P1221	円形	浅い丸形	0.46	0.40	10mmの縦線1%, 1~2mmのスコリア3%を含む	N1/5	無し			
P1222	円形	浅い丸形	0.41	0.15	8~10mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア1%を含む	N1/5	無し			
P1223	楕円形	蓋形	0.98 × 0.88	0.35	8~10mmの縦線1%, 1~2mmのスコリア1%を含む	10SR1/2	無し			
P1224	楕円形	蓋形	0.84	0.40	8~10mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア1%を含む	N2/0	無し			
P1225	不整形	蓋形	0.98 × 0.90	0.40	10mmの縦線1%, 1~2mmのスコリア1%を含む	N2/0	無し			
P1226	円形	蓋形	0.54	0.27	10mmの縦線3%, 2~3mmのスコリア1%を含む	5SR2/1	無し			
P1227	円形	浅い丸形	0.70	0.49	2~5mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し			
P1228	楕円形	浅い丸形	1.14	0.58	2~7mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	5SR2/1	無し	○		
P1229	円形	浅い丸形	0.51	0.19	1~3mmの縦線7%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し			
P1230	不整形	蓋形	1.12 × 0.77	0.49	1~5mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し			
P1231	円形	浅い丸形	1.05	0.38	1~5mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し	○		
P1232	円形	浅い丸形	0.59	0.27	2~3mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し	○		
P1233	円形	浅い丸形	0.45	0.23	2~4mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し	○		
P1234	楕円形	浅い丸形	0.49	0.17	1~5mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し	○		
P1235	円形	蓋形	1.22	0.31	2~7mmの縦線7%, 1~2mmのスコリア2%を含む	5SR2/1	無し			
P1236	楕円形	浅い丸形	0.52	0.40	2~5mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し	○		
P1237	円形	浅い丸形	0.48	0.17	3~5mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	5SR2/1	無し			
P1238	円形	浅い丸形	0.52	0.25	8~10mmの縦線5%, 3~5mmのスコリア1%を含む	2.5SR2/1	無し			
P1239	楕円形	浅い丸形	0.44	0.27	10~15mmの縦線3%, 2~3mmのスコリア3%を含む	N2/0	無し			
P1240	円形	浅い丸形	0.48	0.27	10~20mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア3%を含む	N2/0	有り			
P1241	円形	浅い丸形	0.56	0.12	10~15mmの縦線3%, 3~5mmのスコリア3%を含む	2.5SR2/1	有り			
P1242	楕円形	浅い丸形	0.39	0.24	8~10mmの縦線3%, 2~3mmのスコリア3%を含む	N2/0	やや覆り			
P1243	不明	浅い丸形	0.36	0.23	5~8mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア1%を含む	7SR1/2	無し			
P1244	不明	浅い丸形	0.51	0.25	8mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア1%を含む	SPR1/2	無し	○		
P1245	円形	浅い丸形	0.86	0.65	8mmの縦線3%, 2~3mmのスコリア3%を含む	5SR2/1	やや覆り			
P1246	円形	浅い丸形	1.54	0.50	10~15mmの縦線3%, 2~3mmのスコリア5%を含む	10SR3/1	無し			
P1247	楕円形	浅い丸形	0.89 × 0.61	0.25	8~10mmの縦線5%, 2~3mmのスコリア3%を含む	7.5SR2/1	無し			
P1248	楕円形	蓋研砂	0.40	0.28	50mmの縦線、10~15mmの縦線3%, 2~3mmのスコリア3%を含む	5SR2/1	やや覆り			
P1249	楕円形	浅い丸形	0.56	0.50	10mmの縦線1%, 2~5mmのスコリア3%を含む	SPR1/2	有り			
P1250	楕円形	浅い丸形	0.52	0.22	8mmの縦線1%, 2~3mmのスコリア1%を含む	7.5SR2/1	無し			
P1251	楕円形	蓋研砂	0.51	0.51	2~5mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア2%を含む	SPR1/2	無し	○		
P1252	円形	浅い丸形	0.53	0.30	3~7mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し	○		
P1253	円形	蓋研砂	0.54	0.38	1~3mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し	○		
P1254	円形	浅い丸形	0.50	0.28	1~5mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア2%を含む	7.5SR2/1	無し			
P1255	円形	浅い丸形	0.50	0.17	2~5mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア2%を含む	5SR2/1	無し			
P1256	楕円形	浅い丸形	0.78 × 0.56	0.44	2~4mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア2%を含む	N2/0	無し			
P1257	楕円形	蓋研砂	0.55	0.41	2~7mmの縦線3%, 1~2mmのスコリア2%を含む	N2/0	無し			
P1258	不整形	蓋形	0.50	0.26	2~5mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	2.5SR2/1	無し			
P1259	不整形	浅い丸形	0.40	0.28	3~10mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア5%を含む	10SR2/1	無し			
P1260	円形	浅い丸形	0.47	0.35	5~10mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア5%を含む	7.5SR2/1	無し			
P1261	円形	浅い丸形	0.54	0.36	3~10mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア5%を含む	7.5SR2/1	無し			
P1262	楕円形	浅い丸形	0.57	0.22	2~10mmの縦線5%, 3mmのスコリア3%を含む	7.5SR2/1	無し			
P1263	不整形	浅い丸形	1.15 × 0.90	0.34	5~20mmの縦線7%, 1~3mmのスコリア5%を含む	5SR3/1	無し			
P1264	楕円形	浅い丸形	0.41	0.39	1~10mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア3%を含む	2.5SR2/1	無し			
P1265	円形	浅い丸形	0.49	0.31	1~7mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア3%を含む	N2/0	無し	○		
P1266	円形	浅い丸形	0.53	0.37	1~7mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア3%を含む	5SR2/1	無し	○		
P1267	円形	浅い丸形	0.48	0.26	2~5mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	5SR2/1	無し			
P1268	円形	浅い丸形	0.59	0.26	2~5mmの縦線8%, 1~2mmのスコリア2%を含む	N2/0	無し			
P1269	楕円形	浅い丸形	0.77	0.22	2~4mmの縦線10%, 1~2mmのスコリア2%を含む	10SR2/1	無し			
P1270	円形	浅い丸形	0.63	0.42	2~4mmの縦線10%, 1~2mmのスコリア2%を含む	10SR2/1	無し			
P1271	円形	浅い丸形	0.47	0.27	3~7mmの縦線10%, 1~2mmのスコリア2%を含む	10SR2/1	無し	○		
P1272	円形	浅い丸形	0.53	0.17	1~3mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	N2/0	無し			
P1273	楕円形	蓋形	0.65	0.27	1~5mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア2%を含む	N2/0	無し			
P1274	楕円形	浅い丸形	0.87	0.23	3~10mmの縦線5%, 1~2mmのスコリア5%を含む	SPR1/2	有り			
P1275	楕円形	蓋研砂	0.89	0.29	2~5mmの縦線7%, 1~2mmのスコリア2%を含む	N2/0	無し	○		

第15表 7区ビット計測表(5)

道標名	平面形	断面形	径 (mm)	高さ (mm)	備 考	色	遺土跡あり	遺物/古代	遺物/中世	遺物/近世
PT276	円形	浅い丸形	0.63	0.14	2～5mmの繊維3%、1～2mmのスコリア1%を含む	10YR1/7	無し			
PT277	円形	浅い丸形	0.65	0.38	2～5mmの繊維5%、1～2mmのスコリア2%を含む	10YR1/7	無し			
PT278	円形	浅い丸形	0.44	0.47	3～7mmの繊維5%、1～2mmのスコリア2%を含む	10YR2/1	無し	○		
PT279	円形	浅い丸形	0.57	0.25	3～10mmの繊維7%、1～2mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	無し			
PT280	楕円形	浅い丸形	0.66	0.20	2～7mmの繊維5%、1～2mmのスコリア2%を含む	N1.5/0	無し	○		
PT281	円形	蓋形	0.52	0.26	3～7mmの繊維5%、1～2mmのスコリア2%を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT282	楕円形	浅い丸形	0.53	0.33	3～10mmの繊維10%、1～3mmのスコリア3%を含む	N2/0	無し			
PT283	円形	浅い丸形	1.00	0.21	3～7mmの繊維15%、1～3mmのスコリア3%を含む	5PZ2/1	無し	○		
PT284	円形	浅い丸形	0.55	0.27	3～8mmの繊維10%、1～3mmのスコリア2%を含む	N2/0	無し			
PT285	楕円形	浅い丸形	0.56	0.41	3～7mmの繊維10%、1～3mmのスコリア2%を含む	N2/0	無し			
PT289	不整形	浅い丸形	0.61	0.52	2～5mmの繊維7%、1～2mmのスコリア2%を含む	10YR2/1	無し			
PT291	楕円形	浅い丸形	0.67	0.50	2～7mmの繊維7%、1～2mmのスコリア2%を含む	10YR2/1	無し	○		
PT292	楕円形	浅い丸形	0.39	0.33	3～8mmの繊維5%、1～2mmのスコリア3%を含む	10YR2/1	無し	○		
PT293	不明	浅い丸形	1.27	0.16	3～8mmの繊維5%、1～2mmのスコリア3%を含む	5PZ1/1	無し			
PT294	楕円形	浅い丸形	0.44	0.45	—	—	—			
PT296	円形	浅い丸形	0.56	0.36	5～8mmの繊維7%、1～2mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	無し	○		
PT297	円形	浅い丸形	0.45	0.23	3～8mmの繊維7%、1～2mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	無し	○		
PT299	楕円形?	浅い丸形	0.56	0.29	3～8mmの繊維7%、1～2mmのスコリア3%を含む	2.5Y1/1	無し			
PT300	円形	浅い丸形	0.78	0.52	3～8mmの繊維5%、1～2mmのスコリア3%を含む	N2/0	無し	○		
PT301	楕円形	浅い丸形	0.54	0.32	3～8mmの繊維5%、1～2mmのスコリア3%を含む	5YR2/1	無し			
PT302	円形	浅い丸形	0.56	0.23	3～5mmの繊維7%、1～2mmのスコリア3%を含む	10YR2/1	無し	○		
PT303	円形	浅い丸形	0.66	0.31	3～8mmの繊維7%、1～2mmのスコリア3%を含む	10YR2/1	無し			
PT304	楕円形	浅い丸形	0.48 × 0.61	0.45	3～5mmの繊維7%、1～2mmのスコリア1%を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT305	楕円形	浅い丸形	1.00	0.62	3～8mmの繊維5%、1～2mmのスコリア1%を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT306	楕円形	浅い丸形	0.71	0.62	5～10mmの繊維5%、1～2mmのスコリア3%を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT307	円形	浅い丸形	0.59	0.44	5～10mmの繊維5%、2～3mmのスコリア3%を含む	2.5YR2/1	無し	○		
PT308	円形	浅い丸形	0.54	0.38	3～10mmの繊維7%、2～3mmのスコリア3%を含む	5YR2/1	無し			
PT309	円形	浅い丸形	0.92	0.34	5～12mmの繊維7%、2～3mmのスコリア3%を含む	2.5Y1/1	無し			
PT310	楕円形	浅い丸形	0.50 × 0.65	0.29	8～15mmの繊維5%、2～3mmのスコリア3%を含む	10YR2/1	無し			
PT311	円形	浅い丸形	0.62	0.44	3～8mmの繊維5%、2～3mmのスコリア3%を含む	7.5YR2/1	無し	○		
PT312	円形	浅い丸形	0.55	0.23	3～10mmの繊維5%、2～3mmのスコリア1%を含む	5YR2/1	無し	○		
PT313	円形	浅い丸形	0.61	0.33	3～8mmの繊維5%、1～2mmのスコリア1%を含む	5YR2/1	無し	○		
PT314	円形	浅い丸形	0.41	0.34	5mmの繊維1%、1～2mmのスコリア1%を含む	N2/0	無し			
PT315	楕円形	浅い丸形	0.54 × 0.69	0.33	2～10mmの繊維5%、2～3mmのスコリア2%を含む	10YR2/1	無し			
PT316	楕円形	浅い丸形	0.62	0.39	2～8mmの繊維5%、2～3mmのスコリア3%を含む	10YR2/1	無し	○		
PT317	楕円形	浅い丸形	0.54	0.31	2～5mmの繊維5%、2～3mmのスコリア2%を含む	7.5YR2/1	無し	○		
PT318	楕円形	浅い丸形	0.64	0.40	2～3mmの繊維7%、2～3mmのスコリア1%を含む	2.5YR2/1	有り			
PT319	円形	浅い丸形	0.58	0.50	3～8mmの繊維5%、1～2mmのスコリア1%を含む	10YR2/1	無し			
PT320	楕円形	浅い丸形	0.75 × 0.94	0.33	2～10mmの繊維3%、1～3mmのスコリア2%を含む	7.5Y2/1	無し			
PT321	楕円形	浅い丸形	0.60	0.29	2～4mmの繊維3%、1～3mmのスコリア2%を含む	10YR2/1	無し			
PT322	楕円形	浅い丸形	0.81	0.64	3～7mmの繊維3%、1～2mmのスコリア2%を含む	10YR2/1	無し			
PT323	楕円形	浅い丸形	0.72	0.46	2～15mmの繊維5%、1～2mmのスコリア2%を含む	10YR2/1	無し			
PT324	楕円形	蓋形	0.89 × 1.09	0.29	2～5mmの繊維3%、3～8mmのスコリア5%を含む	10YR2/1	無し			
PT325	円形	蓋形	0.61	0.69	1～5mmの繊維10%、3～5mmのスコリア3%を含む	2.5Y1/1	無し	○		
PT326	円形	浅い丸形	0.47	0.29	10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア1%を含む	5YR2/1	無し			
PT327	円形	浅い丸形	0.71	0.33	2～7mmの繊維7%、3～5mmのスコリア3%を含む	2.5YR2/1	無し			
PT328	円形	浅い丸形	0.65	0.32	2～10mmの繊維5%、2～3mmのスコリア3%を含む	2.5YR2/1	無し			
PT329	楕円形	浅い丸形	0.64	0.52	2～7mmの繊維5%、1～3mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT330	円形	浅い丸形	0.44	0.29	10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア1%を含む	10YR1/7	無し	○		
PT331	円形	浅い丸形	1.07	0.36	8～10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア2%を含む	2.5Y1/1	無し			
PT332	不明	浅い丸形	0.93	0.14	10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア3%を含む	5Y2/1	無し			
PT333	円形	蓋形	1.07	0.38	10～12mmの繊維5%、2～3mmのスコリア2%を含む	2.5Y1/1	無し	○		
PT334	円形	浅い丸形	0.54	0.29	10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア2%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT335	円形	浅い丸形	0.59	0.66	10～20mmの繊維3%、2～3mmのスコリア5%を含む	7.5Y2/1	無し			
PT336	円形	浅い丸形	0.41	0.28	10～20mmの繊維3%、2～3mmのスコリア5%を含む	7.5YR2/1	無し			
PT337	楕円形	浅い丸形	0.53 × 0.66	0.39	10～20mmの繊維3%、2～3mmのスコリア5%を含む	7.5YR2/1	無し			
PT338	楕円形	浅い丸形	0.65	0.25	8～10mmの繊維3%、3～5mmのスコリア3%を含む	5Y2/1	無し	○		
PT339	方形?	浅い丸形	0.90	0.17	10～15mmの繊維3%、2～3mmのスコリア3%を含む	5Y2/1	無し			
PT340	楕円形	浅い丸形	0.49	0.28	10～15mmの繊維3%、2～3mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT341	円形	浅い丸形	1.27	0.39	10～20mmの繊維3%、2～3mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	無し	○		
PT342	円形	浅い丸形	0.47	0.27	10～20mmの繊維3%、2～3mmのスコリア3%を含む	2.5Y1/1	無し			
PT343	楕円形	浅い丸形	0.46	0.30	10～20mmの繊維3%、2～3mmのスコリア3%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT344	楕円形	浅い丸形	0.42 × 0.59	0.27	8～10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア1%を含む	2.5Y2/1	無し	○		
PT345	楕円形	蓋形	0.70	0.45	8～10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア1%を含む	7.5YR2/1	無し			
PT346	楕円形	浅い丸形	0.61	0.27	8～10mmの繊維1%、2～3mmのスコリア1%を含む	5Y2/1	無し			
PT347	楕円形	蓋形	0.78 × 0.83	0.47	8～10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア1%を含む	5Y2/1	無し	○		
PT348	楕円形	浅い丸形	0.47	0.72	8～10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア1%を含む	5Y2/1	無し			
PT349	楕円形	浅い丸形	0.56	0.41	8～10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア1%を含む	5Y2/1	無し			
PT350	楕円形	浅い丸形	0.66	0.62	8～10mmの繊維3%、2～3mmのスコリア1%を含む	2.5Y2/1	無し			
PT351	楕円形	浅い丸形	0.65	0.50	8～10mmの繊維1%、2～3mmのスコリア1%を含む	5PZ1/1	無し	○		
PT352	円形	蓋形	0.70	0.25	10mmの繊維1%、1～2mmのスコリア1%を含む	10YR2/1	無し			
PT353	円形	蓋形	0.64	0.37	10mmの繊維1%、2～3mmのスコリア1%を含む	5YR2/1	無し	○		
PT354	円形	浅い丸形	0.60	0.33	8～10mmの繊維1%、1～2mmのスコリア1%を含む	10YR2/1	無し			
PT355	円形	蓋形	1.06	0.29	1～3mmの繊維10%、2～3mmのスコリア3%を含む	N2/0	無し	○		
PT356	円形	蓋形	1.11	0.31	2～5mmの繊維7%、2～3mmのスコリア3%を含む	N2/0	無し	○		
PT357	円形	浅い丸形	1.08	0.24	2～5mmの繊維7%、2～3mmのスコリア3%を含む	N2/0	無し			
PT358	不明	浅い丸形	1.00	0.21	3～7mmの繊維7%、2～3mmのスコリア3%を含む	N2/0	無し			

第16表 7区ビット計測表(6)

道標名	平面形	断面形	幅(m)	高さ(m)	备注	色	停止線より	道幅/古代	道幅/中継	道幅/道標
PT359	円形	浅い丸形	1.57	0.21	3～10mmの繊維5%, 2～3mmのスコリア3%を含む	N2/O	無し	○		
PT360	円形	浅い丸形	1.23	0.38	2～7mmの繊維7%, 2～3mmのスコリア2%を含む	N2/O	無し	○		○
PT361	楕円形	楕形	0.97	0.26	2～7mmの繊維10%, 1～3mmのスコリア3%を含む	SRP1/7/1	無し	○		
PT362	楕円形	浅い丸形	0.90	0.22	10～20mmの繊維1%, 3～5mmのスコリア3%を含む	N2/O	無し			
PT363	楕円形	浅い丸形	0.64	0.44	2～7mmの繊維10%, 1～3mmのスコリア3%を含む	7.SRP1/7/1	無し			
PT364	円形	楕形	1.19	0.14	8～10mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT365	楕円形	楕形	1.10	0.20	8～10mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT366	円形	楕形	1.15	0.16	8～12mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し	○		
PT367	円形	浅い丸形	0.47	0.24	8mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	2.SY2/1	無し	○		
PT368	円形	浅い丸形	0.37	0.23	5mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	SYR1/7/1	無し			
PT369	楕円形	浅い丸形	0.64	0.30	5～8mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	SYR1/7/1	無し			
PT370	楕円形	浅い丸形	0.62	0.34	5～8mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	SYR1/7/1	無し			
PT371	円形	浅い丸形	1.42	0.28	10～15mmの繊維3%, 2～3mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し	○		
PT372	楕円形	浅い丸形	0.37	0.22	8～10mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SYR1/7/1	無し			
PT373	円形	浅い丸形	0.51	0.37	8～10mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SYR1/7/1	無し	○		
PT374	円形	菱形状	0.48	0.28	5mmの繊維3%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SRP2/1	無し			
PT375	円形	浅い丸形	0.50	0.33	8mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し	○		
PT376	円形	浅い丸形	0.47	0.30	8mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT377	楕円形	浅い丸形	0.63	0.40	8mmの繊維3%, 1mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT378	円形	浅い丸形	0.37	0.25	5mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT379	SRP2	浅い丸形	0.52	0.33	10mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SRP2/1	無し	○		
PT380	円形	浅い丸形	0.49	0.28	5mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	SYR2/1	無し	○		
PT381	円形	浅い丸形	0.57	0.22	10mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア3%を含む	7.SRP2/2	無し	○		
PT382	円形	浅い丸形	0.40	0.25	10～12mmの繊維1%, 3～5mmのスコリア1%を含む	SRP2/1	無し	○		
PT383	円形	浅い丸形	0.34	0.07	5mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	10RP2/1	無し			
PT384	楕円形	浅い丸形	0.61	0.23	10mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア3%を含む	10RP2/1	無し			
PT385	円形	楕形	0.50	0.27	5mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	10RP2/1	無し			
PT386	楕円形	楕形	0.51	0.25	10mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア1%を含む	10RP2/1	無し			
PT387	楕円形	浅い丸形	0.26	0.28	5mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア1%を含む	7.SRP2/1	無し			
PT388	円形	浅い丸形	0.37	0.27	10mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT389	円形	浅い丸形	0.47	0.41	5～8mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	SP1/7/1	無し			
PT390	円形	浅い丸形	0.52	0.46	5mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	2.SYR2/1	無し			
PT391	円形	浅い丸形	0.32	0.20	5mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア3%を含む	10RP2/1	無し			
PT392	楕円形	浅い丸形	0.58	0.17	5mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア3%を含む	10RP2/1	無し			
PT393	楕円形	浅い丸形	0.73	0.27	5mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア3%を含む	10RP2/1	無し			
PT394	不明	浅い丸形	0.66	0.33	5mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SYR2/1	無し			
PT395	円形	浅い丸形	0.57	0.33	5mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SYR2/1	無し			
PT396	円形	浅い丸形	0.72	0.31	8～10mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SYR2/1	無し	○		
PT397	円形	浅い丸形	0.50	0.31	10mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア3%を含む	SYR2/1	無し	○		
PT398	楕円形	楕形	0.61	0.33	5～8mmの繊維1%, 3～5mmのスコリア1%を含む	SYR2/1	無し	○		
PT399	楕円形	浅い丸形	0.63	0.34	10mmの繊維3%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SP3/1	無し			
PT400	円形	浅い丸形	0.53	0.22	8mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT401	円形	楕形	0.90	0.27	8mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT402	不明	浅い丸形	0.75	0.53	5～8mmの繊維3%, 2～3mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT403	楕円形	浅い丸形	0.96 × 0.7	0.53	3～8mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SYR2/1	無し			
PT404	不明	浅い丸形	0.28	0.18	5mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	10RP2/1	無し			
PT405	不明	浅い丸形	0.40	0.25	5mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア3%を含む	2.SYR2/1	無し			
PT406	楕円形	浅い丸形	0.22	0.20	5mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT407	円形	浅い丸形	0.53	0.38	10mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア3%を含む	N2/O	無し	○		
PT408	楕円形	浅い丸形	0.43 × 0.59	0.33	10mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	2.SYR2/1	無し			
PT409	円形	浅い丸形	0.77	0.33	10mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア3%を含む	N2/O	無し			
PT410	円形	浅い丸形	0.63	0.17	5mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	10RP2/1	無し			
PT411	円形	浅い丸形	0.63	0.25	8～10mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SP2/0	無し			
PT412	楕円形	浅い丸形	0.55	0.34	10mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア1%を含む	SYR3/1	無し			
PT413	円形	浅い丸形	0.48	0.28	10mmの繊維3%, 3～5mmのスコリア1%を含む	10RP2/1	無し			
PT414	円形	浅い丸形	0.66	0.41	10mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア3%を含む	2.SYR2/1	無し			
PT415	楕円形	浅い丸形	0.57 × 0.71	0.39	5～8mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	10RP2/2	無し	○		
PT416	円形	浅い丸形	0.68	0.37	5mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア1%を含む	SYR2/1	無し	○		
PT417	不明	浅い丸形	0.53	0.23	5mmの繊維1%, 3～5mmのスコリア3%を含む	SRP3/1	無し			
PT418	不明	浅い丸形	0.59	0.34	5mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア3%を含む	2.SYR2/1	無し			
PT419	不明	浅い丸形	0.54	0.17	8mmの繊維1%, 3～5mmのスコリア3%を含む	SYR2/1	無し			
PT420	円形	浅い丸形	0.69	0.61	5mmの繊維1%, 2～3mmのスコリア1%を含む	SYR2/1	無し			
PT421	円形	浅い丸形	0.74	0.22	5mmの繊維3%, 1～2mmのスコリア3%を含む	10RP2/1	無し			
PT422	円形	浅い丸形	0.57	0.40	5mmの繊維1%, 1～2mmのスコリア1%を含む	N2/O	無し			
PT423	不明	浅い丸形	0.76	0.15	—	—	—			
PT424	円形	浅い丸形	0.61	0.24	—	—	—			

第Ⅷ章 自然科学分析

1. 中原遺跡出土の炭化物の種類と年代

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、中原遺跡（静岡県沼津市所在）の発掘調査で検出された古墳時代後期～律令期前期の住居床面やカマドから出土した炭化物の同定と放射性炭素年代測定を実施し、当時の植物利用と遺構の構築年代に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、住居跡の床面やカマドを中心に出土した炭化物 62 点（試料番号 1～62）である。種実同定は 4 点（試料番号 6,7,8,22）を対象に、炭化材同定は残りの 58 点を対象に実施する。放射性炭素年代測定は、同定後の種実 1 点（試料番号 6）と炭化材 10 点（試料番号 12,25,28,36,38,44,50,57,59,62）の計 11 点を対象に実施する。各試料の詳細は、結果と共に表 1～5 に示す。

2. 分析方法

(1) 炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を複製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

(2) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定する。

(3) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代をもつものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1 g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃ で 10 時間以上加熱し、グラフアイトを生成する。

化学処理後のグラフアイト・鉄粉混合試料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に ¹³C/¹²C の測定も行うため、この値を用いて δ ¹³C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とし

た年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma:68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正することである。暦年較正は、CALIB 5.02 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

3. 結果

(1) 炭化材同定

結果を表 1 に、地区・遺構別の樹種構成を表 2 に示す。試料番号 48 には 2 種類が認められた。これらの炭化材は、針葉樹 2 分類群 (スギ・ヒノキ科) と、広葉樹 8 分類群 (アサダ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・シキミ・クスノキ科・モモ・サクラ属・センダン・ムクロジ・ウコギ属・ネジキ・ムラサキシキブ属) に同定された。なお、試料番号 40.59 は、仮道管を主体とする針葉樹であるが、保存状態が悪く、種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2-4 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3 細胞幅、1-30 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1-3 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸〜厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

散孔材で、管壁厚は中庸〜薄く、横断面では多角形、単独または 2-4 個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状〜対列状に配列、道管内壁にはらせん肥厚が認

表 1. 炭化材同定結果

試料 番号	調査区	遺構	遺物 番号	層位	状態	樹種	備考
1	2区	SB6	1965	床	破片	シキミ	
2	2区	SB6	1992	床	破片	シキミ	
3	2区	SB6	2088	床	破片	スギ	
4	2区	SB8	2372	カマド床	破片	シキミ	
5	2区	SB8	2373	カマド床	破片	シキミ	
9	5区	SB2	2112	床	破片	コナラ属アカガシ亜属	
10	5区	SB2	2506	床	破片	コナラ属アカガシ亜属	
11	5区	SB2	2525	床	破片	コナラ属アカガシ亜属	
12	5区	SB2	2539	床	細片	シキミ	
13	5区	SB2	2539	床	破片	シキミ	
14	5区	SB2	2712	床	破片	スギ	
15	5区	SB8	1345	覆土	破片	モモ	
16	5区	SB8	2699	床	破片	ネジキ	
17	6区	SB3	6797	床	破片	ウコギ属	
18	6区	SB3	6934	床	破片	ウコギ属	
19	6区	SB4R0	5077	覆土	破片	コナラ属アカガシ亜属	
20	6区	SB4	5215	カマド	丸木	シキミ	直径 1 cm (3年生)
21	6区	SB4	5995	カマド	破片	シキミ	
23	6区	SB4	7647	竈方	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
24	6区	SB4	7648	竈方	破片	スギ	
25	6区	SB5	3680	覆土	破片	ヒノキ科	
26	6区	SB5	6344	床	破片	クスノキ科	
27	6区	SB8P6	7306	竈方	破片	スギ	
28	6区	SB9	7705	竈方	破片	クスノキ科	
29	6区	SB14	7099	覆土	破片	スギ	
30	6区	SB14	7410	カマド	破片	スギ	
31	7区	SB2	441	カマド	破片	シキミ	
32	7区	SB2	843	床	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
33	7区	SB5	3785	カマド	破片	シキミ	
34	7区	SB5	5485	カマド	破片	シキミ	
35	7区	SB6	101	覆土	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
36	7区	SB6	5055	床	破片	アサダ	
37	7区	SB8	3128	床	破片	クスノキ科	
38	7区	SB8	3132	床	破片	ヒノキ科	
39	7区	SB8	5184	カマド	破片	シキミ	
40	7区	SB15	760	床	破片	針葉樹	
41	7区	SB15	3244	カマド	破片	コナラ属アカガシ亜属	
42	7区	SB16	3235	カマド	破片	ヒノキ科	
43	7区	SB16	3918	カマド	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
44	7区	SB21	5173	床	破片	クスノキ科	
45	7区	SB21	5174	床	破片	サクラ属	
46	7区	SB21	5175	床	破片	モモ	
47	7区	SB29	4636	カマド	破片	センダン	
48	7区	SB29	4834	カマド床	破片	クスノキ科	
49	8区	SB3	3667	カマド	破片	ムラサキシキブ属	
50	8区	SB3	3858	床	微細片	スギ	
51	8区	SB3	3858	床	細片	スギ	
52	8区	SB3	3858	床	破片	ヒノキ科	
53	8区	SB7	4945	カマド	破片	ムクロジ	
54	8区	SB7	4946	カマド	破片	コナラ属アカガシ亜属	
55	8区	SB8	4411	床	破片	スギ	
56	8区	SB8	4412	床	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
57	8区	SB12	3887	カマド	破片	ムラサキシキブ属	
58	8区	SB12	3933	カマド	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
59	8区	SB14	3574	床	破片	針葉樹	
60	8区	SB14	3793	覆土	破片	シキミ	
61	8区	SB17	4260	カマド	破片	ヒノキ科	
62	8区	SB17	4504	カマド	破片	スギ	

表2. 地区・遺構別の樹種構成

分類群\地区・遺構	2区		5区				6区							
	S86	S88	S82	S88	S83	S84	S84 R0	S85	S88 P6	S89	S814			
	床	カマド	床	礎土	床	カマド	掘方	礎土	床	礎土	掘方	掘方	カマド	掘方
針葉樹														
スギ		1		1				1		1			1	1
ヒノキ科									1					
針葉樹														
広葉樹														
アサダ														
クスノキ								1						
アカガシ属				3				1						
シキミ	2	2	2			2								
クスノキ科									1				1	
モモ					1									
サクラ属														
センダン														
ムクロジ														
ウコギ属						2								
ネジキ					1									
ムラサキシキブ属														
合計	3	2	6	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1

分類群\地区・遺構	7区									8区							合計				
	S82	S85	S86	S88	S815	S816	S81	S829	S83	S807	S88	S812	S814	S817							
	床	カマド	カマド	床	礎土	床	カマド	カマド	カマド	床	カマド	カマド	床	カマド	床	礎土		カマド			
針葉樹																					
スギ											1	2					1	11			
ヒノキ科						1			1		1							5			
針葉樹								1										2			
広葉樹																					
アサダ				1														1			
クスノキ								1				1	1					6			
アカガシ属			1	2					1					1				6			
シキミ			1	2			1							1				13			
クスノキ科						1				1	1							5			
モモ										1								2			
サクラ属										1								1			
センダン											1							1			
ムクロジ												1						1			
ウコギ属																		2			
ネジキ																		1			
ムラサキシキブ属													1					2			
合計	1	1	2	1	1	2	1	1	1	2	3	3	3	1	2	2	2	1	1	2	59

められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

・モモ (*Prunus persica* Batsch)バラ科サクラ属

環孔性を帯びた散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が4-5列配列し、やや急激に管径を減じた後、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管の壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-5個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-60細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*)バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-6個が複合、年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

・センダン (*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel) センダン科センダン属

環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、単独または2-6個が複合して

配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-4細胞幅、1-30細胞高。柔組織は周囲状、ターミナル状および帯状。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1~40細胞高。柔組織は周囲状~連合翼状、帯状およびターミナル状。

・ウコギ属 (*Acanthopanax*) ウコギ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2-8個が塊状あるいは按線方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-10細胞幅、数細胞高のものから広放射組織まである。放射組織には鞘状の組織が認められる。

・ネジキ (*Lyonia ovalifolia* (Wall.) drude subsp. neziki Hara) ツツジ科ネジキ属

散孔材で、管壁は中庸、横断面では角張った円形~多角形、ほぼ単独で、希に2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有している。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高で、辺縁部に直立細胞からなる長い単列翼部をもつ。

・ムラサキシキブ属 (*Callicarpa*) クマツツ科

散孔材で、横断面では多角形、道管は単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

(2) 種実同定

結果を表3に、写真を図版6に示す。試料番号6~8(2区SB24)、試料番号22(6区SB4)の4試料とも栽培種のモモに同定された。以下に形態的特徴を記す。

表3. 種実同定結果

試料番号	調査区	遺構	遺物番号	層位	分類群	部位	状態	個数	備考
6	2区	SB24	2452	床	モモ	核(内果皮)	炭化	6	計1個体未満, 1個 (0.24g) 年代測定
					モモ	種子	炭化	1	
7	2区	SB24	2455	床	モモ	核(内果皮)	炭化	6	計1/2個体未満
8	2区	SB24	2456	床	モモ	核(内果皮)	炭化	5	計1/2個体未満
22	6区	SB4	6830	床	モモ	核(内果皮)	炭化	9	計1個体未満

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)、種子は炭化しており黒色を呈す。核は、完形ならば長さ1.7~3cm、幅1~2cm、厚さ1~1.6cmのやや扁平な広楕円体で、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。試料は全て破片で、最大で1.5cm程度。4試料とも合計は1個体に満たず、試料番号7.8は半分にも満たない。核の内側表面は平滑で、種子1個が入る楕円状の窪みが見られる。試料番号6に1個確認された種子は、長さ0.8cm、幅0.6mm、厚さ0.3cm程度の扁平な楕円体。種皮表面はやや平滑で発泡している。

(3) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を表4に示す。炭化種実は、試料番号6(2区SB24)のモモ核が1,350 ± 20BP、炭化材は試料番号12(5区SB2)のシキミが1,470 ± 30BP、試料番号25(6区SB5)のヒノキ科が1,330 ± 30BP、試料番号28(6区SB9)のクスノキ科が1,490 ± 20BP、試

表4. 住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定結果

試料番号	調査区	遺構	遺物番号	層位	種類	補正年代		測定年代	Code No.
						BP	δ 13 C (%)		
6	2区	SB24	2452	床	炭化種実 (モモ核)	1,350 ± 20	-24.44 ± 0.52	1,340 ± 20	IAAA-102838
12	5区	SB2	2539	床	炭化材 (シキミ)	1,470 ± 30	-29.71 ± 0.74	1,550 ± 30	IAAA-102839
25	6区	SB5	3680	覆土	炭化材 (セノキ科)	1,490 ± 20	-23.77 ± 0.51	1,470 ± 20	IAAA-102840
28	6区	SB9	7705	掘方	炭化材 (クスノキ科)	1,330 ± 30	-28.26 ± 0.53	1,390 ± 20	IAAA-102841
36	7区	SB6	5055	床	炭化材 (アサダ)	1,460 ± 20	-25.48 ± 0.49	1,470 ± 20	IAAA-102842
38	7区	SB8	3132	床	炭化材 (セノキ科)	1,510 ± 20	-29.43 ± 0.42	1,580 ± 20	IAAA-102843
44	7区	SB21	5173	床	炭化材 (クスノキ科)	1,370 ± 30	-25.98 ± 0.71	1,390 ± 20	IAAA-102844
50	8区	SB3	3858	床	炭化材 (スギ)	1,580 ± 30	-25.15 ± 0.41	1,590 ± 20	IAAA-102845
57	8区	SB12	3887	カマド	炭化材 (ムラサキシキブ属)	1,250 ± 30	-25.45 ± 0.55	1,260 ± 20	IAAA-102846
59	8区	SB14	3574	床	炭化材 (針葉樹)	1,600 ± 30	-24.52 ± 0.57	1,590 ± 20	IAAA-102847
62	8区	SB17	4504	カマド	炭化材 (スギ)	1,760 ± 20	-22.31 ± 0.46	1,720 ± 20	IAAA-102848

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表5. 住居跡出土炭化材の暦年較正結果

区	遺構	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.		
			σ	cal AD	652 -	cal AD	672	cal BP			1,298 -	1,278
2区	SB24	1,352 ± 24	σ	cal AD	642 -	cal AD	690	cal BP	1,308 -	1,260	0.977	IAAA-102838
			2 σ	cal AD	752 -	cal AD	761	cal BP	1,198 -	1,189	0.023	
5区	SB2	1,473 ± 27	σ	cal AD	565 -	cal AD	618	cal BP	1,385 -	1,332	1.000	IAAA-102839
			2 σ	cal AD	548 -	cal AD	641	cal BP	1,402 -	1,309	1.000	
6区	SB5	1,490 ± 24	σ	cal AD	557 -	cal AD	602	cal BP	1,393 -	1,348	1.000	IAAA-102840
			2 σ	cal AD	540 -	cal AD	632	cal BP	1,410 -	1,318	1.000	
6区	SB9	1,334 ± 25	σ	cal AD	656 -	cal AD	685	cal BP	1,294 -	1,265	1.000	IAAA-102841
			2 σ	cal AD	649 -	cal AD	711	cal BP	1,301 -	1,239	0.883	
7区	SB6	1,457 ± 23	σ	cal AD	746 -	cal AD	766	cal BP	1,204 -	1,184	0.117	IAAA-102842
			2 σ	cal AD	591 -	cal AD	638	cal BP	1,359 -	1,312	1.000	
7区	SB8	1,507 ± 24	σ	cal AD	565 -	cal AD	646	cal BP	1,385 -	1,304	1.000	IAAA-102843
			2 σ	cal AD	544 -	cal AD	590	cal BP	1,406 -	1,360	1.000	
7区	SB21	1,370 ± 25	σ	cal AD	647 -	cal AD	666	cal BP	1,303 -	1,284	1.000	IAAA-102844
			2 σ	cal AD	619 -	cal AD	682	cal BP	1,331 -	1,268	1.000	
8区	SB3	1,583 ± 25	σ	cal AD	430 -	cal AD	444	cal BP	1,520 -	1,506	0.160	IAAA-102845
			2 σ	cal AD	449 -	cal AD	463	cal BP	1,501 -	1,487	0.176	
8区	SB12	1,249 ± 25	σ	cal AD	483 -	cal AD	533	cal BP	1,467 -	1,417	0.664	IAAA-102846
			2 σ	cal AD	421 -	cal AD	540	cal BP	1,529 -	1,410	1.000	
8区	SB14	1,597 ± 25	σ	cal AD	690 -	cal AD	751	cal BP	1,260 -	1,199	0.789	IAAA-102847
			2 σ	cal AD	762 -	cal AD	778	cal BP	1,188 -	1,172	0.211	
8区	SB17	1,760 ± 24	σ	cal AD	679 -	cal AD	827	cal BP	1,271 -	1,123	0.942	IAAA-102848
			2 σ	cal AD	838 -	cal AD	865	cal BP	1,112 -	1,065	0.058	
8区	SB17	1,760 ± 24	σ	cal AD	422 -	cal AD	442	cal BP	1,528 -	1,508	0.257	IAAA-102848
			2 σ	cal AD	453 -	cal AD	461	cal BP	1,497 -	1,489	0.082	
8区	SB17	1,760 ± 24	σ	cal AD	484 -	cal AD	532	cal BP	1,466 -	1,418	0.661	IAAA-102848
			2 σ	cal AD	414 -	cal AD	537	cal BP	1,536 -	1,413	1.000	
8区	SB17	1,760 ± 24	σ	cal AD	240 -	cal AD	261	cal BP	1,710 -	1,689	0.338	IAAA-102848
			2 σ	cal AD	281 -	cal AD	325	cal BP	1,669 -	1,625	0.662	
8区	SB17	1,760 ± 24	σ	cal AD	215 -	cal AD	355	cal BP	1,735 -	1,595	0.986	IAAA-102848
			2 σ	cal AD	367 -	cal AD	380	cal BP	1,583 -	1,570	0.014	

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and P J Reimer) を使用
 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
 3) 1桁目を丸めるのが習慣だが、暦年較正前年或暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較がしやすいように、1桁目を丸めていない。
 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、2 σ は95%である
 5) 相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

料番号 36 (7 区 SB6) のアサダが $1,460 \pm 20BP$ 、試料番号 38 (7 区 SB8) のヒノキ科が $1,510 \pm 20BP$ 、試料番号 44 (7 区 SB21) のクスノキ科が $1,370 \pm 30BP$ 、試料番号 50 (8 区 SB3) のスギが $1,580 \pm 30BP$ 、試料番号 57 (8 区 SB12) のムラサキシキブ属が $1,250 \pm 30BP$ 、試料番号 59 (8 区 SB14) の針葉樹が $1,600 \pm 30BP$ 、試料番号 62 (8 区 SB17) のスギが $1,760 \pm 20BP$ であった。

また、暦年較正結果を表 5 に示す。測定誤差 σ の場合の暦年は、2 区 SB24 のモモ核が calAD652-672、炭化材は 5 区 SB2 のシキミが calAD565-618、6 区 SB5 のヒノキ科が calAD557-602、SB9 のクスノキ科が calAD656-685、7 区 SB6 のアサダが calAD591-638、SB8 のヒノキ科が calAD544-590、SB21 のクスノキ科が calAD647-666、8 区 SB3 のスギが calAD430-533、SB12 のムラサキシキブ属が calAD690-778、SB14 の針葉樹が calAD422-532、SB17 のスギが calAD240-325 であった。

4. 考察

各住跡から出土した炭化物には、炭化種実 1 分類群 (モモ) と、炭化材 14 分類群が認められた。炭化材で確認された針葉樹のスギやヒノキ科は、木理が直道で割裂性が高く、加工は容易である。広葉樹では、アサダ、クヌギ節、アカガシ亜属、シキミ、モモ、サクラ属、センダン、ムクロジ、ネジキ、ムラサキシキブ属は、比較的硬で強度が高い材質を有する。このうち、ムラサキシキブ属は小径の低木である。ウコギ属は、確認された他の広葉樹に比較すると、やや強度が低い。クスノキ科には様々な種類が含まれ、材質も強度が高い種類から低い種類まで様々である。

各地区別・遺構別の樹種構成 (表 1) は、全体では、針葉樹のスギと広葉樹のシキミの利用が多く、針葉樹のヒノキ科、広葉樹のクヌギ節、アカガシ亜属、クスノキ科も比較的利用されている。比較的点数の多い住居についてみると、5 区 SB2 ではアカガシ亜属、シキミ、スギ、6 区 SB4 でシキミ、クヌギ節、スギ、8 区 SB3 でスギ、ヒノキ科、ムラサキシキブ属となっている。点数の少ない住居でも 2 区 SB6 でスギとシキミ、6 区 SB5 でヒノキ科とクスノキ科、7 区 SB8 でヒノキ科、シキミ、クスノキ科、SB29 でスギ、クスノキ科、センダン、8 区 SB8 でスギとクヌギ節、SB14 で針葉樹とシキミ等の結果が見られ、針葉樹と広葉樹が混在して利用されていることが推定される。

炭化物の年代測定の結果、(較正) 暦年には約 400 ~ 500 年の年代幅があり、calAD240-325 (8 区 SB17)、calAD422-533 (8 区 SB14, SB3)、calAD544-638 (7 区 SB8, SB6, 6 区 SB5, 5 区 SB2)、calAD647-685 (7 区 SB21, 2 区 SB24, 6 区 SB9)、calAD690-778 (8 区 SB12) の 5 時期に区分できる。測定結果から推定される時期区分別に種類構成をみると、針葉樹のスギやヒノキ科は calAD240-638 を示す住居跡には認められるが、calAD647-778 を示す住居跡では針葉樹が確認されていないことから、時期によって針葉樹の利用状況が異なる可能性がある。一方、広葉樹では、時期による木材利用の違いは明瞭ではない。

炭化材は、住居の床やカマドの他、掘方や覆土からも出土している。床から出土した炭化材は構築材、カマドの炭化材は燃料材の可能性が高い。床から出土した炭化材では、calAD422-533 の範囲に収まる住居跡で全て針葉樹が利用され、それ以降の年代を示す住居跡では広葉樹の利用が多い傾向がある。年代測定を実施していない住居跡では、広葉樹の利用が目立つが、針葉樹も利用され、2 区 SB6 や 8 区 SB8 では、針葉樹と広葉樹が混在している。同じ住居跡の中で針葉樹と広葉樹が混在することから、割裂性が高く分割加工が容易な針葉樹と、強度の高い広葉樹とで利用部位が異なっていた可能性がある。

一方、カマドの試料では、calAD240-325 を示す 8 区 SB17 で針葉樹が利用され、それ以降の年代を示す住居跡では広葉樹が利用される。また、年代測定を実施していない住居跡では、シキミを中心とした広葉樹の利用が目立つ。床面の炭化材と共通する樹種が多く、構築材として利用した木材を燃料材としても利用したことが推定される。6 区 SB4 では、直径 1 cm のシキミの小枝と考えられる木材が認められることから、構築材として利用できない小枝等を燃料材に利用した可能性がある。また、カマドの

炭化材では、小径木のムラサキシキブ属も利用されている。

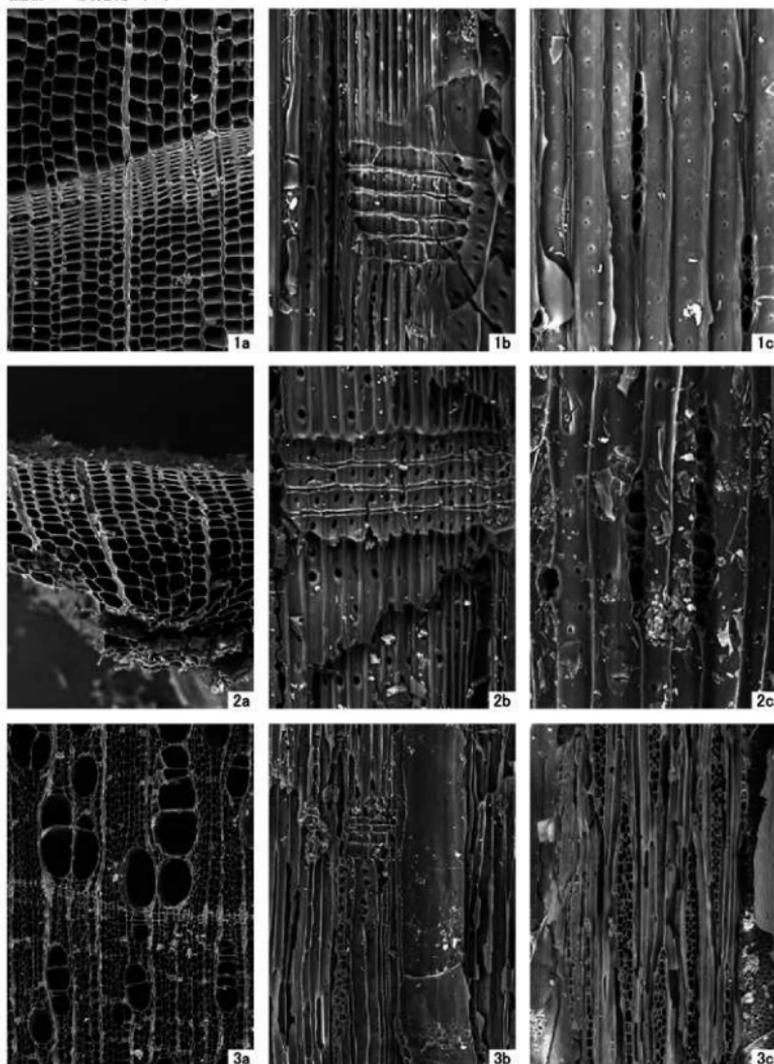
雌鹿塚遺跡の弥生時代～古墳時代に相当すると考えられる層準の花粉分析結果では、スギやアカガシ亜属が優占する結果が得られている（バリノ・サーヴェイ株式会社,1990;松原,1990）。これらの古植生調査の結果や、現在の本地域周辺の植生を考慮すると、木材は遺跡周辺の砂礫土上や愛鷹山麓などで入手可能であったと考えられる。

また、5区SB8と7区SB21ではモモの炭化材が出土しており、calAD652-672を示す2区SB24と6区SB4の床から出土した炭化種実もモモであった。モモは、古くから栽培のために中国から持ち込まれた渡来種とされ、観賞用の他、果実や核の中にある種子（仁）などが食用、薬用、祭祀等に広く利用される。住居跡より炭化したモモの核や木材が出土したことから、当時の住居内および周辺域で利用および栽培されていたことと、火を受け炭化残存したことが推定される。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 松原彰子,1990,雌鹿塚遺跡周辺における自然環境の変遷,『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編 一狩野川西部流域下水道事業処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』,沼津市文化財調査報告書第51集,沼津市教育委員会,171-215.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,1990,雌鹿塚遺跡の自然科学分析結果,『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編 一狩野川西部流域下水道事業処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』,沼津市文化財調査報告書第51集,沼津市教育委員会,153-170.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 炭化物(1)



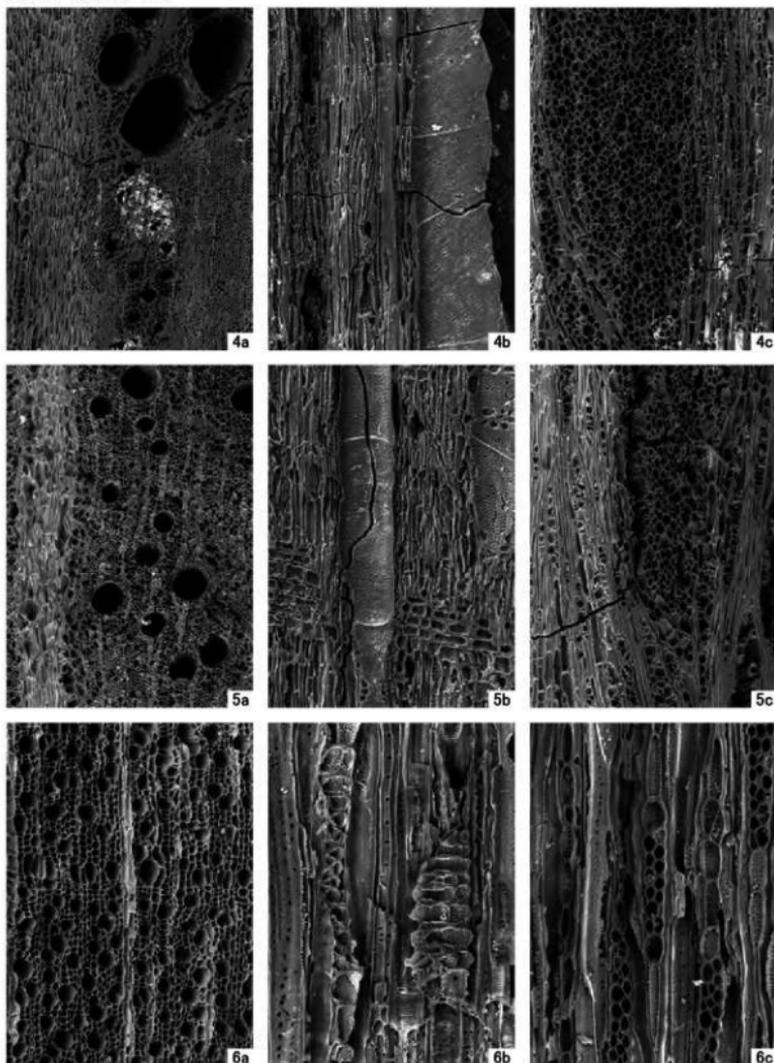
1. スギ(SB14:遺物番号7099)
 2. ヒノキ科(SB3:遺物番号3858)
 3. アサダ(SB6:遺物番号5055)
- a:木口.b:径目.c:板目

200 μ m:3a

200 μ m:1-2a,3b,c

100 μ m:1-2b,c

図版2 炭化物(2)



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(SB12:遺物番号3933)

5. コナラ属アカガシ亜属(SB4R0:遺物番号5077)

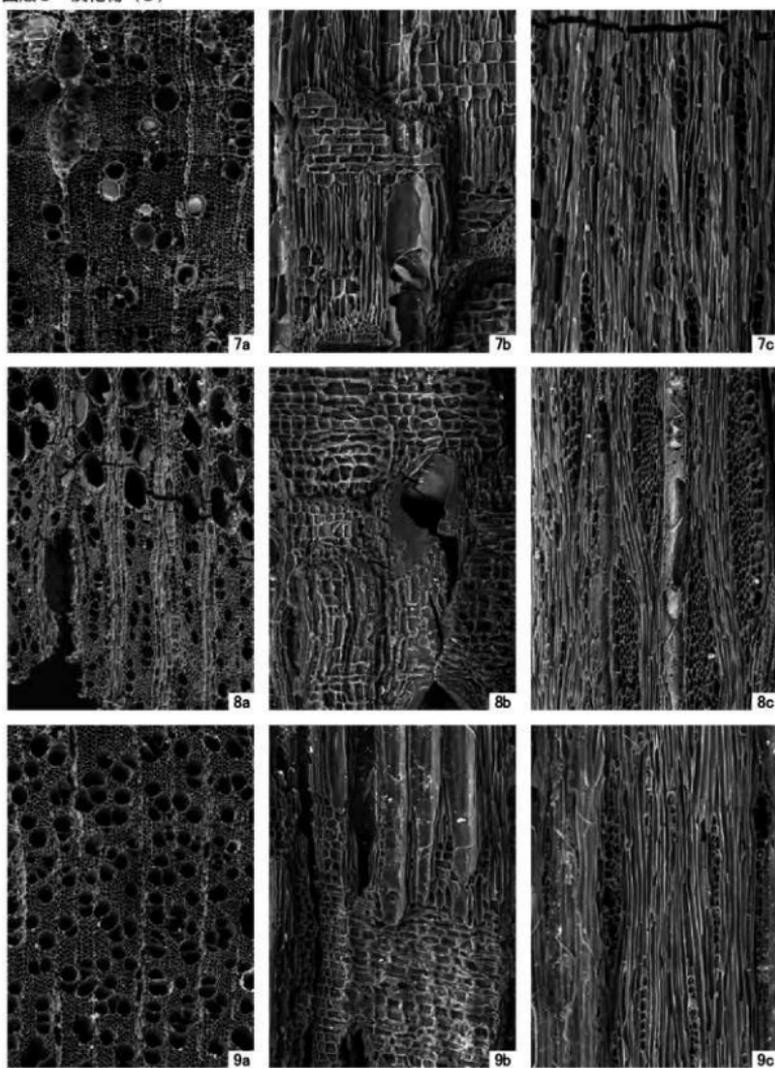
6. シキミ(SB8:遺物番号5184)

a:木口 b:柱目 c:板目

200 μ m a

200 μ m b,c

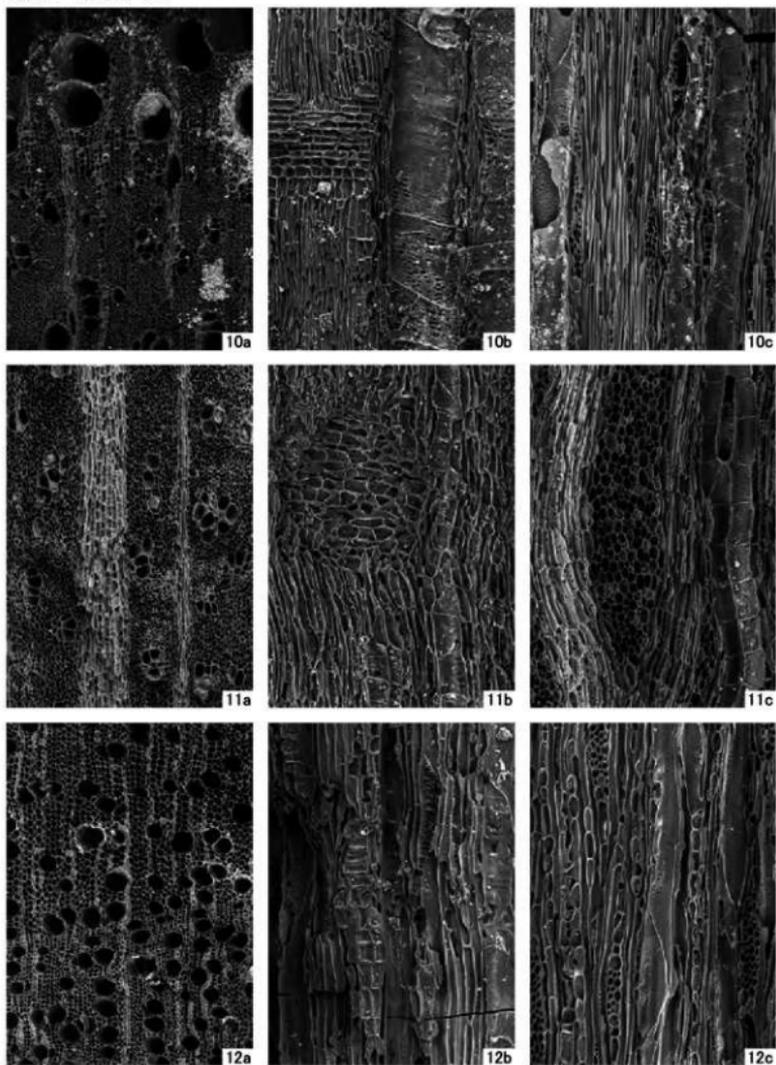
図版3 炭化物(3)



7. クスノキ科(SB9;遺物番号7705)
8. モモ(SB21;遺物番号5175)
9. サクラ属(SB21;遺物番号5174)
a.木口.b.柱目.c.板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

図版4 炭化物(4)



10. センダン(SB29:遺物番号4636)

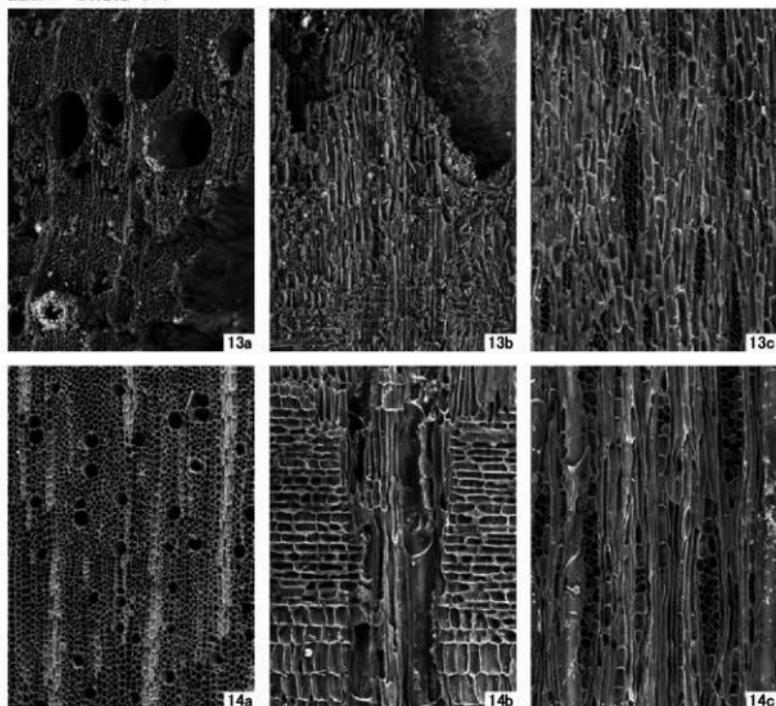
11. ウコギ属(SB3:遺物番号6934)

12. ネジキ(SB8:遺物番号2699)

a:木口 b:縦目 c:板目

200 μ m a
200 μ m b,c

図版5 炭化物(5)



13. トネリコ属(SB7:遺物番号4945)

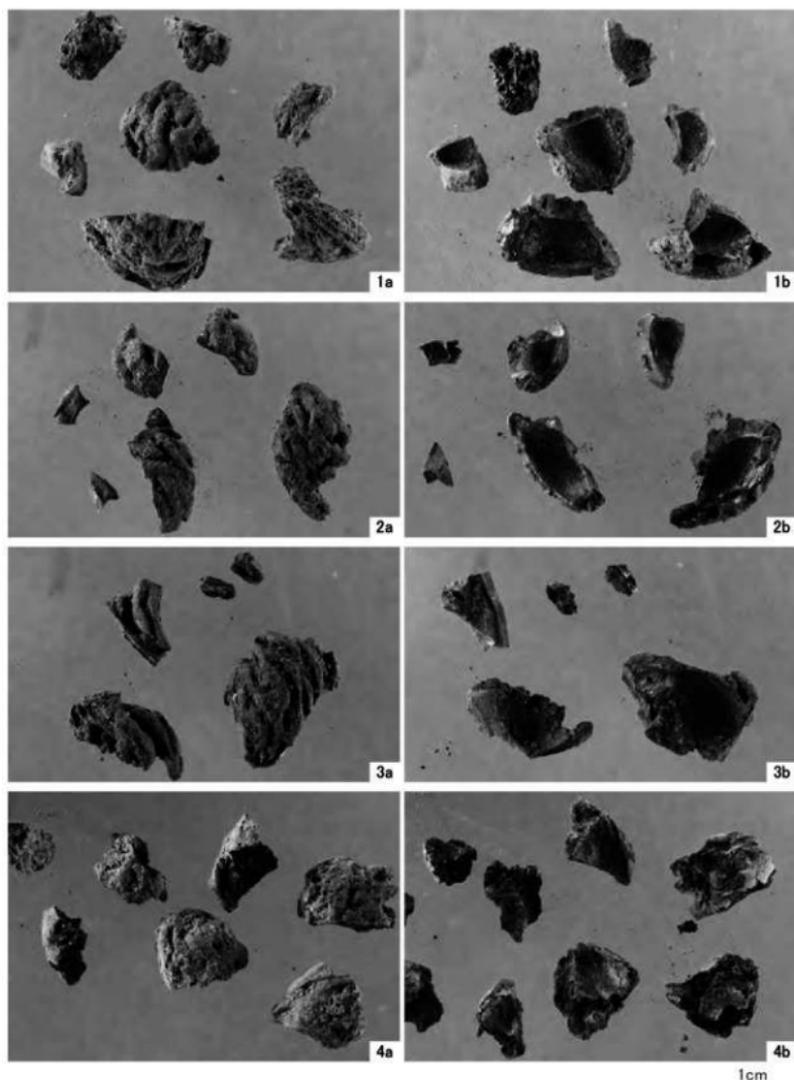
14. ムラサキシキブ属(SB12:遺物番号3887)

a:木口.b:径目.c:板目

200 μm a

200 μm m.b.c

図版6 種実遺体



1. 毛毛核・種子(SB24;遺物番号2452)
3. 毛毛核(SB24;遺物番号2456)

2. 毛毛核(SB24;遺物番号2455)
4. 毛毛核(SB04;遺物番号6830)

2. 中原遺跡出土の炭化材の年代と樹種

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中原遺跡は、静岡県沼津市原字一本松他に所在し、古墳時代後期～奈良平安時代に営まれた集落跡を中心とする遺跡である。当社では、住居跡のカマドや床面から出土した炭化物の放射性炭素年代測定と同定を実施し、住居の年代と植物利用に関する資料を作成してきている。

今回の分析調査では、住居跡のカマド覆土や床面から出土したこれまでとは別資料の炭化材を対象として、放射性炭素年代測定と樹種同定を実施し、住居の年代と木材利用に関する資料を作成する。

1. 試料

(1) 放射性炭素年代測定

試料は、住居跡のカマド覆土や床面から出土した炭化材 10 点（試料№ 1-10）である。試料№ 1 には多数の破片があるが、接合関係は不明である。最も大きいミカン割状の炭化材を抽出した。炭化材に樹皮は認められない。残存する最も外側の年輪を含む 5 年分を測定試料とする。試料№ 2 は、横断面が不定形の分割状を呈し、樹皮は認められない。残存する最も外側の年輪を含む 4 年分を測定試料とする。試料№ 3 は、半裁状（直径 1.1cm）を呈し、樹皮は認められない。炭化材の年輪数は 2 本である。放射方向に沿って半分に分割し、1 片を測定試料とする。試料№ 4 は、断面不定形の芯持材（半径 1cm）で、樹皮は認められない。年輪幅が狭く、48 本以上の年輪が認められる。残存する最も外側の年輪を含む 13 年分を測定試料とする。試料№ 5 は、断面不定形の分割状を呈し、樹皮は認められない。残存する最も外側の年輪を含む 6-7 年分を測定試料とする。試料№ 6 は、不定形の小破片で、年輪数は 3 本あり、樹皮は認められない。後述する樹種同定に必要な量を採取した残りをの全量を測定試料とする。試料№ 7 は、板目状の小破片で、似たような形状の小破片が 11 片ある中から、最も大きな破片を抽出した。炭化材片は、年輪が端部に僅かに 1 本あり、樹皮は認められない。後述する樹種同定に必要な量を採取した残りの全量を測定試料とする。試料№ 8 は、板目板状の破片（年輪数 5 本）で、樹皮は認められない。残存する最も外側の年輪を含む 3 年分を測定試料とする。試料№ 9 は、柾目板状の小破片で、樹皮は認められない。外側半分（5-6 年分）を測定試料とする。試料№ 10 は、断面不定形の分割状を呈し、樹皮は認められない。残存する最も外側の年輪を含む 3-4 年分を測定試料とする。

(2) 樹種同定

試料は、放射性炭素年代測定と同じ炭化材 10 点である。放射性炭素年代測定試料を採取した残りを樹種同定用試料とする。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料に土壌や根など目的物と異なる年代をもつものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によるアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と

鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。また、表中の相対比は、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を複製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して樹種を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表1に示す。各試料の同位体効果の補正を行った補正年代は、試料No 1が $1,430 \pm 20$ BP、試料No 2が $1,410 \pm 20$ BP、試料No 3が $1,230 \pm 20$ BP、試料No 4が $1,720 \pm 20$ BP、試料5が $1,560 \pm 20$ BP、試料No 6が $1,230 \pm 20$ BP、試料No 7が $1,250 \pm 20$ BP、試料No 8が $1,360 \pm 20$ BP、試料No 9が $1,520 \pm 20$ BP、試料No 10が $1,420 \pm 20$ BPを示す。また、暦年較正結果(測定誤差 σ)は、試料No 1がcalAD615-647、試料No 2がcalAD623-654、試料No 3がcalAD710-858、試料No 4がcalAD259-380、試料No 5がcalAD436-542、試料No 6がcalAD719-861、試料No 7がcalAD693-777、試料No 8がcalAD651-667、試料No 9がcalAD537-590、試料No 10がcalAD617-649である。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を年代測定結果と共に表1に示す。炭化材は、針葉樹2分類群(ツガ属・ヒノキ科)と広葉樹6分類群(コナラ属アカガシ亜属・クリ・シキミ・クスノキ科・バラ科ナシ亜科・ネジキ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ツガ属 (*Tsuga*) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は、年輪界近くに認められるが、数が少なく目立たない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞壁は滑らかで、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか〜やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は、スギ型〜ヒノキ型で、1分野に2-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

分野壁孔がスギ型を主体とすることから、サワラの可能性はあるが、観察範囲が狭く、破損している分野壁孔も多いことから確定には至らず、ヒノキ科とした。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、道管壁は中庸〜厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

複合放射組織が確認できないが、道管配列などの特徴からアカガシ亜属に同定した。

表1. 炭化物の放射性炭素年代測定・樹種同定結果

試料No.	遺構位置	状態	種類	測定方法	測定年代 BP	δ 13 C (‰)	校正年代 (暦年経正) BP	暦年経正結果			Code No.	
								試料	cal BC/AD	cal BP		相対比
No.1563	2区 183 カマド遺土	炭化材	クスノキ科	AAA	1,400 ± 20	-27.29 ± 0.43	1,430 ± 20 (1,425 ± 21)	σ	cal AD 615 - cal AD 647	cal BP 1,335 - 1,303	1.000	JAM-122472
								2 σ	cal AD 597 - cal AD 605	cal BP 1,353 - 1,345	1.000	
No.2063	2区 184 カマド遺土	分別焼	ネジキ	AAA	1,460 ± 20	-28.33 ± 0.40	1,470 ± 20 (1,458 ± 21)	σ	cal AD 626 - cal AD 609	cal BP 1,344 - 1,291	1.000	122473
								2 σ	cal AD 710 - cal AD 746	cal BP 1,240 - 1,204	0.416	
No.6857	4区 1821 カマド遺土	炭化材	コナラ属 アカガシ亜属	AAA	1,330 ± 20	-30.90 ± 0.41	1,330 ± 20 (1,334 ± 22)	σ	cal AD 766 - cal AD 783	cal BP 1,164 - 1,167	0.203	JAM-122474
								2 σ	cal AD 788 - cal AD 815	cal BP 1,162 - 1,135	0.266	
No.2079	5区 182 カマド遺土	炭化材	ツガ属	AAA	1,700 ± 20	-27.07 ± 0.41	1,720 ± 20 (1,718 ± 21)	σ	cal AD 843 - cal AD 858	cal BP 1,107 - 1,092	0.115	122475
								2 σ	cal AD 690 - cal AD 750	cal BP 1,260 - 1,200	0.390	
No.9618	6区 181 カマド遺土	分別焼	ツガ属	AAA	1,580 ± 20	-28.76 ± 0.42	1,580 ± 20 (1,558 ± 21)	σ	cal AD 762 - cal AD 814	cal BP 1,168 - 1,076	0.610	122476
								2 σ	cal AD 322 - cal AD 351	cal BP 1,628 - 1,549	0.388	
No.5912	6区 186 カマド遺土	炭化材	小椋科	AAA	1,330 ± 20	-31.14 ± 0.50	1,330 ± 20 (1,328 ± 21)	σ	cal AD 367 - cal AD 380	cal BP 1,563 - 1,570	0.139	122477
								2 σ	cal AD 258 - cal AD 309	cal BP 1,695 - 1,561	1.000	
No.6224	6区 188 カマド遺土	炭化材	クワリ	AAA	1,320 ± 20	-29.34 ± 0.44	1,320 ± 20 (1,288 ± 21)	σ	cal AD 438 - cal AD 490	cal BP 1,514 - 1,460	0.728	JAM-122478
								2 σ	cal AD 510 - cal AD 517	cal BP 1,440 - 1,423	0.079	
No.6370	7区 183 カマド遺土	炭化材	ヒノキ科	AAA	1,390 ± 20	-26.67 ± 0.41	1,390 ± 20 (1,361 ± 21)	σ	cal AD 529 - cal AD 542	cal BP 1,421 - 1,408	0.183	122479
								2 σ	cal AD 428 - cal AD 552	cal BP 1,521 - 1,397	1.000	
No.3901	7区 181 カマド遺土	炭化材	シキモ	AAA	1,630 ± 20	-31.81 ± 0.42	1,630 ± 20 (1,519 ± 22)	σ	cal AD 719 - cal AD 742	cal BP 1,231 - 1,206	0.246	JAM-122477
								2 σ	cal AD 769 - cal AD 783	cal BP 1,161 - 1,127	0.193	
No.2060	7区 181 カマド遺土	分別焼	バラ科	AAA	1,500 ± 20	-29.76 ± 0.33	1,420 ± 20 (1,425 ± 22)	σ	cal AD 787 - cal AD 823	cal BP 1,163 - 1,127	0.389	122478
								2 σ	cal AD 841 - cal AD 961	cal BP 1,109 - 1,069	0.172	
No.2060	7区 181 カマド遺土	分別焼	バラ科	AAA	1,500 ± 20	-29.76 ± 0.33	1,420 ± 20 (1,425 ± 22)	σ	cal AD 680 - cal AD 703	cal BP 1,257 - 1,247	0.025	122480
								2 σ	cal AD 788 - cal AD 814	cal BP 1,161 - 1,148	0.243	
No.6224	6区 188 カマド遺土	炭化材	クワリ	AAA	1,320 ± 20	-29.34 ± 0.44	1,320 ± 20 (1,288 ± 21)	σ	cal AD 765 - cal AD 879	cal BP 1,165 - 1,071	0.722	122479
								2 σ	cal AD 690 - cal AD 748	cal BP 1,257 - 1,202	0.800	
No.6370	7区 183 カマド遺土	炭化材	ヒノキ科	AAA	1,390 ± 20	-26.67 ± 0.41	1,390 ± 20 (1,361 ± 21)	σ	cal AD 764 - cal AD 777	cal BP 1,166 - 1,173	0.195	JAM-122478
								2 σ	cal AD 662 - cal AD 783	cal BP 1,268 - 1,167	0.856	
No.6370	7区 183 カマド遺土	炭化材	ヒノキ科	AAA	1,390 ± 20	-26.67 ± 0.41	1,390 ± 20 (1,361 ± 21)	σ	cal AD 787 - cal AD 824	cal BP 1,163 - 1,126	0.195	122480
								2 σ	cal AD 841 - cal AD 861	cal BP 1,109 - 1,069	0.020	
No.6370	7区 183 カマド遺土	炭化材	ヒノキ科	AAA	1,390 ± 20	-26.67 ± 0.41	1,390 ± 20 (1,361 ± 21)	σ	cal AD 651 - cal AD 667	cal BP 1,299 - 1,283	1.000	122479
								2 σ	cal AD 642 - cal AD 681	cal BP 1,307 - 1,289	1.000	
No.6370	7区 183 カマド遺土	炭化材	ヒノキ科	AAA	1,390 ± 20	-26.67 ± 0.41	1,390 ± 20 (1,361 ± 21)	σ	cal AD 537 - cal AD 565	cal BP 1,413 - 1,345	0.978	122480
								2 σ	cal AD 589 - cal AD 590	cal BP 1,261 - 1,260	0.022	
No.6370	7区 183 カマド遺土	炭化材	ヒノキ科	AAA	1,390 ± 20	-26.67 ± 0.41	1,390 ± 20 (1,361 ± 21)	σ	cal AD 436 - cal AD 469	cal BP 1,514 - 1,461	0.163	122480
								2 σ	cal AD 530 - cal AD 605	cal BP 1,420 - 1,345	0.837	
No.2060	7区 181 カマド遺土	分別焼	バラ科	AAA	1,500 ± 20	-29.76 ± 0.33	1,420 ± 20 (1,425 ± 22)	σ	cal AD 617 - cal AD 649	cal BP 1,332 - 1,301	1.000	JAM-122481
								2 σ	cal AD 598 - cal AD 637	cal BP 1,352 - 1,293	1.000	

1) 測定方法は AAA は、酸化剤-アルカリ処理-酸化処理である。

2) 年代誤差の範囲は、1σ (95%) の範囲内 50% を示している。

3) 99% 年代誤差は、1950年を基点として年代経正済みの場合を示す。

4) 付注1は測定値、測定誤差 (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

5) 樹種の判定には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB RECAL (Copyright 1986-2010 M Stuiver and P Reimer) を使用した。

6) 樹種の判定には、測定年代 (σ) で暦年経正年代として示した、一部は元の年の値を使用している。

7) 年代誤差、1項目を元の年の誤差とし、暦年経正年代や暦年経正プログラムが修正された後の最終値が比較しやすいように、暦年経正年代値は1項目を元の年と示す。

8) 樹種判定の信頼性の確率は68%、2σは95%である。

9) 相対比は、σ、2σのそれぞれを示した値。検体中に別の樹種が存在する比率を相対比に示したものである。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

試料は年輪界付近で割れており、早材部の大部分を欠く。割れた年輪界に僅かに残る翌年の道管径から環孔材と判断できる。小道管は多数が集まって火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・シキミ (*Illicium anisatum* L.) シキミ科シキミ属

散孔材で、道管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2-4個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列、道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

・クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

・バラ科ナシ亜科 (Rosaceae subfam. Maloideae)

散孔材で、管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独および2-5個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・ネジキ (*Lyonia ovalifolia* (Wall.) Drude Subsp. *neziki* Hara) ツツジ科

散孔材で、道管壁は中庸、横断面では角張った円形～多角形、ほぼ単独であるが2-3個が複合することもある。道管は階段穿孔を有している。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高で、辺縁部に直立細胞からなる長い単列翼部をもつ。

4. 考察

(1) 住居跡の年代

測定を実施した炭化材は、住居跡のカマド覆土を中心に出土している。年代測定結果は、測定に用いた年輪の形成年代を示しているが、今回の試料では破片が多く、全ての試料で樹皮が認められないため、木取り等によっては、年輪形成年代と実際の伐採・使用年代との間に時間差が生じている可能性がある。このことを考慮した上で、炭化材の放射性炭素年代測定結果や暦年校正結果をみると、3-4世紀代を示す試料(試料No.4)、5-6世紀代を示す試料(試料No.5,9)、7世紀代の年代を示す試料(試料No.1,2,8,10)、8-9世紀代を示す試料(試料No.3,6,7)がある。これらの測定結果と、住居跡の推定年代を比較すると、7世紀前半とされる2区SB3(試料No.1)、2区SB4(試料No.2)、7区SB11(試料No.10)、8世紀後半とされる4区SB21(試料No.3)、6区SB6(試料No.6)、6区SB8カマド①(試料No.7)では、推定年代と総合的な結果が得られている。

一方、7世紀前半とされる5区SB3(試料No.4)、7世紀後半とされる6区SB1(試料No.5)、7区SB3(試料No.9)、8世紀後半とされる6区SB8カマド②(試料No.8)では、推定年代よりも古い年代が得られている。樹種をみると、ツガ属(試料No.4,5)やヒノキ科(試料No.8)といった針葉樹材で古い年代を示す傾向がある。これらの針葉樹は有用材で、大径木になる種類であり、板状の製品に用いられることも多い。カマドで利用されたのが、加工時の木屑や廃材の可能性もあり、実際の伐採年の部分が失われ、より古い年代を示したことが推定される。

(2) 木材利用

樹種同定を実施した炭化材は、9点が住居跡のカマド覆土から出土しており、1点が床面から出土している。炭化材は、いずれも樹皮が認められない小破片である。これらの炭化材には、合計8種類が認

められた。各種類の材質をみると、針葉樹のツガ属は、針葉樹としてはやや重硬な部類に入り、強度は比較的高い。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ等の有用材が含まれる。いずれも木理が通直で割裂性・耐水性が高く、加工は容易である。広葉樹のアカガシ亜属、クリ、シキミ、ナシ亜科、ネジキは、比較的重硬で強度が高い。クスノキ科は、やや重硬な種類からやや軽軟な種類まであり、材質に幅がある。

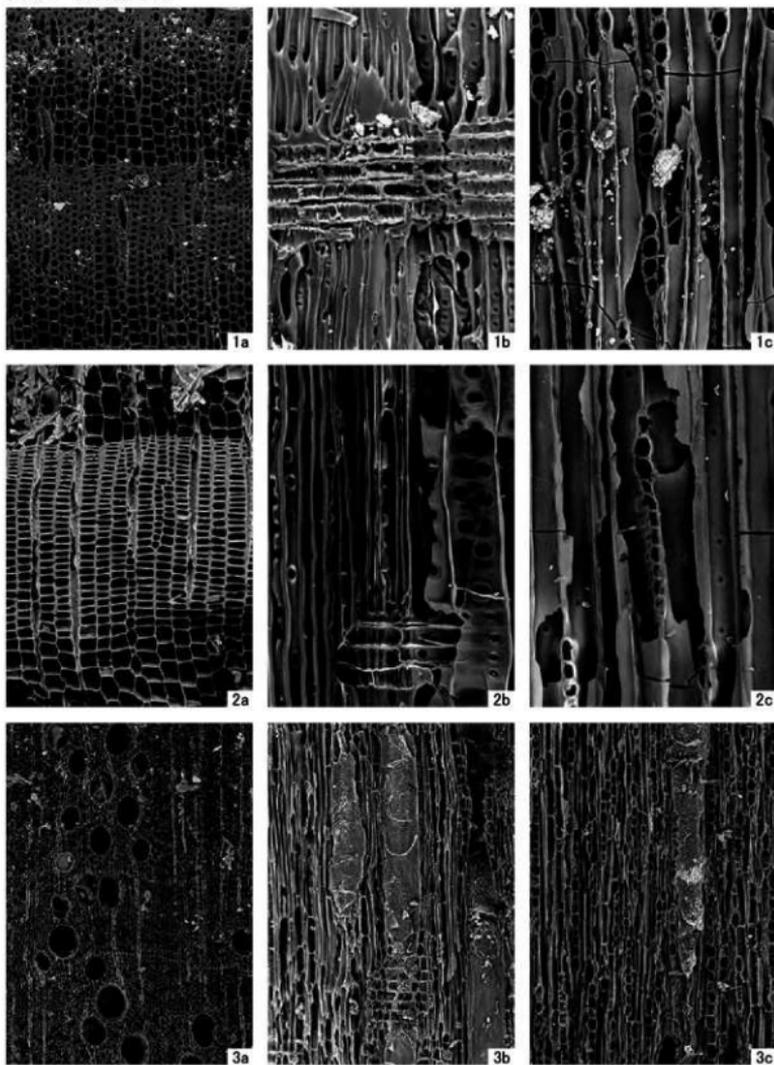
カマドから出土した炭化材は燃料材等の可能性がある。時期別にみると、7世紀前半の住居跡では、ツガ属、クスノキ科、ナシ亜科、ネジキ、7世紀後半ではツガ属、8世紀後半ではヒノキ科、アカガシ亜属、クリ、シキミが利用されている。複数試料について分析を実施した7世紀前半と8世紀後半では、いずれも複数種類が認められ、住居跡によって種類が異なり、材質的にも統一性が無いなど、雑多な種類構成を示す。確認された種類は、現在の遺跡周辺、あるいは愛鷹山麓に生育していることから、遺跡周辺に生育していた種類を燃料として利用した可能性がある。また、ツガ属やヒノキ科については、年代測定値が推定値よりも古い時期を示す。いずれも有用材であることから、利用の過程で生じた加工屑や廃材等が利用された可能性もある。また、7世紀前半と8世紀後半では、利用される樹種が異なることから、周辺植生や木材採取環境が異なっている可能性がある。

7世紀後半の住居（7区SB3）床面から出土した炭化材は、住居の建築部材等に由来する可能性がある。建築部材とすれば、比較的重硬な材質の木材（シキミ）を選択したことが推定される。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181。
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176。
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201。
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166。
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216。
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘,(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

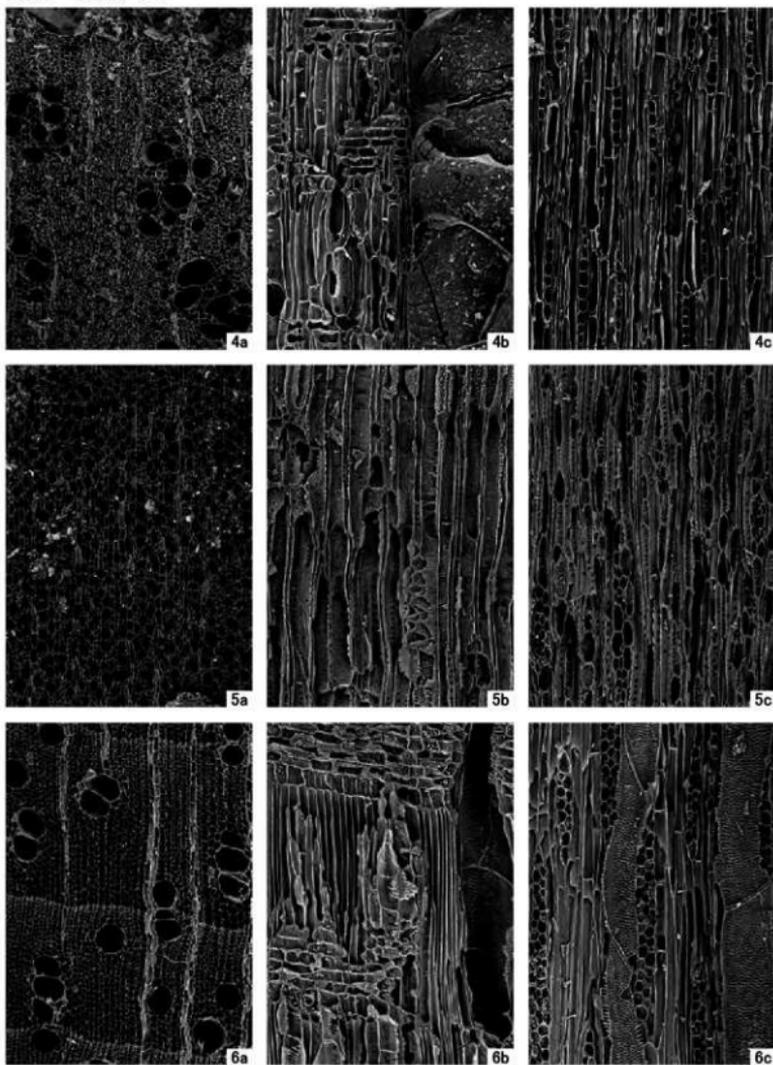
図版1 炭化物(1)



- 1.ツガ属(試料No.4;遺物No.2079)
 2.ヒノキ科(試料No.8;遺物No.6170)
 3.コナラ属アカガシ亜属(試料No.3;遺物No.6957)
 a:木口 b:柾目, c:板目

200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 1a, 2-3b, c
 100 μ m: 1b, c

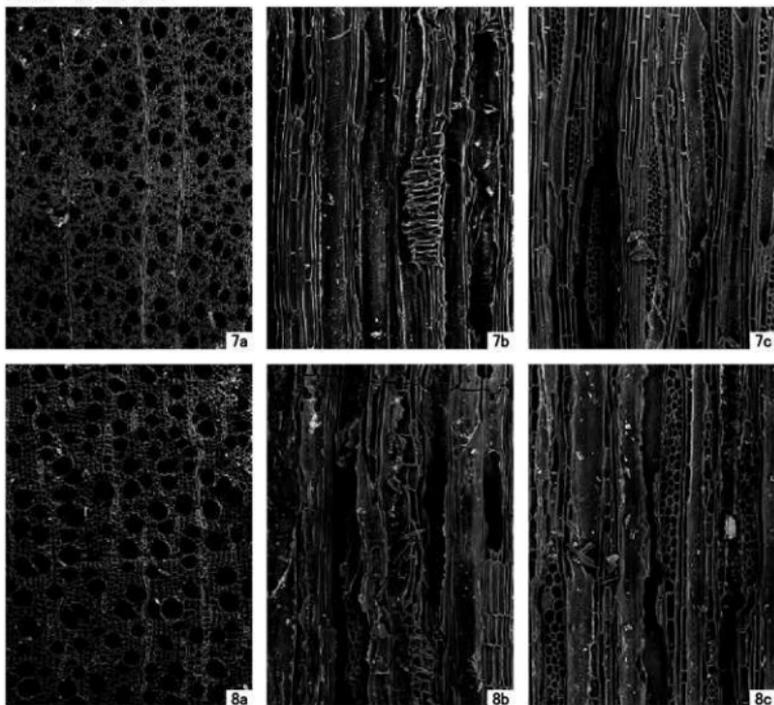
図版2 炭化物(2)



4.クiri(試料No.7;遺物No.6224)
5.シキミ(試料No.6;遺物No.5512)
6.クスノキ科(試料No.1;遺物No.1563)
a:木口.b:柱目.c:板目

200 μ m a
200 μ m b,c

図版3 炭化物(3)



7.バラ科ナシ亜科(試料No.10:遺物No.3286)

8.ネジキ(試料No.2:遺物No.2063)

a:木口,b:柎目,c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

3. 中原遺跡出土ガラス小玉鑄型の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中原遺跡は、静岡県沼津市原字一本松他に所在する古墳時代後期～奈良平安時代に営まれた集落跡を中心とする遺跡である。本分析調査で対象とするのは、出土したガラス小玉鑄型 11 点である。

今回の分析調査では、出土したガラス小玉鑄型 7 点（平成 23 年度資料番号 1～7 の各孔充填土を対象とした顕微鏡観察と年代測定に加えて、充填土抽出後の鑄型計 11 点（平成 23 年度資料番号 1～7、平成 22 年度資料 No.1～No.4）を対象とした観察（実体顕微鏡、マイクロスコープ、レプリカ法）を実施し、鑄型充填土の組成・年代に関する資料の蓄積と、鑄型の製作方法と胎土の様相について考察を行う。また、鑄型に残存する種実圧痕について観察を行い、当時の植物利用について検討する（表 1）。

1. ガラス小玉鑄型各孔充填土の材質と年代

1. 試料

試料は、6 区より出土したガラス小玉鑄型 7 点（平成 23 年度資料番号 1～7）である。資料番号 4、5 は接合し同一個体である。各試料の外観を図版 1～3 に示す。

表 1. 分析項目一覧

年度 (平成)	遺物 (ガラス小玉鑄型) 情報				分析種別確認情報				孔内充填土		土採取後鑄型		図版番号	
	資料 番号	調査 区	出土地点	出土層位	遺物 番号	備考	接合 状況	胎土 鑄型厚 (mm)	イネ 圧痕	抽出 観察	14C 観察 (孔数)	レプリカ		
22 年度	No. 2	6 区	S89	覆土	-	-	B	10.4	-	済	済	13	-	(1) 180-4
	No. 3	6 区	127/41 グリッド	遺物包含層	-	-	B	11.4	-	済	済	3	-	(1) 197-30
	No. 4	6 区	S89	覆土	3513	-	B	10.6	-	済	済	7	-	(1) 180-3
	No. 1	6 区	127/41 グリッド	遺物包含層	-	-	A	10.3	細 1 点 (表面)	済	済	23	1	(1) 197-27
23 年度	2	6 区	127/40 グリッド	-	-	-	A	9.8	-	14	14	21	1	(1) 197-27
	3	6 区	127/40 グリッド	-	1	-	A	10.9	細 1 点 (表面)	10	-	16	-	(1) 197-27
	1	6 区	128/40 グリッド	-	-	-	A	9.5	-	12	-	15	-	(1) 197-28
	4	6 区	S89	覆土	-	-	A	9.4	-	-	-	2	-	(1) 180-5
	5	4 区	S82	覆土	-	-	A	9.6	胚丸 1 点 (表面)	5	-	9	-	(2) 10-5
	6	6 区	126/41 グリッド	-	-	-	B	10.8	-	5	5	5	-	(1) 197-31
	7	6 区	128/41 グリッド	-	-	-	B	9.5	-	9	9	9	-	(1) 197-29
合計	11	-	-	-	-	-	-	-	3	55	1	123	2	

(注) 胎土 A: 表面の砂粒は少量散在。基質は細砂。砂粒は主に白色の長石類の鉱物粒と灰色の輝石類の鉱物粒からなり、灰色の好石片も散在する。胎土 B: 表面の砂粒は多量に散在。基質はやや粗砂。砂粒は主に白色の石英・長石類の鉱物粒と灰色の角閃石の鉱物粒からなり、金色の黒雲母片も散在する。

採取番号 (1): 第 1 分抽。(2): 第 2 分抽

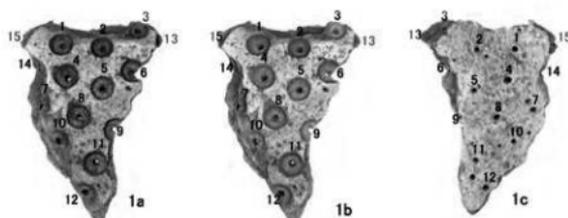
2. 分析方法

(1) 顕微鏡観察

鑄型表面（孔があいた面）をマイクロスコープ（キーエンス社製 VHX-1000）で写真記録後、各試料の各孔に番号を付す。各孔の番号は、図版 1～3 に示す。充填土の取り出しは、面相筆や竹串、化繊糸を用いる。各孔から充填土を取り出す際は、鑄型に傷をつけないようにし、他孔の充填土と混ざらないように注意を払う。なお、ガラスが良好に残存する孔は、沼津市教育委員会との協議の結果、土を取り出さずに現状維持とする。充填土を取り出した後の鑄型の両面を写真記録する。

取り出した充填土は、70℃ 48 時間乾燥後の重量を量り、偏光顕微鏡下で観察を行い、ガラス粒子、鉱物片、微化石および火山ガラスの量比を定性的に求める。なお、火山ガラスの形態分類は、町田・新井 (2003) にしたがう。ガラス粒子などの微細な遺物は、ピンセットで可能な限り抽出する。代表的

図版1 ガラス小玉鑄型(1)

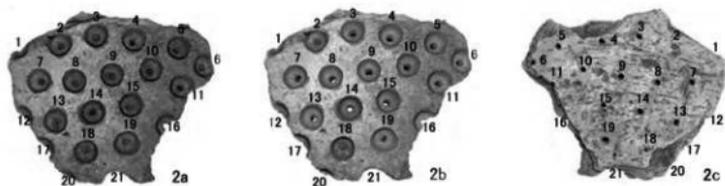


平成23年度

資料番号1

(I)197-28

1. 資料番号1(a:表面(孔充填土抽出前) b:表面(土抽出後) c:裏面(土抽出後))



平成23年度

資料番号2

(I)197-27

2. 資料番号2(a:表面(孔充填土抽出前) b:表面(土抽出後) c:裏面(土抽出後))

1cm
S=1/1

な形態を示すガラス粒子は偏光顕微鏡下の下方ポーラーで写真撮影を行う。

(2) 放射性炭素年代測定

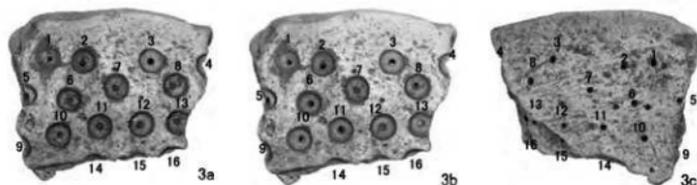
顕微鏡観察後に資料番号2、6、7の充填土を集めて年代測定対象の土壌試料1点とする。今回は炭素含量が少なかったので、HClによる酸処理のみを行い、腐植物質全体を測定対象とする。

試料は、上述した酸処理の後、バイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定と同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて^δ13Cを算出する。

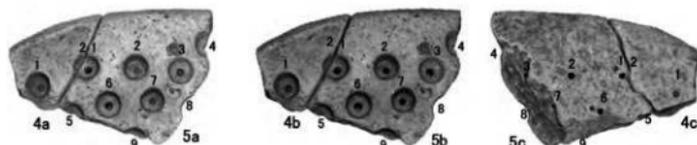
放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

図版2 ガラス小玉鋳型 (2)



平成23年度
資料番号3
(I)197-27

3. 資料番号3(a:表面(孔充填土抽出前)
b:表面(土抽出後) c:裏面(土抽出後))



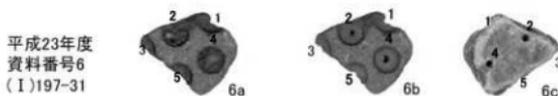
平成23年度
資料番号4
(I)180-5

平成23年度
資料番号5
(II)10-5

4. 資料番号4(a:表面(孔充填土抽出前)
b:表面(土抽出後) c:裏面(土抽出後))
5. 資料番号5(a:表面(孔充填土抽出前)
b:表面(土抽出後) c:裏面(土抽出後))

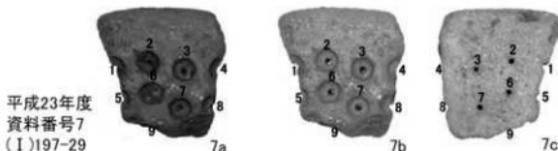
1cm
S=1/1

図版3 ガラス小玉鋳型 (3)



平成23年度
資料番号6
(I)197-31

6. 資料番号6(a:表面(孔充填土抽出前) b:表面(土抽出後) c:裏面(土抽出後))



平成23年度
資料番号7
(I)197-29

7. 資料番号7(a:表面(孔充填土抽出前) b:表面(土抽出後) c:裏面(土抽出後))

1cm
S=1/1

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(14Cの半減期5730 ± 40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ (σ は統計的に真の値が68%、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3. 結果および考察

(1) 各孔充填土の材質

ガラスが良好に残存する孔を除いた55孔より土壌を抽出した。各孔充填土の顕微鏡観察結果を表2に、資料番号1～7の代表的なガラス粒子の写真を図版4に示す。

鑄型の孔に認められる砂粒は、ガラス粒子、鉱物片などが主体となっている。砂粒は資料番号6、7などに多く検出されるが、ガラス粒子は資料番号2、3から多く検出された。

ガラス粒子は、粒状～皮膜状および不定形状で無色透光性～白濁を示し、内部に微細な気泡、自形～半自形を呈する鉱物、晶子様の微細粒子を包含する。粒状のガラス粒子は、底面が平滑で半球状を示すものが多い。また、資料番号6の孔番号4のように粒子の表面に褐色を呈する不定形状の水酸化鉄の付着が認められるものが散見される(図版4-5)。ガラス粒子の粒径は、極細粒砂(0.125～0.063mm)～粗粒シルト(0.063～0.032mm)を示すものが大部分である。以上述べた特徴と産出状況から、ガラス粒子はガラス小玉製造後に鑄型内に付着残存したガラス破片であると考えられ、製品の材質を検討する際の貴重な試料になり得るものと考えられる。

鉱物類は、極細粒砂の石英および斜長石を主体とし、有色鉱物として斜方輝石、単斜輝石、角閃石および酸化角閃石などを伴う。その他の構成粒子としては、火山ガラス、海綿骨針、無色透光性粒子、灰色粒子がごく微量認められている。火山ガラスとしては、無色透明のバブルウォール型～軽石型火山ガラスが認められる。極めてまれに、褐色を呈するバブルウォール型火山ガラスが含まれる。海綿骨針は、針状で無色の破片様を呈している。無色透光性粒子は、植物由来の可能性が考えられる。

孔充填土はおそらく鑄型廃棄後に周囲の土壌が孔に入り込んだものであると推定されることから、検

表3. 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代	Code No.
		BP		BP	
資料番号2-6-7 ガラス小玉鑄型 各孔内充填土	土壌	1,940 ± 20	-21.06 ± 0.33	1,880 ± 20	IAAA-112955

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した測定は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表4. 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)										相対比	Code No.			
		σ	cal	AD	26	-	cal	AD	43	cal	BP			1,924	-	1,907
資料番号 2-6-7	1,944 ± 23	σ	cal	AD	47	-	cal	AD	79	cal	BP	1,903	-	1,871	0.701	IAAA- 112955
			cal	AD	3	-	cal	AD	90	cal	BP	1,947	-	1,860	0.901	
		2σ	cal	AD	99	-	cal	AD	123	cal	BP	1,851	-	1,827	0.099	
			cal	AD	99	-	cal	AD	123	cal	BP	1,851	-	1,827	0.099	

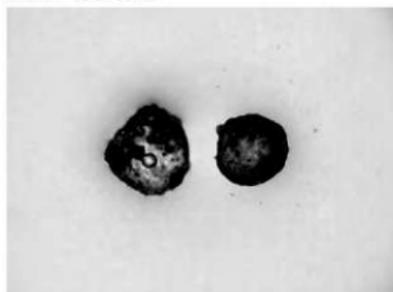
- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and P J Reimer) を使用
2) 計算には表に示した良める前の値を使用している。
3) 1相対比を丸め込むが即座に、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1相対比を丸めていない。
4) 統計的に真の値が入る確率は68%、 2σ は95%である。
5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表2. ガラス小玉鋳型各孔充填土の顕微鏡観察結果

試料番号	孔番号	重量(%)	顕微鏡観察結果										備考						
			ガラス粒	石英	珪石類														
1	1	0.001	△	△	A	○	A		△	△						◎	無色透明粒石型火山ガラス		
	2	0.002	△	△	A	○	A			△						●	無色透明パブルウォール型火山ガラス		
	3	0	△	△	A	○	A				△					◎			
	4	0.002	△	△	A	○	A					△							
	5	0.001	△	△	A	△	A		△								○		
	6	0.001	△	△	A	△	A					△	△					菱角状表面を1程度含む	
	7	0	△	△	A	△	A			△									
	8	0.001	△	△	A	●	A				△						■		
	9	0.001	△	△	A	△	A					△	△				△	無色透明パブルウォール型火山ガラス	
	10	0.002	△	△	B	△	A												
	11	0.001	△	A	△	A					△						■		
	12	0.001	△	B	△	A			△								■		
	13	--	--	--	--	--	--												
2	1	--																抽出せず保存	
	2	--																抽出せず保存	
	3	0.002	●	△	A	◎	A	△					○	△	●				
	4	0.001	◎	△	A	◎	A									◎			
	5	0.002	◎	○	A	○	A						△	△	◎				
	6	0.001	●	○	A	◎	A				△				△				
	7	0.002	◎	○	A	◎	A				△				△				
	8	0.001	◎	△	A	○	A								△				
	9	0.004	◎	○	A	●	A								△				
	10	0.002	◎	△	A	●	A								△				
	11	0.001	△	△	A	○	A	△								◎			
	12	--	--	--	--	--	--											抽出せず保存	
	13	0.004	◎	○	A	■	A	△								○			
14	0.002	◎	△	A	■	A	△												
15	0.002	◎	△	A	■	A													
16	0	○	○	○	○	A													
17	--	--	--	--	--	--													
18	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
19	0.004	◎	△	A	■	A	△											抽出せず保存	
20	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
21	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
3	1	0.001	△	△	A	○	A					△	△					パブルウォール型火山ガラス	
	2	0.001	○	△	A	●	A			△						△		粒石型火山ガラス	
	3	0.013	△	△	A	○	A						△	△	△				
	4	--	--	--	--	--	--											抽出せず保存	
	5	0.001	△	△	A	○	A												
	6	0.002	○	△	A	●	B	△	△				△	△				パブルウォール型・粒石型火山ガラス	
	7	--	--	--	--	--	--											抽出せず保存	
	8	0.003	◎	△	A	■	A	△	△							○			
	9	--	--	--	--	--	--											抽出せず保存	
	10	0.002	◎	△	A	■	A						△	△	△			パブルウォール型・粒石型火山ガラス	
	11	0.002	◎	△	A	■	A									△			
	12	0	◎	△	A	■	A			△						△			
	13	0.002	△	△	A	◎	A											△	
14	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
15	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
16	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
17	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
18	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
4	1	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
	2	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
	1	0.001	△	△	A	△	A											△	
	2	0	△	△	A	△	A				△							○	
	3	0.002	△	△	A	○	A											△	
	4	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存
5	1	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
	2	0.002	△	△	A	○	A											△	
	3	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
	4	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
	5	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
	6	0.002	△	△	A	●	A						△	△				○	パブルウォール型火山ガラス
7	0.003	△	△	A	●	B											△		
8	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
9	--	--	--	--	--	--												抽出せず保存	
6	1	0.001	○	△	A	■	A	△	△	△	△	△	△	△	△			△	
	2	0.2	●	○	A	■	A	△	△									◎	
	3	0	△	△	A	○	A											△	
	4	0.026	○	△	A	■	B	△				△						△	
	5	0.001	△	△	A	◎	A			△									△
	6	0.001	△	△	A	◎	A												△
7	1	0.001	△	△	A	◎	A											△	
	2	0.027	△	△	A	●	C	△			△	△	△	△				△	
	3	0.005	△	△	A	◎	B			△								○	パブルウォール型火山ガラス
	4	0.001	△	△	A	◎	B	△											△
	5	0.003	△	○	A	●	A					△							△
	6	0.042	△	△	B	●	A	△											△
7	0.011	△	△	A	●	B						△						△	パブルウォール型火山ガラス
8	0.001	△	△	A	△	A												△	
9	0	△	△	A	○	A	△												△
合計	抽出	0.388	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(注) △: 数粒程度, ○: 10粒程度, ◎: 20粒程度, ●: 30粒程度, ■: 50粒程度
 A: 輪縁粒砂～細粒砂 (0.063～0.250mm), B: 輪縁粒砂～中粒砂 (0.063～0.5mm), C: 輪縁粒砂～粗粒砂 (0.063～1mm)
 火山ガラスの形態分類は、和田・新井 (2003) による。

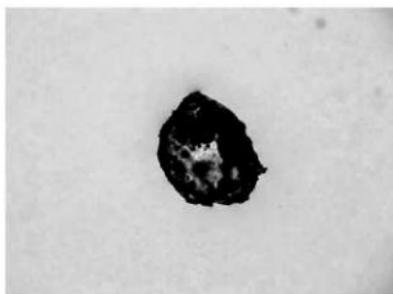
図版4 ガラス粒子



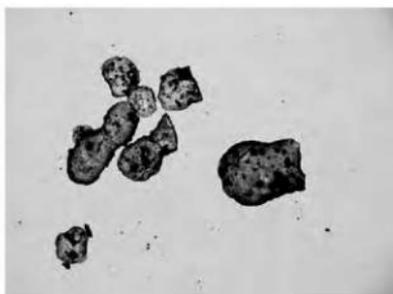
1.粒状を呈するガラス粒子(資料番号3孔番号8)



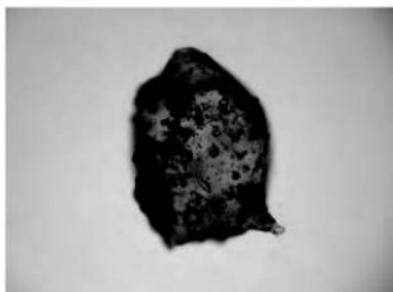
2.不定形状を呈するガラス粒子(資料番号3孔番号8)



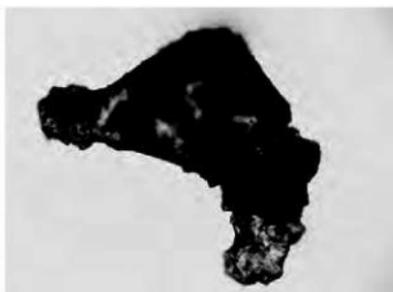
3.粒状を呈するガラス粒子(資料番号3孔番号10)



4.皮膜状~不定形状を呈するガラス粒子(資料番号3孔番号10)



5.粒状を呈するガラス粒子(資料番号6孔番号4)



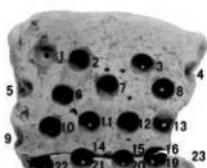
6.不定形状を呈するガラス粒子(資料番号6孔番号4)

0.2mm

1-6

図版5 ガラス小玉鑄型 (4)

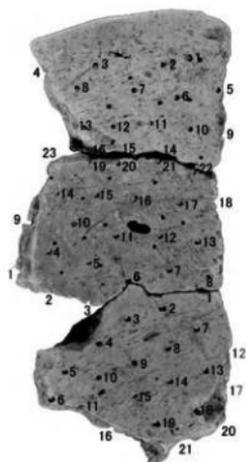
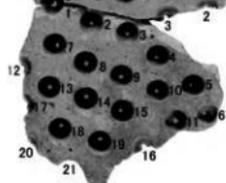
平成23年度
資料番号3
(I)197-27



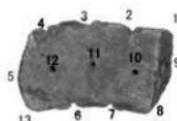
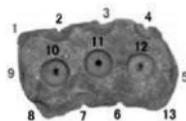
平成22年度
資料No.1
(I)197-27



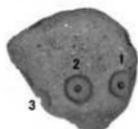
平成23年度
資料番号2
(I)197-27



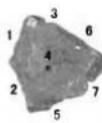
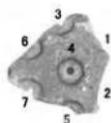
平成22年度
資料No.2
(I)180-4



平成22年度
資料No.3
(I)197-30



平成22年度
資料No.4
(I)180-3



1cm
S=1/1

出された鉱物類は、本遺跡周辺の地質を反映していると考えられる。杉山ほか（2010）などを参照すれば、沼津市の主な地質学的背景は、富士山、愛鷹山、箱根火山など第四紀の火山とその噴出物である。石英よりも長石類の多い傾向や兩輝石や角閃石およびカンラン石などの有色鉱物が検出されている状況は、上述した地質学的背景と整合していると言える。ただし、酸化角閃石は、それを多く含むような地質の分布は周辺に認められないことから、鋳型の胎土中に含まれていた角閃石が、ガラス小玉製作時の被熱によって変化したものである可能性がある。なお、灰色粒子とした碎屑物は、地質に由来するものではなく、その外観から、後述する孔内観察で孔表面に認められた灰褐色～暗灰色を呈する付着物を構成する粒子であると考えられる。この付着物の由来については後述する。

（2）各孔充填土の年代

資料番号 2、6、7 の各孔充填土の同位体効果による補正を行った測定結果を表 3 に、暦年較正結果を表 4 に示す。測定値は $1,940 \pm 20BP$ 、測定誤差 σ の場合の暦年は、calAD26-79 であった。平成 22 年度の資料 No.1 ～ No.4 の各孔充填土も $1,900 \sim 2,000BP$ 前後の年代値を示しており、今回の結果とも調和的である。

これは、少なくとも $1,900 \sim 2,000BP$ 以降にガラス小玉鋳型が埋積したことを反映している。鋳型各孔に充填された土壌は周辺の地山から流れ込んでいると判断され、発掘調査所見とも矛盾がないと言える。

Ⅱ. ガラス小玉鋳型の観察

1. 試料および分析方法

試料は、一部を除く各孔充填土を取り出した後のガラス小玉鋳型 11 点（平成 22 年度の資料 No.1 ～ No.4 の 4 点と平成 23 年度の資料番号 1 ～ 7 の 7 点）である（表 1、図版 1 ～ 3、5）。試料 11 点の合計孔数は 123 点になる。なお、前述したように、平成 23 年度の資料番号 4 と資料番号 5 は同一個体とされているが、これらとは別に、平成 22 年度の資料 No.1 と、平成 23 年度の資料番号 2、3 は接合し、これら 3 点は同一個体であることがわかった（図版 5）。

（1）胎土等の実体顕微鏡観察

全孔 123 点を対象に、双眼実体顕微鏡を用いて、鋳型および各孔表面に認められる砂粒やガラス粒子の状況を記載し、胎土および鋳型製作、ガラス鋳造に関わる情報とする。

（2）マイクロスコープ観察

全孔 123 点を対象に、マイクロスコープ（キーエンス社製 VHX-1000）を用いて、鋳型および各孔表面の状況を記載し、特徴的な箇所画像記録処理を実施する。また、デジタルノギスとマイクロスコープを用いて、各孔の深さと径（主に内径）、中心の細孔の径を計測し、穿孔具に関する情報を得る。

（3）レプリカ法

丑野 毅氏（東京国際大学教授）の指導を受けて実施する。上記の観察結果および胎土の保存状況を考慮し、平成 22 年度の資料 No.1 と、平成 23 年度の資料番号 2 の 2 点を対象として、印象材（シリコン樹脂）を用いた鋳型の破断面および孔内と、イネ圧痕のレプリカを作成する。

シリコン樹脂は、JM シリコン インジェクションタイプ（株式会社ニッシン製）を使用する。シリコンに含まれる油分が胎土に浸透して鋳型が変色するのを防ぎ、かつ、シリコンの離型性を良くするために、鋳型を水に十分含浸させる。対象箇所の表面についた泥やほこりを水中で面相筆を用いて除去する。エアブレーで対象箇所の水分を除去後、シリコンを注入し、先端を細く加工した竹串や水に濡らした指を用いてシリコンの充填を行う。硬化したシリコンを対象箇所から慎重に取り出す。特に、袋状を呈するイネ圧痕は、胎土を破壊しないよう、浅い部分から取り出す。シリコンを取り出した後の鋳型を水に含浸させ、対象箇所に油分が残らない（水がはじかない）ことを確認する。また、レプリカ表面に

鋳型の胎土が剥落していないことを確認する。

レプリカの観察は、双眼実体顕微鏡、マイクロスコープ、走査型電子顕微鏡の順に実施する。

2. 結果および考察

(1) 鋳型の観察

ガラス小玉鋳型の表面観察結果を表1に、孔内観察一覧を表5に、マイクロスコープで撮影した二次元画像と、画像処理による深度合成画像、3D画像を反転させて雄型とした像を図版6～16に、鋳型孔レプリカの深度合成画像、3D画像を反転させて雄型とした像、電子顕微鏡写真を図版17に示す。

・鋳型の形状および胎土

鋳型11点は、全て破片の状態で、平成22年度の資料No.1と、平成23年度の資料番号2、3を接合した最大径は、92.6mmを測る(図版5)。平成23年度の資料番号1も、これらと接合はしないものの、下記のように胎土の様相が似ており、同一個体である可能性が高い。

鋳型を構成する胎土は、大きく分けて2種類を認めることができた(表1)。ここでは仮に胎土A、胎土Bとする。胎土Aは、表面に認められる砂粒は細砂～中砂程度で少量散在、基質は緻密な質感を呈する。砂粒は主に白色の長石類の鉱物粒と黒色の輝石類の鉱物粒からなり、灰色の岩石片も混在する。胎土Bは、表面に認められる砂粒は細砂～中砂程度で多量に散在、基質はやや粗雑な質感を呈する。砂粒は主に白色の石英および長石類の鉱物粒と黒色の角閃石の鉱物粒からなり、金色の黒雲母片も混在する。胎土Aに分類される試料は、平成22年度の資料No.1と平成23年度の資料番号1～5、胎土Bに分類される試料は、平成22年度の資料No.2～4と平成23年度の資料番号6、7となる。なお、胎土Aの中でも、表面に認められる砂の量が若干多い平成23年度資料番号4、5と若干少ない平成22年度資料No.1、平成23年度資料番号1～3という違いが窺える。

各鋳型の厚さは、約1cmを測る(表1)。平成22年度の資料No.3と、平成23年度の資料番号3～5、7の1辺には、鋳型外縁と考えられる円弧状の曲線が確認され(図版2、3、5)、完全な形状は円形または楕円形と推測される。

鋳型の表面と裏面は、孔周縁部に押圧の際に生じる隆起が認められず、平らに成形されている。また、平成22年度の資料No.1と、平成23年度の資料番号1～3の両面にはやや光沢がある。平成22年度の資料No.1と、平成23年度の資料番号1～5の裏面には、平行する数本の浅い細筋が見られ、ヘラ削りの痕跡と考えられる(図版1、2、5)。

・各孔の形状

鋳型表面には、円柱状の孔が配列する。各孔の配列に規則性はなく、隣孔との間隔も区々である。全孔には、孔底の中心から鋳型裏面まで貫通する細孔がある。ただし、平成22年度の資料No.1と、平成23年度の資料番号1～3、5の裏面や破断面には、上記の細孔とは異なる、表面まで貫通しない細孔が見られる(図版1、2、5、6、10)。

各孔の深さは、最小1.4(平成22年度の資料No.2の孔番号7)～最大4.6(平成23年度の資料番号2の孔番号14)(平均3.12±標準偏差0.46)mmを測る(表5)。鋳型の外側に位置する孔は浅く、内側に位置する孔はやや深い箇所が認められる。これは、鋳型の厚さに由来すると考えられる。

各孔の平面形は、全て真円に近く、径(主に内径)は、最小3.7(平成23年度の資料番号5の孔番号7)～最大4.8(平成23年度の資料番号6の孔番号4)(平均4.23±0.21)mm(表5)と、ほぼ揃っており、上端(鋳型表面)では5mm程度に広がる。また、全孔の底の中心を貫く細孔は、平面形は真円に近く、径は最小0.7(平成22年度の資料No.1の孔番号8)～最大1.5(平成22年度の資料No.1の孔番号14)(平均1.05±0.12)mm(表5)と、ほぼ揃っており、上端(孔底)では1.2mm程度に広がる。

また、平成23年度資料番号5の孔番号3、7、9の間には、径3.5mm、細孔の径0.9mm程度の浅く不完全な孔が各1個確認され、孔番号3、7の孔に押しつぶされて変形している(図版14)。おそらく、孔をあけるのに失敗した形跡で、後で孔番号3、7をあけたと考えられる。

・孔内の筋状の痕跡

マイクロスコープおよびレプリカの観察の結果、一部の鋳型の孔内側壁には水平方向の細い筋がほぼ平行に配列し、孔底から細孔内の側壁上端にかけて連続して分布する状況が確認された(図版6～17)。孔底では、細筋が同心円状の配列となる。なお、穿孔具を回しながら押しあげた場合や、回しながら引き抜いた場合に残る螺旋状の構造は認められなかった。このような筋状の痕跡は穿孔具の表面の凹凸を示す可能性がある。

筋状の痕跡は平成22年度の資料No.2以外の資料から確認された。特に平成22年度の資料No.1と平成23年度の資料番号1～3で顕著にみられ、平成22年度の資料No.3、No.4はわずかに確認される程度であった。これは、前述した胎土の状況に由来すると考えられる。

その他に、細孔から2～4条の直線状の細溝が外周に向かって伸びる状態を確認したが、いずれも外周に到達せずに尖滅する(図版10)。これは、穿孔具の形状に由来する可能性は低く、焼成または鋳造時の被熱で生じた亀裂の可能性が高い。

・鉱物粒子

実体顕微鏡観察の結果、孔底や側壁の表面に、石英や長石、有色鉱物、チャートなどの岩片が確認された。有色鉱物は、一部が黒雲母や斜方輝石に同定可能で(図版6、12)、黒雲母片が散在する状況も確認された。長石や有色鉱物は半自形を呈するものが多く、長石は清澄であることから、穿孔具による破損はなかったと考えられる(図版12)。すなわち、鋳型焼成後の鉱物粒が固定された状態で孔があけられた可能性は低いと考えられる。また、鋳型の破断面には、有色鉱物粒子が側壁の上下方向と並列し、粘土などの粒子とともに褶曲する状況がみられた(図版6、10～12)。以上のことから、孔は、粘土版の成形後、表面がまだ柔らかい状態の時に穿孔具を押し込むことにより作られたことが推測される。

・ガラス粒子

ほぼ全ての孔内にガラス粒子の付着が確認された(図版6～16)。ガラス粒子は、平成22年度資料No.1、No.3、No.4、23年度資料番号2～6で多く、平成23年度の資料番号2、3の鋳型表面にも確認された。ガラス粒子は、清澄無色～白濁、半球状～皮膜状を呈し、孔の配置や孔内(全体、壁面、孔底)における分布状況の違いがみられた。以上のことから、全ての鋳型にガラス鋳造が行われた痕跡と示唆され、充填土に確認されたガラス粒子も、孔内に付着したものに由来すると考えられる。

・灰褐～暗灰色付着物

孔内および細孔内には、ガラス粒子の分布とともに灰褐～暗灰色の付着物が確認された(図版6～16)。付着物は、平成22年度の資料No.1で暗灰色、他は灰褐色を呈する。これらの灰褐～暗灰色付着物は、胎土を覆い、ガラスに覆われる状況が多いが、ガラスを覆う状況や細孔壁面を覆う状況も確認された(図版11、13)。充填土から確認された灰色粒子とした碎屑物も、これに由来すると考えられる。

白井(2005)は、日本の古代ビーズ(ガラス小玉)の製作技法を解明するために、現代のアフリカにおける鋳造ビーズ製作技法を調査した結果、ビーズと鋳型の分離を良くするために剥離材が用いられていることを指摘し、その素材として粘土を水に溶いたものや墨などを挙げている。また、白井(2005)は、細孔内に差し込む心棒の素材は、これまで考えられていたような鉄針(大田区立郷土博物館編,2001、潮見,2000、松村,2010、大賀,2010)ではなく、キャッサバや竹藪などの植物に由来する可能性を挙げている。今回、孔内や細孔内に確認された灰褐～暗灰色の付着物は、これらの剥離材や心棒の素材に由来する可能性がある。

(2) イネ圧痕の観察

全鋳型を対象として、種実圧痕を精査した結果、平成22年度の資料No.1と、平成23年度の資料番号3、5に、栽培種のイネ (*Oryza sativa* L.) の穎(稲稃)と胚乳(玄米)の圧痕が確認された(図版1、2、5、18、19)。

平成22年度の資料No.1の圧痕は、完形の穎1点で、鋳型裏面の孔番号11、12の間に確認された。圧痕は、胎土表面と同じ灰褐色を呈し、平面形は、長径4.5mm、短径2.0mmの楕円形で、深さは約2mmの袋状である。圧痕から作成したレプリカ観察の結果、長径6mm、短径4mm、厚さ3mmのやや扁平な楕円体を呈す。基部には斜切状円柱形の果実序柄が確認された。先端部は不明瞭で、芒は確認されなかった。穎果には、5脈をもつ外穎(護穎と言う場合もある)と3脈をもつ内穎があり、ともに舟形を呈し、縫合して稲稃を構成する。果皮表面には顆粒状突起の縦列が明瞭に確認されたが、稃毛は確認されなかった(図版5、19)。

平成23年度の資料番号3の圧痕は、破片の穎1点で、鋳型表面の外縁および孔番号1近くに確認された。圧痕は、胎土表面と同じ淡赤灰褐色を呈し、平面形は長径3.5mm、短径1.6mmの半月形で、深さは約0.3mmである。表面には顆粒状突起の縦列が確認された(図版2、18)。

平成23年度資料番号5の圧痕は、破片の胚乳1点で、鋳型表面の孔番号3に隣接する。圧痕は、胎土表面(淡灰褐色)とは異なる暗黒灰色を呈し、平面形は長径2.3mm、短径2.8mmの半楕円形で、深さは約0.3mmである。基部一端には、幼根や幼芽を含む径1.5mm程度の斜切形の胚が確認された。表面はやや平滑で、2~3本の縦降条が確認された(図版2、14、18)。

以上の結果より、鋳型11点から少なくとも3個体のイネ種実の圧痕が確認された。イネの品種の特定には至らなかったが、鋳型製作用の粘土中に稲稃や玄米が確実に混入していたことが示唆され、鋳型胎土中に他のイネが含まれる可能性も指摘される。このことは、鋳型製作と植物食糧糧のイネとの何らかの関わりを示す貴重な情報であると言える。

Ⅲ. 成果と今後の課題

本分析調査は、中原遺跡より出土したガラス小玉鋳型11点を対象として行った。鋳型各孔充填土の分析ではガラス小玉鋳型7点(資料番号1~7)を対象として、充填土の顕微鏡観察と年代測定を実施した。また、鋳型観察では、11点全ての資料を対象として、実体顕微鏡、マイクロスコープ、レプリカ法による観察を行った。以下に、成果と今後の課題について述べる。

(1) 成果

・鋳型各孔充填土の分析

放射性炭素年代測定は、資料番号2、6、7の充填土を対象とし、補正年代で $1,940 \pm 20BP$ 、暦年較正年代でcal AD 26~79の値を示した。この結果は、平成22年度(資料No.1~No.4)の分析調査で得られた年代とほとんど差はない。充填土は、鋳型埋没後に鋳型孔内に入り込んだと考えられるため、少なくとも弥生時代中期以降にガラス小玉鋳型が廃棄されたと考えられる。

また、各孔充填土からは、ガラス粒子が確認された。鋳型観察でも、孔内にガラス粒子の付着が確認されている。これらのことから、充填土中のガラス粒子は、孔内に付着するガラス粒子が剥落したものと考えられる。

その他に確認された鉱物類の多くは、本遺跡周辺の地質学的背景に整合するものである。ただし、酸化角閃石は例外で、土器の胎土中に含まれていた角閃石が被熱により変化したものである可能性が考えられる。

鉱物以外では、多くの孔から灰色粒子が検出された。現段階ではこれらの由来は不明であるが、ガラス鋳造時の剥離材や、芯棒に由来する可能性がある。

・ 鑄型観察

鑄型の胎土表面の観察では、胎土が緻密なもの（平成22年度資料No.1、平成23年度資料1～5）と、粗雑なもの（平成22年度資料No.2～No.4、平成23年度資料6、7）の2種が確認できた。接合関係から胎土が緻密なもの内、平成22年度資料No.1と、平成23年度資料番号2、3が、平成23年度資料番号4、5がそれぞれ同一個体であると確認されており、胎土の様相は個体差を示すものと思われる。

各孔の穿孔は、表面の鉱物粒子の良好な保存状態と、穿孔時の押し込みに伴って胎土中の有色鉱物や粘土粒子が褶曲する状況が確認されたことから、焼成前の粘土が柔らかい段階で実施されたと考えられる。

各孔の径および細孔の位置・径には、大きな差がない。また、孔内の側壁、孔底、細孔内の側壁に筋状の痕跡が確認された。これらは穿孔具表面の凹凸を表しているものと思われる。

一方、鑄型の裏面から穿孔されているものの、表面まで貫通しない細孔も確認された。胎土の粘土粒子の配列状況を考慮すると、裏面に細孔を穿孔した後で、表面に孔および細孔を穿孔した作業工程が考えられる。

なお、鑄型11点からは、少なくとも3個体のイネの種実圧痕が確認された。鑄型製作時の粘土中に稲穂や玄米が確実に混入していた、もしくは鑄型の整形後、種実を押し込んだ可能性が示唆され、鑄型製作と植物質食糧のイネとの何らかの関わりを示す貴重な情報である。

(2) 今後の課題

本節では、今回の分析結果を踏まえた上で、今後の調査課題について述べる。

今回は、鑄型胎土表面の実体顕微鏡観察結果を記載したが、原料となる粘土や砂の採取地域の推定や、被熱温度に関する知見を得るためには、薄片作製観察を行うことが望まれる。特に、粘土や砂の採取地域の推定は、ガラス小玉製造後に鑄型ごと調査地に搬入されたのか、調査地周辺で鑄型が作成され、鑄造も調査地周辺で行われたのかなどを検証する重要な資料になると思われる。

また、今回の分析調査では、孔充墳土よりガラス粒子を抽出している。これらのガラス粒子の成分分析を行うことで、鑄型を用いてどのようなガラス小玉が鑄造されていたかを知る手がかりとなる。さらに、ガラス粒子とともに確認された灰褐色付着物や灰色粒子には、鑄造時の剥離材や芯棒の痕跡などに由来する可能性があるため、これらの成分分析等を実施し、ガラス小玉製造工程の詳細を明らかにすることが可能になると思われる。

引用文献

- 町田洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.
- 松村恵司,2010,日本の古代ガラス,月刊文化財 566号,文化庁文化財部監修,第一法規株式会社,4-5.
- 大賀克彦,2010,日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開,月刊文化財 566号,文化庁文化財部監修,第一法規株式会社,27-35.
- 大田区立郷土博物館編,2001,ものづくりの考古学—原始・古代の人々の知恵と工夫—,東京美術,277p.
- 潮見 浩,2000,図解技術の考古学〔改訂版〕,株式会社有斐閣,166p.
- 杉山雄一・水野清秀・狩野謙一・村松 武・松田時彦・石塚 治・川柳樹・高田 亮・荒井晃作・岡村行信・実松健造・高橋正明・尾山洋一・駒澤正夫,2010,20 万分の1 地質図幅 静岡及び御前崎(第2版),産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 丑野 毅・新里 康,1992,土器に残された圧痕の観察,田園調布南遺跡2,都立学校遺跡調査会,176-205.
- 白井洋輔,2005,古代鑄造ビーズ製作技法の研究,文化財情報学研究第2号,古備国際大学文化財総合研究センター,141-160.

表5. ガラス小玉錐型孔内観察一覧(1)

資料番号	試料番号	試料種別	観察箇所	観察	分析手段	分析・検出条件	結果	検出	検出	備考
22年度	1	3.5	8.1	0.1 片状～0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状
	2	2.6	3.9	1.0 片状～0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状
	3	3.1	4.2	0.1 片状～0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状
	4	3.4	4.4	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	5	3.1	4.3	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	6	3.1	4.3	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	7	3.3	4.4	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	8	3.2	4.1	0.1 片状～0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状
	9	3.0	4.4	1.0 片状～0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状
	10	3.2	4.3	1.0 片状～0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状	0.1 片状
22年度	11	3.4	4.3	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	12	3.1	4.3	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状
	13	3.1	4.1	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	14	3.1	4.1	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	15	3.4	4.0	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	16	3.4	4.3	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	17	2.6	4.0	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	18	3.0	3.9	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	19	2.9	4.1	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状
	20	2.4	4.2	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
22年度	21	3.0	4.1	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状	1.2 片状
	22	3.0	4.1	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	23	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	24	3.3	4.2	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	25	3.3	3.9	-	-	-	-	-	-	-
	26	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	27	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	28	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	29	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	30	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22年度	31	3.0	4.1	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	32	3.0	4.1	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	33	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	34	3.3	4.2	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	35	3.3	3.9	-	-	-	-	-	-	-
	36	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	37	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	38	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	39	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	40	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22年度	41	3.0	4.1	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	42	3.0	4.1	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	43	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	44	3.3	4.2	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	45	3.3	3.9	-	-	-	-	-	-	-
	46	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	49	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	50	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22年度	51	3.2	4.5	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状	1.1 片状
	52	3.6	4.6	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	53	3.2	4.4	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	54	3.2	4.4	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	55	3.2	4.4	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	56	3.2	4.4	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	57	3.2	4.4	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	58	3.2	4.4	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	59	3.2	4.4	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状
	60	3.2	4.4	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状	1.0 片状

表 5. ガラス小玉錐型孔内観察一覧 (2)

資料 番号	試料 番号	試料 長さ	試料 直径	観察 倍率	観察 位置	備考	ガラス小玉		石炭 長さ	植物 種類	植物 部位	観察部位位置	観察部位位置	
							ガラス小玉 長さ	直径						
20 年度 11 11-27	1	3.2	4.4	1.7	1孔観察、観察位置:1分母。	単孔の観察位置:1分母。	14	—	4	+	+	—	植物体はほぼ直線的に存在する。	
	2	2.3	3.9	1.7	1孔観察、観察位置:1分母。	—	10	—	10	—	+	—	—	
	3	2.1	3.3	1.4	1孔観察、観察位置:2分母。	—	10	—	10	—	+	—	—	
	4	2.4	4.1	0.8	1孔観察、観察位置:2分母。	3本の植物が120°の角度を呈して観察から伸びているが、120°の外側から伸びていない。	—	10	—	10	10	—	—	植物が多岐に、観察位置から伸びている植物は観察位置から伸びている。
	5	2.9	4.1	1.1	1孔観察、観察位置:2分母。	—	10	—	10	—	10	—	—	
	6	3.2	4.0	1.0	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	10	—	10	+	+	+	—
	7	2.7	—	0.9	観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	10	—	10	+	+	+	—
	8	3.0	4.2	1.0	1孔観察、観察位置:2分母。	3本の植物が、ほぼ180°に配置して観察位置から伸びている。観察位置から伸びる植物は観察位置から伸びていないが、観察位置から伸びていない。	—	—	—	—	—	—	—	—
	9	2.9	4.2	0.8	1孔観察、観察位置:2分母。	—	10	—	10	—	10	—	—	—
	10	2.8	—	1.0	観察位置:2分母。	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20 年度 11 11-28	11	3.1	4.3	1.0	1孔観察、観察位置:2分母。	—	10	—	10	—	—	—	—	
	12	2.6	4.3	1.0	1孔観察、観察位置:2分母。	—	10	—	10	—	—	—	—	
	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	14	2.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	15	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	16	3.0	—	0.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	17	2.6	4.4	1.1	1孔観察、観察位置:2分母。	3本の植物が120°の角度を呈して観察位置から伸びているが、120°の外側から伸びていない。	—	—	—	—	—	—	—	—
	18	2.7	4.2	1.2	1孔観察、観察位置:2分母。	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	19	3.2	4.0	1.0	1孔観察、観察位置:2分母。	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	20 年度 11 11-29	1	3.1	4.6	1.1	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—
2		3.1	4.2	1.0	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
3		3.1	4.2	1.0	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
4		3.1	4.4	1.2	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
5		2.9	4.2	1.1	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
6		2.6	4.2	1.1	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
7		3.1	4.2	1.2	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
8		3.1	4.4	1.2	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
9		2.9	4.2	1.1	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
10		2.6	4.2	1.1	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
20 年度 11 11-30	11	3.1	4.3	1.2	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
	12	3.1	4.0	1.2	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—	
10	3.7	4.3	1.1	1孔観察、観察位置:2分母。	植物の観察位置は観察位置から伸びている。	—	—	—	—	—	—	—		

表5. ガラス小玉錐型孔内観察一覧(3)

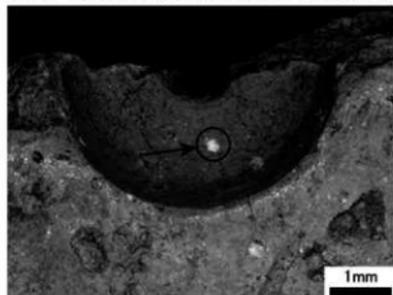
資料番号	231000 (10)	観察位置	顕微鏡	目録	備考	ガラス小玉	ガラス小玉	長条一節状付着物	材質	形状	顕微鏡	観察位置	顕微鏡
14	4.6	4.3	1.1	長条一節状、縦長型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	++	++	長条一節状付着物によって、一部がガラス小玉に付着している。	-	-	-	-	-
15	3.9	4.4	1.7	縦型、縦長型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	++	++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
16	3.4	4.0	1.6	長条一節状、縦長型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	++	++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
17	3.4	4.4	1.0	縦型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	+++	+++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
22	3.6	4.2	1.1	縦型、縦長型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	+++	+++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
10727	3.6	4.2	1.1	縦型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	+++	+++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
20	3.6	-	-	縦型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	+++	+++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
21	-	-	-	縦型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	+++	+++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
1	1.0	4.1	0.9	長条一節状、縦長型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	3と4と5とに比べて縦型がやや個人物種を有する。	+	+	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	(1)	(1)	(1)	(1)
2	3.2	4.3	1.0	縦型、縦長型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	+	+	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
3	2.9	4.2	1.1	縦型、縦長型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	++	++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
4	3.2	3.9	1.0	縦型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	++	++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
5	2.9	3.6	1.0	縦型一節状、縦長型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	01	01	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
6	3.7	4.0	1.1	縦型一節状、縦長型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	2+++	2+++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
7	2.9	4.3	1.1	長条一節状に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	(1)	(1)	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
8	3.6	4.2	1.1	縦型一節状、縦長型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	++	++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
9	3.2	3.7	1.0	縦型一節状、縦長型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	++	++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
10	3.3	4.4	1.0	縦型一節状、縦長型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	+++	+++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
11	2.2	4.2	1.0	縦型一節状、縦長型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	+++	+++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
12	3.3	4.2	1.1	長条一節状、縦長型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	++	++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
14	4.0	4.2	1.1	縦型一節状、縦長型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	+	+	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	(1)	(1)	(1)	(1)
15	3.0	-	-	縦型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	(1)	(1)	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
16	3.0	-	-	縦型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	(1)	(1)	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
17	3.0	-	-	縦型に二分。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	+	+	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
18	3.1	4.1	1.1	縦型一節状、縦長型に二分、縦長型に二分、ガラス小玉に付着して不規則。	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	++	++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-
1005	2	3.0	-	-	孔内表面の面二面に、ガラス片、あり。	++	++	同型状に二分し、縦型一節状の付着物がある。	-	-	-	-	-

表5. ガラス小玉鋤型孔内観察一覧(4)

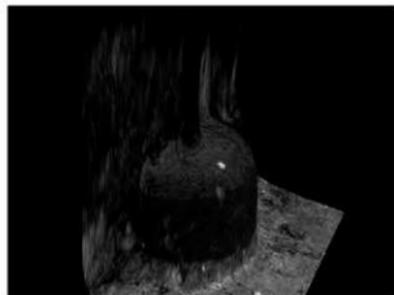
資料 番号	ガラス 厚	ガラス 径	観察 位置	観察 条件	観察 結果	ガラス粒子		目録 番号	写真 枚数	備考	顕微鏡の仕様
						ガラス粒子	目録 番号				
23 厚板	1	3.3	4.2	1.1	1.1	1.1	1.1	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
3	2	3.1	4.1	1.0	1.0	1.0	1.0	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
23 厚板	4	2.5	4.1	0.9	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
5	3	3.3	4.1	0.9	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
105-6	6	3.9	4.1	1.2	1.2	1.2	1.2	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
1	3	3.7	3.7	1.1	1.1	1.1	1.1	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
9	3	3.4	-	-	-	-	-	-	-	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
9	3	3.4	-	-	-	-	-	-	-	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
23 厚板	2	3.5	4.4	1.3	1.3	1.3	1.3	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
6	2	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
105-11	4	3.2	4.8	1.1	1.1	1.1	1.1	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
5	3	4.4	4.5	0.9	0.9	0.9	0.9	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
1	1	2.2	-	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
2	2	2.9	3.2	1.2	1.2	1.2	1.2	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
2	2	2.9	3.2	1.2	1.2	1.2	1.2	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
4	4	2.6	4.0	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
7	5	2.6	-	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
105-19	6	2.6	3.8	1.2	1.2	1.2	1.2	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
7	3	3.1	3.8	1.2	1.2	1.2	1.2	(1)	(1)	(1)	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
9	3	2.1	-	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
9	3	2.1	-	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
平均	3.12	4.23	1.00	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
標準	0.45	0.71	0.10	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
標準	1.4	1.7	0.3	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
標準	4.6	4.8	1.3	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。
標準	110	100	100	-	-	-	-	-	-	-	断面は、顕微鏡にて観察する。有孔状の孔は、顕微鏡にて観察する。顕微鏡にて観察する。

凡例：- 観察しない、(1) 観察した。+ 観察、++ 少量、+++ 中量、++++ 多量。

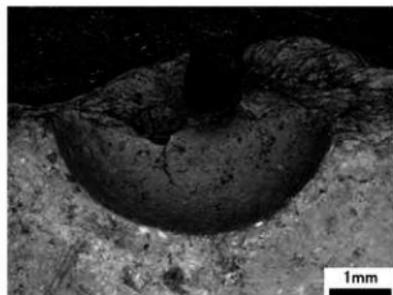
図版6 ガラス小玉鑄型孔 (平成22年度資料No.1)



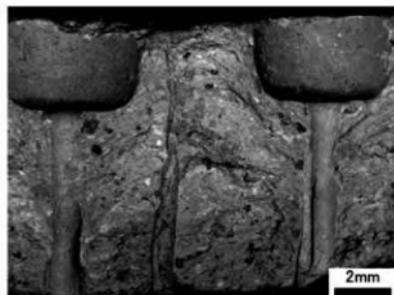
孔番号2の深度合成画像(矢印:黒雲母)



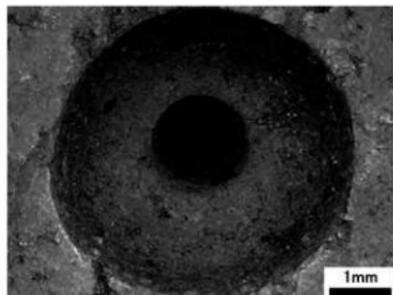
孔番号2の3D画像(反転)



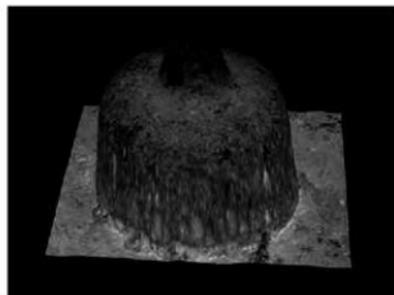
孔番号3の深度合成画像(矢印:斜方輝石)



断面:孔番号2・3の深度合成画像

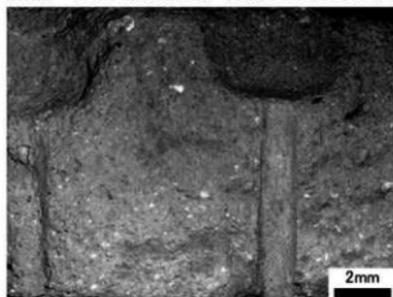


孔番号11の深度合成画像(側壁:ガラス粒子)

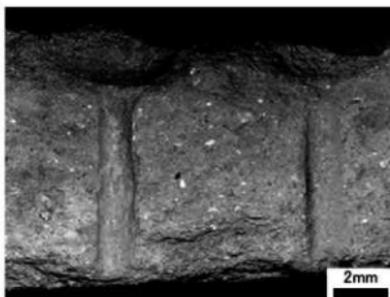


孔番号11の3D画像(反転)

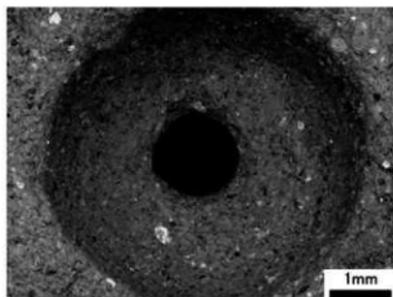
図版7 ガラス小玉鑄型孔 (平成22年度資料No.2)



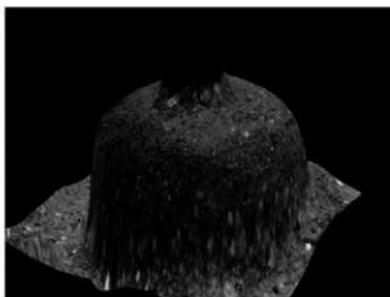
断面: 孔番号2・3の深度合成画像



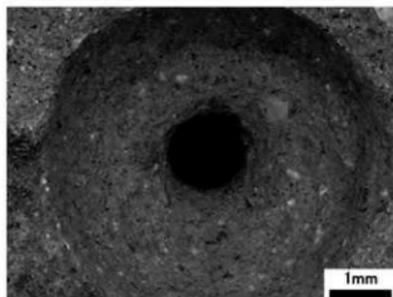
断面: 孔番号6・7の深度合成画像



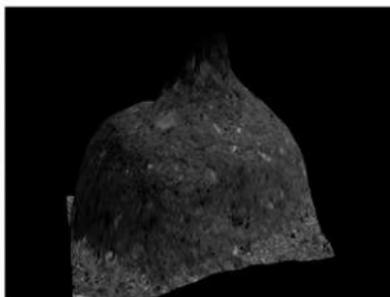
孔番号10の深度合成画像(側壁: ガラス粒子)



孔番号10の3D画像(反転)

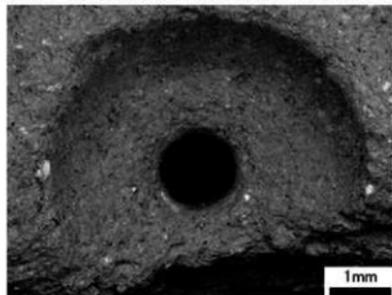


孔番号12の深度合成画像

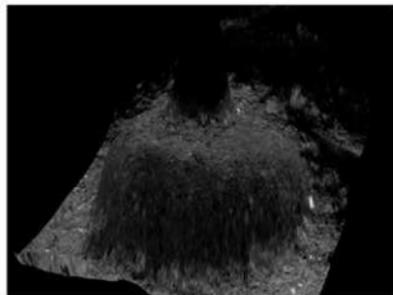


孔番号12の3D画像(反転)

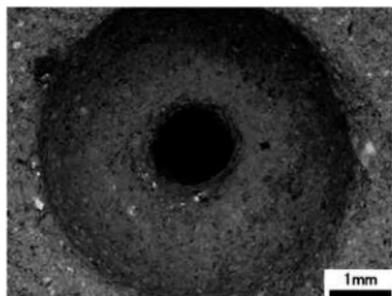
図版8 ガラス小玉鑄型孔 (平成22年度資料No.3)



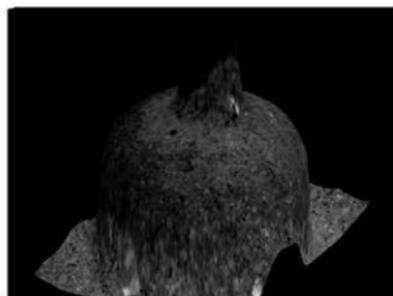
孔番号1の深度合成画像



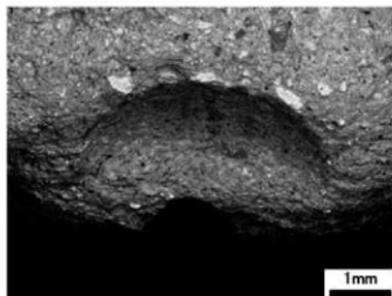
孔番号1の3D画像(反転)



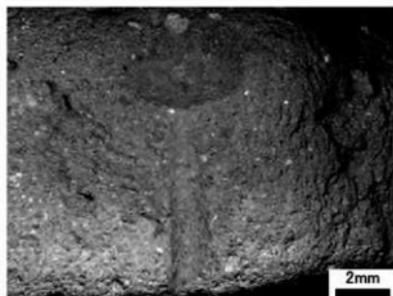
孔番号2の深度合成画像(側壁:ガラス・灰褐色物質)



孔番号2の3D画像(反転)

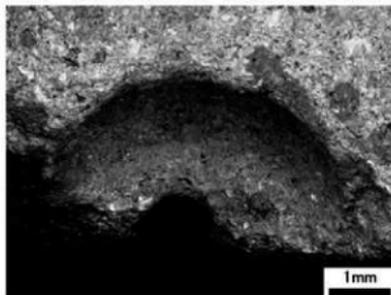


孔番号3の深度合成画像

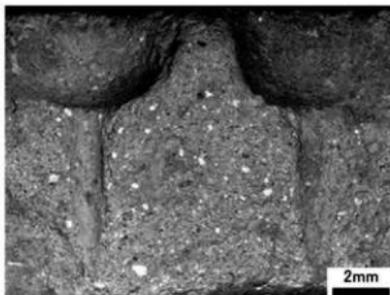


断面:孔番号3の深度合成画像

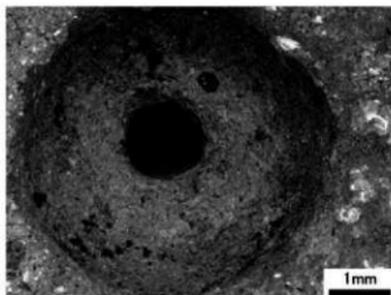
図版9 ガラス小玉鑄型孔 (平成22年度資料No.4)



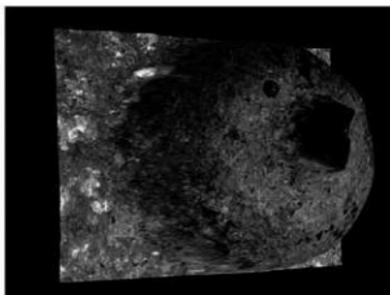
孔番号3の深度合成画像



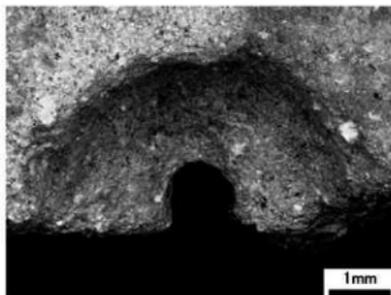
断面: 孔番号3・6の深度合成画像



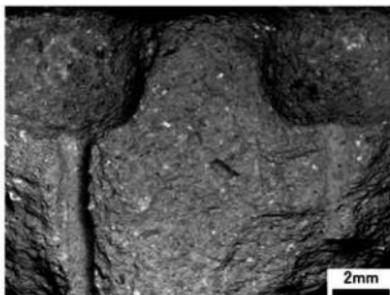
孔番号4の深度合成画像(表面・側壁:ガラス粒子)



孔番号4の3D画像(反転)

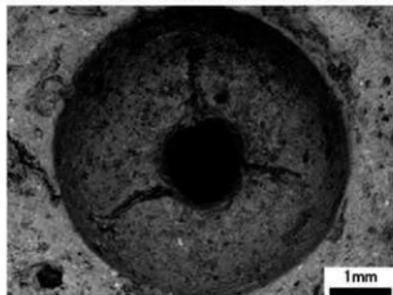


孔番号7の深度合成画像

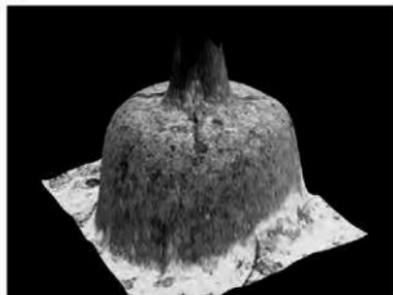


断面: 孔番号5・7の深度合成画像(側壁:ガラス粒子)

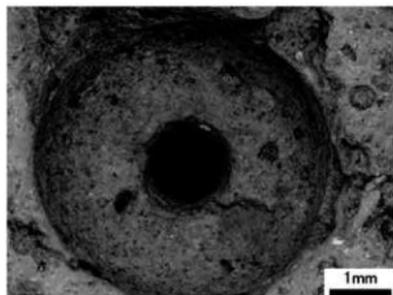
図版 10 ガラス小玉鑄型孔 (平成 23 年度 資料番号 1)



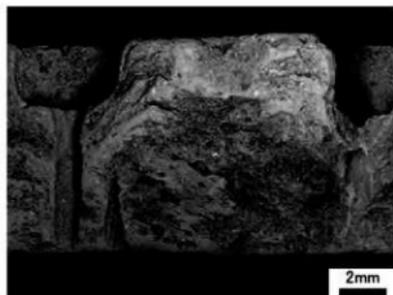
孔番号5の深度合成画像



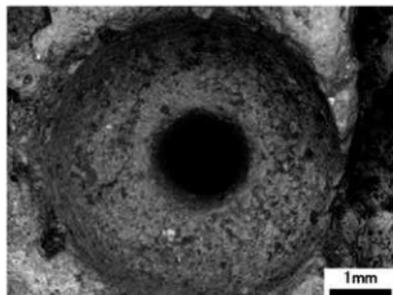
孔番号5の3D画像



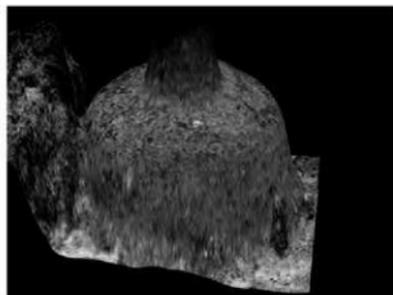
孔番号8の深度合成画像



断面:孔番号6・9の深度合成画像

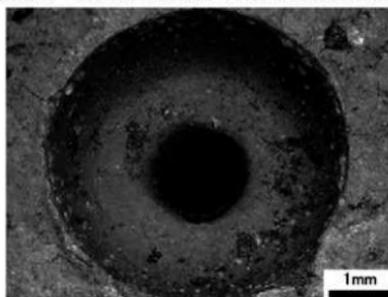


孔番号11の深度合成画像(側壁～細孔:筋状の痕跡)

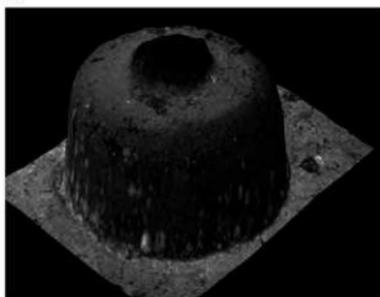


孔番号11の3D画像

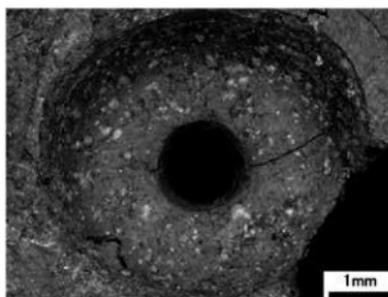
図版 11 ガラス小玉鑄型孔 (平成 23 年度 資料番号 2)



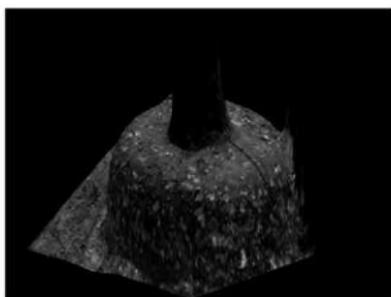
孔番号9の深度合成画像(側面:ガラス粒子)



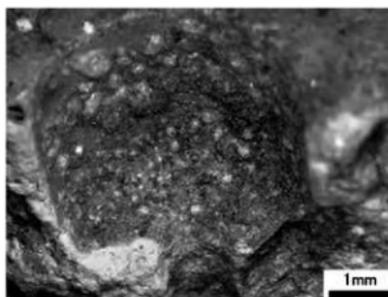
孔番号9の3D画像



孔番号11の深度合成画像(ガラス粒子が密布)



孔番号11の3D画像

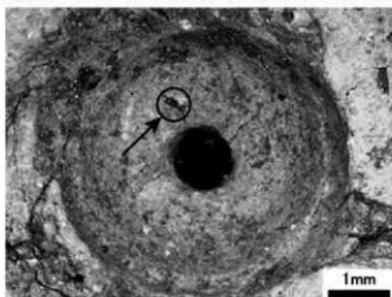


断面: 孔番号17の二次元画像(ガラス粒子が密布)

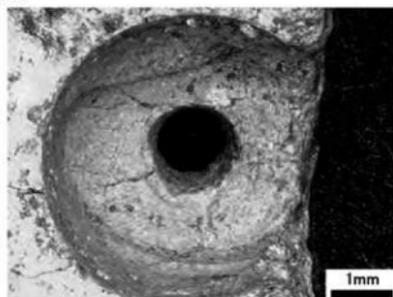


断面: 孔番号12・17の深度合成画像(ガラス粒子が密布)

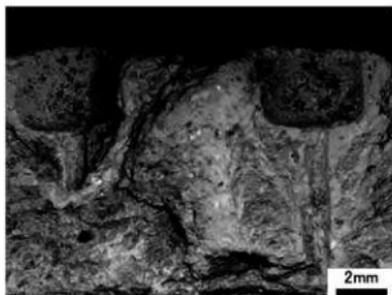
図版 12 ガラス小玉鑄型孔 (平成 23 年度 資料番号 3)



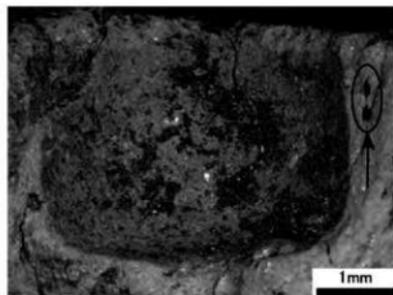
孔番号1の深度合成画像(矢印:斜方輝石、孔底:段差)



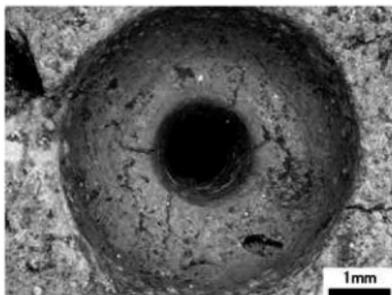
孔番号13の深度合成画像(孔底:段差)



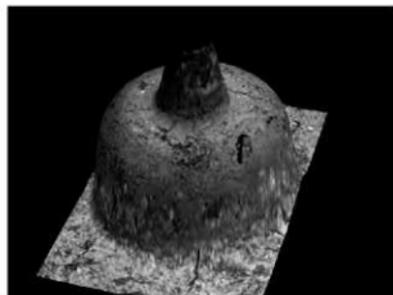
断面: 孔番号4・13の深度合成画像



孔番号4(矢印:有色鉱物が孔と並列、孔底:ガラス粒子)

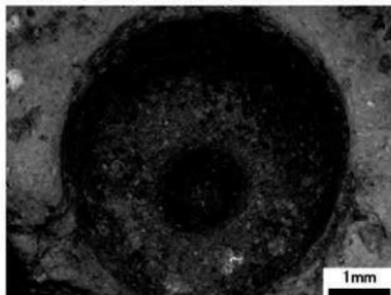


孔番号11の深度合成画像(側壁:ガラス粒子)

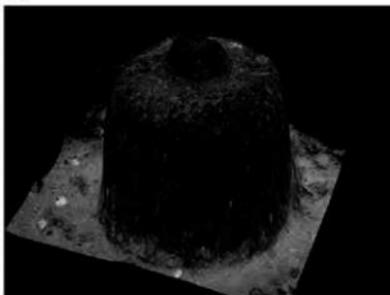


孔番号11の3D画像(反転)

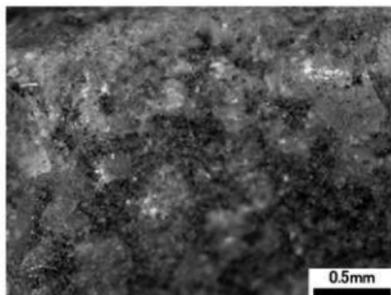
図版 13 ガラス小玉鑄型孔 (平成 23 年度 資料番号 4)



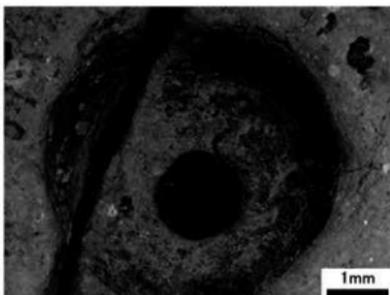
孔番号1の深度合成画像(ガラス粒子が密布)



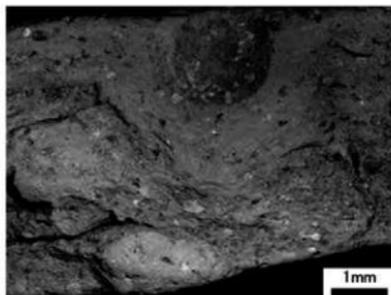
孔番号1の3D画像(反転)



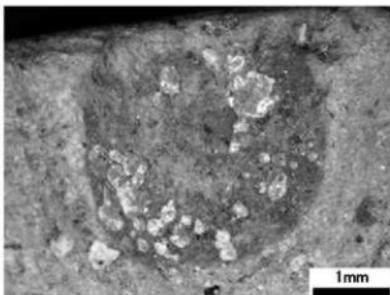
断面: 孔番号1(ガラス粒子・灰褐色色附着物)



孔番号2・資料番号5孔番号1の深度合成画像

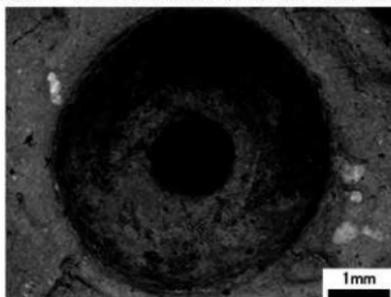


断面: 孔番号2の深度合成画像



孔番号2の二次元画像(ガラス粒子が分布)

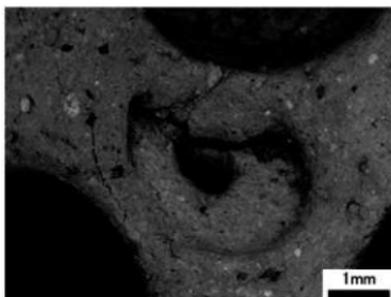
図版 14 ガラス小玉鑄型孔 (平成 23 年度 資料番号 5)



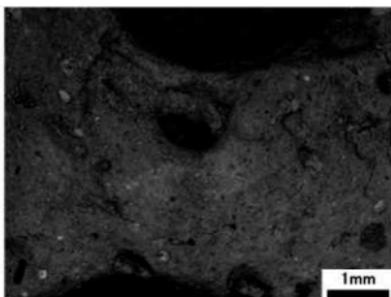
孔番号7の深度合成画像(側壁上部:ガラス粒子)



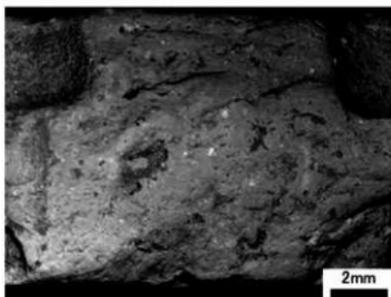
孔番号7の3D画像(反転)



孔番号3・7間にみられる浅孔の深度合成画像



孔番号7・9間にみられる浅孔の深度合成画像

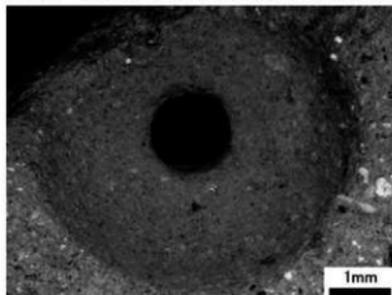


断面: 孔番号5・9の深度合成画像(側壁:ガラス粒子)

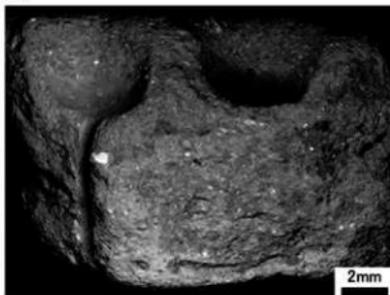


孔番号2~4・6・7、浅孔、イネ圧痕の3D画像(反転)

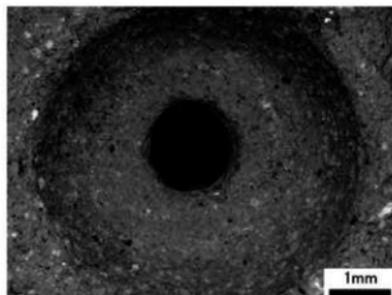
図版 15 ガラス小玉鑄型孔 (平成 23 年度 資料番号 6)



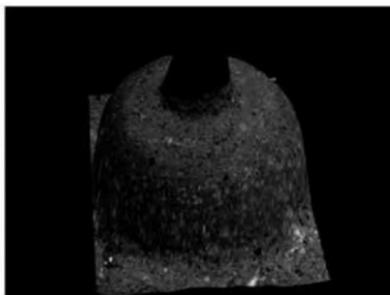
孔番号2の深度合成画像(側壁:ガラス粒子)



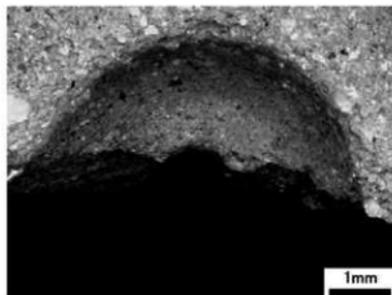
断面: 孔番号1・2の深度合成画像(側壁:ガラス粒子)



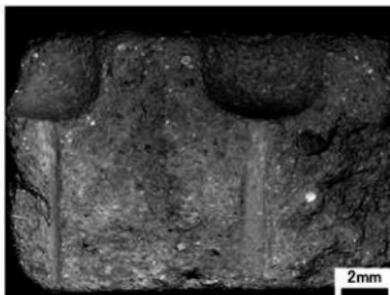
孔番号4の深度合成画像(ガラス粒子が密布)



孔番号4の3D画像(反転)

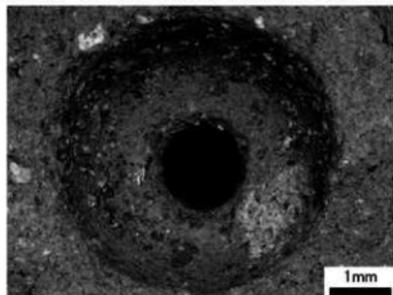


孔番号5の深度合成画像(側壁:ガラス粒子)

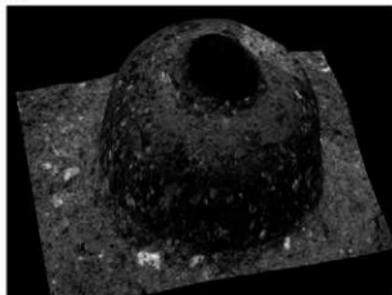


断面: 孔番号3・5の深度合成画像(側壁:ガラス粒子)

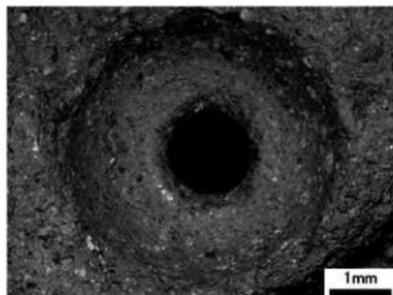
図版 16 ガラス小玉鑄型孔 (平成 23 年度 資料番号 7)



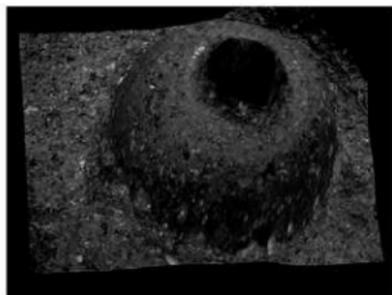
孔番号3の深度合成画像(側壁:ガラス粒子)



孔番号3の3D画像(反転)



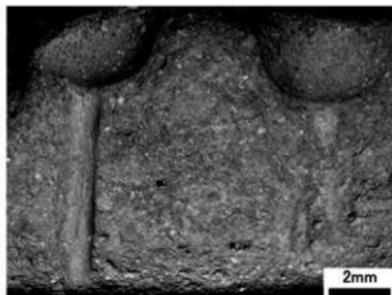
孔番号7の深度合成画像(側壁上部:ガラス粒子)



孔番号7の3D画像(反転)

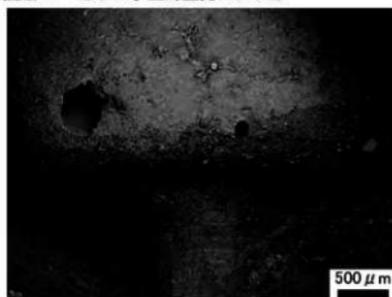


断面: 孔番号1・5・9の深度合成画像



断面: 孔番号4・8の深度合成画像

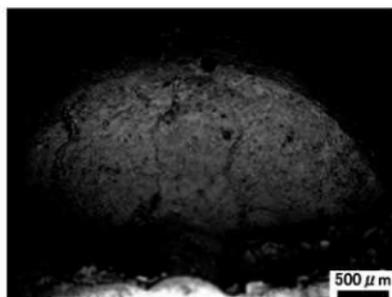
図版 17 ガラス小玉鑄型孔レプリカ



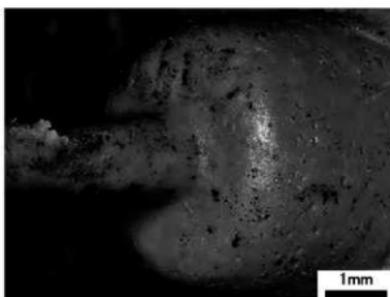
22年度資料No.1孔番号2のSEM画像(側壁～細孔)



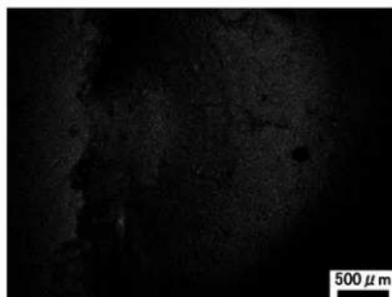
22年度資料No.1孔番号3のSEM画像(側壁～細孔)



22年度資料No.1孔番号2のSEM画像(孔底)



23年度資料番号2孔番号9の深度合成画像

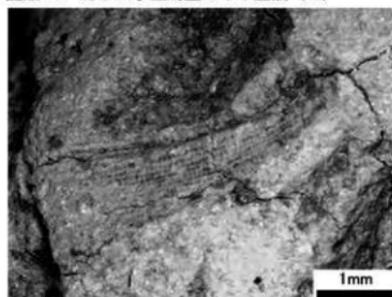


22年度資料No.1孔番号2のSEM画像(孔底)

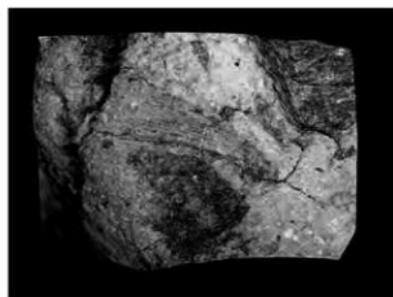


23年度資料番号2孔番号9の3D画像

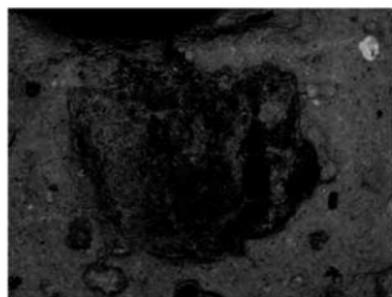
図版 18 ガラス小玉鑄型のイネ圧痕 (1)



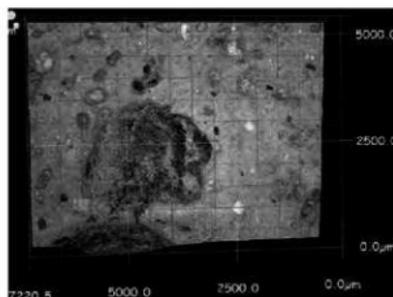
穎圧痕の深度合成画像(23年度資料番号3)



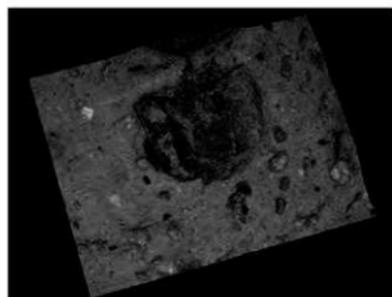
穎圧痕の3D画像(23年度資料番号3)



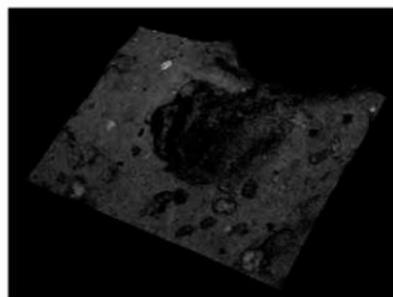
胚乳圧痕の深度合成画像(23年度資料番号5)



胚乳圧痕の3D画像(23年度資料番号5)

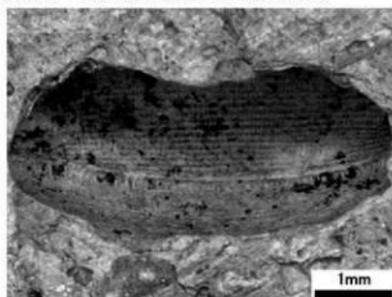


胚乳圧痕の3D画像(23年度資料番号5)

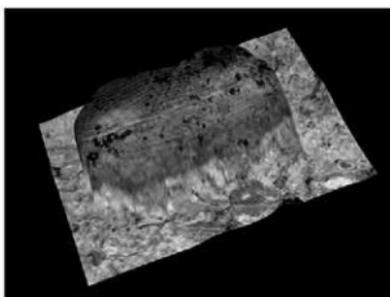


胚乳圧痕の3D画像(23年度資料番号5)

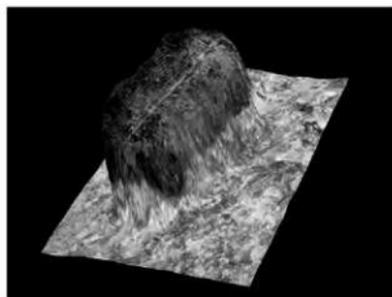
図版 19 ガラス小玉鑄型のイネ圧痕 (2)



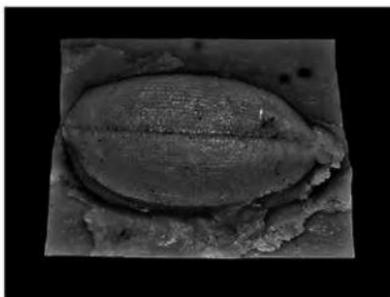
穎圧痕の深度合成画像(22年度資料No.1)



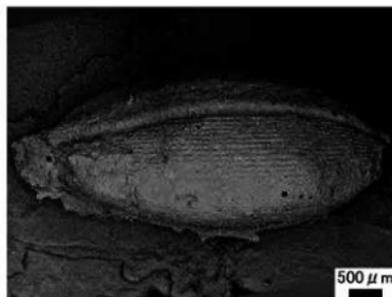
穎圧痕の3D画像(22年度資料No.1)



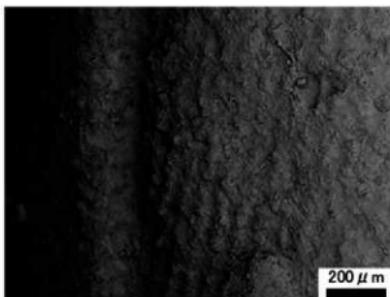
穎圧痕の3D画像(22年度資料No.1)



穎圧痕レプリカの3D画像(22年度資料No.1)



穎圧痕レプリカのSEM画像(22年度資料No.1)



穎圧痕レプリカのSEM画像(表面拡大)(22年度資料No.1)

4. 中原遺跡出土金属遺物の成分分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、古代の住居跡および遺物包含層から出土した金属遺物を対象に蛍光 X 線分析を実施し、遺物の材質について検証を行う。

1. 試料

試料は古代の住居跡および遺物包含層から出土した金属遺物 10 点である。試料の詳細は表 1 に示す。器種は分銅が 1 点、鐮が 1 点、鉸具が 1 点、刺金が 1 点、銅環が 1 点、耳環が 5 点である。試料によっては鍍金と思われる表面装飾等が施されているものもあったため、地金部に加え、微小な範囲について測定可能な機器を用いて鍍金部の分析も実施した。各試料の分析箇所や使用した機器については下記するとともに、表 1 に示す。

№1 の分銅は銅と思われる本体部分の中央部を貫通する形で、釣り手が作られている。本体と釣り手部分は別材で作られていることが想定されたため、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 JSX-3201 を使用して、双方の測定を実施した。

№2 の鐮は薄い板状の金属が環状に曲げられている。本体部分の表面には、鍍金の可能性がある微小な範囲が確認された。本体部分についてはエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 SEA2120L を用いて測定を実施するが、上記のような試料観察結果から、さらにエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 JSX-3201 を用いて、本体、鍍金の双方について測定を実施した。

№3 の鉸具は環状を呈する。表面の観察では鍍金等は見られないので、本体部分の測定を実施した。測定はエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 SEA2120L を用いて測定するとともに、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 JSX-3201 を用いて微小な範囲の測定を実施した。

№4 の刺金は棒状で、表面は銀色を呈し、一部は剥げ落ちて地金と思われる黒色部が露出している。地金と銀色の塗膜部を対象として、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 JSX-3201 および X 線分析顕微鏡 XGT-2700W を用いて測定を実施した。

№5 は銅環で、薄い板状の金属が環状に曲げられた状態を呈す。表面には鍍金等の可能性がある痕跡が見られなかったため、本体を対象として、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 SEA2120L を用いて測定を実施した。

№6～№9 は耳環であり、いずれも表面全体に鍍金と思われる表面装飾が施されている。すべての試料で、一部の鍍金が剥げ落ちて地金が見えている。地金と鍍金部を対象として、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 JSX-3201 および X 線分析顕微鏡 XGT-2700W を用いて測定を実施した。

№10 も耳環であり、肉眼的観察では鍍金等の表面装飾は確認できないが、顕微鏡による観察で、微小ではあるが光沢を持ち、鍍金が残存している可能性がある範囲が確認された。地金と鍍金部を対象として、X 線分析顕微鏡 XGT-2700W を用いて測定を実施した。

表 1. 試料および測定装置

試料 No.	器種	試料名	測定装置			図版番号
			JSX-3201	XGT-2700W	SEA2120L	
1	分銅	4 区-No. 6884	○			(1) 46-14
2	鐮	8 区-No. 1	○		○	(1) 139-8
3	鉸具	8 区-No. 3670	○		○	(1) 55-6
4	刺金	7 区-No. 4979	○	○		(2) 126-6
5	銅環	7 区-No. 1			○	(2) 81-15
6	耳環	2 区-No. 2431	○	○		2 区 (未報告)
7	耳環	2 区-No. 2071	○	○		2 区 (未報告)
8	耳環	3 区-No. 1895	○	○		(1) 29-76
9	耳環	6 区-No. 3580	○	○		(1) 159-26
10	耳環	7 区-No. 4925		○		(2) 90-17

図版番号 (1) : 第 1 分冊 (2) : 第 2 分冊

2. 測定方法

本分析調査で使用した機器について、名称や測定条件を下記する。

- エネルギー分散型蛍光X線分析装置 SEA2120L (セイコーインスツルメンツ KK)
 管球ターゲット：Rh、X線検出器：Si (Li) 半導体検出器
 管電圧 50kV、管電流：自動設定 (～500 μ A)、
 測定時間：300sec、コリメータ：10mm ϕ
- エネルギー分散型蛍光X線分析装置 JSX-3201 (日本電子 KK)
 管球ターゲット：Rh、X線検出器：Si (Li) 半導体検出器
 管電圧 30kV、管電流：自動設定 (～4.0mA)、
 測定時間：600sec、1000sec (Live Time)、コリメータ：0.5mm ϕ (2mm ϕ)
- X線分析顕微鏡 XGT-2700W (KK 堀場製作所 HORIBA)
 管球ターゲット：Rh、X線検出器：Si (Li) 半導体検出器
 管電圧：50kV、管電流：1.0mA、
 測定時間：1000sec (Live Time)、XGT 径 100 μ m

3. 測定結果

以下に各試料の測定結果について述べるとともに、表2～4に成分分析結果を示す。

No.1 分銅 (4区-No.6884)

本体部は銅を主成分とし、ヒ素を含む。JSX-3201の測定結果によると、その割合は銅55%、ヒ素5.5%である。原料の銅鉱物に含まれている量としては多い。意図的にヒ素が加えられている可能性も考えられる。スズを含まないことから、青銅ではないといえる。

釣り手部の材質は鉄である。

No.2 籠 (8区-No.1)

地金は銅を主成分としヒ素を含む。JSX-3201の測定結果によると、その割合は銅65%、ヒ素4%である。スズを含まないことから、青銅ではないといえる。

鍍金部は銀と金が質量比で等量だが量は少ない。水銀は検出されない。

No.3 鉸具 (8区-No.3670)

銅、鉄を主成分とし、ヒ素、スズ、鉛を含む。ヒ素青銅と考えられる。ヒ素が20%前後を占めており、明らかに意図的にヒ素が加えられている。鉄が23%を示しており、鉄芯にヒ素青銅を巻いたものである可能性も考えられる。

No.4 刺金 (7区-No.4979)

地金は銅を主成分とし、ごくわずかにヒ素を含む。カドミウムが検出されている。

鍍金は銀を主成分とし、金と水銀を含み、金の割合が高い。質量比で銀の四分の一強、モル比で六分の一強である。

No.5 銅環 (7区-No.1)

本体部は銅を主成分とする。亜鉛、鉛を含む。SEA2120Lの測定結果によると、その割合は銅90%、亜鉛5%、鉛3.5%である。

No.6 耳環 (2区-No.2431)

地金は銅を主成分とする。わずかにヒ素を含む。2区-No.2071に似た組成である。XGT-2700Wの測定結果は銅が少ない結果となっているが、これはやや風化した部分を測定しているためである。

鍍金は銀を主成分とし、金、水銀をわずかに含む。JSX-3201の測定結果ではカドミウムが検出されている。

№7 耳環（2区-No.2071）

地金は銅を主成分とし、わずかにヒ素を含む。

鍍金は銀を主成分とし、金、水銀をわずかに含む。

№8 耳環（3区-No.1895）

地金は銅を主成分とし、ごくわずかにヒ素を含む

鍍金は銀を主成分とし、金、水銀をわずかに含む。JSX-3201の測定結果ではカドミウムが検出されている。

№9 耳環（6区-No.3580）

地金は銅を主成分とし、わずかにヒ素を含む。

鍍金は銀を主成分とし、金と水銀を含むが、他の4点に比べて水銀の量が多い。

№10 耳環（7区-No.4925）

地金は銅を主成分とし、ごくわずかにヒ素を含む。

鍍金は銀を主成分とする。金は検出されなかったが、鉛を含む。

4. 考察

（1）分銅および不明銅製品の材質

№1 分銅（4区-No.6884）の本体は銅製であり釣り手は鉄で作られている。銅は数%のヒ素を含み、銅原料に由来するものとしては多いため、意図的に混入された可能性も考えられる。質量71.05gであり、1匁=3.75gであるが、古代には、もう少し小さな値であるとされるため、20匁を示す分銅である可能性もある。

№2 匁（8区-No.1）の地金は銅製であり、鍍金部分は銀と金をほぼ等量含んでいるが、検出された量が少ない。水銀は検出されなかったため、アマルガム法による鍍金が行われているか否かは不明である。

№3 鉸貝（8区-No.3670）は、銅を主成分とし、スズを含むため青銅と考えられるが、スズの量は0.8%とわずかである。また、ヒ素の含有量は20%前後ときわめて大きいことから、材質にヒ素青銅が用いられているものと考えられる。一方で、鉄も銅とほぼ同量の23%程度が存在しており、鉄芯にヒ素青銅を巻いたものである可能性も考えられる。

№4 刺金（7区-No.4979）の地金は銅製であり、鍍金は銀を主成分として、金と水銀を含む。水銀を含むためアマルガム法による鍍金が行われている可能性がある。

№5 銅環（7区-No.1）は、銅を主成分とし、亜鉛を含む合金である。亜鉛5%と少ない特徴から、丹銅に相当するものと思われる。

（2）耳環の材質

いずれの試料も地金は銅であり、亜鉛、スズ、鉛などは検出されなかった。また、0.1mmの微小部分を分析したXGT-2700Wの測定結果を見ると、純度95%以上の純銅が使われている（風化部分を分析していると思われる№6、№10を除く）ことが考えられる。いずれも試料も微量のヒ素を含んでおり、銅鉱石に含まれていたものに由来する可能性がある。

鍍金については、金が露出しているところの周囲では、金銀色の被膜は一定の厚さがあることが観察できるので、鍍銀の上に鍍金を施した制作方法は考えにくく、銅の地金に銀の薄板を巻いて、さらにその上に金の鍍金を施している可能性がある。また、水銀が検出されており、金の比率の大小と正の相関を示していることから、銀板の上に金アマルガム法による鍍金が行われていた可能性が考えられる。鍍金部の表面に、磨き痕と思しき線条痕が残る点も整合的である。

なお、上記のような、制作方法の場合、端部で銀の薄板を折り込むことになるが、出土品は端部（接面）が腐蝕しており、側板をたたみ込んでいるところは確認できなかった。

表 2. 蛍光 X 線分析結果 (測定装置: JSX-3201)

元素	重量組成															
	No.1 (4区 (27.46~4))		No.2 (8区 (1) 139~8)		No.3 (8区 (1) 55~6)		No.4 (7区 (2) 126~6)		No.6 (2区 - 未報告)		No.7 (2区 - 未報告)		No.8 (3区 (1) 29~76)		No.9 (6区 (1) 159~26)	
	本体 2.0g	約り手 0.5mg	地金 2.0mg	鑄金 2.0mg	本体 0.5mg	水状 2.0mg	地金 2.0mg	鑄金 2.0mg	時金 0.5mg	鑄金 0.5mg	時金 0.5mg	鑄金 0.5mg	時金 0.5mg	鑄金 0.5mg	時金 0.5mg	鑄金 0.5mg
Na			1.0		2.5											
Mg	0.8				3.7											
Al	15.8	1.6	10.4	0.7	0.6	7.3	12.3	1.5	0.3	4.2	0.4	0.4	1.9	0.5	0.4	10.3
Si	19.5	1.9	16.2	2.6	2.2	6.7	14.3	7.0	2.0	19.6	3.0	3.4	22.0	0.5	1.2	20.0
P			0.5		1.6	1.8										0.8
S	0.9	0.4	0.4						0.3							0.4
Cl		0.4	1.2													
K		0.3				0.3	0.6			0.2						
Ca		0.1				0.3	0.5			0.4						0.2
Ti		0.1				0.2	0.2			0.1						0.2
V		0.1														
Cr																
Mn																
Fe	2.0	91.7	0.2			22.1	23.9	5.3	1.3	0.6	0.1	0.2	0.3			0.5
Co																
Ni																
Cu	55.2	2.3	64.8	85.7	66.2	26.4	20.1	56.8	17.7	74.4	11.4	15.5	24.2	9.1	11.3	70.7
Zn		0.9														
As	5.5	0.6	4.2	0.8	0.7	10.8	24.2	0.3		0.2	0.1		0.5			0.5
Br		0.0														
Rb																
Sr								0.1	0.0							0.0
Ag																
Au								18.7	56.1		73.9	66.5		87.8	69.1	0.6
Cd								2.1	8.4		5.4			4.6		75.8
Sn							0.8									4.5
Sb																
Bi																
Pb								7.4	15.8		2.6	9.5		1.0	8.9	
Hg									1.3					1.2	4.8	
Th																
U																
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

(1):第1分画 (2):第2分画

表3. 蛍光X線分析結果〔測定装置：XGT-2700W〕

元素	X線分析装置 XGT-2700W (XGT 径 100 μm)													
	金属製品		互溶											
	No. 4 (7区 (2) 126-6)		No. 6 (2区 - 未報告)		No. 7 (2区 - 未報告)		No. 8 (3区 (1) 29-7E)		No. 9 (5区 (1) 159-2E)			No. 10 (7区 (2) 90-17)		
	地金	鍍金	地金	鍍金	地金	鍍金	地金	鍍金	地金	鍍金	地金	鍍金		
1000sec	1000sec	1000sec	1000sec	1000sec	1000sec	1000sec	1000sec	1000sec	600sec	1000sec	600sec	1000sec	1000sec	
Ni														
Al	1.8		6.8										3.0	2.4
Si	2.3		30.2										13.1	20.6
P														
S			0.3										0.1	
Cl														
K														
Ca			0.5											0.2
Ti	1.4		0.2				0.4	0.3	0.3		0.1			0.1
V														
Cr	0.1		0.0										0.0	
Mn														
Fe	1.1	0.2	0.6	0.1	0.5	0.3	1.0	0.3	1.4	0.5	0.2	0.7	0.2	0.4
Cu														
Ni														
Du	80.7	7.9	61.0	6.6	95.9	22.1	98.0	12.2	94.8	96.6	13.6	5.4	83.5	65.6
Zn														
As			0.1		3.0	0.1	0.3	0.1	1.6	0.9	0.0	0.0	0.1	
Br		0.1												
Rb														
Sr														
Ag	5.2	68.5		86.4	0.0	74.1	0.1	83.1	0.0	0.0	55.2	82.7		10.3
Cd														
Sn														
Ba														
Au	5.5	21.6	0.2	4.1	0.5	1.2	0.2	2.4	1.8	1.8	22.9	5.0		
Hg		1.8		2.8	0.0	2.3	0.1	1.7	0.1	0.1	8.1	6.2		
Pb	2.1													0.4
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

(1) : 第1分層 (2) : 第2分層

表4. 蛍光X線分析結果〔測定装置：SEA2120L〕

元素	エネルギー分散型蛍光X線分析装置 SEA2120L		
	金属製品		
	No. 2 (8区 (1) 139-8)	No. 3 (8区 (1) 55-6)	No. 5 (7区 (2) 81-15)
	鋼 本体 10mmφ	鈹鋼 本体 10mmφ	鋼理 本体 10mmφ
Fe	0.1	27.3	1.6
Cu	93.0	33.9	89.6
Zn			5.0
As	5.2	21.6	
Ag	0.3		
Sn		0.5	0.3
Sb	0.1	0.3	
Au	0.3		
Pb	0.7	16.4	3.5
Bi	0.3		
計	100	100	100

(1) : 第1分層 (2) : 第2分層

5. 沼津市中原遺跡出土古代土師器の胎土分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、土師器の材質（胎土）の岩石学的特性を明らかにすることにより、既存の地質資料との比較などから、胎土の由来を検討し、古代の土師器製作に係わる資料を作成する。特に遺跡背後に分布する愛鷹火山の火山噴出物という地質学的背景との整合性を確認し、いわゆる在地性について検討を行う。

1. 試料

試料は、中原遺跡から出土した土師器の破片5点である（図1）。試料にはNo.1～5までの試料番号が付されている。これらのうち、No.1とNo.2は、それぞれ裏-1、裏-2とされ、個体番号はそれぞれ1837、1921とされている。発掘調査所見によれば、これらは「駿東裏」と呼ばれるものであり、その分布も静岡県東部に限定されている。また、カツオを煮たとされる鍋とも胎土が共通しているとの所見がある。

No.3とNo.4は、それぞれ環-1、環-2とされ、個体番号はそれぞれ2408、2370とされている。No.5は水平口縁裏とされ、個体番号は無しとされている。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩石片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や切断による薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での製作事情の解析も可能である。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレバート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。



図1. 分析試料

3. 結果

観察結果を表1・2、図1～3に示し、以下に器種ごとの特徴を述べる。

1) No.1(糞-1)・No.2(糞-2)

2点の試料ともに、斜長石の鉱物片と安山岩、変質岩の岩石片および火山ガラスの4者を主体とする組成であり、これらに加えて石英の鉱物片や軽石などの岩石片が微量～少量伴われる。変質岩は、両試料ともに軽石や安山岩などの風化岩である。また糞-2には流紋岩・デイサイトの岩石片も微量含まれる。これら碎屑物の粒径組成は、両試料ともに粗粒砂および中粒砂が多いことは共通するが、糞-2はさらに細粒砂の量比も同程度に高い。碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合は、両試料ともに20%前後である。

2) No.3(坏-1)・No.4(坏-2)

2点の試料ともに、計数された碎屑物の数が少なく、碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合も10%前後であり、上述した糞の試料に比べて有意に低いと言える。ただし、出現する鉱物や岩石の種類については、斜長石の鉱物片や安山岩と変質岩の岩石片および火山ガラスなどが比較的多く、その種類構成は上述した糞の試料に類似する。また、坏の試料には2点ともに玄武岩の岩石片が微量ながらも認められていることも特徴と言える。

碎屑物の粒径組成は、2点の試料ともに中粒砂をモードとし、次いで細粒砂の割合も高い。細粒砂に次いで割合の高い粒径は、坏-1では粗粒砂であるが、坏-2では粗粒シルトである。

3) No.5(水平口縁甕)

石英の鉱物片が多く、少量のカリ長石および斜長石の鉱物片を伴い、少量のチャートや頁岩などの堆積岩類と多結晶石英および花崗岩類の岩石片を含む。他に微量の角閃石や黒雲母などの鉱物片も含まれている。

碎屑物の粒径組成は、中粒砂が多く、次いで細粒砂、粗粒砂の順に多い。碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合は25%に近く、上述した糞の試料よりも若干高いと言える。

4. 考察

胎土中の砂粒における鉱物片および岩石片の種類構成は、胎土の材料となった砂や粘土などの

表1. 薄片観察結果(1)

試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計			
		石英	植物片	カリ長石	斜長石	角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	黄鉄鉱	砂屑	軽石	スコリア	凝灰岩	凝灰岩	火山ガラス	火山ガラス		その他	植物体	
No. 1 層-1	細砂																				0	
	極粗粒砂	1		1							7		1								11	
	粗粒砂	2		9								2				11	2	18			44	
	中粒砂	4		14			1				1		5			9	3	11			48	
	細粒砂			13	1											1	1	1	6		23	
	極細粒砂	3	1	6																	16	
	粗粒シルト	3		5														1			9	
	中粒シルト																				0	
	基質																					532
	孔隙																					17
備考	基質は褐色粘土鉱物、酸化鉄などで構成される。火山ガラスは軽石型が主体で、風化により脱ガラス化しているものが多い。変質岩は、軽石ほかの風化岩。																					
No. 2 層-2	細砂																				0	
	極粗粒砂		1								3	1	3								11	
	粗粒砂		3	1							1	9				14	1	6			35	
	中粒砂		9									1	2			10	9				31	
	細粒砂	1	1	10				4				1	1			5	7				30	
	極細粒砂	1		5	1			1													8	
	粗粒シルト			1																	1	
	中粒シルト																				0	
	基質																					508
	孔隙																					11
備考	基質は褐色粘土鉱物、酸化鉄などで構成される。火山ガラスは軽石型が主体で、風化により脱ガラス化しているものが多い。変質岩は、軽石、火山岩ほかの風化岩で、酸化鉄結核様となっているものも散見される。																					
No. 3 層-1	細砂																				0	
	極粗粒砂																1		1		2	
	粗粒砂								1		1	2	1				1	2			8	
	中粒砂			1							1	5				3	1				11	
	細粒砂			4			1					1	1					2			9	
	極細粒砂			1										1							2	
	粗粒シルト			3																1	4	
	中粒シルト																				0	
	基質																					337
	孔隙																					7
備考	基質は褐色粘土鉱物、炭質物、酸化鉄などで構成される。変質岩は、火山岩の風化岩などで、酸化鉄結核様となっているものも散見される。火山ガラスは軽石型とバブルウォール型で、未変質である。																					
No. 4 層-2	細砂																				0	
	極粗粒砂																				0	
	粗粒砂									1		1				1		1			4	
	中粒砂			5								2	1			3	1		1		13	
	細粒砂			4								2	1			2					9	
	極細粒砂	1		4														1			6	
	粗粒シルト	1		2															2	4	9	
	中粒シルト																				0	
	基質																					381
	孔隙																					15
備考	基質は、褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで構成される。変質岩は、風化岩が主体で一部、酸化鉄結核様のものも認められる。																					

表2. 薄片観察結果 (2)

試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成																				合計							
		鉱物片										岩石片											その他						
		石英	クリストパライト	カリ長石	斜長石	角閃類石	角閃石	黒雲母	白雲母	重晶石	天徳野鉱物	チャート	砂岩	粗石	スロリア	凝灰岩	凝灰岩・デンプサイト	安山岩	玄武岩	花崗岩	多結晶石英	変質岩	凝灰岩	火山ガラス	酸化鉄結核	炭素質	植物片	植物圧縮体	
No.5 水平口緑帯	総数											1																1	
	極粗粒砂											1	1															2	
	粗粒砂	10		6					1	3		1	4	2									3		1	1	32		
	中粒砂	25		8	15	1		1				2	4	3		1	1	1		5	3	1	3				73		
	細粒砂	19		7	10			2		1	2	3								1	1						46		
	極細粒砂	12			2							2									1							17	
	粗粒シルト	9			3																							12	
	中粒シルト	1																										1	
	基質																											569	
	孔隙																												9
備考		基質は淡褐色粘土、黄褐色、石英、長石類などで埋められ、ややシルト質である。花崗岩類の中には黒雲母のクロットも含まれる。																											

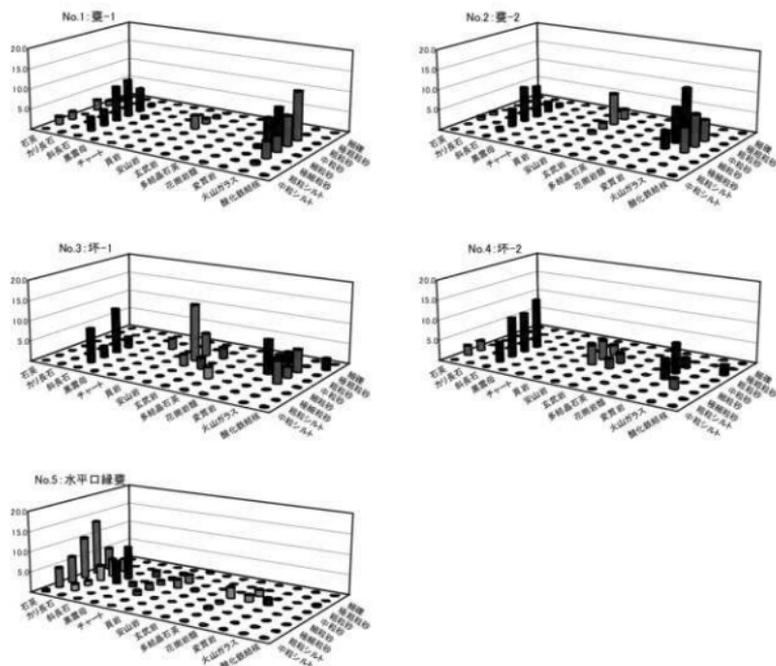


図2. 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

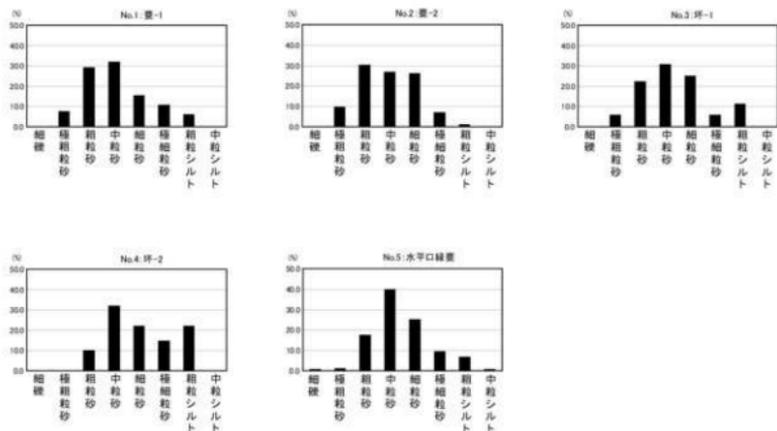


図3. 胎土中の碎屑物の粒径組成

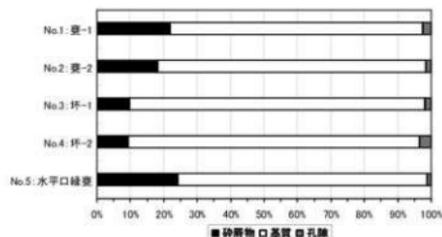


図4. 胎土中の碎屑物の粒径組成

堆積物が採取された場所の地質学的背景を示唆していると考えられる。ここで沼津市の位置する駿河湾東部沿岸地域の地質学的背景を杉山ほか(2010)や日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会(1988)などにより概観してみる。まず北側に安山岩質噴出物からなる愛鷹火山があり、その背後には玄武岩質の噴出物からなる富士火山が位置する。また、東側には、新第三紀中新世の凝灰岩や流紋岩・デイサイトからなる湯ヶ島層群により構成される山地が、駿河湾と狩野川の沖積低地との間に分布する。狩野川の沖積低地の北東側には安山岩質噴出物からなる箱根火山が位置し、狩野川の沖積低地の東側には、玄武岩～安山岩質の噴出物からなる多賀火山が位置する。このような記載からは、沼津市の地質学的背景として、玄武岩～安山岩質の火山岩類が主要な構成要素となっていることがわかる。

今回の試料では、いわゆる駿東壘とされている No.1 と No.2 の壘の試料について、斜長石の多い鉱物組成と、安山岩を比較的多く含む岩石組成、さらに軽石や安山岩の風化岩と思われる変質岩が多いことなどの特徴が得られており、この特徴は、上述した沼津市の地質学的背景とも整合する。また、No.3 と No.4 の坪についても、鉱物と岩石の出現傾向は、壘の試料 2 点とほぼ同様であることから、やはり沼津市の地質学的背景と整合した胎土であるといえる。なお、No.1 ～ No.4 までの試料には火山ガラスも主要な碎屑物として含まれているが、そのうち No.3 の火山ガラスは未変質であり、その形態は軽石型とパブルウォール型とが混在している。この形態的特徴からは、背後の愛鷹山南麓斜面に広く分布す

る愛鷹ローム層の上部に多量に含まれる始良 Tn 火山灰 (AT: 町田・新井, 1976) に由来する可能性があると考えられる。愛鷹ローム層における AT の火山ガラスの産状は、小山 (1992) や由井 (1995) などの分析例により確認されている。甕の試料における火山ガラスは軽石型を主体とするが、観察結果でも述べているように、これらの試料における火山ガラスは風化が進んでおり、形態的に風化に強い軽石型が多く残存したものと考えることができる。すなわち、甕の試料における火山ガラスも愛鷹ローム層中における AT に由来する可能性があると考えられる。

以上のことから、No.1、2 の甕と No.3、4 の環は、いずれも沼津市周辺に分布する堆積物が材料として使用された可能性が高いと考えられる。なお、甕と環の胎土の違いは、碎屑物全体の量比にあるが、これは土器の機能や用途に合わせた素地土の調整の違い (混ぜる砂の量の違い) を示しているとも考えられる。

No.5 の水平口縁甕とされた試料は、上述した 4 点とは明らかに異なる鉱物・岩石組成を有する。特徴の第一は石英の鉱物片が多いことであり、他に鉱物組成としてはカリ長石と斜長石が同量程度を示し、微量の黒雲母や極めて微量のザクロ石や白雲母などの鉱物を含むという特徴があげられる。また、岩石組成では、堆積岩類と多結晶石英および花崗岩類が主体をなし、安山岩などの火山岩類は極めて微量しか含まれないという特徴がある。これらの特徴は、前述した沼津市の地質学的背景とは整合しないものであることから、その胎土の材料となった粘土あるいは砂は、沼津市周辺に分布する堆積物ではない可能性が高い。その鉱物組成および岩石組成から推定される地質学的背景は、堆積岩類と花崗岩類が広く分布する河川の流域となる。ここで、上述した杉山ほか (2010) や日本の地質「中部地方 I」編集委員会 (1988) に牧本ほか (2004) などを加えて、駿河湾から遠州灘に至る範囲で静岡県を流下する主要な河川流域の地質を見ると、まず富士川水系では上流域に甲府盆地を囲む花崗岩類が分布するが、下流域左岸側には富士山の火山噴出物が広く分布するため、No.5 の胎土の鉱物・岩石組成とは整合しない。安倍川については、流域に新第三紀の堆積岩類からなる瀬戸川層群が広く分布するが、流域に花崗岩類の分布はなく、さらに下流域にはデイサイトの溶岩や火砕岩からなる竜爪層群が広く分布することから、これも No.5 の組成とは整合しない。大井川は、その上流域には四万十帯と呼ばれる中生代から古第三紀にかけて形成された堆積岩類が広く分布するが、花崗岩類の分布は流域には認められない。さらに天竜川については、中流から上流域にかけて四万十帯の堆積岩類と領家帯と呼ばれる花崗岩類が広く分布するが、中流域には三波川帯と呼ばれる主に結晶片岩からなる変成岩帯が広く分布している。したがって、天竜川の堆積物も No.5 の胎土と整合するとは言えない。この時点で、No.5 の甕は静岡県外からの搬入品の可能性が生じる。しかし、既存の地質記載によれば、堆積岩類と花崗岩類の組み合わせを特徴とする堆積物の可能性としては、大井川下流域右岸に広がる牧之原台地を構成する段丘礫層も検討しなければならない。牧之原台地を構成する段丘礫層中には、天竜川水系によって運ばれた花崗岩類の礫が混在することが確認されているのである (杉山ほか, 1988)。すなわち、No.5 の胎土を構成する砂や粘土は、牧之原台地内の砂や粘土に由来する可能性もあると考えられる。

これまでに当社では、静岡県内各地の遺跡から出土した 7 世紀後半～8 世紀とされる土師器甕を今回と同様の手法により分析を行っている。大井川町藤守遺跡から出土した土師器を対象とする胎土分析 (バリノ・サーヴェイ株式会社, 2003) では、発掘調査所見により分けられた遠江系と駿河系という分類が、分析による鉱物・岩石組成から分類された I 類と II 類という分類と一致するという結果が得られている。すなわち、遠江系の試料は I 類の組成を示し、駿河系の試料は II 類の組成を示した。試料は 15 点であったが、例外は 1 点もなかった。

I 類の組成は、今回の分析における No.1～4 の組成にほぼ一致し、II 類の組成は、今回の分析における No.5 の組成とほぼ一致した。ただし、I 類の試料の中には結晶片岩の岩石片を微量～少量含むも

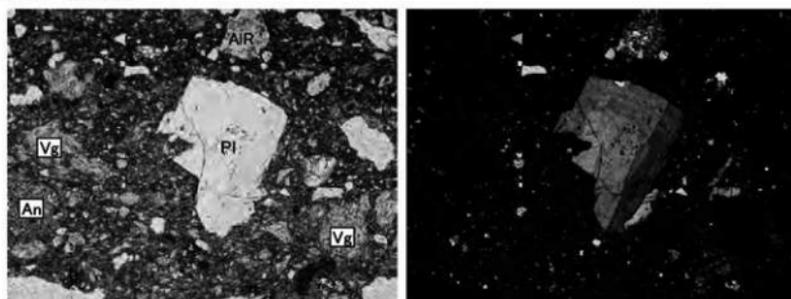
のがあったり、Ⅱ類の試料の中にはデイサイトを多量含むものがあったりなど、試料により若干組成の異なるものは認められた。しかし、Ⅰ類およびⅡ類全体のそれぞれの傾向と今回の分析結果との対応関係は上述した通りである。このことは前述した各胎土の鉱物・岩石組成から推定される地域性とも矛盾せず、むしろ支持する結果であると言える。

今回の分析からは、2点の駿東襲とされた試料および2点の環については、胎土の鉱物・岩石組成が沼津市の地質学的背景と整合することから、沼津市周辺の堆積物を材料としている可能性のあることが指摘された。一方、水平口縁襲とされた試料については、胎土の鉱物・岩石組成から推定される地質学的背景と一致する地域を特定できず、県外あるいは牧之原台地周辺という可能性のあることが指摘された。今後も沼津市周辺域における古代の土器の分析事例および主要河川流域の堆積物の分析事例を蓄積することにより、より具体的な生産地の地域的な絞り込みが可能となることが期待される。

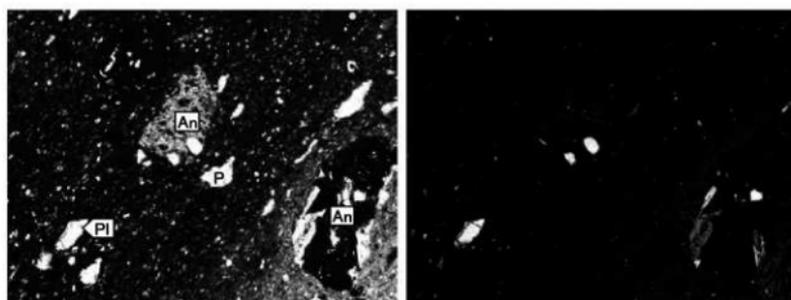
引用文献

- 小山修二,1992.尾上イラウネ遺跡のテフラ層序と古環境復元 地質とテフラ層序.沼津市文化財調査報告書第35集
尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書Ⅱ その2ー自然学的分析・写真図版ー,40-73.沼津市教育委員会.
- 町田 洋・新井房夫,1976.広域に分布する火山灰ー始良Tn火山灰の発見とその意義ー.科学,46,339-347.
- 牧本 博・山田直利・水野清秀・高田 亮・駒澤正夫・須藤定久,2004.20万分の1地質図幅「豊橋及び伊良湖町」.産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 松田順一郎・三輪若菜・別所秀高,1999.瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察ー岩石学的・堆積学的によるー.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
- 日本の地質「中部地方Ⅰ」編集委員会,1988.日本の地質4 中部地方Ⅰ.共立出版,330p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社,2003.付編2 藤守遺跡および関連遺跡出土土師器製の胎土分析.静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第139集 藤守遺跡Ⅱ 平成14年度(主)焼津極原線緊急地方道道路改築(A)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所,70-80.
- 杉山雄一・寒川 旭・下川浩一・水野清秀,1988.御前崎地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1図幅).地質調査所,153p.
- 杉山雄一・水野清秀・狩野謙一・村松 武・松田時彦・石塚 治・及川輝樹・高田 亮・荒井晃作・岡村行信・実松健造・高橋正明・尾山洋一・駒澤正夫,2010.20万分の1地質図幅 静岡及び御前崎(第2版).産業技術総合研究所 地質調査総合センター.
- 由井将雄,1995.愛鷹火山と箱根火山の形成と愛鷹ローム層.静岡県考古学会シンポジウムIX「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年」予稿集.静岡県考古学会,360-363.

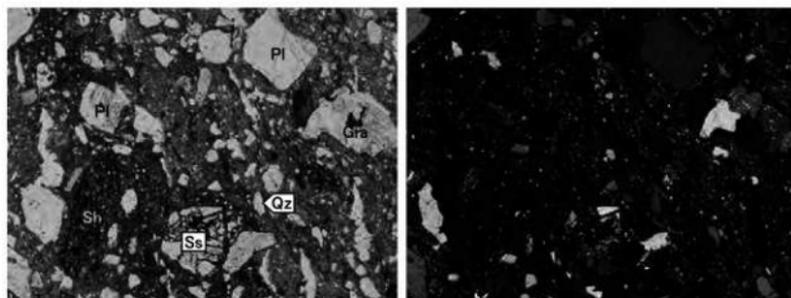
図版1 胎土薄片



1.No.1(壘-1 個体番号18371)



2.No.3(坏-1 個体番号2408)



3.No.5(水平口縁壘 番号無)

Qz:石英, Pl:斜長石, Sh:頁岩, Ss:砂岩, An:安山岩, Gra:花崗岩, AIR:変質岩,
Vg:火山ガラス, P:孔隙。

0.5mm

6. 中原遺跡出土水平口緑甕の蛍光X線分析による製作地の推定

池谷 信之

1. はじめに

中原遺跡からは「遠江系水平口緑長胴甕」(以下、「水平口緑甕」と略称)が出土している。この水平口緑甕は、駿東地域では8世紀以降に出現したとされ(木ノ内 2002)、口縁部が水平に近い角度まで大きく外反し、胴部に縦位の細かいハケメが加えられる。胎土には雲母類や石英の砂粒を含み、薄手硬質であることを特徴としている。中原遺跡から出土した水平口緑甕も、同様の特徴を有しており、搬入品であると見られる。

筆者らはこれまでに、蛍光X線分析によって土器の製作地をフォッサマグナの内側と西側に区分し、必要に応じて鉱物分析結果を加え、製作地をさらに地域的に限定する試みを行ってきた(池谷・増島 2009, 池谷・木村 2015)。本稿では中原遺跡出土の水平口緑甕に、最近沼津市内で発掘調査が行われた相生町遺跡の出土例(原田 2016)も加えた分析結果を紹介する。

2. 分析資料

基準資料 土器や瓦などの原料となる粘土は、列島内に広範囲かつ無数に存在しているものと予想され、産地推定の基準となる資料を漏れなく収集するのは、不可能に近い。そこで、出土地が製作地からほとんど動いていない土器類を「準原産地資料」と称し、この化学組成を産地推定の基準とする。準原産地資料の規定に最も合致するのは、古窯址出土の須恵器や陶器類、瓦などである。また東海地方東部から関東にかけての地域では、古窯址じたいの数が少ないため、沼津市内から出土した大塚式や律令期の埴、甲府盆地中央部の甲斐型埴なども準原産地資料に加えた。資料収集の対象とした遺跡は、池谷 2016 を参照された。

分析対象資料 分析対象とした資料を表1に示した。判別図上の相対的な位置を比較するために「水平口緑甕」だけでなく、土師器環・いわゆる「駿東甕」なども分析対象に含めた。

3. 分析方法

分析条件 分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置 SII2110 を用いた。分析資料の表面をグラインダーを用いて1mm程度研磨して平坦面を作り、流水下で1分程度洗浄した。測定条件は以下のとおりである。なおX線の励起効率を考慮して軽元素側と重元素側では異なる電圧と電流を設定した。

管電圧：15 kV (Al ~ As) / 50 kV (Rb ~ Y) 管電流：40 μ A (Al ~ As) / 6 μ A (Rb ~ Y)

照射径：10mm 測定時間：それぞれ 200sec 雰囲気：真空

測定はあらかじめ設定した元素について、強度をカウントするルーチン測定モードで行った。なお標準物質として JG-1 を用い、プレス機で 10t/m² の圧力を加えて成形した。作業日ごとに標準物質も測定を行い、標準物質の元素強度に対する各資料の強度比を用いた。計測した元素は以下の 14 種類である。

アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn)、ヒ素 (As)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr)

フォッサマグナ内外の判別 得られた各元素の強度比をもとに、Si/Fe、Ca/K、Zr を指標とする 2 つの判別図を作成した (第 1 図 ~ 第 2 図)。ここでは、フォッサマグナ西縁 (糸魚川 - 静岡構造線) の西側の基準資料を \times 印で、その内側 (東側) の基準資料を \circ 印で表示している。2 つの判別図に遺跡出土資料を重ねてプロットすることで、土器の産地がフォッサマグナ西縁の「西側」であるか「内側」であるか推定することができる。

4. 分析結果と考察

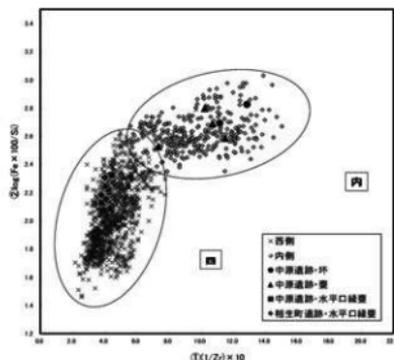
2 つの判別図とも 9 点の水平口緑甕すべてが「西側」のゾーンにプロットされた。つまりこの結果は、こ

これらの土器が「西側」の土器をモデルとして中原遺跡周辺で製作されたのではなく、「西側」で製作された後に中原遺跡に持ち込まれたことを示している。

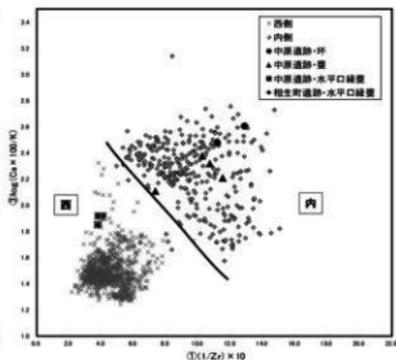
本報告書では、(株)パリオ・サーヴェイに委託して胎土に含まれる鉱物の分析も実施している(第Ⅷ章5)。ここでは、№1～№4(本節の分析№)の土師器環や甕について、カリ長石をまったく含まず斜長石が多い鉱物組成、堆積岩をほとんど含まず安山岩が比較的多い岩片の組成などが、愛鷹火山の地質学的特徴と整合的であることから、遺跡周辺の堆積物が粘土として使用されたと推定されている。いっぽう№7は、カリ長石と斜長石を同量程度含み、かつ微量の雲母類・ザクロ石を含む鉱物組成、堆積岩類と多結晶石英・花崗岩類を砂粒として含むという特徴から、堆積岩類と花崗岩類の混在する堆積物を想定し、その可能性のある場所として、牧之原台地あるいは静岡県以西を挙げている。以上の鉱物分析の結果は、蛍光X線分析の結果とよく一致しており、中原遺跡から出土した水平口緑甕は「西側」からの搬入品であると判断できる。

引用文献

- 木ノ内義昭 2002 「第Ⅵ章考察第1節 須恵器流入以降から律令時代の土師器の様相―主として富士郡推定域の出土遺物から―」『東平遺跡第16地区(三日夜庵寺跡)・第27地区発掘調査報告書』:114-127頁 富士市教育委員会
- 池谷信之・増島寿 2009 「蛍光X線分析法による縄文土器のフォッサマグナ東西の判別―東海地方および南関東地方の事例から―」『地域と学史的考古学』杉山博久先生古希記念論集刊行会
- 池谷信之・木村聡 2015 「沼津三枚城跡の石垣堀と瓦」『沼津市博物館紀要』39:1-34頁 沼津市歴史資料館
- 原田雄紀(編) 2016 「相生町遺跡発掘調査報告書」沼津市文化財調査報告書111
- 池谷信之 2016 「第二曲輪SH7遺構出土かわかけの製作地」『司史跡 長浜城跡整備事業報告書 総合調査報告編』沼津市文化財調査報告書第114集



第1図 フォッサマグナの西側/内側の判別図(1)



第2図 フォッサマグナの西側/内側の判別図(2)

表1 分析対象属性表

分析№	器物名	出土遺跡	形状	出土地	時期	構成成分	色調	胎土の特徴
1	№4	中原遺跡	甕	3区6号住	7世紀後半		7.5195/4	砂粒少なく、磁石は平準、スクリア様の粘土を含む。炭屑類少ない。
2	№3	中原遺跡	甕	3区6号住	7世紀後半		7.5195/4	砂粒少なく、磁石は平準、スクリア様の粘土を含む。炭屑類少ない。
3	№1	中原遺跡	甕	3区6号住	7世紀後半		7.5195/3	いわゆる「軟葉葉」。砂粒多く、ディザイト様の不透明白色の砂粒が多い。炭屑類少ない。
4	№2	中原遺跡	甕	3区6号住	7世紀後半		5195/4	いわゆる「軟葉葉」。砂粒多く、ディザイト様の不透明白色の砂粒が多い。炭屑類少ない。
5	中原遺跡	甕	0区4号住	8世紀前半	第1分冊 第158図8	10195/2	「軟葉葉」に比べて磁石が強い。砂粒が少なく、炭屑類少ない。炭屑類の閉鎖。	
6	中原遺跡	甕	0区4号住	8世紀前半	第1分冊 第158図7	10195/3	「軟葉葉」に比べて磁石が中程度。砂粒が少なく、炭屑類少ない。炭屑類の閉鎖。	
7	№5	中原遺跡	水平口緑甕	3区6号住	7世紀後半		10197/2	1㎜の無結晶石英様の不透明白色砂粒を多量に含む。1.8㎜以下の炭屑類が少量含む。
8	中原遺跡	水平口緑甕	0区4号住	8世紀前半	第1分冊 第158図4	10196/3	1㎜の無結晶石英様の不透明白色砂粒を多量に含む。1.8㎜以下の炭屑類が少量含む。	
9	中原遺跡	水平口緑甕	0区4号住	8世紀前半	第1分冊 第158図6	2.5196/2	1㎜の無結晶石英様の不透明白色砂粒を多量に含む。1.8㎜以下の炭屑類が少量含む。	
10	中原遺跡	水平口緑甕	0区4号住	8世紀前半	第1分冊 第158図7	10195/3	1㎜の無結晶石英様の不透明白色砂粒を多量に含む。1.8㎜以下の炭屑類が少量含む。	
11	相生町遺跡	水平口緑甕	2号住居跡	8世紀中葉～後半		10194/2	1㎜の無結晶石英様の不透明白色砂粒を多量に含む。1.8㎜以下の炭屑類が中多量を含む。	
12	相生町遺跡	水平口緑甕	1号住居	8世紀前半～中葉		10195/3	1㎜の無結晶石英様の不透明白色砂粒を多量に含む。1.8㎜以下の炭屑類が中多量を含む。	
13	相生町遺跡	水平口緑甕	1号住居	8世紀前半～中葉		10196/3	1㎜の無結晶石英様の不透明白色砂粒を多量に含む。1.8㎜以下の炭屑類が中多量を含む。	
14	相生町遺跡	水平口緑甕	1号住居	8世紀前半～中葉		10196/2	1㎜の無結晶石英様の不透明白色砂粒を多量に含む。1.8㎜以下の炭屑類が中多量を含む。	
15	相生町遺跡	水平口緑甕	2号住居跡	8世紀中葉～後半		10196/2	1㎜の無結晶石英様の不透明白色砂粒を多量に含む。1.8㎜以下の炭屑類が中多量を含む。	

※(器物)の欄に示した数字は図録第5巻の1分冊№(本巻240頁)を参照。

報告書抄録

ふりがな	なかはらいせきはっくつちようさほうこくしよ							
書名	中原遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	第2分冊							
シリーズ名	沼津市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第113集							
編著者名	木村 聡 矢田兎代							
編集機関	沼津市教育委員会							
所在地	〒410-8601 静岡県沼津市御幸町16番1号 TEL055-931-2500 内							
発行年月日	西暦 2016年3月4日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
中原遺跡	沼津市 原字一本松 他	22203	201	35° 07' 50"	138° 46' 33"	2008.7.2 ～ 2010.8.31	10,996㎡	鉄道高架事業に伴う新貨物基地建設
				日本測地系				
				35° 07' 38"	138° 46' 44"			
所収遺跡名	種別	主な年代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中原遺跡	集落	古墳時代後期～奈良平安時代		竪穴住居址、掘立柱建物址、溝状遺構、土坑		土器、石製品（石斧、砥石、敲石、削器、印、紡錘車）土製品（ガラス小玉跡型、土鏃、紡錘車）銅製品（耳環、釵具、分銅、鏝、銅屑、刺金）鉄製品（鉄鏝、刀子、鎌、吊金具、貴金具、鉄鋸、袋状鉄斧、釣針、鉄素材）、鉄滓		鉄製品製作関連遺物が出土。
要約	<p>中原遺跡は富土川河口から狩野川河口の間に形成された千本砂礫洲上に位置する古墳時代後期～近代にかけての複合遺跡である。本書では主に古墳時代後期～奈良平安時代について記載している。</p> <p>調査によって検出された遺構には、竪穴住居址（竪穴建物址）、掘立柱建物址、溝状遺構、土坑、ピットなどがある。特に竪穴住居址の検出数は非常に多く、全区の合計で104軒が確認された。また鉄製品が多量に出土し、特に鉄製品生産と関連する遺物である鉄鋸が注目される。静岡県内初の出土例であるガラス小玉跡型もあり、集落内において、鉄製品や玉製品の生産を行っていた可能性が高い。その他に分銅や釵具の出土もあり、高位の人物の存在も示唆される。</p>							

沼津市文化財調査報告書 第113集

中原遺跡発掘調査報告書

(第2分冊)

平成28年2月19日 印刷

平成28年3月4日 発行

編 集／沼津市教育委員会

発 行／沼津市教育委員会

沼津市御幸町16番1号

TEL (055) 931-2500(代)

印 刷／みどり美術印刷株式会社